

太田市八幡遺跡

1990

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第105集

太田市八幡遺跡

1990

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

昭和43年度より実施している太田北部土地改良事業の一環として、一級河川蛇川河川改修工事が行なわれました。本工事によって、太田市烏山に所在する遺跡の一部が破壊されるため、群馬県教育委員会により調査が実施されました。

遺跡の所在する太田北部地区は県指定史跡鶴山古墳を初め、多くの古墳が分布し、古代寺院である寺井庵寺跡の所在、さらに古代の官道東山道のルート上でもあり、古代史を解明するのに重要な地域となっています。

この太田北部地区に蛇川河川工事を含め大規模に土地改良事業が進められたことは、農業の近代化をはかる上で、極めて意義深いといえるのですが、同時に私達の歴史的、文化的遺産といえる埋蔵文化財の保護についても十分考慮すべきもので、できるかぎりの保存をはかる必要があるといえます。本発掘調査は河川工事の性格上、やむを得ず、緊急発掘調査を行なったものでありますが、調査を実施するにあたり、たとえ消極的であるにせよ、失なわれていく埋蔵文化財の記録資料を作成し、その保存をはかることは、今後文化財保護を進める為にも、地方文化の向上をはかる上においても大いに意義あるものと考えられます。

諸般の事情により発掘調査した遺構・遺物の整理作業が遅れましたが、本年度当事業団が群馬県教育委員会の委託を受けて整理事業を行い、ここに「太田市八幡遺跡発掘調査報告書」を作成することができました。発掘調査後15年の経過を経て、調査関係者の総意・協力を得て調査報告書が発刊できたことは、誠に意義深いものがあります。関係者の労苦と熱意に対し、心から感謝申し上げますと共に、本報告書が広く県民各位、研究者・教育機関等に活用され本県の歴史を解明する上での資料として役立てられることを願い、上梓の言葉とする次第であります。

平成2年3月1日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は過年度公共整理事業に伴う委託事業であるとともに、文化財保護法とその施行令等に基づき作成した報告書である。
2. 発掘調査は群馬県土木部河川課からの委託を受け群馬県教育委員会が実施した。試掘調査は昭和47年11月20日から11月24日までの5日間、本調査は昭和48年4月10日から6月13日の間に実施された。その際の組織は次のとおりである。

(1) 試掘調査

調査担当者 平野進一 調査員 久保田文雄（太田市教育委員会） 調査指導者 木暮仁一・梅沢重昭

(2) 本調査

調査主体 群馬県教育委員会 協力 太田市教育委員会・東部教育事務所

調査担当者 平野進一・柿沼恵介・真下高幸（群馬県教育委員会文化財保護主事） 調査員 久保田文雄（太田市教育委員会社会教育主事）・松本浩一・長谷部達雄・前沢和之・清水和夫・飯塚卓二（群馬県教育委員会文化財保護主事）・江原清（群馬県教育委員会文化財保護課調査員） 調査主任 木暮仁一（群馬県教育委員会文化財保護課第二係長）

(3) 旧報告 書名「太田市八幡遺跡発掘調査報告」（群馬県教育委員会）1974

総頁 48頁 うち本文30頁・写真18頁（全景および風景5葉、遺構・遺物出土状態35葉、遺物接合後写真なし）

報告作成担当 平野進一・真下高幸 執筆 平野進一 協力 木暮仁一・柿沼恵介

3. 整理体制と整理期間

整理主体者 群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

期 間 昭和63年10月1日～平成元年5月30日

整理従事者 平成元年度 金子恵子・細井敏子・小久保トシ子・矢島三枝子・本多琴恵・近藤若菜 昭和63年度 金子恵子・富永セン・佐藤美代子・小林恵美子・小久保トシ子・本多琴恵・高橋裕美
遺物保存のための化学処理 関邦一・北爪健二・小材浩一

遺物写真撮影 佐藤元彦

遺物図化 当団調査研究部第一課 スリー・スペース土器実測班 担当真下高幸（当団調査研究部第1課長）・長沼久美子・佐藤美代子・高梨房江・尾田正子・千代谷和子・八峠美津子

整理担当 下城正（昭和63年度）・大江正行（平成元年度）

事務・接渉 松本浩一・田口紀雄・神保信史・中隆之・住谷進・小林昌嗣・笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏

4. 本書の作成・編集は下城正・大江正行がこれに当り、最終責任は大江にある。

5. 本書の作成にあたり、次の機関、諸先生、諸兄の教示を受けた。

県市町村の文化財担当職員および当団職員

胎土分析……群馬県工業試験場の花岡絏一・小沢達樹氏と化学課員

6. 本遺跡の記録保存資料および出土資料は、群馬県に所有権は生じていないが、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管、管理されている。
7. 遺跡名称は旧報告が公開されているため、太田市八幡遺跡をそのまま受継ぎ遺跡名称とした。また地名は、旧報告の時点では大字は上鳥山であったが現在では上・中・下鳥山を統合し、大字鳥山となっている。小字名称は八幡である。
8. 本書の凡例は次のとおりである。
 - (1) 遺構方位は国家座標系 第Ⅸ系の座標北を示し、グリッドと方位との関係は、今回の整理で、太田市 1 : 2,500現況図11と合成した結果、調査区方眼の南北軸はN10°30'Eを指向していた。
 - (2) 縮少率は住居跡図を1 : 60とし、各遺構図に縮少率を標記してある。遺物実測図は1 : 3を原則とし、数点例外はあるが、それらを含め、遺物図に縮少率を標記してある。縮少率標記のない場合は、遺構図は1 : 60、遺物図は1 : 3である。
 - (3) 遺構写真は、平野進一・柿沼恵介による。遺物写真について佐藤元彦によるが、拡大および赤外（さくら赤外750）は大江による。遺物写真は赤外・縮少を示した小間を除き、遺物の実物大について、おおむね1 : 3で作成した。
 - (4) 遺構・遺物に係わる細かな凡例は、各篇の冒頭で示し、そのほかトーンなどは図中で示した。土器図中で特に明示のないのは、黒色煙の土器である。
9. 大江を除く執筆者名は目次と各文末が冒頭に記し、明らかにした。

本文目次

第1篇 調査に至る経緯と経過	7	S B 04	63~66
第1章 発掘調査に至る経緯		S B 05	66~68
(神保倍史)	7	S B 06	68~71
第2章 発掘調査の経過	8	S B 07	71
第2篇 調査方法と基本層位	9	井戸遺構	71
第1章 調査方法	9	S E 01~03	71~74
第2章 基本層位	11	溝遺構	75
第3篇 周辺遺跡	13	S D 01~05	75~76
第4篇 検出された遺構と遺物	23	S D 06~11	76~85
住居跡	24	土壌	85~87
S J 01~S J 09	24~37	特殊遺物	92~102
S J 10~S J 19	37~55	縄文時代の遺物(下城正)	103
S J 20~S J 24	55~57	第5篇 遺物観察	106~132
掘立柱建物	58~61	第6篇 太田市八幡遺跡出土土器の胎土分析	
S B 01	61~62	(小沢達樹・大江正行)	133~138
S B 02	62	第7篇 考察	139~144
S B 03	62~63		

図版目次

第1図 試掘調査と本調査区との関連図	10	第11図 S J 02遺構図	27
第2図 完新鮮示標テフラ層の分布図	12	第12図 S J 03遺構・遺物図	27
第3図 周辺遺跡分布図	14	第13図 S J 04遺構・遺物図	28
第4図 太田八幡遺跡周辺地形と小字区界図	15	第14図 S J 05遺構・遺物図	28
第5図 寺井庵寺跡概出土瓦	17	第15図 S J 06遺構・遺物図	30
第6図 遺跡位置図	20	第16図 S J 06遺物図	31
第7図 遺構全体図	21・22	第17図 S J 07遺構・遺物図	32
第8図 S J 01遺構図	24	第18図 S J 08A遺構・遺物図	33
第9図 S J 01遺物図	25	第19図 S J 08B遺構・遺物図	34
第10図 S J 01遺物図	26	第20図 S J 09A・09B遺構図	35

第 21 図	S J 09A 遺物図	36
第 22 図	S J 09遺構・遺物図	38
第 23 図	S J 10遺構・遺物図	38
第 24 図	S J 11A 遺構図	39
第 25 図	S J 11B 遺構・遺物図	39
第 26 図	S J 11B 遺物図	40
第 27 図	S J 11B・C 遺物図	40
第 28 図	S J 11C 遺物図	41
第 29 図	S J 12遺構・遺物図	42
第 30 図	S J 12遺物図	43
第 31 図	S J 13遺構・遺物図	45
第 32 図	S J 14遺構・遺物図	45
第 33 図	S J 15遺構・遺物図	46
第 34 図	S J 16遺構・遺物図	47
第 35 図	S J 17遺構・遺物図	49
第 36 図	S J 17遺物図	50
第 37 図	S J 18遺構・遺物図	51
第 38 図	S J 19A 遺構図	52
第 39 図	S J 19B 遺構図	52
第 40 図	S J 19遺物図	53
第 41 図	S J 20遺構図	54
第 42 図	S J 20遺物図	54
第 43 図	S J 20遺物図	55
第 44 図	S J 21遺構・遺物図	56
第 45 図	S J 22遺構・遺物図	57
第 46 図	S J 23遺構図	57
第 47 図	S J 24遺構図	57
第 48 図	S B 01遺構・遺物図	59
第 49 図	S B 02遺構図	60
第 50 図	S B 03遺構図	63
第 51 図	S B 04遺構図	64
第 52 図	S B 05遺構図	65
第 53 図	S B 05遺構図	66
第 54 図	S B 06遺構図	67
第 55 図	S B 06遺物図	68
第 56 図	S B 07遺構図	69
第 57 図	S B 07遺構図	70
第 58 図	S B 08遺物図	71
第 59 図	S K 遺物図	72
第 60 図	S E 01遺構・遺物図	73
第 61 図	S E 02遺構・遺物図	73
第 62 図	S E 03遺構・遺物図	74

第 63 図	S D 01, S D 01-04, S D 06遺物図	78
第 64 図	S K 05-06・07遺構・遺物図	79
第 65 図	S K 遺構図	80
第 66 図	S K 遺構図	81
第 67 図	S K 遺構図	82
第 68 図	S K 遺構・遺物図	83
第 69 図	S K 遺構図	84
第 70 図	S K 02・34遺物図	85
第 71 図	S K 遺物図	87
第 72 図	A・B 区遺物図	88
第 73 図	C・D 区遺物図	89
第 74 図	E・F 区遺物図	90
第 75 図	F~L 区遺物図	91
第 76 図	須志部新種少器種	92
第 77 図	発研究者の須志部類	93
第 78 図	発研究者の須志部類	94
第 79 図	山形発掘採集発研究者の須志部	94
第 80 図	甕書の上器	95
第 81 図	甕書の上器	95
第 82 図	埴輪類	96
第 83 図	埴片	96
第 84 図	粘土器不良・未成物	96
第 85 図	灰釉陶類	96
第 86 図	砥石ほか磨耗石器	97
第 87 図	古代瓦	98
第 88 図	中・近世瓦	98
第 89 図	続縄中世陶器	98
第 90 図	施釉陶器(中世)	99
第 91 図	軟質陶器(中世)	99
第 92 図	硯	99
第 93 図	石版	99
第 94 図	陶・磁器類(近世以降)	99
第 95 図	軟質陶器(近世以降)	100
第 96 図	鉄製品と鉄滓物	101
第 97 図	鉄製品	102
第 98 図	縄文時代土器	104
第 99 図	縄文時代土器	105
第 100 図	分析試料図	134
第 101 図	Sr/Rb と Ca/K グラフ	137
第 102 図	土地区画推定図	141
第 103 図	大田市八幡遺跡と土地区画推定図	142
第 104 図	掘立柱建物群と土地区画	143

写真図版目次

写真図版 1	上 鶴山古墳と調査地
	下 調査地北半を望む
写真図版 2	1列左 調査風景
	右 調査風景
	2列左 調査風景

右 調査風景
3列左 調査風景
右 調査地北半を望む
4列左 調査地南半を望む
右 調査地南半を望む

写真図版 3	1列左	S J 01床面状況	右	S D 01、B 3区付近状況	
		右	S J 01遺物出土状況	4列左	S D 01、B 3区付近状況
	2列左	S J 02床面状況	右	S D 01-04、B 3区付近状況	
	右	S J 02掘方状況		写真図版 11	
3列左	S J 03床面状況	右	S D 08(左)・02(右)、F 4区付近状況		
	右	S J 04竈状況	2列左		S D 05(奥)・03(手前)、D 4-1 2区間
	右	S J 05床面状況	右	S D 06出土状況	
写真図版 4	1列左	S J 06床面状況	右	S D 08出土状況	
		右	S J 06竈状況	3列左	S D 08、F 3区土層断面状況
	2列左	S J 08A床面状況	右	S D 08、K 3区土層断面状況	
	右	S J 08A掘方状況	右	S D 08土層断面状況	
	右	S J 08A遺物出土状況	写真図版 12	1列左	S K 04出土状況
	右	S J 08B近景状況	右	S K 19(左奥)・S K 20検出状況	
	右	S J 08B遺物出土状況	2列左	S K 21出土状況	
	右	S J 08B遺物出土状況	右	S K 30土層断面状況	
写真図版 5	1列左	S J 09A・09B床面状況	右	S K 31土層断面状況	
		右	S J 09B竈検出状況	右	S K 33土層断面状況
	2列左	S J 09B竈断面状況	右	S K 38土層断面状況	
	右	S J 09B竈掘方状況	右	S K 38土層断面状況	
	右	S J 10床面状況	写真図版 13	1列左	S K 38遺状状況
	右	S J 10調査状況	右	S K 38土層断面状況	
	右	S J 11B床面状況	2列左	S K 39土層断面状況	
	右	S J 11B遺物出土状況	右	S K 39検出状況	
写真図版 6	1列左	S J 12床面状況	3列左	S K 45・44付近状況	
		右	S J 12遺物出土状況	右	S K 44・45付近状況
	2列左	S J 13床面状況	右	S K 47遺物出土状況	
	右	S J 13竈遺物出土状況	右	S K 47遺物出土状況	
	右	S J 14床面状況	写真図版 14	S J 01出土遺物	
	右	S J 14竈状況	写真図版 15	S J 01・03・04・05・06出土遺物	
	右	S J 15床面状況	写真図版 16	S J 06・07・08A出土遺物	
	右	S J 16掘方状況	写真図版 17	S J 08A・08B・09A出土遺物	
写真図版 7	1列左	S J 17床面状況	写真図版 18	S J 09A・09B出土遺物	
		右	S J 17竈状況	写真図版 19	S J 10、11B、11B・C出土遺物
	2列左	S J 17竈断面状況	写真図版 20	S J 11C・12出土遺物	
	右	S J 17遺物出土状況	写真図版 21	S J 12出土遺物	
	右	S J 17貯蔵穴掘方状況	写真図版 22	S J 13・14・15・16出土遺物	
	右	S J 18遺物出土状況	写真図版 23	S J 16・17出土遺物	
	右	S J 19A床、掘方状況	写真図版 24	S J 18・19出土遺物	
写真図版 8	1列左	S J 19A竈状況	写真図版 25	S J 19・20・21・22出土遺物	
		右	S J 19A竈貯蔵穴状況	写真図版 26	S B 01・06・07、B 2区ビット、G 2区ビット、D 3・J 1区ビット、C 1区ビット、K 3区ビット、K 3区ビット、A 2区ビット
	2列左	S J 19A竈付近遺物状況	写真図版 27	S E 01・02・03出土遺物	
	右	S J 19B掘方状況	写真図版 28	S D 01、01・04、06、S K 05・06・07出土遺物	
	右	S J 20土層断面状況	写真図版 29	S K 02・05・06・07・34・47出土遺物	
	右	S J 20とS D 02状況	写真図版 30	小土塊、A 1区、A 3区、A・B 2区、B 2区出土遺物	
	右	S J 20遺物出土状況	写真図版 31	B区・B 3区・B 4区・C 1区・C 2区・C 4区・D 1区・D 4区出土遺物	
写真図版 9	1列左	S B 01検出状況	写真図版 32	E 1区・E 3区・E 4区・F 1区・F 3区出土遺物	
		右	S B 02検出状況	写真図版 33	F 4区・G 3区・H 2区・I 2区・J 1区・J 2区・J 4区・K 1区・L 2区遺物
	2列左	S B 02検出状況	右	S B 03検出状況	
	右	S B 03検出状況	写真図版 34	須恵器類稀少部種・美濃研の須恵器類・墨書土器・黒書の土器	
	右	S B 04検出状況	写真図版 35	粘土捏不貞未成物・灰釉陶器・磁石はくろ珪石類・古代瓦・中近世瓦・焼酎中世陶器	
	右	S B 07(奥)・S B 01(手前)検出状況	写真図版 36	施釉陶器・軟質陶器・硯・石版・近世陶磁器・近世軟質陶器	
写真図版 10	1列左	S E 01検出状況	写真図版 37	鉄製遺物	
		右	S E 01遺物出土状況	写真図版 38	鉄製遺物
	2列左	S E 02遺物出土状況			
	右	S E 02遺物出土状況			
	右	S E 03検出状況			

第1篇 調査に至る経緯と経過

第1章 発掘調査に至る経緯

太田市の北部地域の上烏山・中烏山・寺井を流れる一級河川蛇川の流域は、埋蔵文化財の分布密度が濃い。県指定史跡鶴山古墳は、その代表的なものである。この地域が農業振興地区に指定され、土地改良事業（太田北部土地改良事業）が始ったのは昭和43年度からである。当然ながら、この土地改良事業に伴い、蛇川の河川改修工事も計画された。土地改良事業及び蛇川河川改修工事は、この地域に濃密に分布する埋蔵文化財をいかに取り扱っていくかが大きな問題となった。そこで、県教育委員会及び太田市教育委員会は、事業の主体者である県土木部及び農政部の関係各課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議しながら、各事業を進めていただいた。

各事業が進捗する中で、昭和48年度に工事を行うことになっていた太田市烏山宇八幡地区の蛇川河川改修工事の対象地は、太田市の遺跡台帳No78の遺跡地に相当し、土師器片が多量に散布していたので県教育委員会文化財保護室と県土木部河川課との間で、埋蔵文化財の取り扱いについて協議が行われた。当初は、埋蔵文化財の現状での保存が論議されたが、試掘調査を実施し、遺構確認の際は記録保存のための発掘調査を実施することで協議が整った。

試掘調査は、昭和47年11月20日より11月24日までの5日間に、県教育委員会文化財保護室員により実施され、幅30m、長さ400mの調査対象地域に1.2m×4mのトレンチを数多く設定して遺構確認に努めた結果、調査対象地域の南西部水田地帯に奈良・平安時代の住居跡等の遺構を確認した。

試掘調査の結果を踏まえて文化財保護室と河川課は、本調査を実施するための協議を重ね

1. 本調査は、昭和48年4月より6月末日までの3ヶ月間とする。
2. 発掘調査に要する経費は、県土木部が負担する。
3. 発掘調査は、県教育委員会が直営事業として実施する

の3点を骨子とした協議が整った。

昭和48年4月1日に、県教育委員会には関越自動車道新湯線、上越新幹線、上武道路等大規模開発の工事に伴い消滅する埋蔵文化財の発掘調査を実施するための文化財保護課が発足し、埋蔵文化財発掘調査を担当する職員も大幅に増員された。蛇川河川改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、新体制の文化財保護課により昭和48年4月10日より6月13日までの64日間、太田市教育委員会の協力を得て実施した。

本調査の報告書は、昭和49年3月に群馬県教育委員会より「太田市八幡遺跡発掘調査報告」として刊行されたが、諸般の事情により報告内容が調査した遺構・遺物の一部であった。このために県教育委員会は、本調査の正式な調査報告書を刊行するため、本年度事業として報告書刊行のための整理事業を群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託し、以下に記すところの報告書をまとめることができた。

発掘調査を通しては、太田市教育委員会及び太田市職員・新野・寺井・上烏山・下強戸等の地区の多数の人々に協力をいただいたが、これらの人たちの協力に、ようやく報いることができた。

第2章 発掘調査の経過

旧報告内容をそのまま次に転載する。

予備調査

予備調査は昭和47年11月20日から11月24日の5日間にわたって実施した。

調査の対象区域は幅30m、長さは400mに及び、また調査が緊急に問題化したという事情から、この調査の実施は期間的に余裕のないものであった。この為、遺跡地にかかる工事区域全体の傾向を把握する必要以上、河川敷上に沿って小規模(1.2m×4m)なトレンチを多く設定し、遺構の確認につとめた。

トレンチの設定にあたっては、河川改修工事区域が蛇川右岸に沿って設けられている為、(工事区域の西側斜面は蛇川河川浸蝕を受けている)遺構の確認は薄いものと判断された。この為トレンチは河川工事区域の中軸線上に20mの間隔でB例のトレンチ、中軸線より東側へ10mの距離でA例のトレンチを第2図の如く千鳥状に平行して設定した。

調査時点においては、遺跡の立地条件、遺物の散布状態からして、遺構は鶴山古墳西側の桑畑中に分布を占めるものと判断された。しかし、調査の結果は、桑畑においては表土層より約50cm～60cmで、ただちに黄褐色ローム層に至り、表土層中にも多量のロームブロックを認め、遺跡地北側部分での2ヶ所の河川状の溝を除いて遺構の確認に至らなかった。

当初、遺構の検出は薄いものと予想された遺跡地南西側の水田地区には7本のトレンチを設けた。この地区では水田下に粘質な暗褐色遺物包含層を認め、6本のトレンチに遺構、遺物を確認した。以上、予備調査により得た成果について次のようにまとめることができる。

- 1 遺構は遺跡地南西側の水田地区に集中している。
- 1 水田地区は水田の出土遺物からして奈良・平安時代を中心とした集落跡と考えられる。
- 1 畑地地区では遺構の確認に至らず、遺構があったとしても、すでに消滅しているものと考えられる。

本発掘調査

本発掘調査は、予備調査により得た資料に検討を加え、昭和48年4月10日から6月13日までの64日間にわたって調査を実施した。

発掘対象面積は、南側水田地区に巾約30m×長さ約120mの範囲で、総面積約3600㎡に及ぶものであるが、河川改修工事に伴い、上鳥山から寺井に至る農道上の蛇川架橋工により、調査区の南側に道路を迂回させた為、この部分での発掘を実施し得なかった。

予備調査により、遺跡地北側部に確認された溝状の遺構については主要部分にトレンチを設け、遺構の性格について追求を行なったが、工事区域の範囲が狭く、その解明には至らなかった。しかし、その規模・形状・方向性については、概ね把握することができた。

第2篇 調査方法と基本層位

第1章 調査方法

調査は蛇川の改修箇所について行なわれた。旧報告によれば「予備調査の結果、調査区域が西側水田地区(30m~120m)の範囲に限定され、河川敷部分の遺構が完全に消滅することから、水田部分の全面的な発掘調査を実施することを決定した。

グリットの設定にあたっては

- ① 河川敷工事区域の中軸線によって東西区域に二分し、12の大グリット(20m×20m)水田部分に覆うように設定する。大グリットは、さらに中グリット(10m×10m)、中グリットは小グリット(5m×5m)と調査の進行に応じ、グリットの規模を縮小する。
- ② グリット名については、河川改修工事との関連から東側区域の北より南側舗装農道までの間をAからFの6区に、西側区域では同様に、北よりGからL区とする。中グリットでは、東北部を一区、東南部を2区、西南部を3区、西北部を4区、小グリットでは、中グリット同様に東北部よりイからニまでの4区に細分する。
- ③ グリット間の畦は、大グリットでは中心線から20cmづつ残し、40cmの幅、小グリットでは10cmづつ20cmの幅、小グリットで5cmづつで10cmの幅と、グリットの規模に応じグリット間の畦を縮小した。

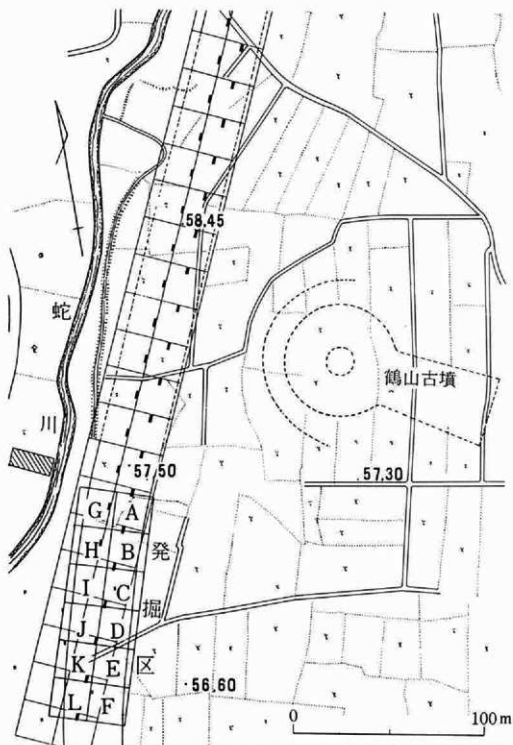
以上の調査方法に基づき、河川改修工事との関連から、東側区域のAグリットより発掘を開始し、第一層までは大グリット、第二層では中グリット、第三層の遺物包含層に至っては小グリットへと掘り進むに従って、グリットの規模をせげ、調査の進行に負担のからぬよう計った。」とある。

試掘調査の記録は第1図の原因と思われる工事用図にトレンチを記入した図が残されていたほか資料は見である。出土遺物はわずかながら存在する。上記の大・小グリットとは地区呼称であって座標としては用いられていない。その結果、記録保存図には徹底した形で区別標記はなされていない。中・小グリットと呼称した扱ひも標記数は少なかった。少ない場合は当報告の個別遺構図を图示する際に、小区画の角目を全部切りさらにその中に字を配するのであるから記入した場合は、角目が少ない場合でも、最低4ヵ所以上にA1-(区)イと記入しなければならぬのと小区画が5mであるので、それを用いると土壌平面の表記は区画線から2mも3mも外れた場合は補助線を用い「A1-(区)イ南とA1-0北間の線上より南へ1m」と一本の線について複雑な表記をせざるを得ない。したがって本報告では大・中グリットと称された区画はそのまま使用したが小区画はグリット座標として新たに1辺10mの中グリットと呼称された中を2m毎に5等分し、北から南へ向いA・B・C・D・E(A)、東から西へ向い1(5)・2・3・4・5とした。グリットの呼称点は、若番側の北東隅にある。改変したことによる支障は、記録保存図・出土遺物はともに小グリットと称した呼称の記載・注記量は極めて少ないので、大支障とはならない。今後、文化財保護法が改正され、本報告とは別の形で、各遺跡内容の検討や出土遺物の完全公開化の義務を果すための第二次整理が行なわれることがあるとすれば、今回の整理で使用した新呼称法と遺物類の図版用新番号などと記録保存図、記録写真、出土遺物の呼称法・新番号とを二たび記入する再編集が必要であろう。

水準については、記録保存図中には露面高数値・眼高標記が記入されていたが、原点については単に原点

第2篇 調査方法と基本単位

とあるのみで標高値の記入はなされていなかった。そのため、遺跡拡張区全体に記入されている調査露面高値から等高線（測点間均等配分）を起して図化し、さらに発掘調査で掘り下げた深さを加えて、工事区内の水田・畑地に記入されている標高値を比較したところ、原点は標高56.65mと推定された。しかし、今整理のため1:2,500太田市現況図を入手して、照合したところ、現等高線とは工事区図の方が約10cm低いと考



第2図 遺跡地周辺と調査区域

第1図 試掘調査と本調査区との関連図 (『太田市八幡遺跡発掘調査報告』1974 第2図×2) 1:2,000

えられた。本報告は調査時点での工事区図の高さを使用した。そのため水準点引照した時のような正確な値ではないことをこわっておきたい。

記録保存図は1:20で図化されている。図化は平板実測で行なわれたらしく、記録保存写真の端コマに平板実測風景を見かけ、また実測原図に平板使用痕を認めた。

写真は6×9判のモノクローム、35mm判のモノクローム・カラー・リバーサルフィルムが現存している。

第2章 基本層位

旧報告によれば「本遺跡地の地層について前述したように、遺跡地周辺一帯は旧渡良瀬川の氾濫より形成・発達した沖世積平坦地が広がり、地層については概ね共通性があるものと考えられる。地層は表土より黄褐色ローム層まで40～60cmの厚さで5層に識別される。さらにC-3区の井戸状遺構により確認し得たのであるが、黄褐色ローム層下は灰白色粘土層、砂層と続き、礫層に至る。

発掘調査区域は北側（水田と畑地の接点）より、西側舗装農道まで約120mほどの距離で、その間40cmほどの比高差があり、南方に向かってゆるやかに低くなっていることがうかがわれる。

調査区域の層序については、第1層は水田に利用された灰褐色粘質土層、第2層は橙褐色の薄い酸化鉄分沈殿層が形成されているが、南側F-3区・F-4区では桑畑となっているため、褐色の耕作土層から第3層の遺物包含層に移り、この部分では第1層・第2層は生成されていない。第3層は暗褐色の粘質土層で、いわゆる遺物包含層である。遺物は主にこの土層より出土する。粘土状遺構、住居跡カマドは主にこの層の上面付近より確認されるものであった。

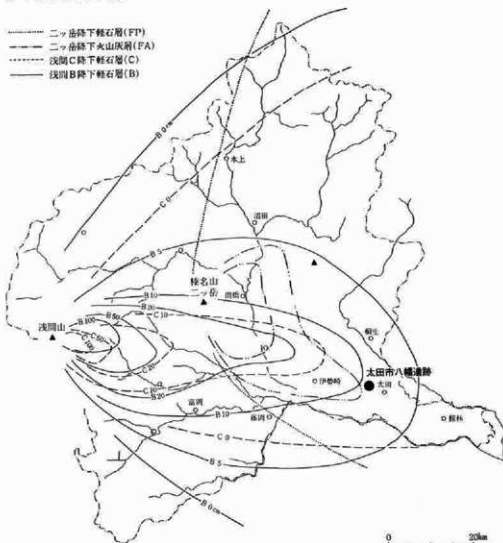
遺構については、一部第3層の暗褐色粘質土層より確認されたものの、遺構内埋没土が同質の暗褐色土であるため、第4層の黄褐色ローム漸移層、あるいは第5層のローム層より確認した。第4層は黄褐色のローム漸移層であるが、南側部分のB-3区、B-4区にて認められるもので、それより北側は第4層は確認されず、第3層より第5層に直接移行する。以上、発掘区域の地層について概要を記したが、表にまとめると次のとおりとなる。」とある。しかし、記録保存図中には基本層序の層位番号の注記は極めて少なかった。

層序	色調	特 徴	備 考
第1層	灰褐色土層	粘質土で、粒子が細かい。厚さ20cmから30cm。	現表土、水田耕作土
第2層	橙褐色土層	粘質土が酸化により橙褐色化している。厚さ5cmから10cm。	水田床
第3層	暗褐色土層	粘質土、粒子が細かい。比較的固い。厚さ20cmから40cm。	遺物包含層
第4層	黄褐色土層	粘着力が弱い。第5層との区別が不明確発掘区の南側部分で確認される。	ローム漸移層
第5層	黄褐色土層	火山灰層・地山。	ローム層

この基本層位との関連で火山灰の堆積状況が気にかかるが、調査時点は、今日のように鍵層とする火山灰層の認識は薄く、火山灰鍵層把握の初期段階であった。そのため浅間山・榛名山噴源の火山灰が、ここまで遠くおよんでいたとは各担当者は思わなかったであろう。今にして思えばという質問に対しては「当初、除去した表土と表土下の土層、標準土地層で言えば、第3層の上層の一部までが砂質で、浅間山A・B軽石層、を含んでいた可能性があるかもしれない。」とのことであった。

浅間B軽石層の堆積は、新田郡尾島町の周辺まで平坦面上に順堆積層が存在することが明らかにされている。

第2篇 調査方法と基本層位



第2図 完新鮮示標テフラ層の分布図 (『考古学ジャーナル 157』1979を加除筆)

るので、太田市鳥山にある当遺跡までおよんでも不思議ではないし、近年隣接地にある「成塚石橋遺跡」(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1988によれば、浅間B軽石の順堆積層が溝内にある。また同遺跡では浅間Aは不明瞭・榛名FA・FPのいずれかの軽石粒が存在していたという。

浅間B軽石はしばしば広大な水田跡を埋めつくして、堆積しているが、その実年代に関して考古学上は、B軽石を挟む上・下層の出土遺物から検討する地道な方法であるが、中沢悟は「清里・陣場遺跡」(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1981の中で「灰軸陶器の終末期は、中国陶器に白磁碗を写している玉緑口縁の段階と考えられている。その時期は、H-105窯期にあたり、11世紀第四半期におかれている。それ以前の丸石2号窯式の灰軸陶器は、清里陣場遺跡の第6期初頭に含まれるが、H-105号窯期の段階に近いと思われる堅穴住居は、上記のように調査された結果、灰軸陶器は搬入されていない。この段階を經過してB軽石が降下しているのである。最近の編年観をふまればB軽石の降下に12世紀初頭と考えて良い可能性が生まれる。」とし、この時点ではじめて、史料の検討からなされた可能性と、考古学上の状況検討・遺物の年代検討から出された答えとが近接すると考えうようになったのである。史料上は、「中右記」の天仁元年(1108)説が有力となっている。記事内容は「国中有高山称麻則峯、而從治曆間、峯中細煙出来、其後微々也、從今年七月廿一日、猛火燒嶺、其煙厲天、沙礫潤国、煨燼積庭、国内田畠依之已以滅亡」である。

第3篇 周辺遺跡

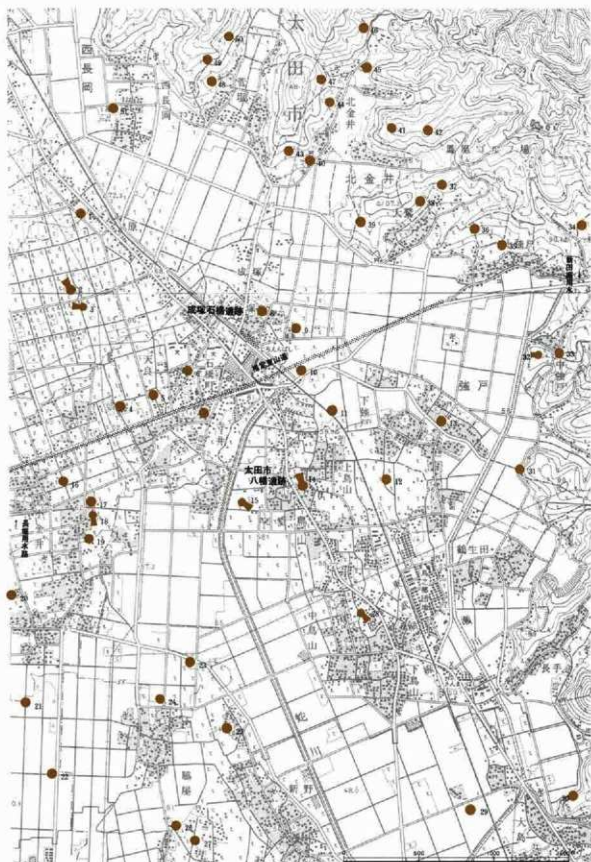
古墳時代以降の遺跡の性格を知るためには必ず生産基盤の状況を見る必要がある。周辺で古代水田の確認された例はないが近接の成塚石橋遺跡では溝遺構中に12世紀初頭に降下したとされる浅間山B軽石層の順堆積が確認され、さらに南西約7.5kmにある新田郡尾島町歌舞伎遺跡ではB軽石下水田が検出されており、もはや太田市近辺でも浅間山B軽石水田の発見は、時間の問題となった。現在および近年までの水田の状態に目を向けると、主要な灌漑水路は東方に江戸時代寛文期に開削された^{新田用水}開登用水（開登景能により寛文4年着手未完、明治5年に再掘削通流—現開登用水）が東接の八王子丘陵、太田金山丘陵との間の低地帯を南流し、さらに、金山丘陵以南を八瀬川が南流している。太田市八幡遺跡の西側の水田地帯は、開登用水からの灌漑によるのではなく、八王子丘陵の東方から八王子丘陵と金山丘陵の間をへて、成塚、寺井の低台地を横切る水系によっている。現在、『太田市1：2,500平面図10・11』（昭和59年8月調整）を見ると、その水系は八王子丘陵の南西端で八瀬川に分流しているが東武桐生線の東方約80mで分流するまでの間は「新田堀用水路」という名称が印字され、以南の分流が「蛇川」と「長堀用水路」という印字で銘記されている。新田堀用水路については近年、新田庄はじめ上野の中世史について意欲的に研究を進められる峰岸純夫の「上野国新田庄の成立と展開」「中世の東国」（東京大学出版会）1989によれば「開削時期不明で戦国期には史料に出現する」とし、峰岸の作成した水系図は新田堀用水の末端を現新田郡金井所在の水田地帯に置き、「戦国期以降の開削」と注書をし、開削時期の明言をさせておられる。現蛇川を地図上で見ると、成塚、寺井の台地を横切るもので人為の開削がなければ考え難い状況を見てとれ、自然による力が強かったとしても先の長堀用水（かつての新田堀用水か。本稿では、以降、長堀用水路のあたりを通水していたと思われる新田堀用水を古新田堀用水と呼びたい。）が開削されていなければ汲ぐことはなかったと考えられる。また無理を押し低台地上を通過させるからには太田市八幡遺跡西側の低谷地への配水を行なうこともその目的の一つであったと考えられる。そうした灌漑の推定と太田市八幡遺跡との関連について第7篇で追証したい。

八王子丘陵と、金山丘陵に接する低地帯は旧渡良瀬川によって生じたとされており、大間々扇状地形中、最も長大な低地帯で新田郡笠懸村^左美沼のあたりまで達している。その低地帯を水田耕作として大規模に開発したためか、規模の大きな古墳が5世紀後半頃から、この低地帯に面して古墳が築造されはじめ、古墳時代後期の段階には、大間々扇状地形中最も文化的な躍進を遂げ、その後の段階にも大きく影響をあたえている。

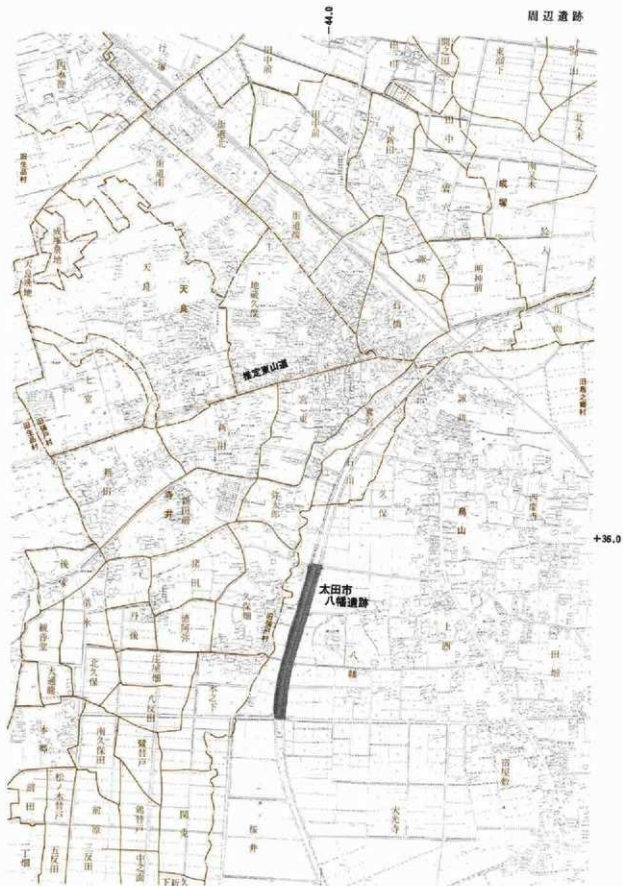
次にそうした地帯首長墓級を見ると5世紀代の前方後円墳に太田市烏山地内に鶴山古墳、鳥^鳥崇神社古墳、亀山古墳がある。第7章のとおりいずれも本遺跡と近接している。

鶴山古墳は、今回の等高線図の作成の際、工事図に記入してある標高値によって規模を求めると、墳丘全長約60m、周堀幅13～15mで、後円部径約30mを測ることができ従来の総長約100mをいく分下回る。主体部は昭和23年に群馬大学によって、墳頂部から竈穴式石室が検出され、^{新田用水}頸短付短甲はじめ短甲3、冑2、石製模造品、皮製盾などの出土があり、5世紀代の遺物組合せを持つことで知られる。^鳥鳥崇神社古墳は、現在は後円部を残すのみで、前方部はまったく削平されてしまっている。昭和48年の墳丘の実測調査の際、くびれ部の左右に中島の存在が推定されるようになった。規模は墳丘推定全長約70m、後円部径約40mを測り、埴輪、埴石の存在が知られ、中島の祭祀的機能から5世紀代の築造が主体部には竈穴式系石室が推定されている。中島については富岡牛松が「金山を囲む前方後円墳（上）」『上毛及上毛人第226号』1936に示しておられ、昭和11年時に確認されている点は重要である。亀山古墳は前方部が削平化されている。墳丘実測によ

第3篇 周辺遺跡



第3図 周辺遺跡分布図 国土地理院「上野城」「朝生」1:25,000



第4図 太田市八幡遺跡周辺地形と小字区界図 1 : 10,000 (太田市 昭和59年 1 : 2,500にによる)

第3篇 周辺遺跡

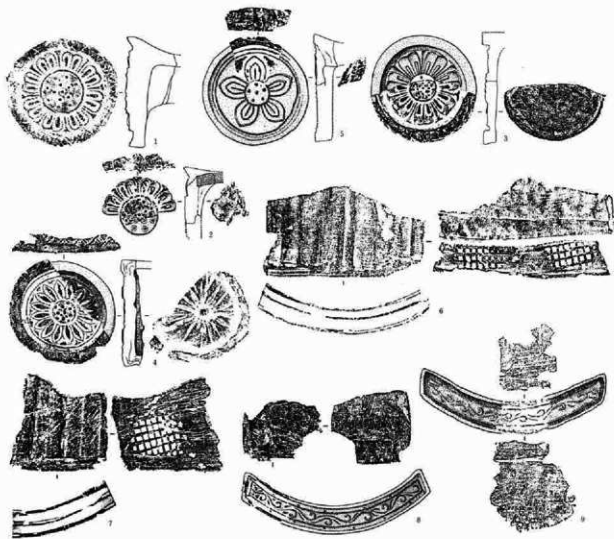
る規模は欠損が多いものの墳丘全長58m前後が推定され、後円部は30.5mほどが測知されている。葺石と古様の埴輪の存在が知られる。6世紀代から7世紀初頭頃までを見ると新田町天良に所在の二ツ山古墳1号墳、2号墳、藪塚本町に西山古墳が存在する。二ツ山古墳1号墳は慶応大学が昭和23年に墳丘の発掘を行ない、靱・さしば・柄などの器材、鳥・獣などの動物埴輪、人物、家形埴輪などと葺石の存在が知られる。規模は墳丘全長74mに約18m幅の周堀が巡る。後円部中段には南に向けやや規模の大きい横穴式土室が開口する。二ツ山古墳2号墳は1号墳に近接し、規模は墳丘全長45m、後円部径32mで、さらに約10mの幅の周堀が巡る。「上毛古墳総覧」によれば明治21年に石室は開口され長21尺であったという。両墳ともに6世紀終末から7世紀初頭頃と推定されているが、埴輪類はその種類も多く、埴輪造形表現が盛んであった頃を窺わせ、遺物類の最末の年代を採用するのではなく、多少し遅った頃の盛期の状態を促えた方がよいのではないだろうか。西山古墳は、丘陵利用の30m級前方後円墳で、後円部に長さ4.1mの横穴式土室が開口し、石室形態から最終期の前方後円墳と捉えられている。北山古墳も藪塚本町にあり、墳丘は丘陵利用の径約20mの円墳で、長さ6.3mの土室が開口している。石材は藪塚石と称される凝灰岩の切石積で、7世紀代の地城管掌した首長級墓や後代の郡司層との繋りを知るうえで欠くことのできない存在であり、またこの頃の7世紀代群集墳は、八王子丘陵西傾に多く存在する。

これらの古墳についての総括を古墳を研究された梅沢重昭は『群馬県史 資料編3』「解説」1981の中で「鉆川上流の金山西方地区には、群馬県地方で最も古い様相を伝える前方後円墳の八幡山古墳、また少し位置が離れるが、東毛第二の規模を誇る5世紀前半期の前方後円墳泉茶臼古墳がある。鳥山地区には鶴山古墳、亀山古墳、鳥茶神社古墳などの五世紀後半から六世紀前半にかけての前方後円墳が存在し、この地区の一部、上磯戸には初期の様相をうかがわせる前方後円墳の寺山古墳、新田郡新田町天良に後期の前方後円墳の二ツ

番号	名称	種別	時代
1	墳墓	古墳	
2	二ツ山1号古墳	墳墓	古墳
3	二ツ山2号古墳	墳墓	古墳
4	天良七堂遺跡	寺院跡・城跡	奈良・平安
5	寺院跡又は城跡	寺院跡・城跡	奈良・平安
6	寺井院寺跡	寺院跡	奈良・平安
7	寺井古墳群	墳墓	古墳
8		墳墓	古墳
9	成塚古墳群	墳墓	古墳
10		集落	縄文-古墳
11	寺裏遺跡	集落	古墳
12	藤五郎塚	墳墓	古墳
13		墳墓	古墳
14	龜山古墳	墳墓	古墳
15	鶴山古墳	墳墓	古墳
16	笠松遺跡	集落	縄文-奈良・平安
17	松尾神社古墳	墳墓	古墳
18	生品村第9号古墳	墳墓	古墳
19	土俵遺跡	集落	古墳
20	上新井遺跡	集落	古墳
21	中溝遺跡	集落	古墳
22	深町遺跡	集落	古墳
23	堂原遺跡	集落	弥生-古墳
24	オクマン山古墳	墳墓	古墳
25	釣堂院寺	寺院跡	中世
26		集落	古墳
27	観音堂(藤原義助館跡)	墳墓・城跡	中世

注：奈良時代 平は平安時代を示す。

番号	名称	種別	時代
28	鳥茶神社古墳	墳墓	古墳
29	三枚横南	集落	縄文-古墳
30		集落	縄文
31		製鉄址	平安・鎌倉
32	寺山古墳	墳墓	古墳
33		生産址・他	古墳
34	萩原館跡	城跡	中世
35	上磯戸古墳群	墳墓	古墳
36	大鷲 向山古墳群	墳墓	古墳
37	大鷲 大平古墳群	墳墓	古墳
38	大鷲 柳穴古墳群	墳墓	古墳
39	成塚 向山古墳群	墳墓	古墳
40		生産址・他	古墳
41	御旗山古墳	墳墓	古墳
42	小金井 東涌古墳群	墳墓	古墳
43	菅塩山崎古墳群	墳墓	古墳
44		墳墓	古墳
45		墳墓	古墳
46		墳墓	古墳
47		墳墓	古墳
48	菅塩西山古墳群	墳墓	古墳
49	西長岡 東山古墳群	墳墓	古墳
50	菅塩祝入古墳群	墳墓	古墳
51	西長岡 宿古墳群	墳墓	古墳



第5図 寺井庵寺跡既出土瓦 1:5 (木暮仁一氏資料)

寺井庵寺遺跡

寺井庵寺は当遺跡の北西約500mの低台地上にある。現在、定地化が進み、寺域はかま道遺構の痕跡を辿ることはできないが、遺構は、かつて太田市立強戸小学校のプールの改修の際、大規模な発掘が確認されたことがあり、また地元で瓦を丹念に集収された木暮仁一氏によれば強戸小学校、中学校とその西方と南方に類した畑地、宅地（現宅地）から多くが採集されると聞いているので、強戸小学校のプールを中心にした一帯に寺地があると考えうる。また寺井庵寺は、上藤木、金井、山王塚寺と並び講堂を配した品内で数少ない大寺院としても知られている。その周辺は尾崎啓左衛門「群馬県新田郡寺井庵寺址」『日本考古学年報』1948があり、それ以降に、須田茂「寺井庵寺」『群馬県史資料編2』（群馬県）1987が詳しい。その建立願意について、須田茂は「遺跡の性格」「入谷遺跡集」（群馬県前田町教育委員会）1987の中で「新田郡河川クラスの豪族の氏寺に比定される。」とし氏寺としての建立を、それに対して木津博明は「歴史の現場」『上野国分寺・尼寺中間地域8分冊中の第3分冊』（群馬県歴史文化財調査事業団）1988の中で「壬申の乱以後台頭した太野氏を誦して」官寺、としての性格を具備し建立されたことが明確される。」と特定している。太野氏は大野朝臣東人に係る氏族をさして、「官寺としての性格を具備」という点は須田が古代新田郡の主体官衙にあてた近接の天良七堂遺跡（『昭和30年の発掘調査によって、六周三翼の証柱式の礎石建物一棟が検出された。本遺跡は南東棟であった。多量の灰化土を伴うことから官衙の正倉とみられている。』須田（前掲）による）の位置関係や修定東山道が近接すること、さらに周辺に上野国分寺式瓦の既出遺跡が5遺跡以上も存在しており、8世紀代の周辺一帯は官の色彩が極めて濃厚に存在する地域であったとすることができ、本津のいう官寺としての性格の具備はそうした地域の内的視点から見て妥当性がある。それらの位置関係は第3図を参照されたい。

既出瓦は強戸小学校保管資料（前掲『日本考古学年報』所載瓦）と木暮仁一氏が集収された平輪20におよぶ資料とが主体を占める。甃瓦には中房の大きさの異なる二品種以上の前建設政後南建南文瓦（第5図1、2-7世紀後半）、複弁七葉蓮草文甃瓦（第5図3-7世紀後半）、細弁菊花文甃瓦（第5図4-8世紀後半）、上野国分寺式の半弁五葉蓮瓦（第5図5-8世紀中頃）などがあり、字瓦には有段三重弧文字瓦（第5図6-7世紀後半）、曲線三重弧文字瓦（7世紀後半）、二種の上野国分寺式扇行啓草文字瓦（第5図7、8-8世紀中頃）などがある。当遺跡でも、第87号のとり男瓦1点があり製作について扇形力（自力能力）のある無条痕が見られ、それは南建南文瓦の男瓦部と共通する手法のため7世紀後半の所産で寺井庵寺からの搬入物と考えられる。8世紀代に太田市八幡遺跡は機能しているが、そこに起因した人々はおそらくそびえ立つ堂塔の舞容に日々接していたにちがいない。

山古墳があって、東毛地域における有力地区であったことをうかがわせる。新田郡域でその最も北に位置する前方後円墳は新田郡藪塚本町西山古墳である。これは東毛地域における最終期の前方後円墳の1つであり、小地域圏を形成する古墳群の中核的性格をもって位置している。また、この地区の群集墳の発達は、大島から長手、鶴生田にかけての金山西麓の丘陵地や、北金井から新田郡藪塚本町湯ノ入にかけての八王寺山塊の西南側から西側に連なる丘陵地帯、今の東武鉄道赤城線の通る成塚、街道橋付近の天間々扇状地縁辺の高燥地帯に分布している。また、大間々扇状地末端に発達した沖積平野を背景に、その周辺の低台地上には由良、脇屋、藤阿久、細谷、下田島などの地に群集墳の分布が見られる。さらに、新田郡新田町上田中にも、鈴鏡、馬具類を出土した兵庫塚古墳(総覧新田郡編打村十五号)を中核に、群集墳の分布が認められる。」とされている。

7世紀後半頃から奈良時代の周辺遺跡の状況は前代の小地域における内的発展を受け継ぎつつ成立する状況が見られる。その頃についてこの周辺地域の調査を多く手がけた須田茂「入谷遺跡Ⅲ」(群馬県新田町教育委員会)1987によると「新田郡の領域と郷 新田郡は、その領域としては北東を金山・八王子・鹿田山の低丘陵を結んだ線、西を早川および岡上用水路、南を利根川で区画された南北17km、東西12kmほどの三角形を呈す。郷は、新田・津野・石西・祝人・淡甘・駅家の六郷である。その推定地は新田郷、駅家郷が郡中央部東寄り、津野郷が郡南域、石西郷が郡南東域、祝人郷が郡北東域、淡甘郷が郡西域である。

寺院跡と官衙跡 新田郡における古代寺院としては、まず、太田市天良・寺井に所在する寺井廃寺があげられよう。本寺院跡は伽藍配置は不明であるが、軒瓦として5ないし6種があり七世紀後半から10世紀に及ぶことが知られる。創建期瓦は川原寺式の複弁八弁文軒丸瓦と三重重文軒平瓦である。群馬県東部域の最古期に位置づけられ、新田郡司クラスの豪族の氏寺に比定される。寺井廃寺以外の寺跡は6ヶ所ほどがあげられる。そのうち、新田郡新田町花香塚に所在する梨子木遺跡は群馬県域でも類例の少ない特徴的な瓦を出土する。平瓦は凸面に斜格子叩きが重ね打ちされ凹面はナデ整形され、丸瓦は凸面凹面ともナデ整形され、丸瓦は凸面凹面ともナデ整形である。八世紀前半から中頃にかけての年代でとらえている。梨子木遺跡以外の5遺跡は合ノ原遺跡(新田郡新田郡藪塚本町杉塚)・釣堂遺跡(太田市脇屋・新野)・源六瀬遺跡(新田郡新田町下田中)・中江田本郷遺跡(新田郡新田町中江田)である。この5寺跡は軒瓦として上野国分寺式の単弁重五弁文軒丸瓦と右偏行唐草文軒平瓦をもち、瓦塔も保有するらしいことが知られつつある。このうち合ノ原遺跡は発掘調査によって集落内に営まれた瓦葺き掘立柱式の単一堂宇様の遺跡であって、その堂宇内に瓦塔が安置されていたことが知見された。年代は八世紀後半頃である。梨子木以下の6寺跡は寺というよりもむしろ草堂・仏堂というべきものであって郷長クラスの有力者層の氏寺的性格を有するものとみなされる。

以上の寺跡を郷との関係でとらえると、寺井廃寺、上

計	笠懸	龜生	強島	宝本	世貞	尾野	丸野	合田	太田	市村名	新田郡
	打品	打品	打品	打品	打品	打品	打品	打品	打品		
八三二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	九〇	前方後円墳
五四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三	方壺
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	下方円
七三八	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	八五	瓦型
三八	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	瓦形式不明

上表は昭和13年に実施された古墳一斉調査の報告である「上毛古墳総覧」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第五輯』(群馬県)1935中の集約数値である。以下の総数8,423基を数え、調査期間内で未定地域の想定を加えると総数10,000基を上まわるとされている。当遺跡は旧島之郷村にあり、北に鶴戸村が、さらにその延長に生品村が位置している。その三村を合すると計251基となり、多数の展開があったことがわかり、さらに新田郡内でも、この周辺に古墳の集中があった点が窺える。藪塚本町に実数が多いのは7世紀代を主とする集域である。

生原郷との関連からは、それらは、八王子丘陵と金山丘陵の西側の低地に面した低台地上に主として分布があり、明治以降使用水が通される遙か前代に耕地利用があったことを推測させる。

野井遺跡が新田郷、駅家郷、中江田本郷遺跡が淬野郷、釣堂遺跡が石西郷、台ノ原遺跡が祝人郷、源六塚遺跡、梨子木遺跡が淡甘郷となろう。これをまとめると、新田郡においては七世紀後半代に郡司クラスの豪族層によって寺が造られ、八世紀代に郷長クラスの有力者層によって小規模な寺（仏堂）が造営されたと推測される。

つぎに、官衙の遺跡をみたい。その事例は、入谷遺跡と天良七堂遺跡の二遺跡がある。ここでは後者にふれたい。天良七堂遺跡は太田市天良に所在する。昭和30年の発掘調査によって、六間三間の総柱式の礎石建物一棟が検出された。本遺跡は南北棟であって、多量の炭化米を伴うことから官衙の正倉とみられている。なお、本遺構の礎石は八王子山系の凝灰岩の割石を石材とするが、白色凝灰岩の上面に柱座加工のある礎石が南方100mほどの地点から出土し他の礎石建物の存在も確実視されている。

東山道と新田駅 上野国は東山道に属し五駅がおかれたが、新田郡内には新田駅が設置されていた。東山道の径路は延喜式のそれは都から陸奥国へ達し新田駅はその通過地であった。しかし、宝亀二年（771年）以前は新田駅で武蔵国へ向う支路が分岐していた。すなわち、新田駅は分岐路にあたる駅であるため自ずとその所在地は限定されるものとみられる。

以上、新田郡の歴史地理環境をみてきた。この中からは入谷遺跡と天良七堂遺跡は新田郡衙あるいは新田駅家のいずれかにあたるであろうと思われる。そして、郡衙と郡司の氏寺は近隣に並存することが多々あるとされていること、及び東山道との関連などから、現状では天良七堂遺跡を郡衙にあて、入谷遺跡を駅家にあてておくのが妥当と思われるのである。

それらの遺跡の中で入谷遺跡の性格付を「駅家にあてておくのが妥当」とされておられるが入谷遺跡の出土瓦は7世紀代の瓦であること、ほかの理由から駅家とは考え難いので他遺跡に求める必要性がある。本章は言及する場ではないので後日の機会に改めて触れたい。

また奈良時代における情景を示す例に『萬葉集』東歌上野国歌二十五首中の三四〇八・三四三六が知られている。

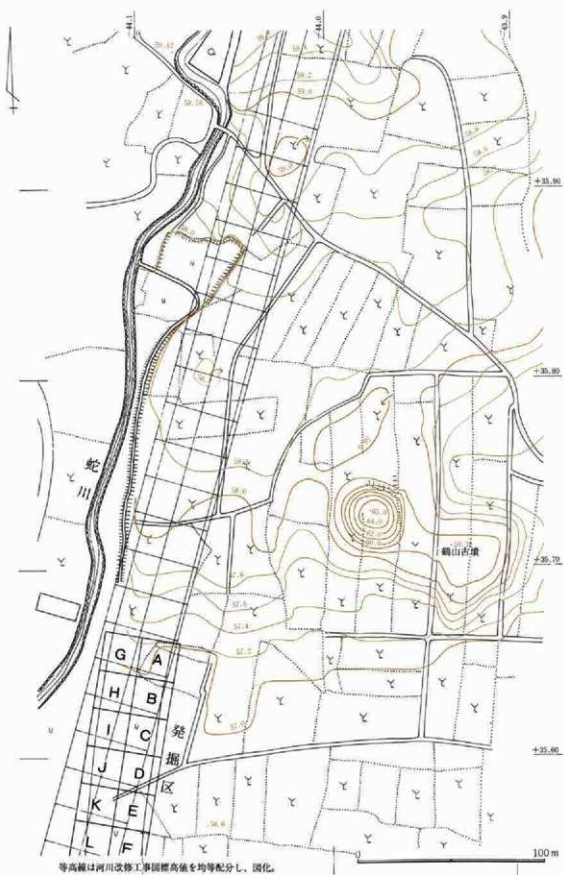
三四〇八 新田山ねにはつかなな吾によそりはしる兒らしあやにかなしも

三四三八 しらとほふ小新田山のもる山のうら枯れせななどこはにもがも

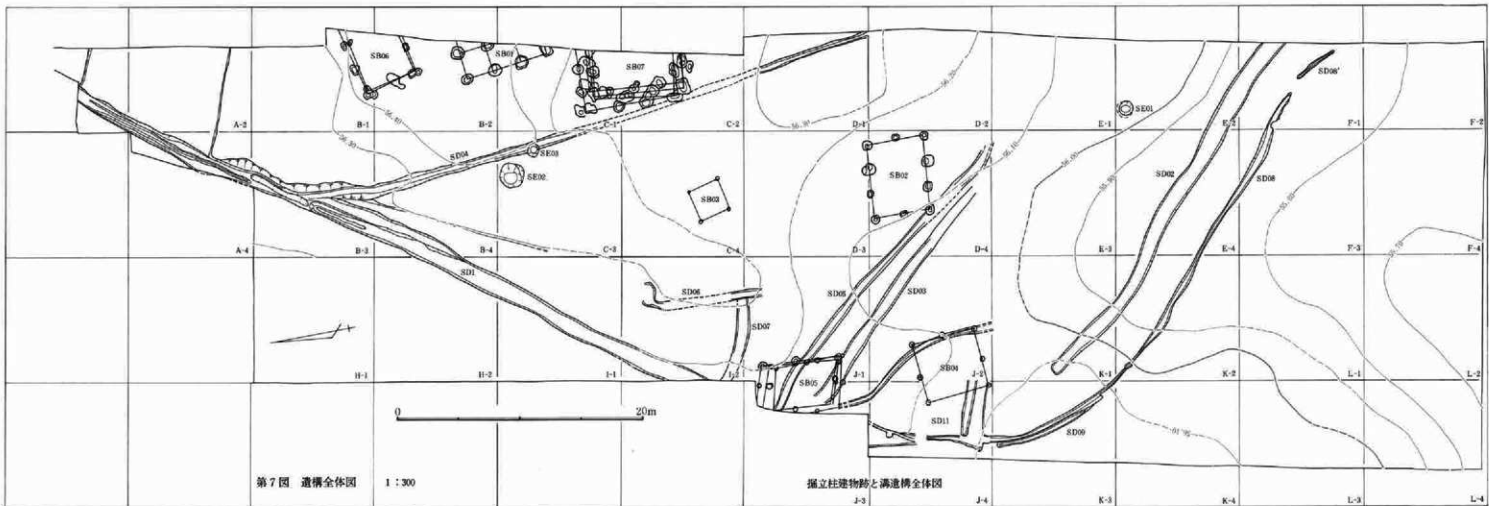
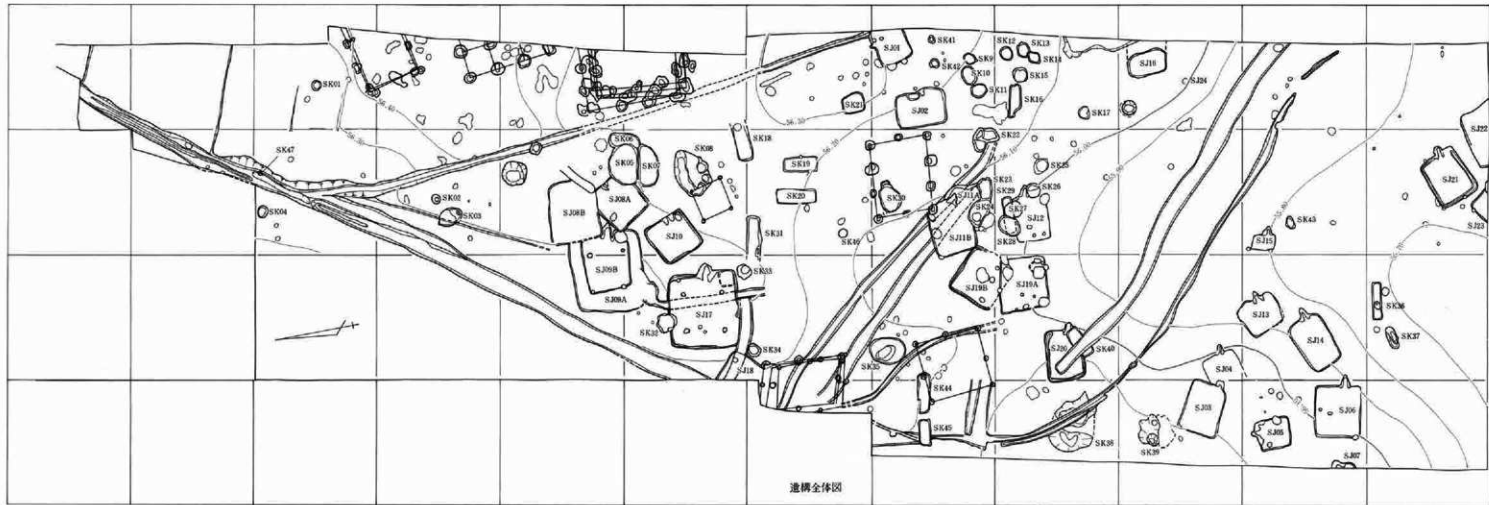
とある。土屋文明『萬葉集上野国歌私注』1944によれば新田山は新田郡地方の山とされ、三四三八の小新田山の解釈を「新田は、神の贄たる田、新田山はその山であるから神の山と云ふべきであらう。金山の連山は何處を見ても、例へば草山に松の疎らな一峯にしても神の山と感ぜられるのである。」さらに小新田山のもる山について「一説に「小新田山のもる山」と考へられて居る山田郡毛里田村（現太田市）丸山の小丘である。丸山の郡落名はこの丘の名から由来したのであらう。今は山田郡に属して居るが古くは新田郡であったと見える。この附近は地勢からして、新田郡新田驛から下野驛に至る交通路と思はれるから、そこに「小新田山のもる山」が在ったということも考えられる。」とされておられる。その小丸山は、東北東約3.5kmの位置にあり、第7図から外れるが、新田郡内の古代郷名の一つに祝人郷の存在は新田山を神の山と云ふべきとされた点と関連して重要であらう。

この後、中世の遺跡は新田氏、後の岩松氏などと関連し数多くある。それは現在刊行中の『新田町誌』『太田市史』と『群馬県史』によられたい。本遺跡とのかねあいは第102・103図を作成する際に館状の土地区画が認められ第7篇を参照されたい。

第3篇 周辺道路



第6図 遺跡位置図 1:1,000 57.0m未満の等高線は、調査時点での図が無く、図化不可能。



第4篇 検出された遺構と遺物

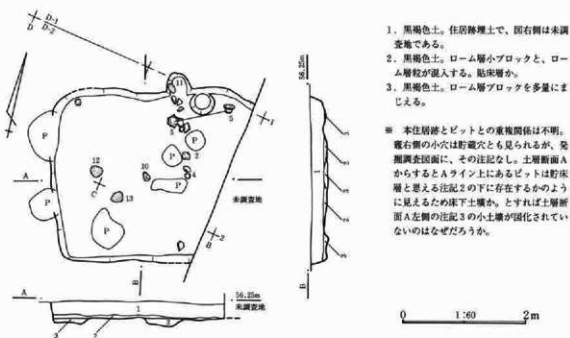
発掘調査で検出された遺構は竪穴住居26、掘立柱建物跡7、溝遺構11、井戸跡3、長方形土壇10、粘土探掘を思わせる土壇1、風倒木跡を思わせる土壇2、そのほかの性格・形態の土壇多数などがある。第7図の遺構全体図にその配置を示した。作成は旧報告中の全体図を参考にし、新たに作成した個別図を基に加筆を行ったが、記録保存した遺構図座標標記と旧報告の座標とのくい違いが時々見られたが、それについては旧報告の全体図の方が全体認識が正しいと考え、旧報告全体図の遺構配置を信じた。その理由は、発掘調査を行なう際、全体観の把握と遺物取上げおよび図面作成の必要性から遺構の全体図を1:100か1:200で作成し、その際多くの場合に平板実測が行なわれる。平板実測は根本的な誤差があっても、座標の1目盛を誤まるほどの事態はそうではなく、全体図を作成する際も、その図面で座標比較を行なうことがしばしばあるので、それが旧報告の全体図を信ずる理由である。第7図中の等高線は今回の整理で新たに作成したものである。記録保存図中には調査露面高数値、眼高標記がなされていたが原点については単に原点とあるのみで標高値の記入はなされていなかった。第7図の等高線は、遺跡内全体に記入されている調査露面高値を均等配分して10cm毎に求めたもので、標高は、調査時点の工事区図にある地表面標高値と発掘して掘り下げた深さを差し引いて等高線高値とした。そのため第7図は正標高値と5cm前後の差もありうる。また掲載の実測図そのものも、その値を用いている。工事区図内の標高引照に問題があればその値はさらに大きくなる可能性があり、ことに昭和59年9月調整の1:2,500太田市平面図とは工事区図の方が約10cm低いように見受けられるので、今後隣接地を調査する際にはその確認に努めて欲しい。次に検出された遺構と遺物の扱いについて触れる。

遺構名称は調査では遺構図面記を住居跡は「住」、掘立柱建物跡は「掘立柱建物跡」、井戸跡は「井」、土壇は「土壇」、溝跡は「溝」と記入されていた。今回の整理は、住居跡は「S」、掘立柱建物跡は「SB」、井戸跡は「SE」、土壇は「SK」、溝は「SD」に改めた。調査の都合で変更された場合の枝番号はアルファベットが用いられ、それは踏襲した。調査区名称は座標にはなっていないため10m方眼単位毎にA1区のように表現されていた大区画とその名称はそのまま使用し、さらにその中はイロハを用いて小区の設定がなされていたが、それも遺構表現上座標呼称としないので、大区の各辺を5等分し、北と東に若く、南北を数字で、東西をアルファベットを配し今回の整理に用いた。

記録保存図中の遺構名称・遺物番号と、遺物に記入された遺構名称・遺物番号とは不一致のものが多く見られ、S J 9 A・B、S J 11 A・B・C、S J 19 A・Bに遺構・遺物の記録保存図内注記、遺物注記に混用があったが、それらについて遺物出土状態写真量が少な過ぎて、照合し得た例は極めて少ないので、調査時点表現をそのまま本書に掲載した場合が多い。また各住居跡出土注記と記録保存図中にある遺物類とは番号不一致の方が多く、遺物取上げに対する信頼度は薄く、残念と言わざるを得ない結果であった。

遺構図・遺物図の凡例・例言は次のとおりである。遺構図は床面状態図とし、掘方についての表現はかくれ線として破線を用いた。破片表現は貯蔵穴にも使用したが、それは記録保存図中に記入されておらず、記録写真に写されている場合に、概念を記入し「貯」と略注した。その際の破線の意味は想像線である。出土遺物は原因どうり出土位置を記入したが取上げ番号の漏れている場合には写真で照合しようとしたが、S J 17の貯蔵穴内遺物を除くと照合できた場合は少なく、照合できた場合は掲載平面図中に遺物番号を付した。また遺物注記に取り上げNoが付されている場合には遺物図中に△記号を用い、床面とある場合には○を付し

第4篇 検出された遺構と遺物



第8図 S J 01遺構図

た。記号のない場合は、出土層位不明である。さらに「カ」は竈またはその周辺から出土したことを示しているため「カ」と記入した。遺物表現は遺物図・遺構図とも石は点描、土器は線描を用いた。灰や焼土・被熱箇所はトーンを用い、トーンを使用した場合は、そのつど意味を図中に示した。示されていない時は前後ページを参照されたい。その中で焼土に関しては地山が焼土化したものか、竈を廃棄時に破壊し、その焼土粒・焼土塊が発散したものなのかは記録保存図中に明示が極めて少ないため掲載図中の表記は推定である。土層断面図の水準線は必ず標高値を記入し、注記は記録図内の注記を転載した。その文章内容は、色調を優先させたのでそのままではない。遺物図と観察表の表現とは一致しているはずであるが、遺物図の方がやや細かい表現となっている。遺物図のトーンは燻部分を示す。

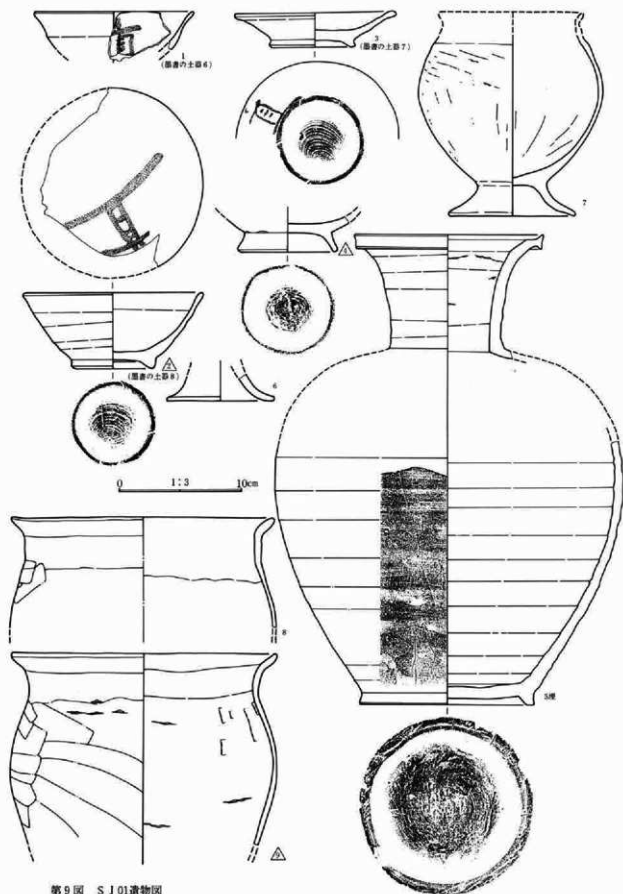
住居跡

S J 01

遺構 位置はD 2区で北東上から上がり勾配の微傾斜地にある。重複はS D 04と重なり、東壁断面によればS D 04が新しく、S J 01が古い。平面形は隅丸長方形気味で、主軸は西壁でN 22°Wを測る。規模は東壁下で3.21 + α m、立ち上がりは遺存のよい西壁下で18cmを残す。床面は断面ように部分的に直接床面とし、大半は貼床である。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は竈右袖側に存在し径38cm、深さ8cmを測る。掘方は土層断面図しかなく明らかではないが、床下の浅い凹みが部分的に存在する。

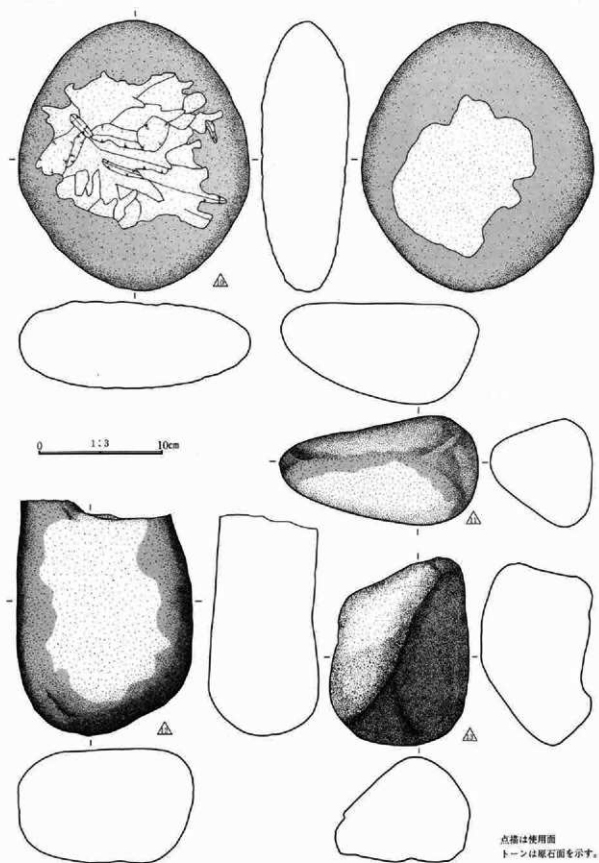
竈 竈は東壁下の南半寄にあり、小規模な所である。

遺物 本住居として取り上げられた遺物中に床面出土注記は2・4・9・10・11・12・13にNoが付されているがそれらについて床面標記がなく床面に伴うか判然としない。記録保存図にはNo 2・4・5・10・11について平面図上に出土地とNoの記入がなされている。5については記録写真を見ると、床面よりやや離れてあり、床面出土として認定し難いので埋土の扱いとした。

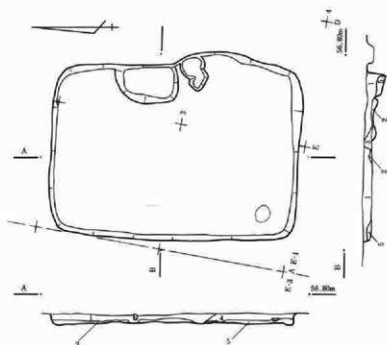


第9図 S J 01遺物図

第4篇 検出された遺構と遺物



第10図 S J 01遺物図

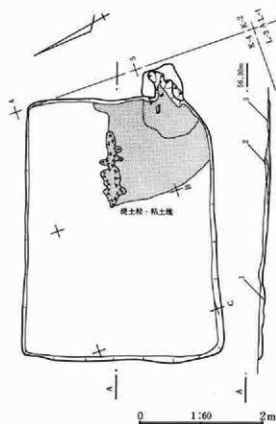


第11図 S J 02遺構図

1. 黒褐色土。住居跡埋土。
2. 黒褐色土。ローム層ブロックやローム粒を多く含む。
3. 黒褐色土。ローム層ブロックやローム粒は2・4より少ない。
4. 黒褐色土。ローム層ブロックやローム粒を多く含む。
5. 黒褐色土。埋土に似た層。

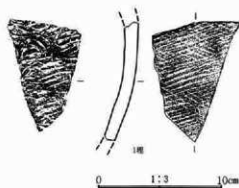
※ 本住居跡の竈位置は、発掘調査図面にその記載なく不明瞭。調査時の図面には、実測図平面東壁の中央とやや左寄りに小土壇があり、竈痕方または貯蔵穴のように見える。本住居跡は重複がない。

0 1:60 2m



第12図 S J 03遺構・遺物図

1. 黒褐色土。住居跡埋土。
2. 暗褐色土。焼土・木炭粒を主体とする。竈破壊による燧材か。
3. 暗褐色土。焼土・木炭粒を含む竈関連土層。

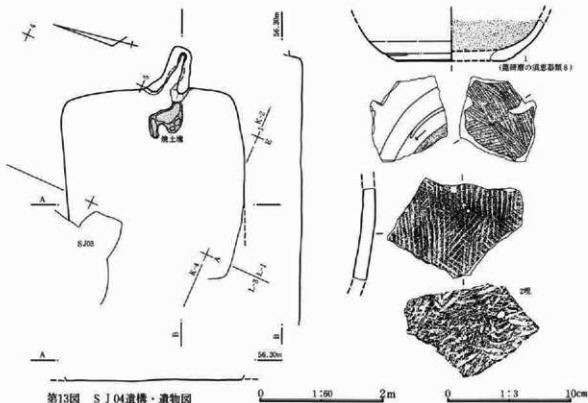


S J 02

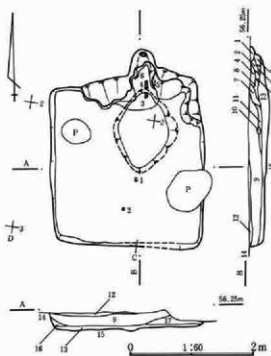
遺構 位置はD 2区中の北東上がり勾配の微傾斜地にある。重複遺構は平面図上では認められない。平面形は隅丸長方形気味で、主軸は東壁で2'Eを測る。規模は西壁下で3.94m、立ち上がりは遺存のよい北壁下で16cmを残す。床面は土層断面からすると地山上の直接床のようであるが判然としない。柱穴は検出されていない。

竈 竈は東壁下のやや北寄りにその痕跡らしき掘方が

第4篇 検出された遺構と遺物



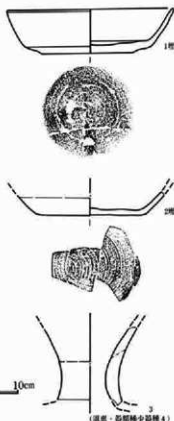
第13図 S J 04遺構・遺物図



1. 暗褐色土。焼土粒、灰をわずかに含み、全体は軟らかで粗質。
2. 暗褐色土。焼土粒、ローム層粒を含み、粘性あり、質味強し。
3. 暗褐色土。焼土粒ほとんど含まず、黒色土味強く軟らか。
4. 暗褐色土。ローム層粒と焼土粒をわずかに含む。粘性・粘りあり。
5. 暗褐色土。灰多く、焼土・ローム層粒入る。黒色土味強軟らか。
6. 黒褐色土。灰・ローム層・焼土粒含み、軟らか、粘性なし。

第14図 S J 05遺構・遺物図

7. 暗褐色土。ローム層粒多く、焼土・木炭粒わずかも含む。粘性あり。
8. 黒褐色土。焼土・ローム層粒をわずかも含む。
9. 暗褐色土。焼土・ローム層粒をわずかも含む。硬く、粘りあり。
10. ローム層ブロック。
11. 褐色土。ローム層ブロックを多く含む。
12. 暗褐色土。住居跡の主体土で、軟らか。
13. 黒褐色土。ローム層ブロックを含む居床層。
14. 暗褐色土。軟らか粗。ローム層移層に似る。
15. 暗褐色土。焼土粒をわずかに含む。粘性あり。
16. 暗褐色土。黄色土味強く、軟らか。
17. 暗褐色土。焼土粒わずかに含む。軟らか。



(須磨・高脚器少器類 4)

あるが検出時点の記録図や注記がなく不詳である。

遺物 遺物はこの住居跡として取り上げられた個体がなく、該当なしである。

S J 03

遺構 位置はK 4区の西上がり勾配の微傾斜地にある。重複は記録保存図によれば、S J 04と重なるが、新・古の注記はなく、不明である。平面形は一边の長い隅丸長方形気味で、主軸は東壁でN 26°Eを測る。規模は北壁下で4.02m、立ち上がりは遺存のよい西壁下で8cmを残す。床面は土層断面図によると地山直接床のようであるが確証はない。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は記録図にそれらしき凹みは記入されていない。

竈 竈は東壁下の南端にあり、その前面に、焼土粒や粘土小塊が広がり、廃棄時の破壊状況を偲ばせた。

遺物 遺物は、床面として取り上げた個体がなく、伴う遺物は不明である。1は埋土出土のわずかな破片中の1例である。

S J 04

位置はK 2・L 1区の西上がり勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図を見るとS J 03と重なるが新・古の注記はなく不明である。平面形は隅丸長方形気味で、主軸は東壁でN 17°Wを測る。規模は東壁下で2.83m、立ち上がりは遺存のよい北壁下で2cmを残すが床面ほとんど痕跡の状態であった。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は記録保存図にそれらしき箇所が見当たらない。

竈 竈は東壁下の中央やや南寄りにあり、前方に焼土粒・焼土塊が認められている。

遺物 注記に床面とされる例は遺物・記録保存図中にもなく、伴う遺物は明瞭でない。1・2は埋土から抽出した。

S J 05

遺構 位置はL 3区の北西上がり勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図を見ると重複はない。平面形はやや歪んだ長方形気味で、主軸は西壁でN 3°Eを測る。規模は西壁下で2.45m、立ち上がりは遺存のよい西壁下で24cmを残す。床面は記録保存図断面を見ると注記番号に貼床の指摘がある。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は記録保存図に指摘と図示はないが竈右袖側に凹みがあるため、そこが貯蔵穴位置である可能性が持たれる。掘方は竈前面の床下に浅い凹みが確認された。記録保存図断面を見ると掘方は平らであるので顕著な凹凸はないようである。

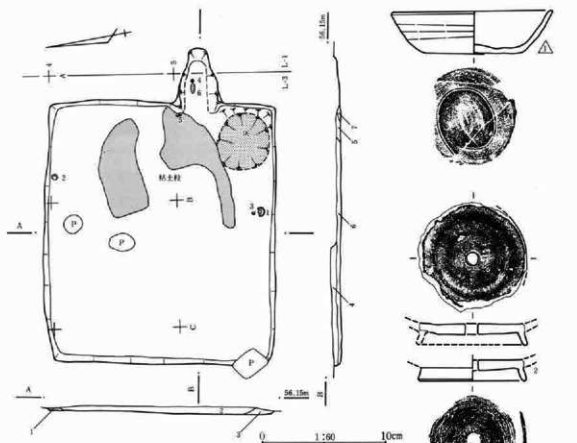
竈 竈は北壁下のやや南寄りにあり、記録保存図には煙道部の残存が記されている。袖は明瞭な形ではなく、なんとなく張り出したような形を呈する。

遺物 記録保存図中に1・2のNoが見え、遺物にも注記がなされているが、記録写真を見ると床から離れており、伴うとは認定し難い。3は埋土扱いの遺物中から抽出した。

S J 06

遺構 位置はL 3区の南西上がり勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図を見ると重複はない。平面形は長方形気味で、主軸は東壁でN 12°Eを測る。規模は北壁下で4.14m、立ち上がりは遺存のよい西壁下で13cmを残す。床面は注記No 6の上面か下面か注記がなく不明瞭である。貯蔵穴は記録保存図に記入はなかったが

第4篇 検出された遺構と遺物



1. 暗褐色土。焼土粒少なし、粘性あり。
2. 暗褐色土。焼土・木炭・ローム層粒わずか含み、やや粘性あり。
3. 暗褐色土。焼土粒ほとんど含まず、粗質で粘性なし。
4. 暗褐色土。焼土・木炭粒をわずか含み、粘性あり。
5. 暗褐色土。焼土粒をやや多く含む。龜岡連。
6. 暗褐色土。焼土粒をまじえず、埋質で軟らかい。
7. 暗褐色土。焼土粒を多く含む。龜岡連。

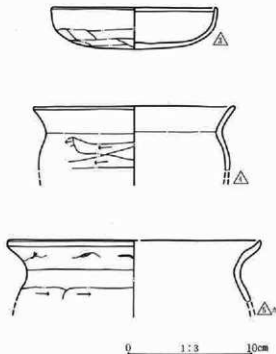
記録写真に写されていたので模式的に記入した。注意されたい。

竈 竈は東壁下のやや南寄り支脚として用いられたかもしれない位置に6が直立して存在した。前面には図のトーンで示したとうり焼土塊や粘土粒が散布し、廃棄時の破壊状況を偲ばせていた。

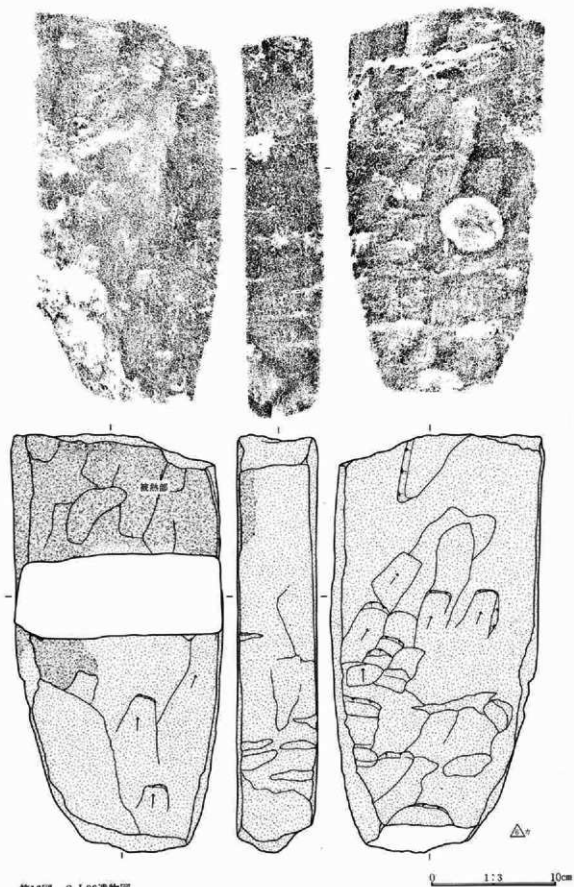
遺物 記録保存図と遺物注記と一致する遺物に1・2・3・4・5・6があり、それとは別に5・6の遺物に竈出土との注記あり。

S J 07

遺構 位置はL3区の西上がり勾配の微傾斜地にあるが大半は未調査地に入る。重複は全体平面図に重複は見えない。平面形は大半が未調査地に入込み、不明

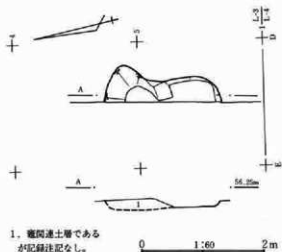


第15図 S J 06遺構・遺物図



第16図 SJ06遺物図

第4篇 検出された遺構と遺物



1. 竈周土層であるが記録記号なし。

0 1:60 2m



第17図 S J 07遺構・遺物図

いが、やや上まわる程度であったものと考えられる。竈は東側周壁部中央よりのやや南寄りに築かれているが、竈掘り方は、第10号住居跡と同様、ローム層にては確認されていない。東南隅には径45cm、床面よりの深さ25cmほどの円形ピットが確認されており、いわゆる貯蔵穴状ピットと考えられるものである。

周溝は床面精査の段階では不明だったが貼り床の除去により、一部を除いて浅い小溝がめぐり、住居跡を一周していたものと推察される。床面は竈付近、及び中央部は比較的固く、厚さ3cm程度の暗褐色土とローム土による薄い貼り床となっている。

なお、床面には、直径10～15cm、深さが床面より20cm前後の円形の小さいピットが8ヶ所に確認されており、住居廃棄後になんらかの小規模な建築遺構が建てられたことが推察されるものであった。」とある。

遺構 位置はC3・4区の勾配がほとんどない場所にある。全体平面図を見るとS J 8 B・S J 9 A・B・S K 05と重なっていたが、新・古の関係は記録されていない。平面形は隅丸方形気味で、主軸は東壁でN29°Wを測る。規模は西壁下で344m、立ち上がりは遺存のよい西壁下で16cmを残す。床面について記録保存図中に特に注記はないので旧報告を参照されたい。施設として周溝は北・西・南壁直下にあるが、床に存在したものが掘方に伴うか記録されていない。柱穴は検出されていないが、旧報告には建築物の重複を示唆する内容があるが、記録遺構図に指摘がない。貯蔵穴は南東隅部に検出され、径43cm、深さ23cmを測る。

竈 竈は東壁下のほぼ中央に存在しているが実測図は明瞭な表現がなされていない。構造不明瞭である。

遺物 記録保存図中に6点の遺物Noが見えたが、遺物と一致したのはA7、A8のみであった。遺物図中の△は一致しないながらもNo付の個体である。

竈である。主軸は東壁でN1°Wを測る。規模は東壁下で1.8+αm、立ち上がりは遺存のよい南壁下で8cmを残す。床面は記録保存図に特別な注記はないので明瞭でない。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は未調査地が多く不明瞭である。

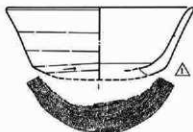
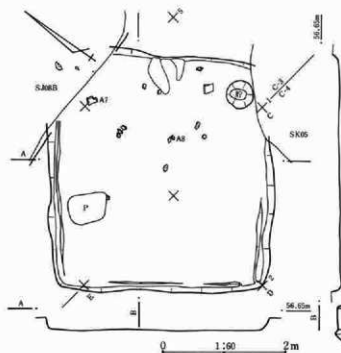
竈 竈は東壁下にそれらしき凹みが、記録保存図中に見えるが特に注記はない。

遺物 本住居跡として取上げられた遺物はなく、不明である。

S J 08A

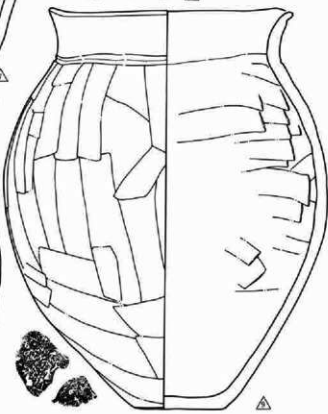
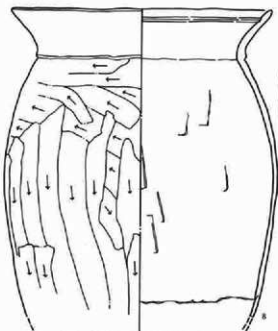
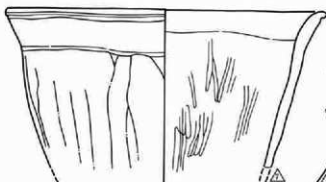
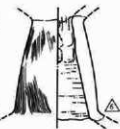
旧報告には次のように記述されている。「本住居跡はC-3区、C-4区にまたがり、東側は楕円形土壇、北側は第8-B号住居跡と一部重複して確認されている。

竈穴プランはかなり整然とした正方形を呈し、第3層上面より床面までの深さは約30cm、ローム層より3.70m×3.75mほどの規模である。竈穴がほぼ垂直状に掘り込まれているので構築時の規模はこの敷置に近い。



(S502-2)

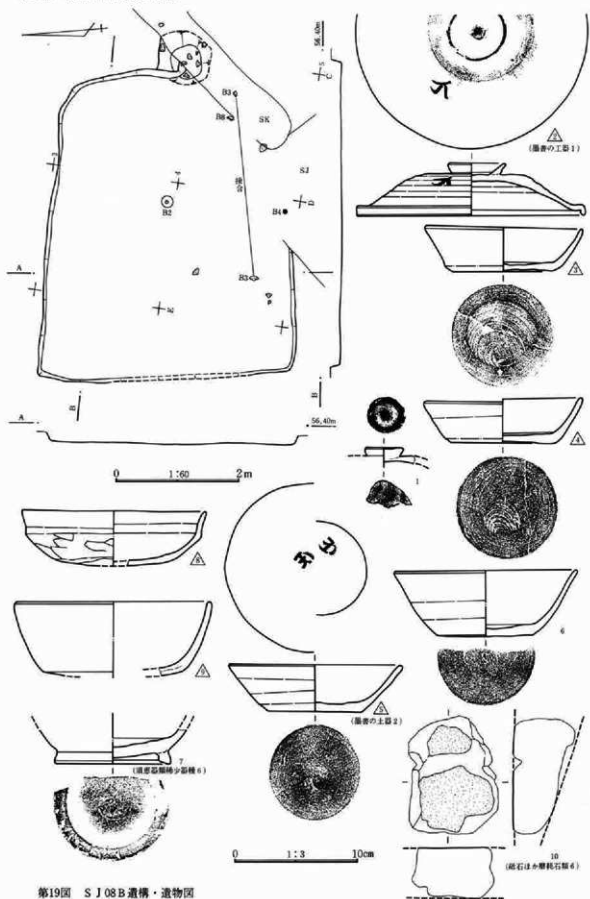
(須磨器種少型種11)



第18図 S J 08A 遺構・遺物図

0 1:3 10cm

第4篇 検出された遺構と遺物



第19図 S J 08 B 遺構・遺物図

S J08B

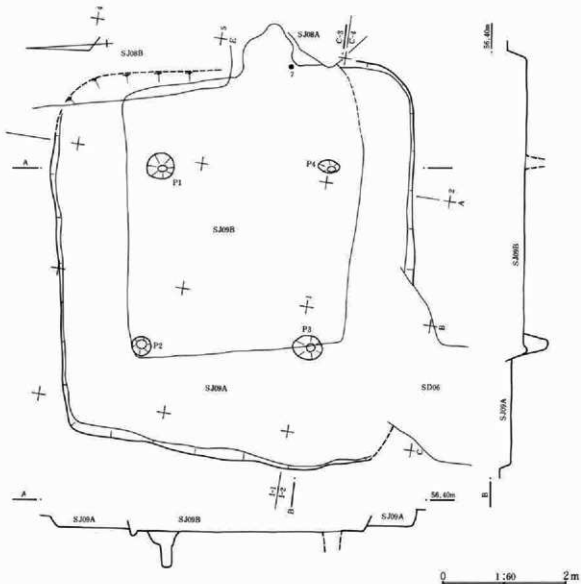
遺構 位置はL3区の平坦な地形上にある。重複は全体平面図を見ると8A・S J9A・Bおよび長方形土塼と重なっていたが、新・古の関係についての記録はない。平面形は一辺の長い台形気味で、軸は東壁でN7°Wを測る。規模は北壁下で4.8m、立ち上がりは遺存のよい北壁下で15cmを残す。床面について時に注記はない。柱穴 は検出されていない。貯蔵穴は記録保存図に明示がなく、不明確である。

竈 竈は東壁下の中央に、掘方らしき小土塼が記録されているほかは見えない。

遺物 記録保存図中にB2・B3・B4・B8の記入があり、遺物注記に一致するが、B5・B9の出土場所の明記を欠いている。

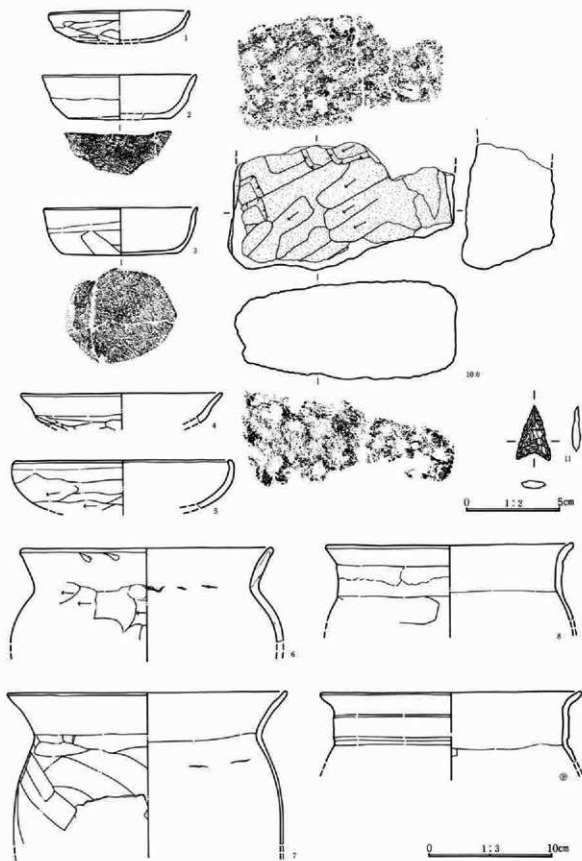
S J09A

遺構 位置はC3・4・I1・2の平坦な地形上にある。重複は全体平面図を見るとS J08A・B、S J



第20図 S J09A・09B遺構図

第4篇 検出された遺構と遺物



第21図 S J 09A 遺物図

09B、SD06と重なるが新・古について、SJ09Bのみが断面図上にその図示があった。SJ09Bが新しく、SJ09Aが古い。平面形は一辺の長い隅丸長方形気味で、主軸は東壁でN1°Wを測る。規模は南壁下で6.36m、立ち上がりは遺存のよい北壁下で18cmを残し、当遺跡の住居跡の中では最も大きい。柱穴は4個所に認められ、P1は径43cm、深さは床から58cm、P2は径30cm、深さ40cm、P3は径49cm、深さ38cm、P4は径34cm、深さ30+αcmであった。貯蔵穴は記録保存図にその図示がない。

竈 竈はSJ09BやSJ08A・Bとの重複があるため、東壁側が不明瞭となっているが、他の北・西・南壁には記録に該当がない。

遺物 遺物注記は9にNoが、10に竈との注記がなされているが、記録保存図中にNoの記録がない。9は竈材と考えられ、被熱個所が認められる。

SJ09B

遺構 位置はC3・4、I1・2西平坦な地形上にある。重複は全体平面図を見るとSJ8A・B、SJ9BとSD06との重複が見られるが記録に新・古の指摘はない。ただSJ09Aとの関係が断面図上に見えSJ09Aが古く、SJ09Bが新しい。平面形はやや歪んだ長方形気味で、主軸は東壁でN4°Wを測る。規模は北壁で4.2m、立上は遺存のよい西壁下で24cmを残す。施設として周溝が北・東壁の一部に認められる。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は記録保存図には認められなかったが、記録写真中に竈右袖側に凹みが見られ、遺構図には、それを模式的に記入したので注意されたい。

竈 竈は東壁下のやや南寄りにあった。

遺物 2・3について遺物注記がなされていたが、記録保存図中にNoが記入されておらず、供伴は明確でない。

SJ10

遺構 位置はC4・12区の平地な地形上にある。重複は全体平面図を見ると重複はない。平面形は隅丸方形気味で、主軸は東壁でN19°Wを測る。規模は中央で3.5m、立ち上がりは遺存のよい南壁で15cmを残す。施設として四壁下に周溝を施し、柱穴は検出されていない。貯蔵穴は南東隅に検出され、径52cm、深さ30.5cmを測る。

竈 竈は東壁のやや南寄りにある。

遺物 遺物注記に2・3が存在するが、記録保存図には該当がない。

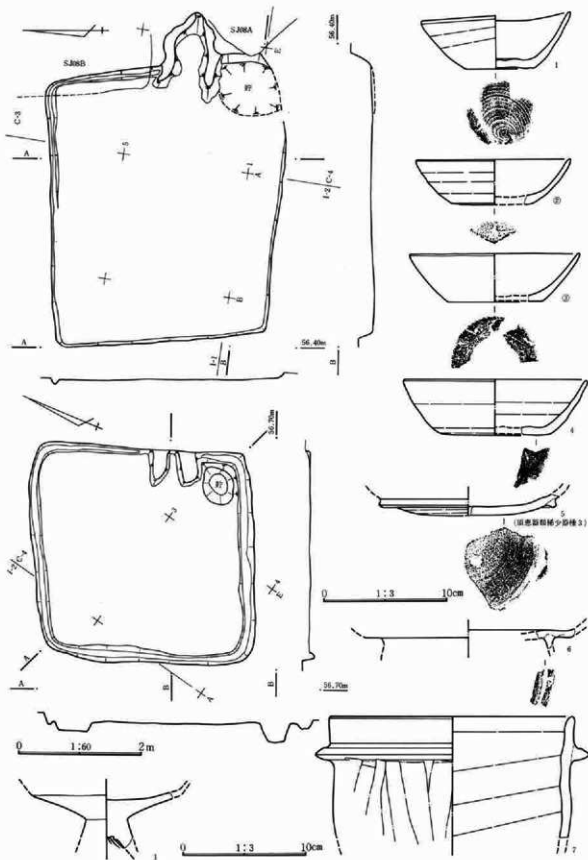
SJ11A

遺構 位置はD4区で北東上がり勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図を見るとSK24、SD05、SB2の柱穴、SJ11Bと重なっていたが、調査所見に新・古の記述は旧報告にSB02が新しいとする外はない。平面形は東半のみの残存で西半は11Bに重複し、残存部分は隅丸形気味で、主軸は東壁でN19°Eを測る。規模は東壁下で3.6m、立ち上がりは遺存のよい北壁下で15cmを残す。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は記録図面に該当がない。

竈 竈は東壁下にそれらしき張り出しの図化記入あり。

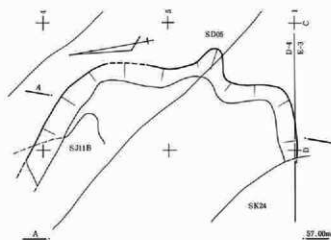
遺物 本住居跡として取上られた遺物はない。

第4篇 検出された遺構と遺物

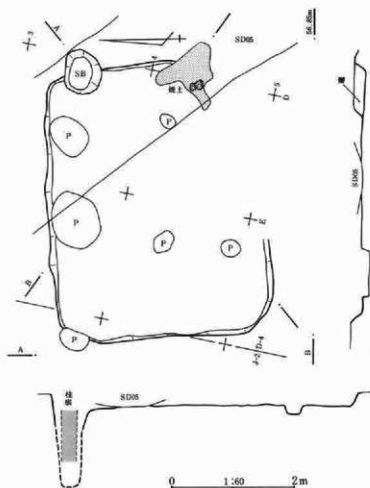


第23図 S J 10遺構・遺物図

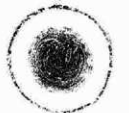
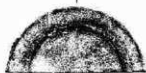
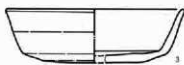
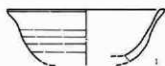
第22図 S J 09遺構・遺物図



第24図 S J 11A遺構図



第25図 S J 11B遺構・遺物図



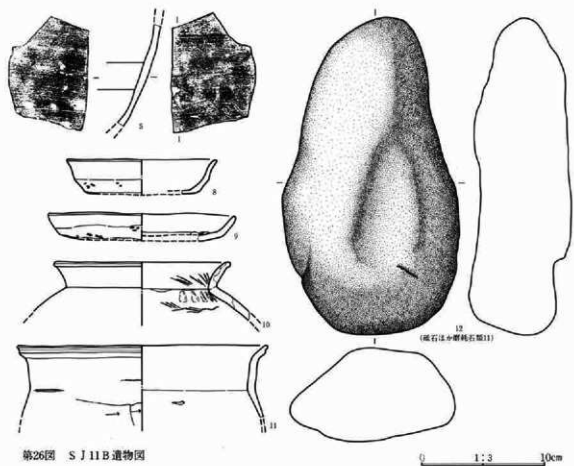
(陶片等の調査図類7)



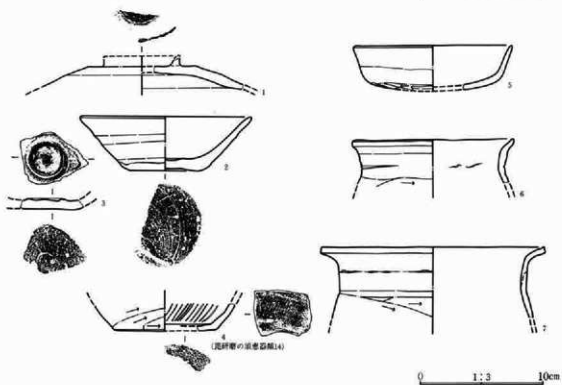
(陶片等の調査図類6)



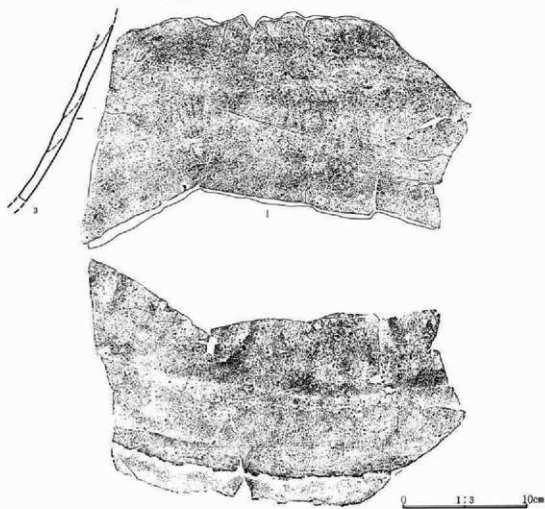
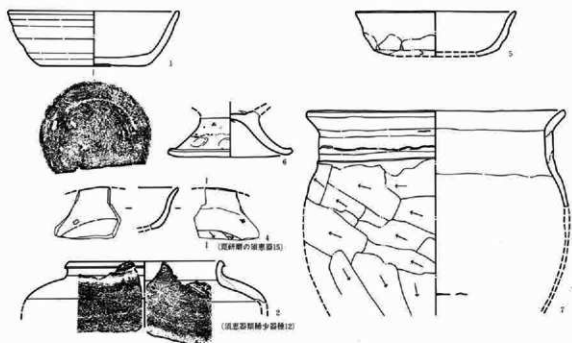
第4篇 検出された遺構と遺物



第26図 S J 11 B 遺物図

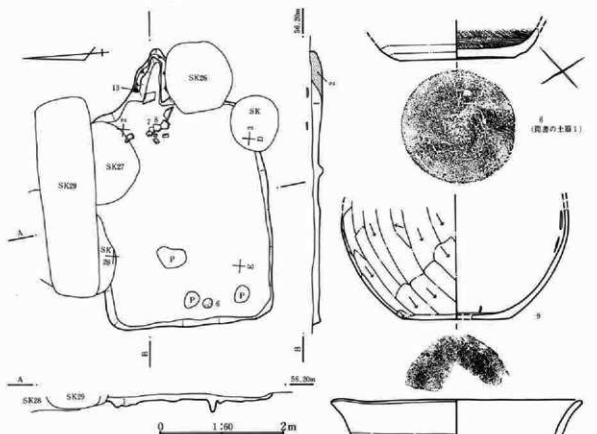


第27図 S J 11 B - C 遺物図

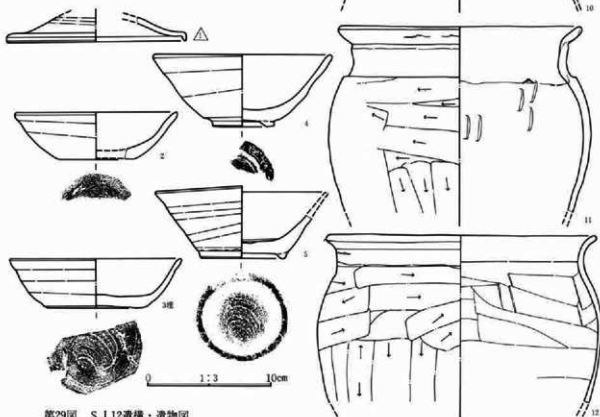


第28图 S J 11C 遺物图

第4篇 検出された遺構と遺物



1. 黒褐色土。ローム層粒、ローム層小ブロックを多く含む。締る。
2. 暗褐色土。焼土・木炭粒を多く含む電同連土層。



第29図 S J 12遺構・遺物図

S J11B

遺構 位置はD4区の東上がり勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面によるとS J11A、S J05と重なっていたが記録図に新・古の関係は記録されていない。平面形は隅丸長方形気味で、主軸は東壁でN9°Wを測る。規模は北壁下で4.1m、立ち上がりは遺存のよい北壁下で21cmを残す。床面はローム層ブロックと黒褐色土により約10cmの厚さで貼床され、掘方は起伏を持っていたという。その硬さは特に竈周囲および、中央部が締っており、他は軟らかであったという。貯蔵穴は記録図に該当がない。

竈 竈は東壁下のやや南寄りにあり、袖石が使用され、袖材はローム層ブロックとローム層客土によって構築され、壁面は焼けて良く締っていたという。

遺物 12点を掲げたが床面出土の注記、実測図平面に遺物番号の記入はなされていないため、詳細は不明。取り上げた遺物注記に11B・Cの一群があり、11C住居跡記録は該当がなく、全体平面図にも住居跡番号はない。おそらく、調査過程で与えた住居跡番号を取り消したものと考えられる。またS J11Aの遺物が一切見当らなかったため、S J11Bの遺物がそれに該当し、S J11Cの遺物がS J11Bから出土したのかもしれない。残念ながら両住居跡ともに遺物出土状況写真がなく照合できない。

S J12

遺構 位置はE3区の東上がり勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図を見るとS K26・29と重なっているが、調査所見に新・古の記載はない。平面形は隅丸長方形気味で、主軸は東壁でN2°Wを測る。規模は南壁下で3.45m、立ち上がりは遺存のよい北壁下で13cmを残す。床面は黒褐色土とローム層ブロックによる貼床がなされ西側で約10cm、東側で約7cmの厚さであったという。締りは中央部と竈周辺が特に強く、他は締りやや弱いとの所見あり。貯蔵穴は記録図にその指摘がない。

竈 竈は東壁下のやや北寄りにあり、袖材は白灰色粘土とローム層とにより築成され、内壁は良く焼け込んでいたという。

遺物 遺物取上時の遺物注記1・8・8'にNoが、Bにカ(竈)とあり、平面図には7・8・13の出土Noの記入がなされている。遺物No7と平面図内Noとは写真照合による。

S J13

遺構 位置はK2・L1の西上がり勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図によると、重複遺構はない。平面形は隅丸方形気味で、主軸は東壁でN15°Wを測る。規模は東壁下で3.2m、立上は遺存のよい北壁下で24cmを残す。床面はほぼ水平で締り強いという。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は調査時の写真によれば南東隅部がわずかに凹み貯蔵穴を思わせ、実測図中のそれは補足推定である。

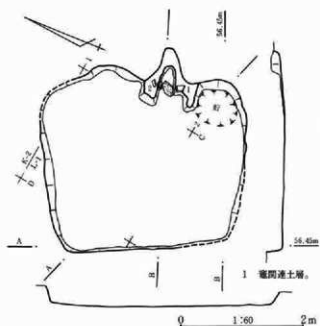
竈 竈は東壁下のやや南寄りにあり、竈内に1・2の甕が存在したという。

遺物 遺物、実測図注記にNoはなく、1・2は写真照合である。

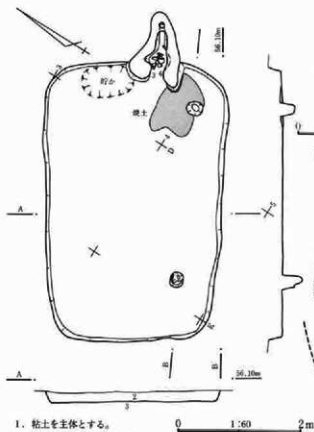
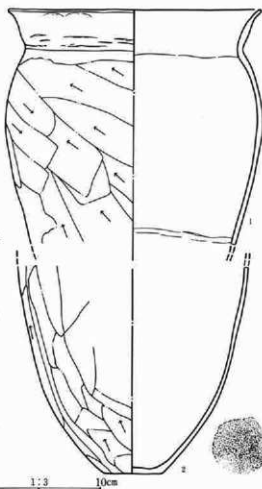
S J14

旧報告には次のように記述されている。「本住居跡は、南西部のL-1区に、6号、および13号住居跡と近接して、NE-68°の方向で位置している。

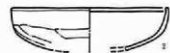
住居跡プランは4.4m×2.2mほどの隅丸長方形を呈し、第3層の暗褐色土層の下部を床面としている。第



第31図 S J 13遺構・遺物図



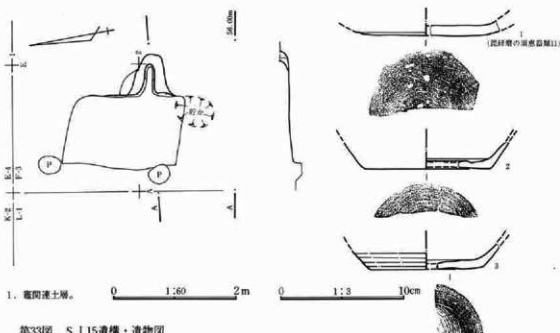
1. 粘土を主体とする。
2. 暗褐色土。硬く、締りあり。
3. 黒色土。掘方上に薄く貼られているが、床面と暗褐色土の地山との境目は不明瞭。



第32図 S J 14遺構・遺物図



第4篇 検出された遺構と遺物



第333図 S J 15遺構・遺物図

3層の上面より床面までの深さは40cmほどである。竈は東側周壁の南寄りに位置しており、周壁外へ舟底状に掘り込み、暗褐色土をわずかに含む、灰白粘土で構築されている。煙道は周壁より60cmほどの距離で、竪穴外へ1孔確認された。床面は第3層暗褐色土の下部にあたるが、住居跡内埋没土とほぼ同質のため、見分けが困難であった。周溝については確認し得ない。床面の除去の際に、床面下に2ヶ所の柱穴状ビットが確認されているが、本住居跡に伴うか確定できない。」とある。

遺構 位置はL1区の北西上がり勾配の微傾斜地にある。全体平面図に重複はない。平面形は隅丸長方形気味で、主軸は東壁でN31°Wを測る。規模は北西壁下で4.27m立ち上がりは遺存のよい北西壁下で16cmを残す。床面は全体に締りが少なく、東側は特に弱かったという注記が記録保存図にある。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は記録中になく、記録写真中にそれらしき凹みが写されている。図中のそれは推定補描である。

竈 竈は北東壁下のやや南寄りに灰白色粘土で構築され、内壁の焼け込みは少なく、焼道部の焼け込みがやや強いという。燃焼部内に土師器壺が存在したという。

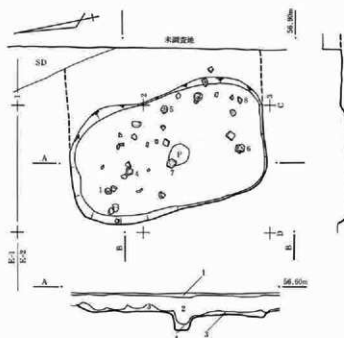
遺物 遺物Noは平面図、遺物注記とも3・4がカ(竈)とあり、3・4は同一個体である。

S J 15

遺構 位置はF3区の北上がり勾配の微傾斜地にある。全体平面によれば重複はなく、平面形は全体に黒褐色土内に存在し、検出面が低く、全体規模の把握はなされなかった。床面はローム層ブロックと褐色土からなる貼床層がわずか残存したに過ぎなかったという。主軸は東壁でN12°Eを測る。規模は北側で1.1+αm、立ち上がりは竈の奥で15cmを残す。貯蔵穴は記録図中にはなかったが記録写真を見ると竈右側に浅い凹みがあり、それを思わせる。図中は推定の補描である。本住居跡を推測する場合、1辺約1.9mの規模とは考え難く、もう少し大き目であったと考えられる。

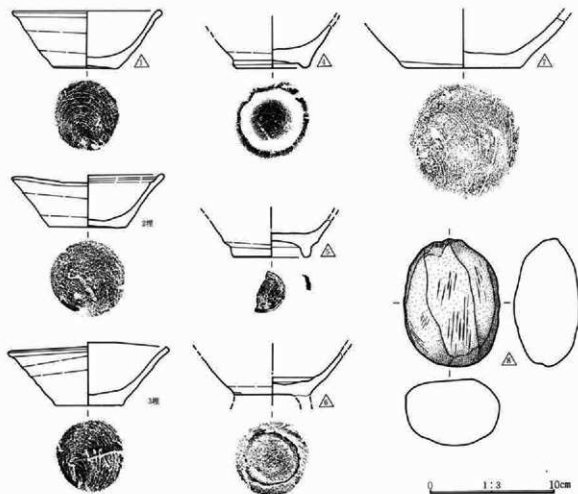
竈 竈は東壁下の南寄りにあり、内側に灰の存在が顕著という。

遺物 埋土中から取り上げられた個体を3点図示したが、取上げ遺物の全重量は少ない。



1. 黄褐色土。表土層直下にある、やや酸化気味の層。粗質である。
2. 暗褐色土。粗質でさらさらしており軟質。多くの遺物を含む包含層。
3. 黄褐色土。ローム層ブロックを主体とする。陥床層か。
4. 黄褐色土。ローム層小ブロックを含む。小土塊の埋土層。後出土壌か。
5. 黄褐色土。地山のローム層。

0 1:60 2m



第34図 S J 16遺構・遺物図

第4篇 検出された遺構と遺物

S J16

遺構 位置はE2区の東上がり勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図を見るとSD04と重なり、記録写真の東壁断面に新・古の関係が写されていた。SD04が新しく、S J16が古い。平面形は隅丸方形気味で、主軸は東壁でN6°Wを測る。規模は西壁下で3.1m、立ち上がりは遺存のよい西壁下で掘り方まで16cmを残す。床面は掘方のみを調査し、東側延長が未調査地内に入る。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は検出されていない。

竈 竈は検出されていないため、未調査地内に入り込む、東壁に存在する可能性あり。

遺物 Noは遺物、記録図中にあり。1・4・5・6・7・8は遺物にNo注記があり、1・5・6・7は実測図にNo注記があり照合が可能であった。床面出土の認定はなされていない。

S J17

調査概報には次のように記述されている。「本住居跡はI-2区にNW-78°の方向で位置し、北側西寄り不正円形土壁、及び住居跡中央を南北に走る小規模な溝によって一部立切られている。

第17号は確認された住居跡中最大のものであり、第3層上面より床面までの深さは30cmほどで、ローム層より5.75m×5.80mほどの正方形プランとなる。カマドは東側周壁部中央からわずかに南側へ築かれており、カマド中央部には砂岩質の支脚がすえられている。煙道の小孔については竅穴外2ヶ所に確認している。カマドの構築にあたっては周壁外に楕円状の掘り方を穿ち、暗褐色土の混じる黄白色粘土により築かれ、その内壁は耐火土と考えられる焼土の混じった灰色粘土により固められている。主柱穴は4ヶ所に確認されており、その柱穴中心間の距離は3.0-3.1mで、ほぼ等しく、かなり整然とした平面構成がみられる。床面については暗褐色土、ローム土により、水平堆積状に厚い貼り床を構築し、その厚さは住居中央部では30cmほどになる。」とある。

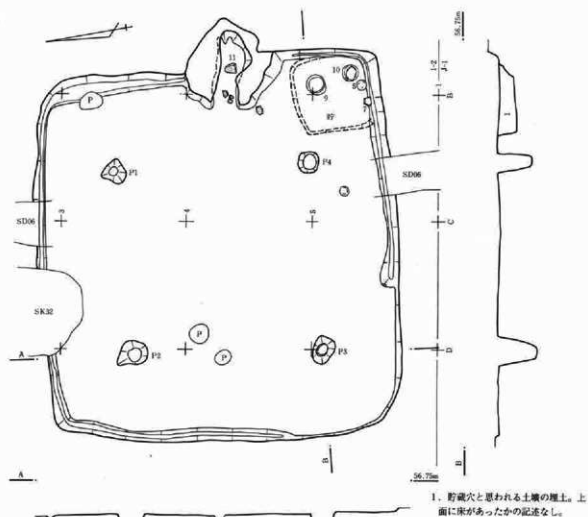
遺構 位置はI2区の平坦な地形上にある。重複は全体平面図を見るとSD06と重複していたが記録図中に新・古の関係の注記はない。旧報告は立切られとある。平面形は隅丸方形気味で、主軸は東壁でN3°Eを測る。規模は北壁下で5.3mを測り、当遺跡ではS J9Aと並んで大形に属す。立上は遺存のよい東壁下で17cmを残す。床面はローム層と黒褐色土をまじえ、厚く貼床をほどこすという。罫りは竈周囲と中央部にあり、他はやや甘く、両側床面はやや高かったという。施設として全体に周溝を巡らしている。柱穴は4箇所を検出され、P1は径38cm、深さは床から55cmを測る。P2は径44cm、深さ46cm、P3は径42cm、深さ56cm、P4は径33cm、深さ57cmを測る。貯蔵穴は南東端に検出され、隅丸方形を呈する。長径120cm、深さ34cmを測る。各柱間はP1・P4間、P2・P3間が3.1m前後、P1・P2間、P4・P3間が3.0m前後ではほぼ方形に近い、30cm1尺とすれば約10尺である。唐尺値に近い。なお出土遺物の主体は8世紀代にあり、しかも大形住居である点から、ある特権階層の存在が示唆される。

竈 竈は東壁下のやや南寄りにあり、内面底に焼土・炭化物粒を含む層が1cm前後の厚さで存在したという。遺物No11は石製石脚である。構築状況に関して旧報告に詳しい。

遺物 記録図・遺物にNo注記がなく、5・6・7・8・9・10は遺物注記に貯とあった。写真照合の結果、5・7・9・10は、平面図中遺物に一致した。11・12・13には遺物注記カ(竈)とあり。

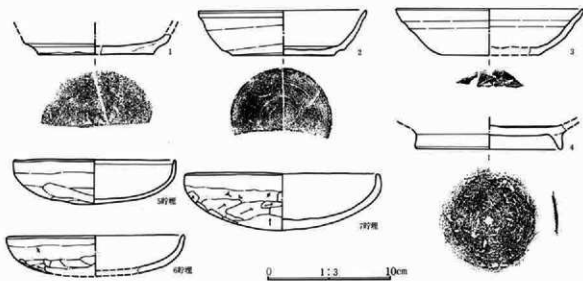
S J18

遺構 位置はI1・J1区の東上がり勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図によるとSD07と重なる



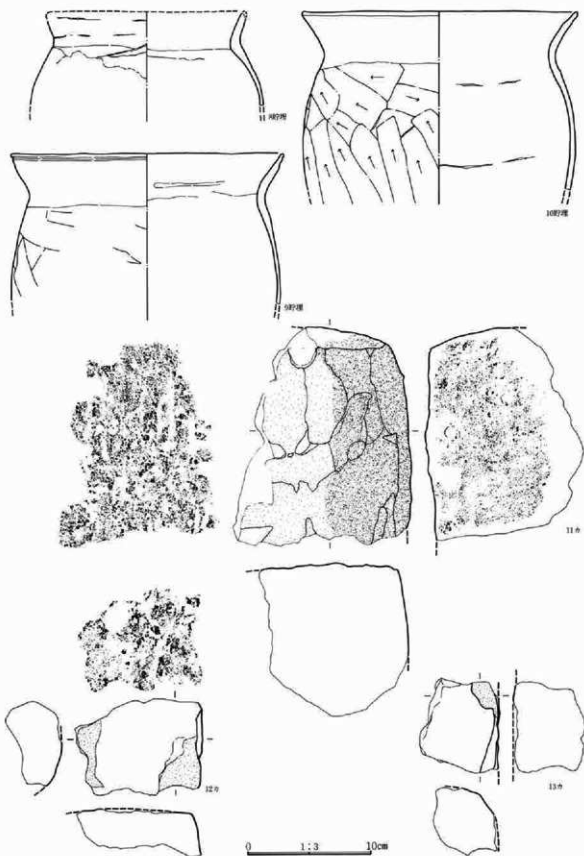
1. 貯蔵穴と思われる土塊の埋土。上面に床があったかの記述なし。

0 1:60 2m

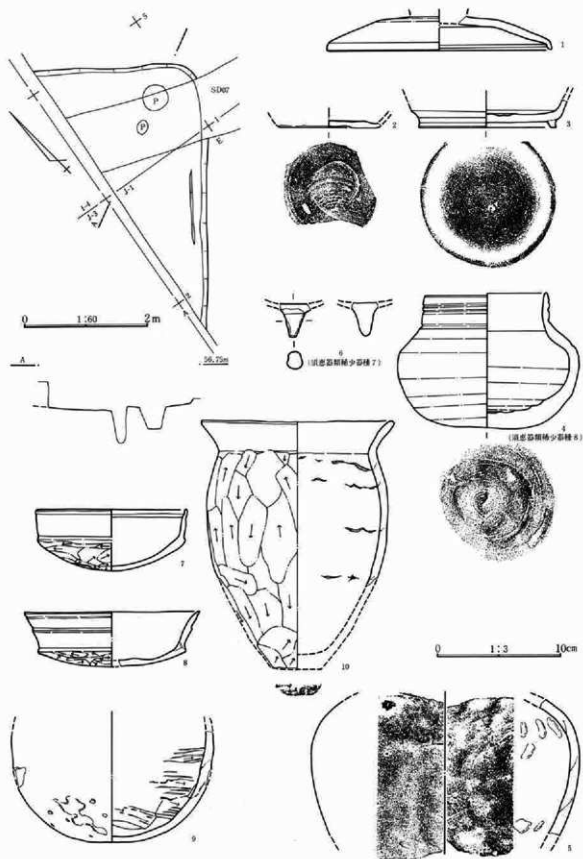


第35図 S J 17遺構・遺物図

第4篇 検出された遺構と遺物

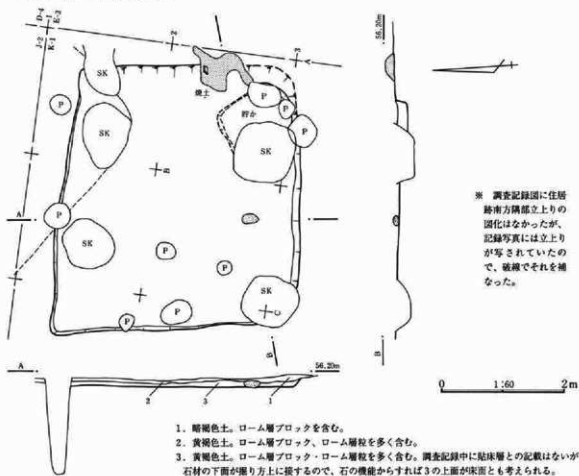


第36図 S J 17遺物図

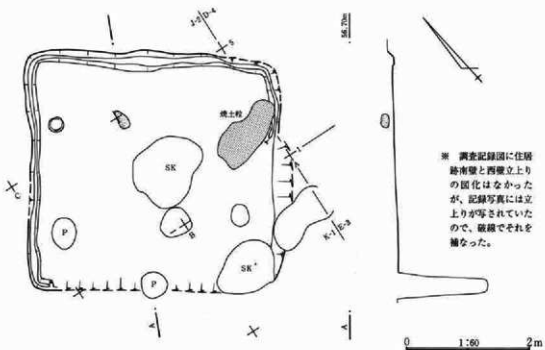


第37圖 S J 18遺構・遺物圖

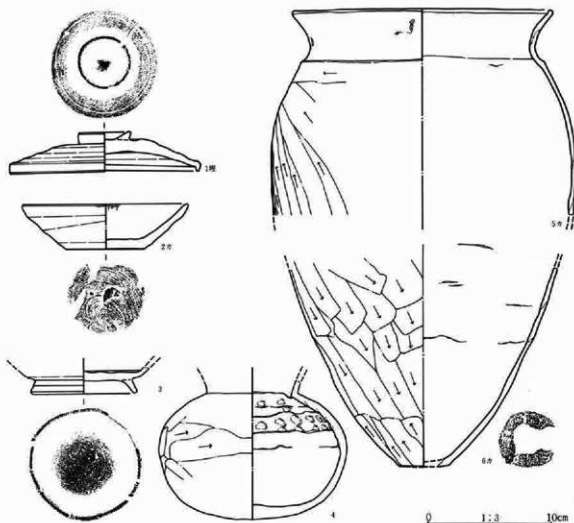
第4篇 検出された遺構と遺物



第38図 S J 19A 遺構図



第39図 S J 19B 遺構図



第40図 S J 19遺物図

が新・古の関係は明示されていない。平面形は隅丸気味で、主軸は東壁でN46°Eを測る。規模は西半が未調査で明らかでないが東壁下で4.25+αm、立上は遺存のよい北壁下で4cmを残す。施設として東壁下の部分に周溝を施し、柱穴は検出されていない。

竈 竈は検出されていないので未調査地に存在する可能性あり。

遺物 記録図・遺物にNo注記はなし、床面出土遺物は判然としない。

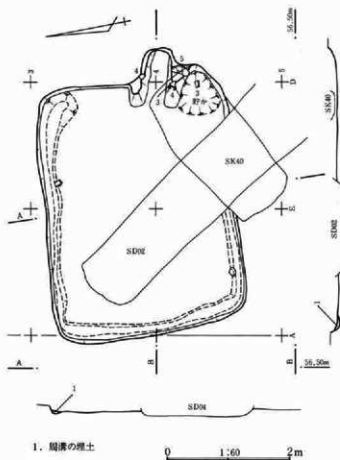
S J 19A

遺構 位置はK1区の北上り勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図にS J 19Bと重なっていたが、新・古の関係の明示はない。平面形は一边の長い隅丸長方形気味で、主軸は西壁でN1°Wを測る。規模は北壁下で4.23m、立上は遺存のよい南壁下で6cmを残す。床面は黒褐色土とローム層ブロックで築土し、中央では締る。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は南東隅部に、または掘方に貯蔵穴様の土壌が存在するか注記なく不明瞭である。

竈 竈は東壁下のやや北側に存在した。

遺物 S J 19はA・Bの2址がありながら、19として1址の扱いで遺物が取上げがなれており、それがA・

第4篇 検出された遺構と遺物



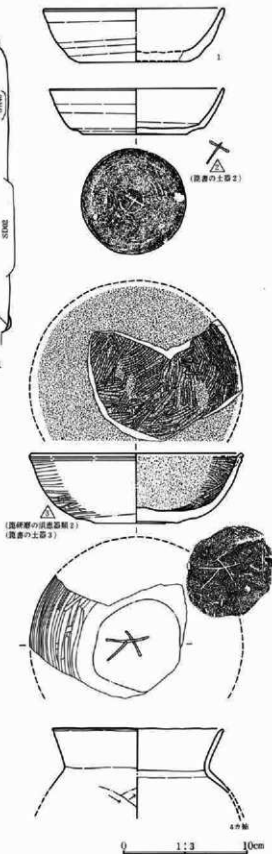
第41図 S J20遺構図

Bのどちらかに属すかは、遺物出土状態の記録写真もなく不明である。

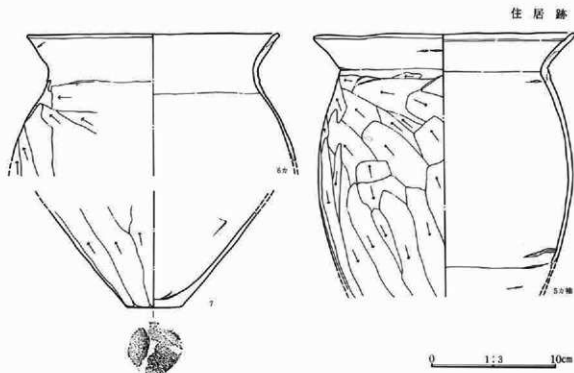
S J19B

遺構 位置はD4・J2・K1区の東上り勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図を見るとS J19Aと重複しているが注記に新・古の明示はない。平面形は方形気味で、主軸は東壁でN43°Wを測る。規模は北壁下で4.1m、立ち上がりは遺存のよい東壁下で4cmを残す。床面はローム層と暗褐色土を薄く客土した貼床との所見がある。施設として西・北壁下に周溝が巡り、柱穴は検出されていない。貯蔵穴は記録図に該当がない。

竈 竈は東壁下のやや北寄にあるが、調査所見に「本址のカマドは本住居址に伴うものとは、位置・方向的に考え難く、もう一址別住居の存在が考えられるが調査時において確認はできなかった。」という。



第42図 S J20遺物図



第43図 S J 20遺物図

遺物 S J 19はA・Bの2址がありながら、19として1址の扱いで遺物の取上げがなされており、それがA・Bのどちらかに属するかは遺物出土状態の記録写真もなく不明である。

S J 20

旧報告には次のように記述されている。「本住居跡はK-1区の西側寄りに確認されたもので、南北方向に走る中規模な溝②(S D 02)により、南側周壁、床面中央が切り込まれている。ローム漸移層より4.0m×3.1-3.15m、第3層の暗褐色土層の上面より床面まで25cmほどの深さで、やや隅丸の長方形を呈している。カマドは東側周壁の南寄りに位置し、周壁外へ舟底状に掘り込み、構築している。床面は固く、薄い貼り床が認められる。貼り床の除去によりローム層に掘り込まれた浅い周溝が住居跡のカマドをつつむように一周していることを確認している。」とある。

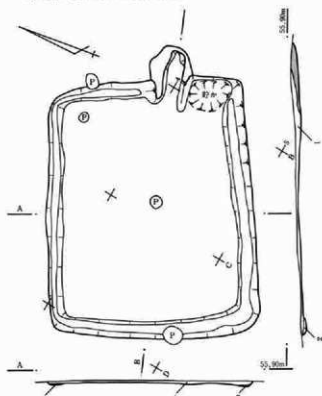
遺構 位置はK 1区で平坦な地形上にある。重複は全体平面図によるとS D 02、S K 40と重なるが、新・古の明示はない。平面形は隅丸長方形気味で、主軸は東壁でN 8°Eを測る。規模は北壁下で4.06m、立上は遺存のよい北壁下で13cmを残す。床面はローム層ブロックと黒褐色土で薄く客土し貼床としていたという。施設として東壁を除き周溝が巡っている。床面図にはそれがなく、床下に存在していたようで、旧報告と一致する。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は図示はなく、写真によると南東隅部にそれらしき凹みがあり、図中のそれは推定の補描である。

遺物 遺物Noは2・3にその注記があり、4・6にか(壺)とあり、5にか桶とある。記録図中には3・4・5に位置とNoの記入があり照合が可能であった。床面出土の認定はなされていない。

S J 21

遺構 位置はF 4区の平坦な地形上にある。重複は全体平面図を見ると重複はない。平面形は隅丸長方形気味で、主軸は東壁でN 22°Wを測る。規模は北壁下で4.0m、立上は遺存のよい西壁下で4cmを残す。施設

第4編 検出された遺構と遺物



第44図 S J 21遺構・遺物図

遺物 埋土中出土の1点を掲げた。

S J 22

遺構 位置はF 2・F 4区の平坦な地形上にある。重複は記録図を見ると北東側に削平化を示す一線が記入され、さらに北壁西半を欠損が記録されているが理由は判然としない。平面形は南半は未調査地に入る。主軸は東壁でN 24°Wを測る。規模は北壁下で43+a mを測る。立上は遺存のよい西壁下で22cmを残す。柱穴は検出されていない。貯蔵穴および竈は未調査地に存在する可能性がある。

遺物 記録図、遺物にNo注記はない。1～8は埋土中の遺物を掲げた。

S J 23

遺構 位置はF 4区の平坦な地形上にある。重複は全体平面図に認められないが南側の大半が未調査地に入る。そのため全体形状は不明確である。主軸は東壁でN 38°Wを測る。規模は北東壁下で1.7+a mを測る。立上は遺存のよい北西壁下で13cmを残す。

竈 竈は北壁下に確認されたが、大半は未調査地中に入る。

遺物 本住居跡から取上げられた遺物は見当たらない。

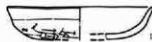
S J 24

遺構 位置はE 2区の北東上り勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図を見るとS D 02と重なる新・古の関係は明瞭でない。平面形は遺物のみが取残された状態であり規模も判然としない。

遺物 記録平面図に2点が示されているが、出土遺物中に見当たらない。

1. 暗褐色土。ローム層粒、ローム層ブロックを含み、黒褐色土で構成されている。
2. 暗褐色土。ローム層粒少ない。層状土であるが、調査記録図中に、西溝埋土の上面が硬かったか、軟らかかったかの記載はない。
3. 暗褐色土。焼土・木炭粒を含む竈関連土層。

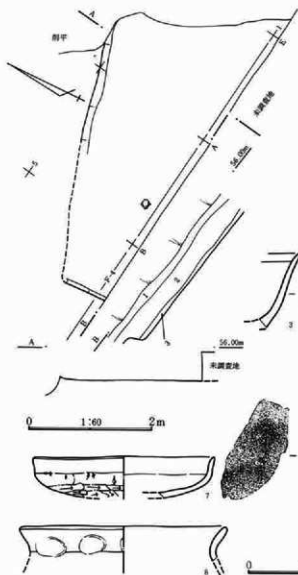
※ 調査記録図中に住居平面南東隅部に貯蔵穴様土塊の表現はないが、記録写真中に竈右溝に残った凹みが写されていたため、破線でそれを補った。



0 1:3 10cm

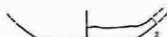
として周溝が全周していたが上面は床面のようなものである。柱穴は検出されていない。貯蔵穴は記録図中に明示されていないが記録写真中に竈右側にそれらしき凹みが写されており、図中のそれは補描である。

竈 竈は東壁下の中央やや南寄にあった。



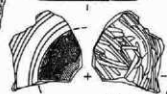
第45図 S J 22遺構・遺物図

1. 暗褐色土。表土層で全体的に粗質。
2. 暗褐色土。ローム層粒・ローム層ブロックをわずかながら混える。全体に粗質である。
3. 暗黒褐色土。ローム層粒、ローム層ブロックをわずかながら混える。全体に締りがある。陥床層。



(遺構層の状況断面5)

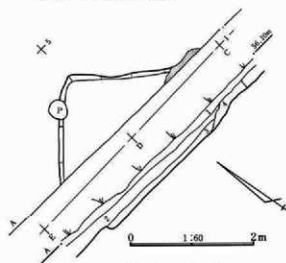
0 1:60 2m



(遺構層の状況断面8)



0 1:3 10cm



第46図 S J 23遺構図

1. 暗褐色土。表土層で全体的に粗質。耕作土層。
2. 暗褐色土。ローム層粒・ローム層ブロックをわずかながら混える。全体的に粗質である。
3. 暗黒褐色土。ローム層粒、ローム層ブロックをわずかながら混える。全体に締りがある。
4. 黄灰色土。ローム層粒・木炭・焼土粒含む腐植層。



0 1:60 2m

第47図 S J 24遺構図

掘立柱建物跡

掘立柱建物群について旧報告は次のように触れている。「発掘本調査により多数の柱穴ピット群を確認しているが、遺構の重複、削平等により、掘立柱遺構としての把握が難しく次にかかげる4棟、及びB-1区からB-2区にかけて、さらにJ-1区にかけてピット列が掘立柱建築遺構として可能性がある。

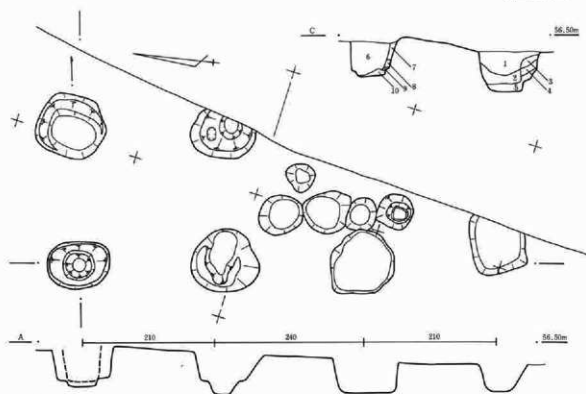
- ①B-2区からC-1区の大規模な建築遺構(S B01)。
- ②D-4区の中規模な建築遺構(S B02)。
- ③C-4区の小規模な建築遺構(S B03)。
- ④J-2区からJ-4区の小規模な建築遺構(S B04)」とある。

なお調査区域内には多くの柱穴状ピットが確認されていることから、かなりの掘立柱建築遺構の存在していたことが推察されるものであった。」とある。

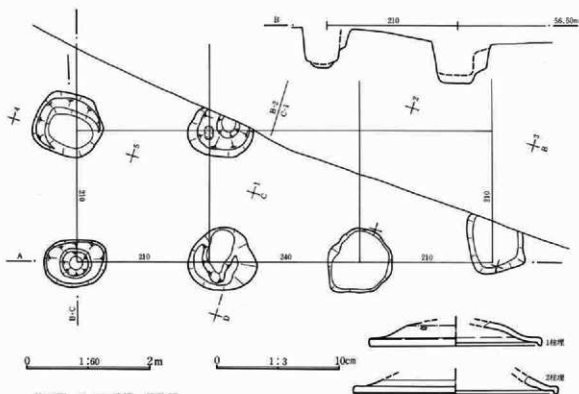
掘立柱建物跡は調査拡張地域の北半部に7址が確認された。そのうちS B01・02・03・04については旧報告の時点かまたは調査中に掘立柱建物跡の建物単位の把握がなされたが、S B05・06・07については、掘立柱建物と注記されたのみで単位の把握がなされていなかったため今回の整理作業の中で建物単位と各柱間単位の検討を行なった。また建物単位の把握のなされているS B01・02・03・04も同様に行なった。

検討法は30cmと35cmを単位とする場合の両方で行ったが、厳密さは、調査記録図が平板実測を用いての作成のため大差は生じていないかもしれないが、測定者、測点設定、図化者の一体化がなされないことから結果的な精度差が問題で、さらに平板設定者に設定時の心得が完全に果されているかも手伝って、実測図面の精度は、そう高くないと云える。そのため実測図のトレースは原因表現に近い形を、図化された線位置も原因を遵守し大幅な修正は加えていない。また断面図についても遺跡で作成された断面図を修正することはしていない。しかし、S B05・06・07については建物単位の把握が遺跡でなされなかったため、成断面図の作成を記録保存図中の地面高値によって新たにいった。建物単位の把握は、その建物の平面形がわずかに歪んでいた場合は困難で、おおむね、桁と梁とが直角になっていたであろうと仮定した。ただしS B02のみは側柱の関係から桁と梁との関係は直角でなく、その場合、隅柱と梁の棟側柱穴位置との関係を相互、平行の関係にあるであろうと見なし、6本の柱穴が頃良く並びうる平面上の線を捉えた。つまり平面上において作成しうる頃合の平行四辺形を求めた。ここではそれを建物の側柱規模と呼んだ。建物単位は本来であれば屋根規模も想定しておく必要があるが、それは妻入の時、おおむね1間を、切妻の場合は半間ほどと考えているので、およそS B01とS B07の同時並存などは考え難い。

柱間は尺、寸と合せて頃合いの長さを求め、一辺の総長を桁行長、梁行長とした。側柱線を求める作業工程は、①30cm・35cm単位2種のトレース方眼を作成し、あらかじめどちらの方眼に掘立柱建物が関連するのかを調べる。②全体の柱穴を鉛筆トレース(A)、③方眼紙上にトレース図(A)を貼り、それに基づいておよその平行四辺形関係線を別のトレース用紙上に求める(B)。④平行関係線上にある(A)+(B)のまま(B)の柱間を完尺値に置き直し計算し、頃合いの完尺を求めるが、完尺が求められない場合は、寸刻みで計算し、その際、経験的ではあるが、おおむね、三・五・六寸が残数の基本単位であることも考慮に考え柱間長を求めて(C)を作成する。⑤完尺または残数寸単位を含む柱間数にある平行四辺形(C)を二たび方眼紙上に(A)とともに載せ直しを行い補正柱間の平行四辺形(C)の側柱線を作成する。⑥その際、完尺の求め方が妥当でない場合はC'の側柱線と掘立柱建物跡の柱穴とが噛み合わない場合、噛み合わない時は③・④にもどって側柱線作図の再検討を行う。以上のような方法によって柱間単位の推定および側柱規模を捉えた。しかし、最終的には、考古学

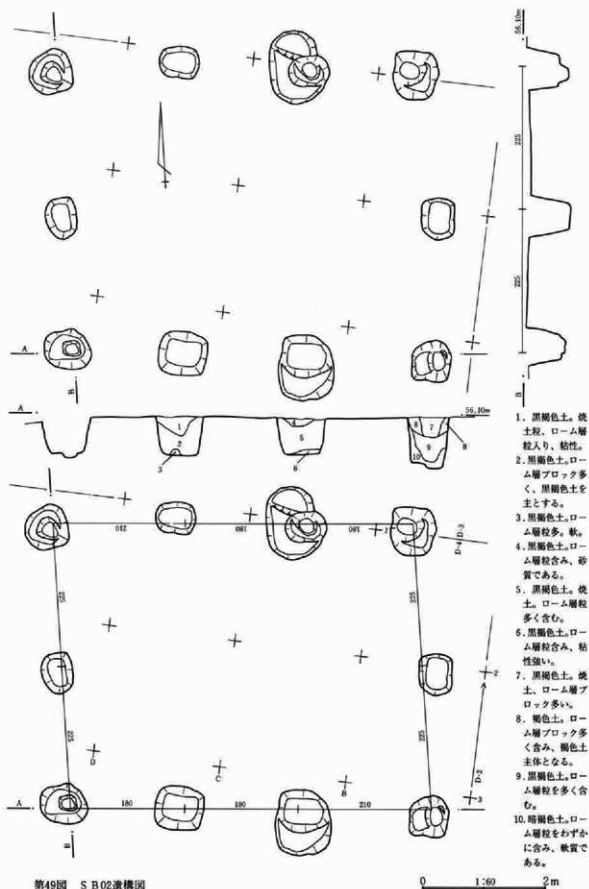


1. 黒褐色土。ローム層粒、ブロック入り、粘性味強い。
2. 黒褐色土。1に似るが、粘性は少ない。
3. 褐色土。ローム層ブロックを主体とする層。
4. 黒色土。黒色土を主体とする。
5. 黒褐色土。ローム層ブロックを多く含む。
6. 黒色土。ローム層小ブロックを多く含む。粘性味強い。
7. 黒色土。ローム層小ブロックを多く含む。粘性やや弱い。
8. 褐色土。ローム層小ブロックを主体とする層。
9. 黒色土。黒色土を主とする層。
10. 注記漏。



第48図 S B01遺構・遺物図

第4篇 検出された遺構と遺物



第49図 SB02遺構図

の基本が同質・同等の比較を行うことを原則とし掘立柱建物跡の各柱穴形状・埋土状況が同質であったとは調査時点を実現してのことではないので言い切れない。したがって柱間単位、側柱規模は机上のものでしかなく、作成した側柱線推定の平面図も推奨しうる性格のものではないので、それとは別に側柱線の推定をしない実測図を付載した。二種の平面図は、その意味からの作成である。

掘立柱建物群の各時期や、相互の同時性は発掘記録類にはなく、いつの所産で、いったいどのような性格・機能にあったかも不明である。しかし、S B 01・06・07の柱穴掘方形状は大きく中世以降とは考え難く、それは中世以降の県内における最大の掘立柱建物（利根郡月夜野町後田遺跡 S B 01）の掘方幅が1.1m、柱間が240・270cmであったので、S B 07の径約1m、柱間210・(240)cm、S B 06の径約70cm、柱間(240)・210・100cm、S B 07の径約50～70cm、柱間(270)・210・180cmの規模は、中・近世として考えた場合は、建物の一辺規模が小さい割に、掘方規模が大き過ぎ、またそうした規模の掘方を持つ建物が三棟も近接してあるのは中・近世の既成概念からは考え難く、より古代における可能性が高いので、本書では古代における所産の可能性を考えておきたい。

S B 02・04・05は柱穴の掘方規模が小さく貧弱であるので、古代・中世・近世であるのかを既成概念で押すことは困難であるが古代の掘立柱建物跡であっても不思議ではない。S B 03については、1間分で方形をなし、柱間が255cmと大きく、その割に掘方が小さいのは大形堅穴住居跡の特徴でもあるので、既成概念をもってすれば、柱穴のみが残された堅穴住居跡に可能性がある。

掘立柱建物群の広がりは、西側は周辺土地区画図のとおり蛇川または蛇川成立以前の凹地形が広がるのであったとしても、そう多くないと考えられる。したがって掘立柱建物がまとめて群として存在したとするなら、東に高くなる地勢にしたがい、東側に群構成されていたと考えられる。

S B 01

S B 01について旧報告には次のようにある。「B-2区からC-1区にかけて建築遺構の西側部分が確認されている。調査対象区域外であるため、その全様は明らかにし得なかったが、調査区域では最大規模のものである。調査の行なわれた西側部分については間口（東西）2間、奥行（南北）3間ほど確認され、柱穴を6ヶ所検出した。柱穴の形状は個々相違はあるが、径0.8m～1.0mほどの隅丸方形を呈し、第3層の暗褐色土層より80cm前後で垂直状に掘り込まれている。柱穴埋土は第3層と同様の暗褐色土で、底部にはロームブロックが多くみられる。柱穴推定心々間の距離は間口2.4m（8尺）奥行2.1m（7尺）ほどである。方位はNE-8°で、磁北より東側にややぶれている。」とある。

遺構 位置はB 2・C 1区の間や平坦で遺跡内では最も高い場所にある。重複は全体平面図を見ると小土塊が存在するが柱穴とは重複しない。建物跡のうち東西1間、南北3間分が確認されたが、可成が東側の未調査地に入る。規模は東西・南北のいずれに棟走行があるのかは判らないが、検出部分は総柱であるので倉庫や東柱使用の建物の可能性が高く、倉庫とした場合、側柱規模6.6mの3間方形建物と考えうるが、南側については未調査地内入るのて明言はできない。柱間数値は西側の一辺で北より210cm（7尺）+240cm（8尺）+210cm（7尺）が算出でき、北側一辺は210cm（7尺）+Xである。側柱線の求め方は北西隅柱穴の中央と東南の未調査地にかかる柱穴内の凹みとが側柱線と柱間の東柱線とが直交関係を持つよう作成した。しかし未調査地にかかる柱穴の中央を取ると、西側柱列の柱間を240+210+210として考えなければならず、そうした場合は、北側に最長の柱間があることになり建物観としては均正を失うことにも通じ、三間建物の中央一間に240cmの柱間を持つてくることの方が合理と考え、西側柱列も210+240+210とした。そのため三

第4篇 検出された遺構と遺物

間方形の建物に妥当性がわずかながら持たれる。掘方は、C土層断面が記録されていた。注記番号1・2、6とが柱の抜取を意味するのか、最終掘り方を意味するのか、調査担当の遺構検出の観察結果が示されていないので掘り直しがあったのかは明確でない。注記番号5が埋める個所には段差があり、それが、平面図上も見てとれるが観察の意志を欠いている。平面図上は、掘方が素直な形態を呈さず、各所に不整形箇所と中段があるので掘り直しの可能性はある。

遺物 どの柱穴内か分からないが須恵器蓋片2点の出土がある。8・9世紀代の製品と考えられる。

S B02

S B02について旧報告には次のようにある。「D-4区に位置し、間口(東西)3間、奥行(南北)2間、西側の奥行心々間の方位はNW-9°でやや西側にぶれている。その規模は、間口南側5.65m-5.75m、奥行西側4.25-4.35mほどで、比較的中規模な掘立柱建築遺構といえる。4隅の柱穴掘り方は隅九方形状を呈し、1辺約70cm、深さは第3層の上面より80cmほどで、底部には径20cm-30cmほどの柱痕状の円形の浅い凹みが認められる。4隅の間の掘り方は隅九長方形で、その規模は50cm-60cm×70cm-80cm、第3層の暗褐色土層上面より1.0cmほどの深さにある。柱穴内の埋土は、第3層の暗褐色土を主とするが、中央部がやや褐色を呈するものもあり、柱痕の可能性が考えられる。

柱穴推定心々間の距離は一定せず、その使用尺が何尺であったのかどうかははっきりしない。したがって、その規模は柱穴中心間の距離により推定されるものであった。

なお、東南隅の柱穴と第11号住居跡が重複しており、第11住居跡より新しい遺構であることを確認している。」とある。

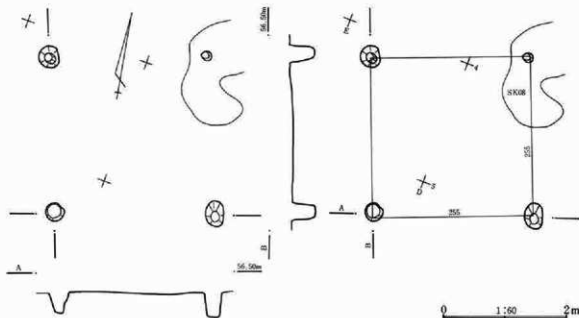
遺構 位置はD3・D4区の北東上がり勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図を見ると南西隅柱穴がS J11B・S D05と重なっていたが新・古に関する所見は旧報告中にS J11Bが古いとするほかは得られていない。建物跡は東西3間、南北2間で棟方向は東西軸にある。規模は推定側柱線の桁側5.7m、梁側4.5mである。調査時点では、正長方形の構造のように捉えられていたが、検討の結果、内角84°と96°からなるやや歪んだ平行四辺形を呈することが明らかとなった。側柱線の作因は、隅柱位置の最も低いカ所と、棟側の柱穴が外れないよう作因した。柱間数値は遺構図のとおり、南側柱列で西より180cm(6尺)+180cm(6尺)+210cm(7尺)、東西の梁側で225cm(7尺)であった。桁側は柱間を広くとる210cmのカ所がそれぞれあり、出入・壁位置が推測される。掘方はAの土層断面図によれば隅柱の最も低い位置と埋土とは関連性が求められていないので、中段が掘り直しの結果であるのか不明である。平面形態によれば10柱穴のうち6柱穴に中段または不整形箇所があり、掘り直しを考えたくなる形態を見る。

遺物 出土遺物中S B02のとして取り上げられた遺物はない。

S B03

S B03について旧報告には次のようにある。「C-4区にて確認されたもので、間口、奥行とも1間であり、その心々距離は間口南側2.55mで、ほぼ方形を呈する。柱穴は直径30cmほどの円形で、ローム層上面より深さ40cmほどの小柱穴である。奥行西側の心々間の方位はNW-7°で、磁北よりやや西にぶれている。」とある。

遺構 位置はC4区の平坦な地形上にある。重複は全体平面図を見るとS K08と重なるが新・古の関係は明示されていない。建物跡のうち東西1間、南北1間分が確認されたが柱間はほぼ等しく棟方は示せない。



第50図 SB03遺構図

規模を推定するについて、側柱線を求めたが柱穴の最深部分の中に線が載るようにして作図した。その結果、1辺255cmの直角長方形を呈すると分かったが、1間分を255cmに取るのは、当遺跡で長い方に属し、その前に柱穴規模の小さい特徴があった。そのため、堅穴住居跡に伴う柱穴も考えざるを得ない。柱間数値は1間分255cm（8尺5寸）を測る。掘方は各柱穴とも細長いのが特徴で、平面図に中段は記入されていない。

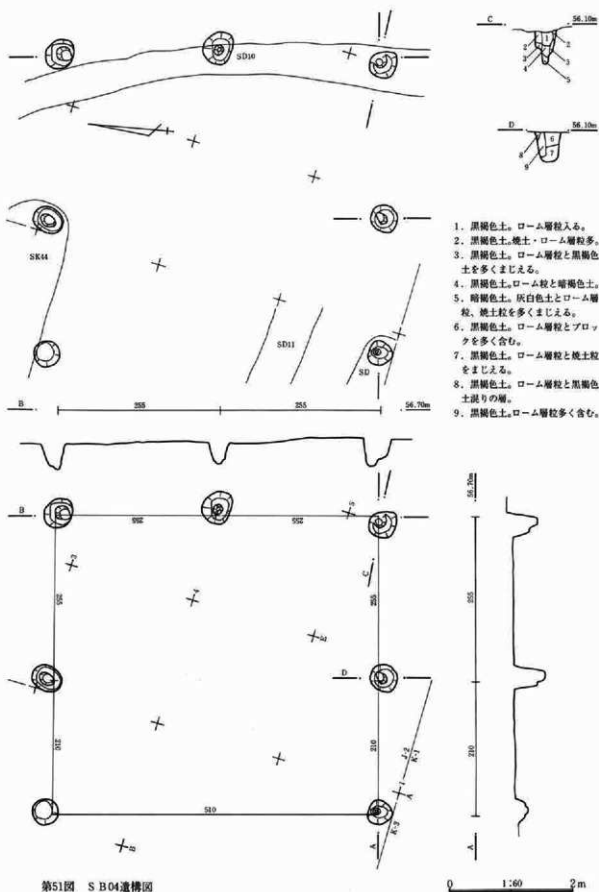
遺物 出土遺物中に、取り上げられた個体は見当らなかった。

SB04

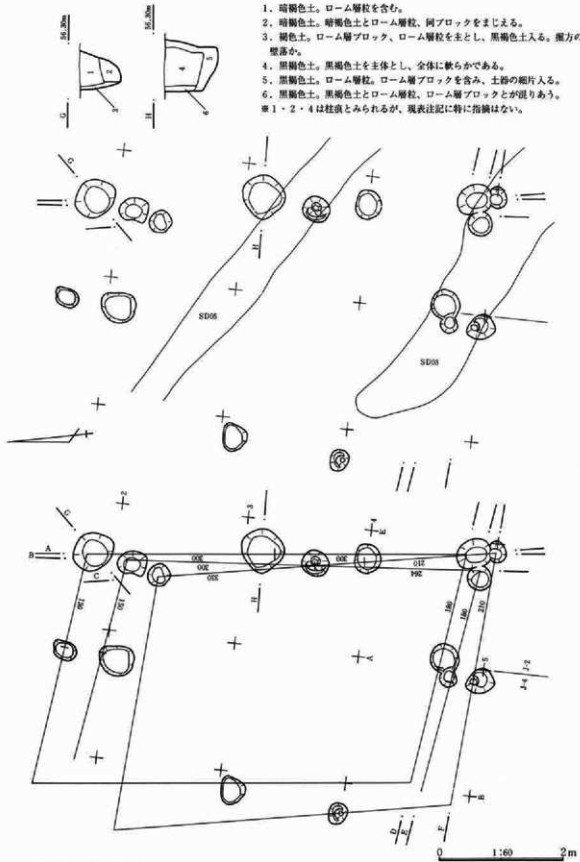
SB04について旧報告には次のようにある。「J-2区からJ-4区にかけての小規模な掘立柱建築遺構について間口（東西）2間奥行（南北）2間であるが西側奥行の中央柱穴は攪乱により、確認し得なかった。柱間は2.40m～2.50mほどあり間隔は一定していない。柱穴は直径30cmから40cmほどの隅丸方形を呈し、第3層上面より60cmほどの深さで垂直気味に掘り込まれ、底部には柱痕と考える浅い凹みが各柱穴にみられる。」とある。

遺構 位置はJ2・J4区の北上がり勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図を見るとSK44、SD10・11と重なっているが新・古の関係は明確にされていない。建物跡の柱穴は東西2間、南北2間分が確認されたが、西側は、1間である。規模について側柱線の求め方を隅柱最深部分に載るよう直角に作成したが、北西隅柱穴内に整然と載らないため建ち方はやや歪んでいたと思われる。側柱線の規模は南北5.1m、東西4.65mを測り南北にわずかに長い長方形を呈するため棟方向は南北であったと考えられる。側柱は西の辺の中央を欠いており、板壁などの遮閉的な状態が考えうる。横側柱の西と東側とは西側の柱間が45cm狭く、東半に使用面積の多さがあり、東側柱255cmの等柱間で2分されている点も考慮すると、東側を意識した建物と考えられる。柱間数値は南の辺で西より210cm（7尺）+255cm（8尺5寸）、北の辺で西より210cm（7尺）+255cm（8尺5寸）、東の辺で、南より255cm（8尺5寸）+255cm（8尺5寸）である。255cmを1間とする個所が多く見られるのが特徴である。掘方は、Cの土層断面図を見ると、柱穴の上方から最深部分に向け、

第4篇 検出された遺構と遺物

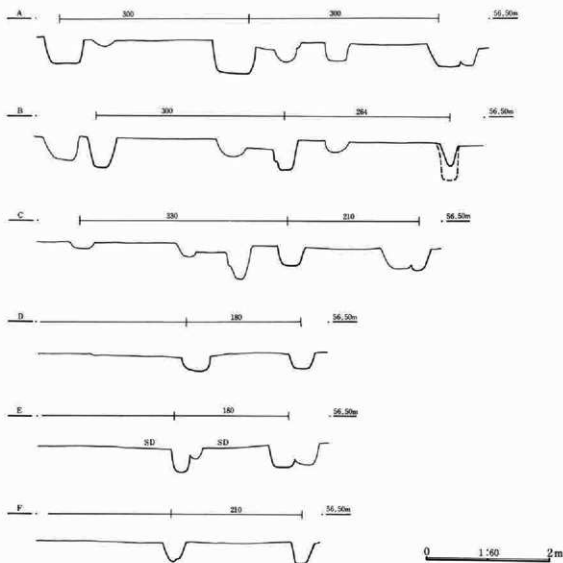


第51図 S B04遺構図



第52図 S B05遺構図

第4篇 検出された遺構と遺物



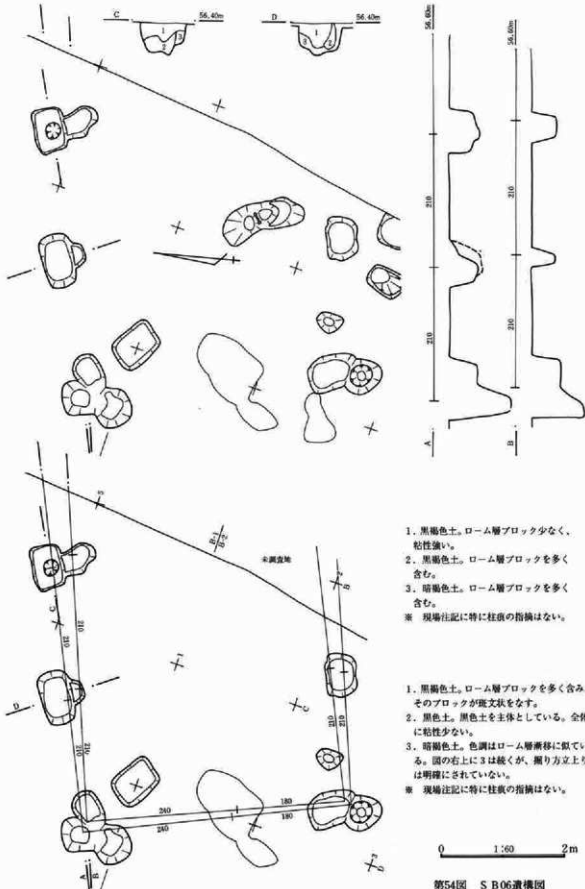
第53図 SB05遺構図

柱の根腐れのような跡があるが柱痕であるとの注記はない。Dの断面では注記No9と、柱穴最深部分とが、平面では一致する位置にあり、柱痕のように見える。

遺物 出土遺物中に取り上げられた例はない。

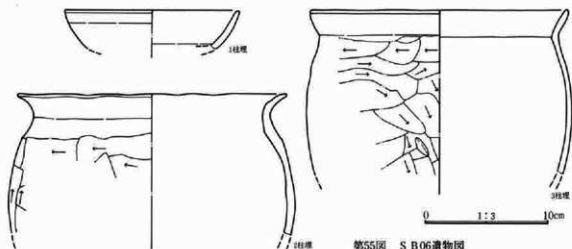
SB05

遺構 位置はJ1・J区の平坦な地形上にある。全体平面図を見ると未調査地内に西側は喰込み、さらにSD03・SD05・SD10と重なる新・古の確認は示されていない。建物跡は東西1+α間、南北2間分が認められた。柱穴には少なくとも、3回前後の建替えがなされている。それが複合した構列を都合よく集めたものかもしれない可能性は、旧報告の時点で掘立柱建物跡として扱われているため、調査中も掘立柱建物である意識は払われていたと思われる。また構列とした場合は周辺に小穴が多く図化されている訳ではないので掘立柱建物にある程度の可能性が持たれ、図示した各柱穴が、共通してやや深いのもその点を示唆するであろう。鋼柱線は各柱穴の最深部分に入るよう鋼柱線を作成したが、その工程の中で3回の建替が考えられたため建替の方則でもある一定方向のづれ込みに則して3回の建替を作図した。その結果鋼柱線は、とも



第54図 S B06遺構図

第4篇 検出された遺構と遺物

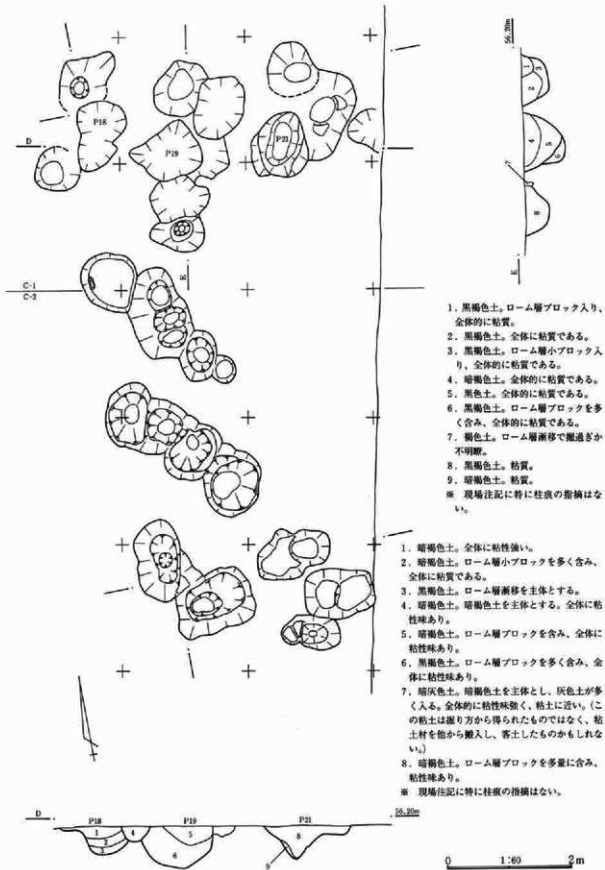


第55図 S B06遺物図

に歪んだ方向性を考えざるを得ず、内角鈍角側（下図平面北東隅側）外より $113^{\circ} \cdot 113^{\circ} \cdot 114^{\circ}$ となり、外側建物について、北辺の梁間150cm（5尺）+ α 東辺の桁行300cm（10尺）+300cm（10尺）=600cm（20尺）、南辺の梁間180cm（6尺）+ α であり掘方がやや大きい特徴があった。その内側は北辺の梁間150cm（5尺）+ α 、東辺の桁行300cm（10尺）+264cm（8尺8寸）=564cm（18尺8寸）南辺の梁間180cm（6尺）+ α であった。前者は $N 5^{\circ} E$ 、中者は $N 7^{\circ} E$ 、後者は $N 1^{\circ} E$ を測る。その内側は北辺の梁間は棟側柱を欠くが、調査上の濡れか否か明確にはされていない。東辺の桁行は330cm（11尺）+210cm（7尺）=540cm（18尺）で、南辺は210cm（7尺）+ α であった。掘方は、北東隅側のそれが最も大きく、掘方についてG・Hの土層断面図を見ると1・2・4は、埋土の大半を示しており、抜取りにしては大き過ぎるきらいがある。掘方は平面上の不整形箇所や、中段の存在が少なく、前代の柱穴を受継ぐ形で掘直しは認め難い。建物観は桁と梁が直角にならない建物で、柱穴も全体からすると小規模円形を成しており、貧弱さが感じられる。また推定3回の建替は必要性の高かった機能を果たすための建物と考えうる。

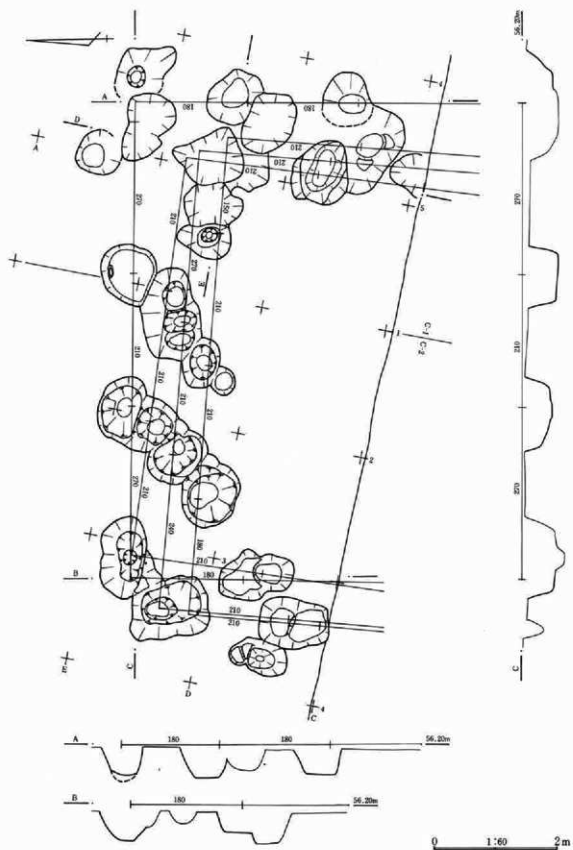
S B06

遺構 位置はB1・B2区の平坦な地形上にある。重複は全体平面図を見ると柱穴様の小土城群と重複するが、注記に新・古の明示はない。また未固化解所が部分的に存在する。なぜ固化解されなかったのか不思議である。建物跡のうち東半は未調査地に入るが検出は東西3+ α 間、南北2間分の東西棟が確認された。側柱線の設定は掘り直しと見られる点を同一規模の建物が掘り直しされる場合には一律にずれが生じる法則に乗取って作成した。北西隅部外側は直角長方形として大きい柱穴の最深部に載るよう作図した。北西隅部の内側は直角長方形として小さい柱穴が載るよう作図した。その結果、前者は北辺が210cm（7尺）+210cm（7尺）+ α で総長420cm（14尺）+ α を測り、西辺の梁間は240cm（8尺）+180cm（6尺）で総長420cm（14尺）を測る。南辺は210cm（7尺）+ α であった。後者は北辺で210cm（7尺）+210cm（7尺）+ α で総長420cm（14尺）+ α を測り、西辺の梁間は240cm（8尺）+180cm（6尺）で総長420cm（14尺）を測る。南辺は210cm（7尺）であった。方向は前者が $N 14^{\circ} W$ 、後者が $N 13^{\circ} W$ であった。掘方は記録図面によれば、平面に不整形箇所が多い訳ではないが、唯一記録されたC断面を見ると掘直しのように見える2・3とが段差となって存在し、実測図面に甘さが感じられるため同一位置における同一規模建物の存在については判然としない。形は隅丸長方形の一群に属す。その機能は2回の建替えから機能の存続をある程度必要とした建物と考えら

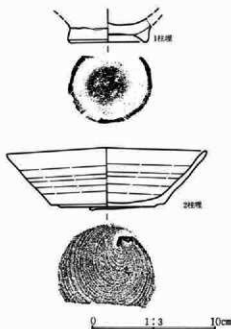


第56図 SB07遺構図

第4篇 検出された遺構と遺物



第57図 SB07遺構図



第58図 S B08遺物図

れる。

遺物 出土遺物として柱穴内から3点の取り上げがなされている。いずれも8世紀代と見られる。

S B07

遺構 位置はC1・C2区の東上がり勾配の微傾斜地にある。重複は全体平面図を見ると部分的にS D04にある。調査では掘立柱建物として遺構名称はあたえられてはいなかったが、記録野帳を見ると、部分的に柱穴を認定する内容が含まれており、また小穴の並びが掘り直しはあるものの掘り直しの法則に近い状況が見て取れたので再検討を行なった。その際、北辺の小穴下端部の未図化箇所があったがそのまま原因どうりトレースを行なった。落ちマークは加筆である。側柱線の求め方は西辺・北辺とは掘り直しの法則が感じられたが、南辺についてはそれにしたがうと余る柱穴が生じることとなってしまった。操作は前後2回行い、最

初は建替回数7回、2回目は4回であった。それぞれ基準となる柱穴相互の関係が明らかでないことに起因しているが、掲載の側柱線図はある程度、妥当と思える建替4回の例を示したが7回をとると余る柱穴数は少なくなるものの、他で不整合が生じた。したがって建替回数は4回以上最大7回前後までであったことが考えうる。掲載の側柱線図は調査時点で検証を行なったものではなく、あくまでも机上で作成した一つの目安である。そのため柱間数値の信頼度は薄い。建物観は棟方向は全掘されておらず不明確であるが東西棟ならS J07の西辺は梁側となり、3間分であるので妻入の建物が考えられ、南北棟なら北辺の180cm~210cm(6~7尺)の柱間は3間分に対して狭ま過ぎるので3間分以上の柱間が考えられる。構造としては、7棟の掘立柱建物中最も特異な建物である。また南北軸・東西軸であったとしても側柱の延長に届かない柱穴は記録されていない。方向性は、西辺で外側よりN1°E、N8°E、N6°E、N5°である。機能は、4回以上の建替回数からは、当遺跡中において機能存続が最も必要な建物と見なされる。それだけ重要な建物であったのであろう。

遺物 埋土として取上げられた2点を掲げた。

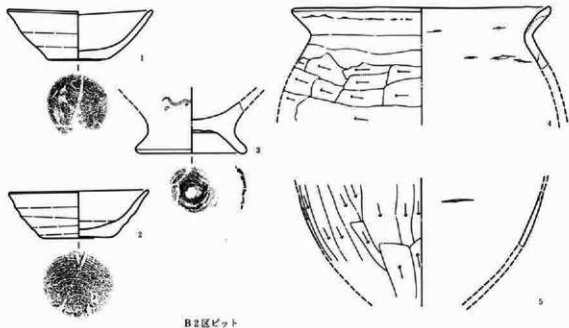
井戸遺構

井戸遺構は、調査では井戸状遺構と称され2基の記録がなされた。井戸状遺構1 = S E01であるが、その井筒部径0.6m、深1.75mを井戸状と認定するなら、同様の規模の土壌も、それに類すると考える必要があり、整理段階でS E03を加えた。

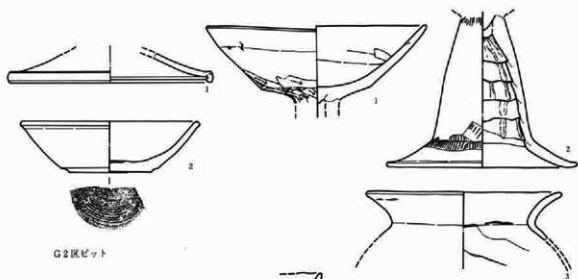
S E01

S E01について旧報告には次のとおりある。「巾1m、深さは第3層上面より2mほどで筒状を呈し、砂層に至って底部としている。壁部の剥離がいちじるしい。埋土は主に暗褐色土で、土器片が少量出土している。」とある。

第4篇 検出された遺構と遺物



B2区ピット



G2区ピット



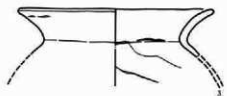
C1区4P3



K3区1P



A2区NEP



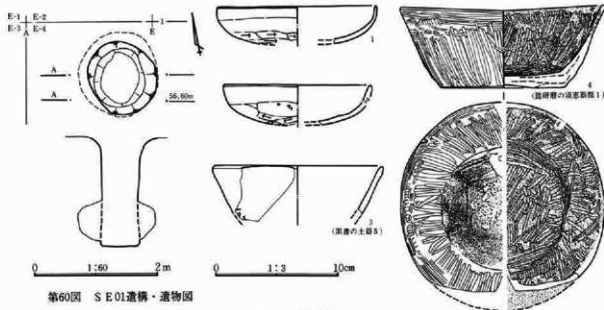
D3・J1区ベルト下ピット



K3区

0 1:3 10cm

第59図 SK遺物図



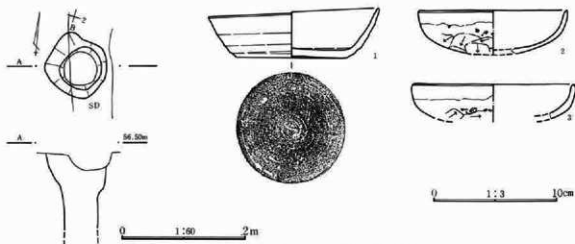
1. 黒色土。土器を含む。
2. 黒色土。焼土粒入る。
3. 黒色土。粘性あり。
4. 黒褐色土。ローム層ブロック多い。
5. 黒色土。粘性あり。
6. 黒褐色土。ローム層ブロック入る。
7. 黒色土。粘性あり。
8. 黒色土。ローム層ブロック入る。
9. 黒色土。
10. 黒褐色土。ローム層ブロックを含む粘性土。
11. 黄褐色土。砂質土を含む粘性土。



第61図 SE02遺構・遺物図

0 1:3 10cm

第4篇 検出された遺構と遺物



第62図 SE03遺構・遺物図

位置はE2区の北東勾配の微傾斜地にあり、重複は全面平面図には見えない。形態はほぼ円形を呈す。規模は検出面で直径1.1m、井筒径0.6m、深1.75mである。下方に、湧水によって壁崩落した個所があり、最下部に上方からの井筒部延長を認める。調査時点で湧水がどの程度であったのか明示はない。出土遺物中4は最も残存が良く、約半分の残存である。1・2・3は小片である。

SE02

SE02について旧報告には次のとおりある。「上部がすり鉢状で胴部は筒状に落ち込む。ローム層上面では巾2m、第3層上面ではさらに広がるものと考えられる。筒部は巾1m、第3層上面より底部まで2.5mほどの深さで、黄褐色粘土層より灰白色粘土層、砂利層をぬけ、礫部に至り、底部としている。調査中、礫部より多量の水が湧出した。埋土はローム土を含む暗褐色土で、底部についてはロームの混じった砂層の堆積をみる。」とある。

位置はE3区のはほぼ平坦な台地上にある。重複は全体平面図には見えない。形態は検出面で直径2.1m、井筒部で1.12m、深2.34mを測る。上方は開き出し、下方は先細りになり、底面は隅丸状ではあるが深くなる。構築基盤は、最下面が礫層、その上に粘土層（各々トーン）が約13cmの厚さで堆積する。土層注記によれば全体的に黒色土が多く、その中にロームブロックが入る。ロームブロックは井筒部の壁崩落がない限り、入り込む可能性は少ないはずで、もしあった場合は黄褐色～黒褐色土が主体となるであろう。したがって、ロームブロックが含まれる場合は埋め戻された可能性もたれる。井筒上部が漏斗状に開き出す形態が野井戸であったのかは地域における分析が進んでいないために明瞭でない。しかし、水の汲出しについて胴部が漏斗状では、汲出しはしづらはずで、なんらかの汲上げ法か、井筒上部における汲上げ施設の存在を考えざるを得ない。出土遺物について11点を掲げたが、大きくとも1個体弱にとどまった。

SE03

位置はC3区はやや平坦な地形上にある。重複は全体平面図を見るとSD04と重なるが新・古の関係は明示されていない。形態は検出面で直径0.95m、井筒部で0.55cmを測る。上方はやや開き出し、下方は1.2mまで掘下げ以下は中断しているが、その間の井筒部は直口に近い形をとっている。出土遺物について3点を掲げたが、1は完器に近い個体であるため、この井戸の廃棄時点と何んらかの形で係わる可能性が持たれる。

溝遺構

旧報告には次のようにある。「調査により確認された溝状遺構は中規模な溝、小規模な溝のものと、形状において、直線的で水の流れた可能性が強い溝と、蛇行し、水の流れた可能性の薄い溝とに分類できる。以上、溝について概括したが、水田部分の発掘により確認された溝状遺構については、遺構、および出土遺物等からして、平安以前にさかのぼるものも多いと考えている。中規模な溝S D01より出土した川原石については、出土状況からして、短時期に埋没されたものと推察される。中規模な溝S D02については、形状、埋没土等からして、水の流れた可能性が薄く、南面に走る白色粘土帯とに強い関連があると判断される。」とある。

溝遺構は旧報告の時点で溝5まで番号が付されていたのをS D1～5としたほかS D11まで新番号を加えた。新番号S D08は、旧名粘土帯とした遺構名称であったが、記録写真を見ると溝埋土中に灰色粘土層の埋積があり、それについて周辺を掘り下げ粘土を帯状に残したため粘土帯となってしまったようである。そのためそれを溝扱いとしてS D08にした。そのほかS D11まで新追加番号である。そのため伴う出土遺物は抽出できなかった。

S D01

S D01について旧報告には次のようにある。「A-1区より1-2にまたがる、ほぼ直線的な溝で、NW-38°方向に走る。調査区域では最も大きい溝であり、その断面の形状は「コ」の字状に開き、計測値は地点により異なるものの、ローム層上面では幅140cm、下端の幅90cm、深さ30cmから35cmほどの数値を得る。A-1区よりB-3間にかけては溝中央部にさらに浅い小溝が認められる。溝内埋土は上部から中部にかけて、第3層と同様、暗褐色粘質土、溝下部には砂を多量に含んだ褐色混土層の堆積をみる。溝の方向性と合わせて、西南に向かう水路の可能性が強いと判断される。

溝中の出土遺物については、本調査による出土遺物の整理がなされていないので確実でないが、少量の土師器片、須恵器破片、河原石に混入して円筒埴輪片の出土をみている。なお、B-3区北側の東斜面に確認された変形土器を埋置した土壌と切り合っており、この土壌よりも新しいことを確認した。」とある。

S D01は拡張区の北西を区切る溝で、拡張区の中では最も大きな溝跡である。最大規模は巾1.65m、検出面からの最大深さ35cmであり、方向性はN43°Eの方向に直線的に設けられる。溝の高低は北に高く、南に低い。このS D01の延長にS D08・09が存在したのか明確でないが、走行の成行からしてS D08・09に分岐または至る可能性はあるであろう。出土遺物の中には9世紀末頃の須恵器破片ほか、円筒埴輪2個が取り上げられてある。遺物番号4は復元率は高く、二次転用した埴輪円筒であっても、近接地から運び込んだものであろう。そのほかB4区溝として注記された遺物が存続したが、S D01、S D04との区分はできなかった。旧報告中に流水の指摘があるのは重要である。

S D02

S D02について旧報告には次のようにある。「F-1区からK-1区にかけて、NW-45°の方向に、やや蛇行状に走る中規模な溝で、K-1区にて竅穴住居跡第20号を切り込み、断絶している。住居跡との切り合いからして、第20号住居跡より新しいことはほぼ確実といえる。断面の概略の数値はローム層上面では幅約1.0mから1.5m、深さ30cmから40cmほどで、「コ」の字状に開き、第3層の暗褐色土が埋没している。蛇行

第4篇 検出された遺構と遺物

していること、溝埋没土、粘土帯の関連から、水路の可能性は薄いものと考えられる。」とある。

S D02は遺跡地拡張区南半を北西から南東方向に斜めに存在しており、西側はS J 20のあたりから南側にS D08が並走する。規模は最大幅で1.4m、深13cm、方向性はややうねっており、およそN45°Wを測る。西側に高く、東側に深い。重複遺構にS J 20があるが、新・古の関係は明示されていない。N45°Wの方向性は地形上の傾斜に対しほぼ並行してある。出土遺物は1溝として取り上げられた例はなく、不明である。

S D03

S D03は遺跡地拡張区を北西から、南西に向け存在しており、両末端は不明瞭となる。北側にS D05が並走してある。規模は最大幅で1.1m、深13cm、方向性はおよそN43°Wを測る。西側に高く、東側に低い。重複遺構にS J 11A・BとS B05とがあるが新古の関係は明示されていない。N45°Wの方向性は地形上の傾斜に対し、ほぼ並行してある。出土遺物は3溝として取り上げられた例はなく不明である。

S D04

S D04について旧報告には次のようにある。「B-3区の中央部分にて、中規模なS D01より南に直線的に分岐する小規模な溝で、D-1区に及んでいる。その断面は中規模な溝S D01と同様、「コ」の字状に開き、ローム層上面では上端幅80cm、下端幅60cm、深さ30cmほどである。溝内埋土は暗褐色粘質土で、下部はやや砂質を帯びている。」とある。

S D04は遺跡地拡張区の北半部を北西から南東に向け存在しており、中途に未固化工所がある。底面は東下りになるものの水平に近く特にS D01と接する箇所では最も高まりがあるため、平面では最も幅の広い状態を呈する。規模は幅0.9m、深さ27cm、方向はN8°Wを測る。方向性は台地上の高所を横切り直線的であるため、ある目的に則したり、機能本位に構築された可能性はあろう。またS D01から分岐する可能性は全体平面図からすると高いと思えるが、S D01以西の調査拡張が計られていないので明確ではない。重複はS B07とS E03と重なるが新・古の明示はない。出土遺物はB4区において溝と注記された遺物があり、それについてはS D01の可能性もあり判然としにくい。

S D05

S D05について旧報告には次のとおりある。「D-4区からJ-1区にかけて、NW-37°方向に小規模な溝が蛇行して走り、その断面はローム面より30cm-40cm深さ20cmほどで底部は弧状を呈する。溝の方向性からして、中規模な溝S D02、S D03との関連性があるようである。」とある。

S D05は遺跡地拡張区を北西から、南西に向け存在しており、東側末端は不明瞭となる。南側にS D03が並走してある。規模は最大幅0.7m、深11cm、方向性はうねり気味ではあるがおよそN40°Wを測る。西側に高く東側に低い。重複遺構にS J 11A・BとS B05とがあるが新・古の関係は明示されていない。N40°Wの方向性は地形上の傾斜に対しほぼ並行してある。出土遺物は5溝として取り上げられた遺物はなく不明である。

S D06

S D06は遺跡地拡張区の中央やや西寄りに南北走してある。両末端とも不明瞭となる。西側に交する形でS D07がある。規模は幅0.7m、深14cm、方向性はN4°Eを測る。走行は北に高く南に低い。重複はS J

17と重なるが新・古の関係は明瞭でない。出土遺物は溝6としてわずかに存在し部分的ではあるが図示してある。

S D07

S D07は遺跡地拡張区の中央やや西寄りに東西走してある。東末端はS D06と接するが重複しているのか明瞭ではない。西末端は未調査地におよぶがS D01から分岐したのかも不明瞭。規模は幅1.0m、深さ10cm、方向性は蛇行気味に西から北側に傾く。底の勾配は微妙で不明瞭・出土遺物は明瞭にされていない。

S D08

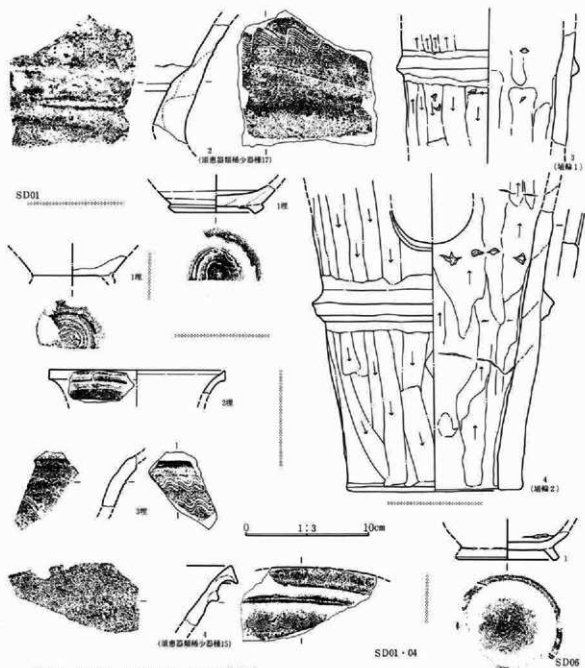
S D08について旧報告には次のとおりある。「F-1区よりK-3区に向かって白色粘土帯が、中規模な溝S D02と同様な方向で東南から西北にかけて走っている。粘土帯は第3層暗褐色土上面で認められ、幅20~30cm、厚さ5cmほどで、断面は下端が弧状を呈している。上部は第2層の暗褐色土層からして耕作等により削平されたものと考えられ、幅、厚さについてはどの程度であったかの推測の域をでない。また、粘土帯は第3層の暗褐色土層の上面よりV字状に掘込まれた溝の上部に乗っていたものと判断される。このことは溝内の埋土が第3層の暗褐色土層と同質のため色別は困難であったがローム漸移層、さらにはローム層まで掘り込まれた溝の底部から推察されるものであった。粘土帯より溝の底部までの深さは35cmから40cmほどで、埋没土の形状からして水の流れた可能性は薄いものと考えられる。」とある。

S D08は遺跡地拡張区の南寄を北西から南東に向け、S D02と並走してある。勾配は東に低い。規模は幅0.6m、深さ20cm、方向性は直線的な個所でN49°Wを測る。重複はS K38と重なっていたが、土層断面を見ると、S K38が古く、S D08が新しい。調査時点では粘土帯遺構と名称が付されていた。記録図を見ると露面高値記入は、粘土帯上が高く、周辺が約20cm低い数値の記入があった。しかし、記録写真の土層断面を見ると、その粘土は溝成りの凹み中に存在しており、傍目には溝中に堆積した粘土に見えた。そのため、今回の整理では溝としての扱いの中に入らなかつたが、それで問題は解決した訳ではなく、なぜ粘土が溝中に堆積したのであろうか、それは人為か、自然現象なのかなどの問題が残される。なぜ粘土が堆積したのかについて見ると記録図F1・F2区内に粘土の「薄い堆積あり」と注記され、旧報告の意向とは異なるが流出粘土を思わせる記述がある。その一方ではS D08は東端の08'間との間に、不連続個所がある。それは、立上っており、あたかも土橋状の状態を呈し、さらに08'の東端でも途切れる個所が存在する。そのため、土橋状に高まる個所が通路として機能していたと仮定すると、8世紀代の豪族居館の前橋市下東西遺跡（『下東西遺跡』（財団法人馬場遺跡文化財調査事業団）1987）の居館外周溝などの土橋状通路などにそれは通じ、下東西例ではさらに内部側に土塁の存在が規定されており、仮りにS D08の北側に粘土盛上げによる土塁があったとするなら崩落した粘土が流入する可能性がありうる。また、平面注記にある流入と見られる記述も見がせない。そのため、隣接地を調査する際に明らかとする以外に解決の糸口はなさそうである。出土遺物については明瞭にされていない。

S D09

S D09はK3区のS D08と並走してあり、掘直しの結果、生じたと見られる。規模は幅0.4m、深さ7cmであった。重複はS K38と重なり、土層断面を見るとS K38が古いが、S D08との重複関係は明示されていない。溝底の傾きは、底面に凹凸があり、露面高値の数字に傾向が見い出せず判然としなない。もしS D08の掘直し

第4篇 検出された遺構と遺物

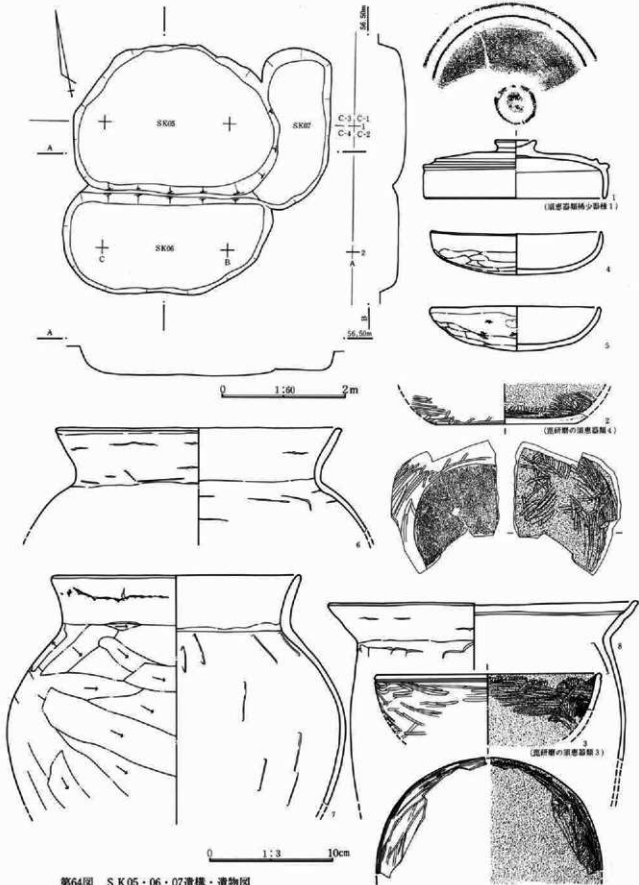


第63図 SD01、SD01・04、SD06遺物図

であれば東下りとなる。出土遺物は明瞭にされていない。

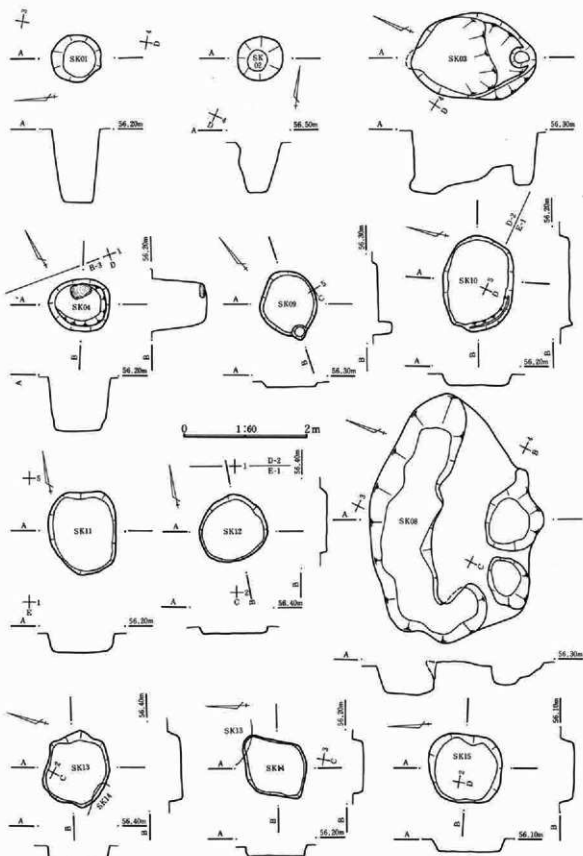
SD10

SD10はJ2・3・4区にある。重複はSB04と重なるが明示がない。規模は0.5m、深8cmを測る。方向性は北西から南南東に向き、やや蛇行気味である。両端ともに不明瞭となっているが、SD10の北側延長上がSD01に発するの、その個所が未調査地に入るため不明確である。溝底の勾配は微妙であるが南側は低くなる。出土遺物は明瞭にされていない。

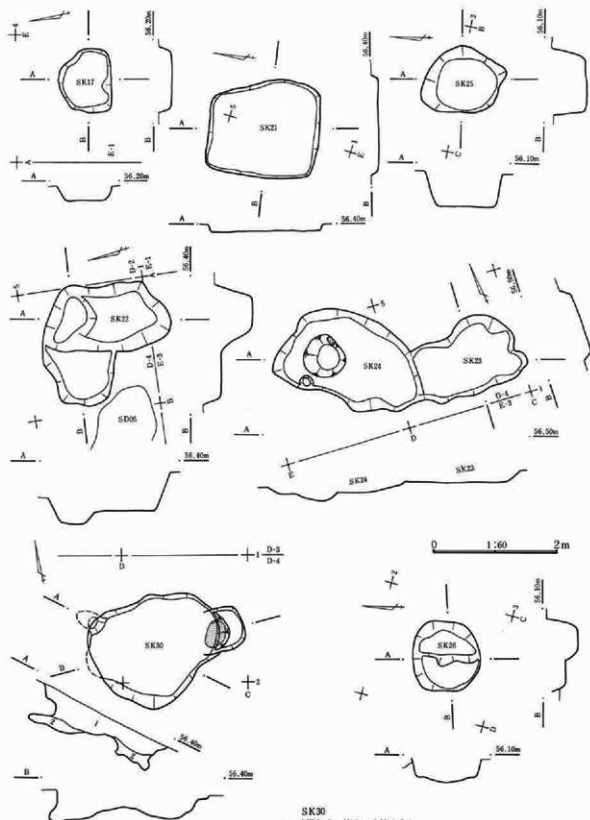


第64図 SK05・06・07遺構・遺物図

第4篇 検出された遺構と遺物



第65図 SK遺構図

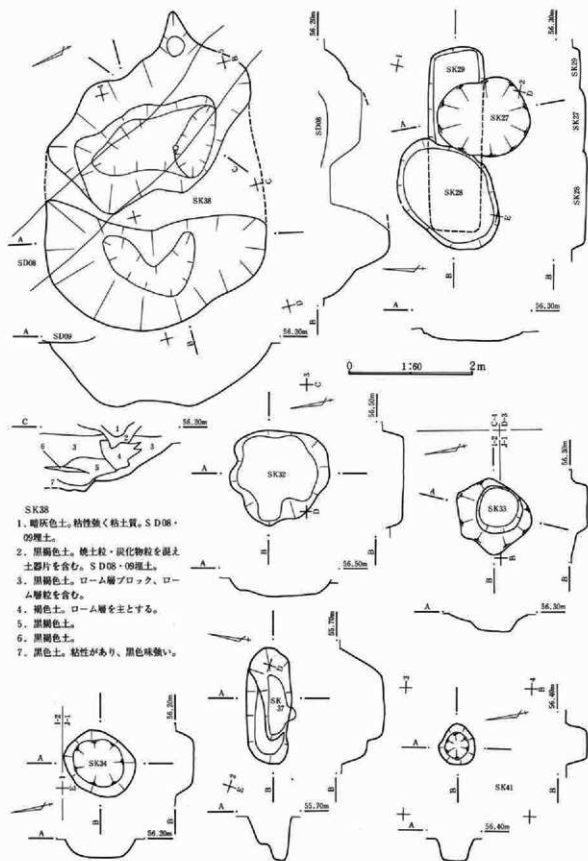


SK30

1. 暗褐色土。焼土の小粒を含む。
 2. 黄褐色土。ローム層小ブロックを多く含む。
- ※ 図中のトーンは焼土を示し、現場実測中に「焼土底面に出土」とあり。

第66図 SK遺構図

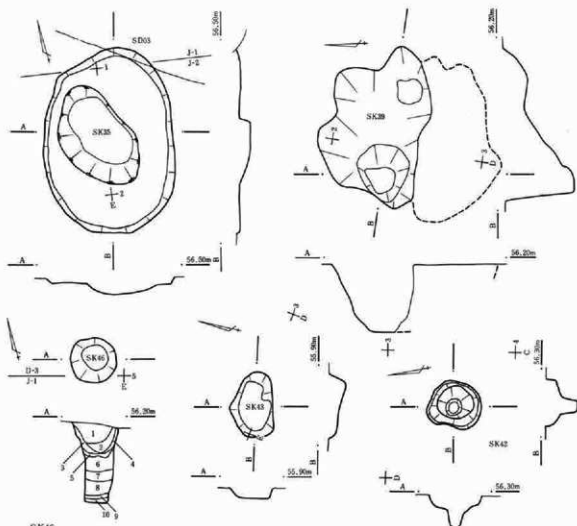
第4篇 検出された遺構と遺物



SK38

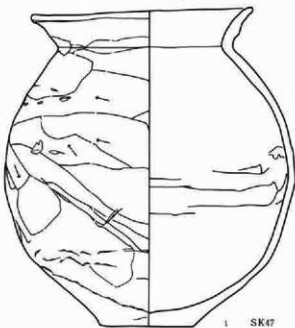
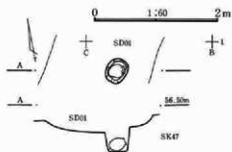
1. 暗灰色土。粘性強く粘土質。S D 08・09埋土。
2. 黒褐色土。焼土粒・炭化物粒を混え土器片を含む。S D 08・09埋土。
3. 黒褐色土。ローム層ブロック、ローム層粒を含む。
4. 褐色土。ローム層を主とする。
5. 黒褐色土。
6. 黒褐色土。
7. 黒色土。粘性があり、黒色味強い。

第67図 SK遺構図



SK46

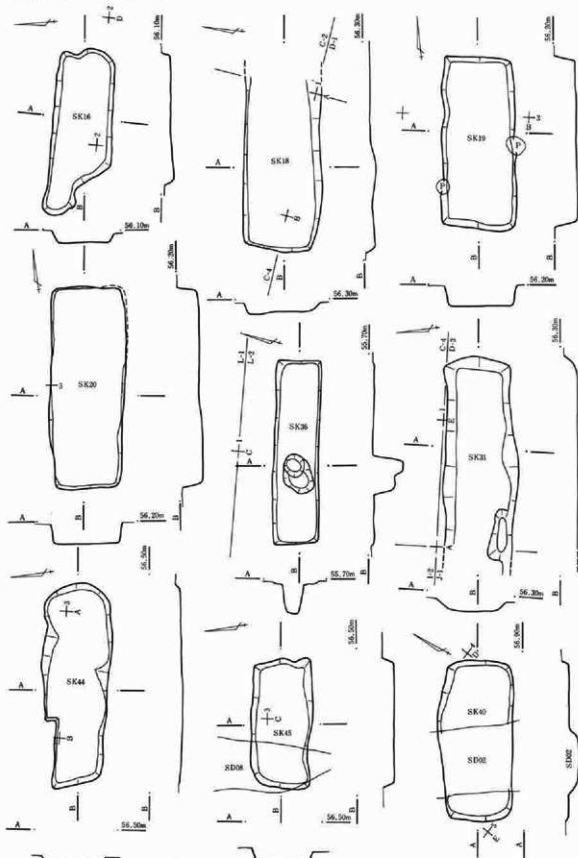
1. 黒褐色土。焼土粒をまじえ、粘性あり。
2. 黒褐色土。焼土粒をわずかに含み、軟質。
3. 黄褐色土。ローム層粒・ブロック入り、焼土粒含む。
4. 黒褐色土。焼土粒をわずかに含む。
5. 黒色土。粘性おびる。
6. 黒褐色土。焼土粒わずかに含む。軟質。
7. 黄褐色土。ローム層粒を多量に含む。
8. 黒褐色土。
9. 黄褐色土。ローム層粒多量、7に似るが全体が軟質。
10. 黒褐色土。軟質である。



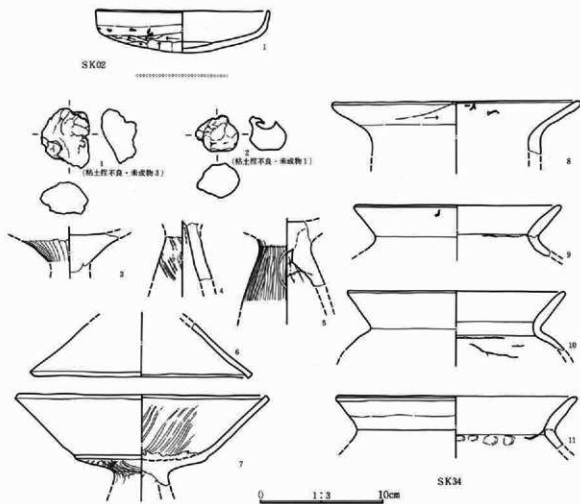
第68図 SK遺構・遺物図

0 1:3 10cm

第4篇 検出された遺構と遺物



第69図 SK遺構図



第70図 SK02・34遺物図

SD11

SD11はJ4区にあり、溝幅0.8m、深10cm、方向性はN72°Wである。重複はSB04と重なるが明示はない。西末端はSD08と重なるがそれも明瞭でない。溝底は微妙であり均配についてははっきりしない。出土遺物は明瞭にされていない。

土 壙

発掘調査では土壙番号が付された例は、記録図、全体図に番号が付されていても記録保存遺構図に番号が付されていないため、遺構・遺物とが照合できたのはSK02、SK05・06・07、SK32、SK47であった。土壙番号は、今回の整理で新番号に改らためた。成断面図は、個別に記録された例は少なく大半が整理時に露面高値に基づいて新作成したものである。また本文記述をする際は、個々の土壙に対し逐一触れることが記録保存の前提であるが、土壙に関して記録保存中に時に注明示や土層断面が存在している訳ではないので資料内容から2次的な内容を引出すことは困難である。そのため全体傾向としてある程度、言えそうな点について以下に触れたい。

第4篇 検出された遺構と遺物

調査拡張区全体を見ると、掘立柱建物跡に関連すると考えられる土壌を除き、人為によると見られる小穴をひろくと、その分布はある程度まとまりがあり、C3・4区周辺、D2・E1区周辺、D3・D4・E3・J2・J4・K1区に見られる。あるまとまりがある点は、土壌相互が共通の目的に則して設けられた可能性が高い。また浅く不整形で、その成因が自然か人為か良くわからない小穴が群を成し検出されることがしばしばある。それは、検出した露面高を測定してみればわかるが、およそ微地形の低地部分に検出されることが多く、結果的に考えれば自然による場合も多いのである。当遺跡ではそうした微地形の低地が南東からF4・F3・E4・E3・J2区にかけ存在しているが、そうした地帯中に深く不整形な土壌が多く存在しなかったのは、おそらくは、黒色土の生成が堆積が可成り厚かったためと考えられる。

共通の目的に即して設けられたと考えられる土壌を類別すると、円形と長方形土壌がある。

円形土壌は一般例では、径1m前後ではほぼ正円形を呈し複数の密集傾向が強し、立上りはやや内傾する。埋土は浅間山B軽石（12世紀初頭）が汚れた状態で黒色土と伴に入っている場合が多い。当遺跡での埋土の状態は明示がなく、明らかでないが、密集傾向と、平面形態に共通性がある。SK9・10・12・13・15がそれである。

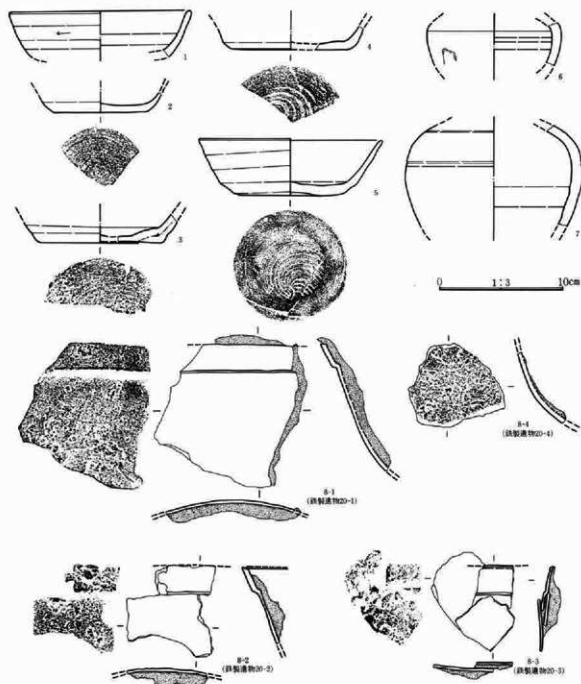
長方形土壌は、一般例では、長さに長短はあっても、正長方形に近いが、わずかながら隅丸形をとり、幅は、50～60cm前後で、壁面は内傾する。埋土は、浅間山B軽石をよごれた状態で含む場合が多く、最下面には二次堆積土の黒色土または地山層が1cm前後の厚さであり、構築当初が開放性であったことを示し、その上方は、地山ブロックを多く含む故意に埋没させた感が強い傾向がある。壁面を精査すると平鑿で掘り下げた鋸歯の痕跡がしきりと残される。構築時期は15世紀代的美濃焼陶片が出土した例があり、下って江戸時代初頭頃的美濃焼陶片を出土した例があり、中世後半から、江戸時代の初頭頃までの間に、ひんぱんに掘られたのであろう。機能については、中・近世の考古学が今日のように羅違をとげる前代には、すべて墓塚にするような見識のない機能推定が多かったが、その後、墓塚とするのはわずかであって、大半は農業生産に伴う遺構と推定されるようになった。この類の土壌の分布の傾向として、近年まで使用された畑の地境に接して平行するか直交する例が多いことも指摘されている。この類にSK16・18・19・20・29・31・36・40・44・45がある。SK18・19・20・31、SK44・45にはまとまりがある。

風倒木痕と見られ土壌が存在するが、土層断面が、各土壌について明確な記録がされていないため性格について明言はできない。該当にSK08・SK38・SK39がある。

次に特異な状態や所見のある土壌について触れたい。

SK05・06・07はC3・C4区にある。記録図には埋土記述がなく、相互の関係は不明である。平面形態はSK05と06の接する個所が両土壌とも立上り状態を見せ、そうした個所の状態は粘土の探掘坑の掘方に似て、それはある穴を掘り、さらに粘土を求めて近接した個所に次の穴を掘り、前の穴と接する個所は埋もどしてあるので、埋もどしの土が見えたら掘るのを止め、丁度、SK05・06の接する立上りは粘土探掘坑のそれに似ている。出土遺物は当初堅穴住居跡に見えたらしく、8C住とされていたので、そのため3土壌のどれから出土したのかは明確でない。本整理中に調査担当の粘土の採集が可能な場所かたずねたところ、SE01中の壁面において約50cmの厚さで見られたという。

SK30の平面図には「焼土底面に出土」とあり、トーンはその位置を示す。焼土について焼土粒なのか地山の焼土化なのかは明確ではない。土層断面図によれば埋土中の焼土粒は多いとのことであり、底面に焼土があっても不思議ではないであろう。底面は凹凸があって一率に平らではないが、注記No2のロームブロックの多い土層がそれを埋めている。ロームブロックが多く含まれる場合は人為埋てんの可能性が高い。

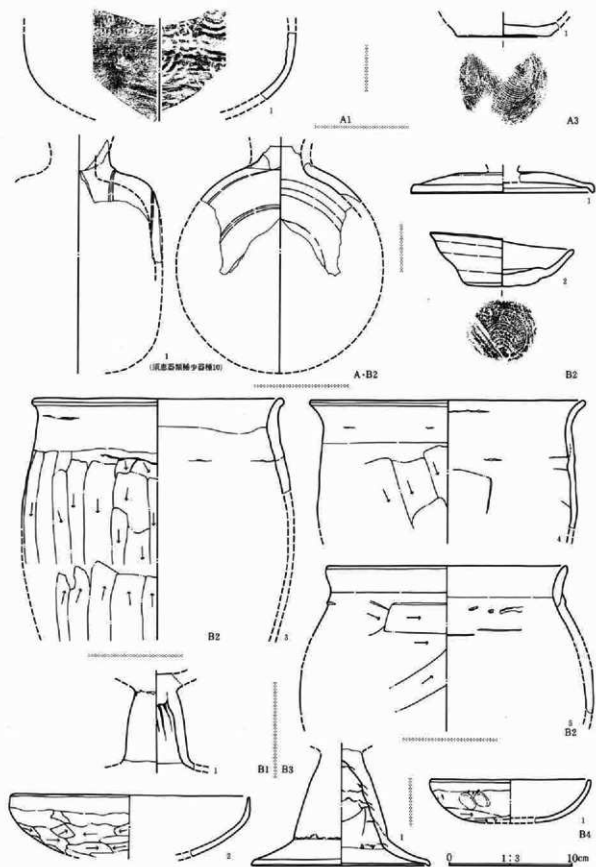


第71図 SK遺物図

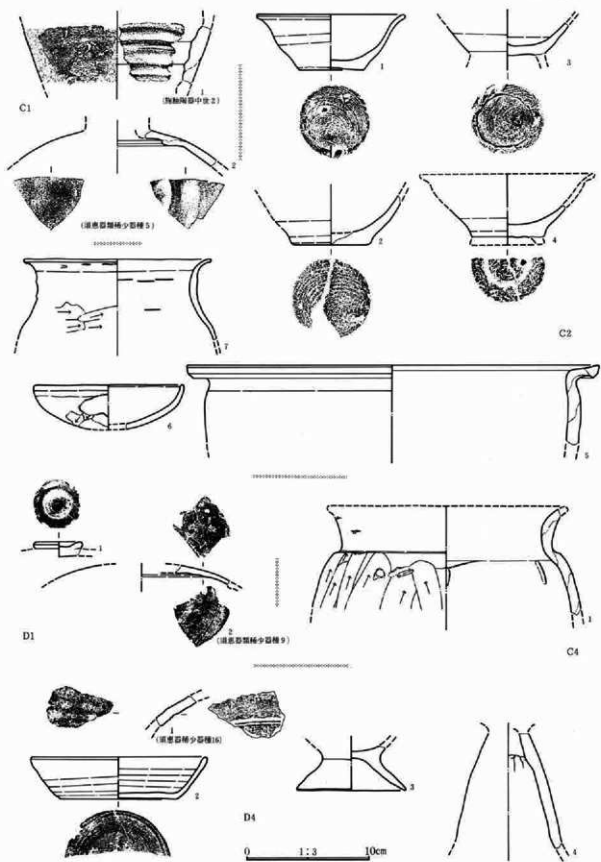
※ 点線は酸化の抽出しを示す。

SK 34は平面小形丸形を呈し、土層断面はない。埋土中から粘土を捏ね、未成の状態で焼上げられた土師器小形粗製土器2点がある。遺物番号1は小形短頸壺を潰した状態のまま焼上げられ、当遺跡周辺において、そうした小形粗製土師器の生産が示唆され重要である。遺物個々の出土位置は明確でない。

第4編 検出された遺構と遺物

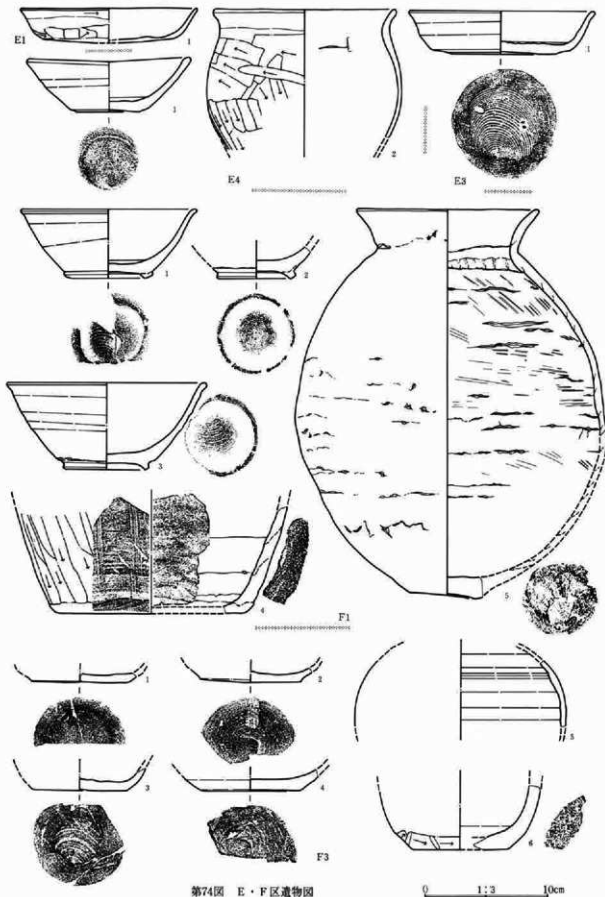


第72図 A・B区遺物図



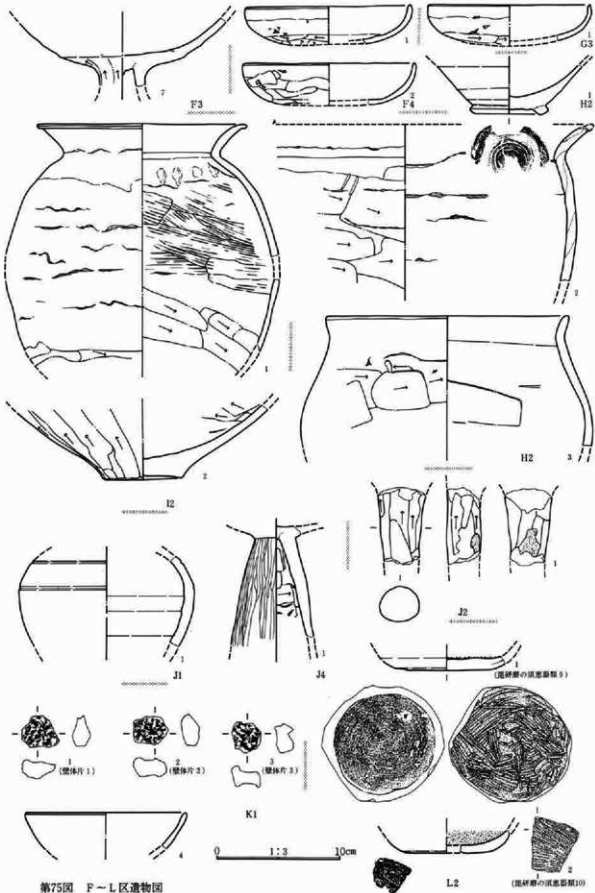
第73图 C·D区遗物图

第4篇 検出された遺構と遺物



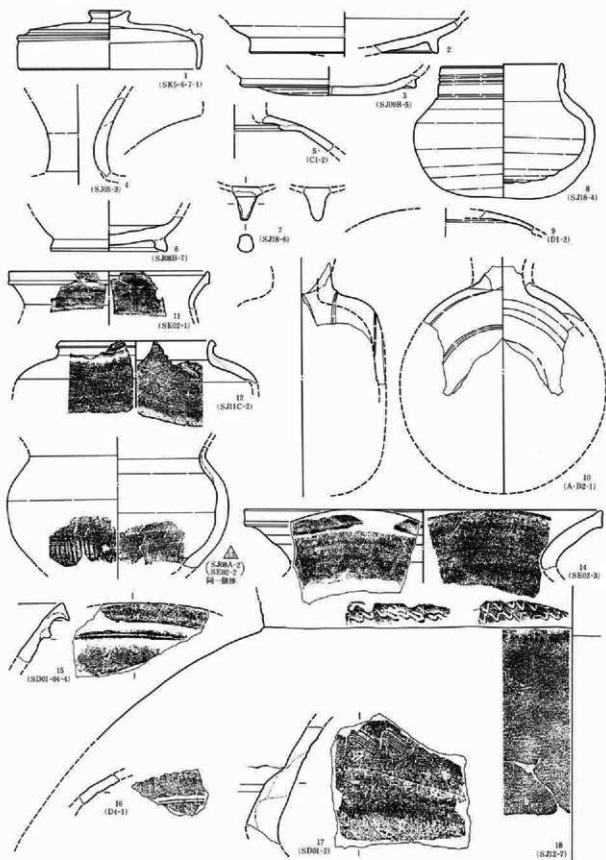
第74図 E・F区遺物図

0 1:3 10cm

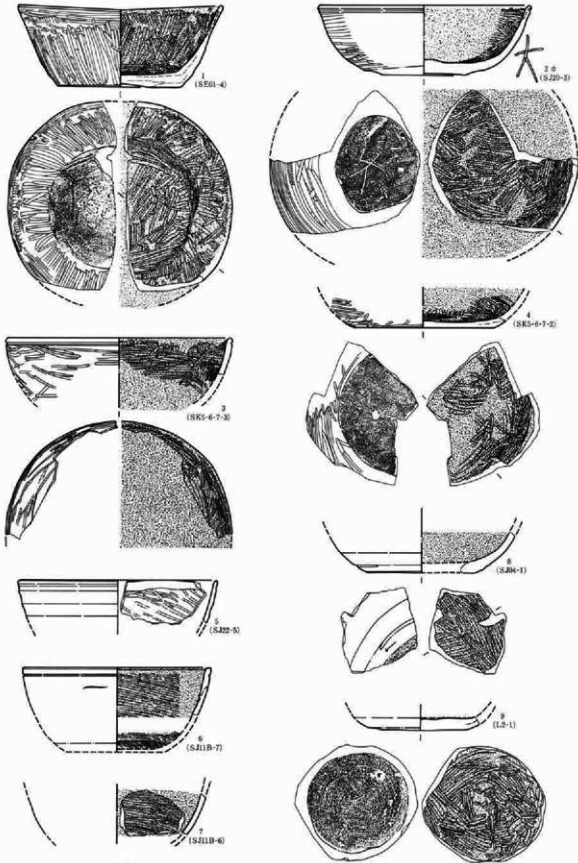


第75図 F~L区遺物図

第4篇 検出された遺構と遺物



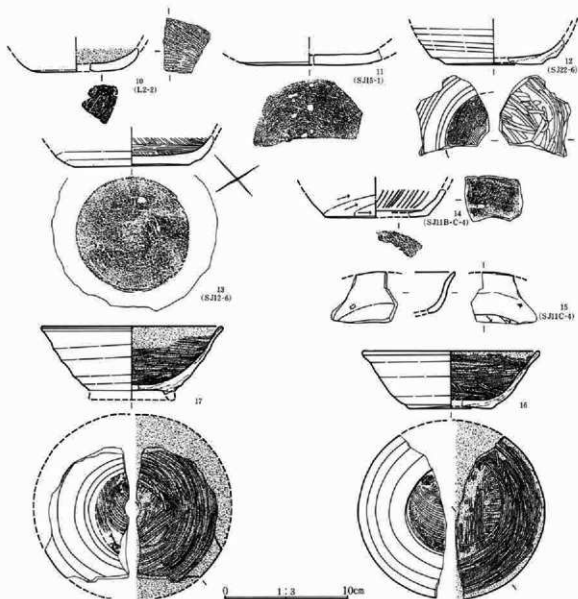
第76図 須恵器類稀少器種



第77図 莢研磨の須恵器類

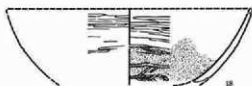
0 1:3 10cm

第4編 検出された遺構と遺物



第78図 甍研磨の須恵器類

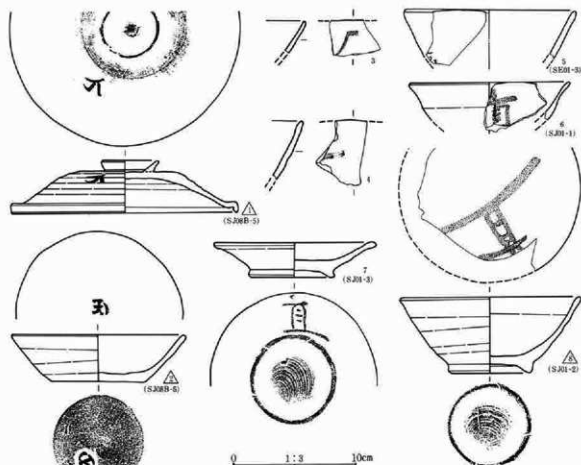
群内8世紀代前後の土器群は、一般にいう土師器、須恵器のほか、①土師器の暗文土器、②内面研磨の土師器質の須恵器、③特殊事情のもとに酸化焰気味の焼成とした特徴を含む須恵器。が注意される。①は7世紀終末頃から畿内や西国のみならず、9世紀の終末頃までは確実に存在している。その間、同じ体制で同一または複数の工人組織が生産したものかは明らかではない。粘土を見ると、7～8世紀間は素地が軽く、軟らかい褐色の鉄燻物粘土が目立ち、褐色と同系の暗褐色粘土は硬く不整形である。9世紀になると素地はやや重くなる。素地の質感は、陶土が主体ではなく、軽いので山地から流出したローム層を含む粘土が、ローム粘土を相当量混ぜ合わせて用いたと推定され、そうした粘土は須恵器との比較からすれば、板蓋層群（高崎市観音山丘陵・藤岡市西原など）と吉井町の南側の丘陵地帯の土味である。そのように捉えらるると当初から8世紀頃までは、ある主体工人（ある特定地域にいたる人で、その中がどこのように分化していたかは不明）によって製作されたと考えられ、それらの供給は、利根川以西に多い。②の一部は利根川以東に多く、黄 塚（第78図3）などを含め、地層があり、内面研磨と黒色処理（北毛地域が深く外面まで達するほどであるのに対し浅い）、



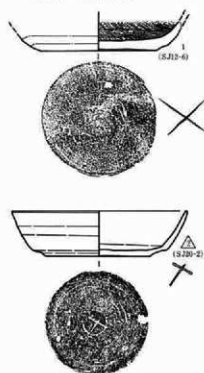
第79図 山際窯跡採集 甍研磨の須恵器

1:3

場合によって細線が用いられる点を特色とする。製作の幅は8世紀代11世紀頃まで両手法が認められるが9世紀頃に量的に少ないと思える段階があり、同一工人承諾が進らなるかは明らかでない。粘土は①の類に比べると重く、夾層の暗褐色粘土も硬く不整形で、陶土素地の占める割合が高いと推定される。10・11世紀代の土味は8世紀代のそれと異なる。8世紀代頃の製作地域は、1986年に笠懸窯跡群（新田町）中の山際支群の灰原から同類の破片（第79図）を得ており、また、粘土分析の結果も同支群領域に入るため、笠懸窯跡群が主体製作地である可能性は高い。③については北毛地域の月夜野窯跡群の例を指す。



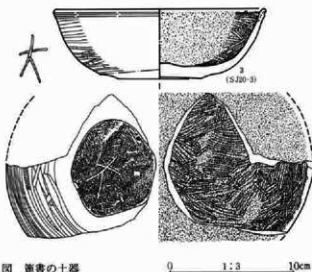
第80回 墨書の土器



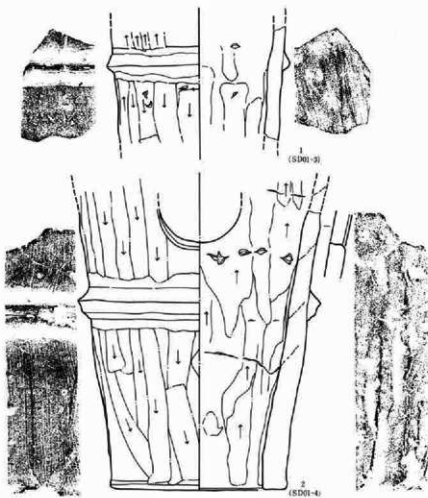
黒書の土器1・2は、S J 8 Bより出土しているが両者の供伴は、整理担当者自身の調査ではないため保証し得ない。しかし、両者の器形は8世紀後半代と考えられるため、墨書としては、やや古例となろう。1は「万」にも見えるがはっきりしない。1・2ともしっかりした筆致である。6・7・8はS J 01から出土し、供伴は保証し得ない。字跡は3点ともに「世」か。まとまって存在する点に注意される。

黒書の土器はいずれも、笠懸陶器群と見られる類器である。1は記号、2は記号か文字なら「十」か、3は「大」と判読される。3点とも器形は8世紀代と考えられ、焼成前の黒書であるから、文字は受注者にあててか、製作側の区分のための刷書かもしれない。

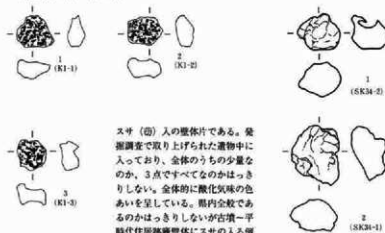
第81回 黒書の土器



第4篇 検出された遺構と遺物



第82図 埴輪類



スサ(凹)入の整体片である。発掘調査で取り上げられた遺物中に入っており、全体のうちの少量なのか、3点ですべてなのかははっきりしない。全体的に酸化気味の色合いを呈している。胎内全紋であるのかはっきりしないが古墳一平時代住居跡磁器体体にスサの入る例はある。

第83図 埴体片



第85図 灰釉陶類

当遺跡周辺には古墳が多く、昭和13年に作成された「上毛古墳集」によれば、強戸村とし184基の古墳が数えられている。明治の迅速園を見て小丘の表現が強戸村内の各所に存在する。遺跡内において古墳の周辺がおよぶと存在していたとの調査所見は得ていないが、A区の北東方向約120mには、前方後円墳で小形の竪穴式石室を有する龜山古墳が存在している。龜山古墳は、昭和23年に群馬大学尾崎喜佐雄氏によって発掘調査がなされ、主体部からは短甲、須臾をはじめとし、5世紀を象徴する遺物類の出土があった。

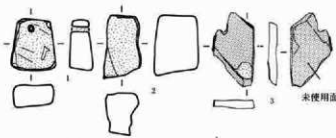
埴輪類の1・2の粘土は1が高がややなく、やや密な感じがするのに対し、2は高があり、大きな粘土物質粒が目立って入り、一見して、1・2の製作素材は異なり、形態・技法も、1が突帯の断面形が三角、2が台形状を呈し、1に刷毛目が弱いこと、2に細刷毛目が入ることなど大きく相異しており両個体が異次元の所産であることがわかり、およそ6世紀の埴輪類と考えられる。1は直径が小さいため埴輪形象の基部の可能性があり、2は円筒埴輪の基部である。2には透しの下半が1個所に認められるが、円形か半月形の透しのいずれであるのかは上半を欠くため明らかでない。

0 1:3 10cm

第84図 粘土捏不良・未成物

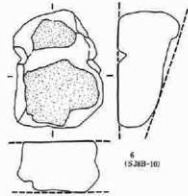
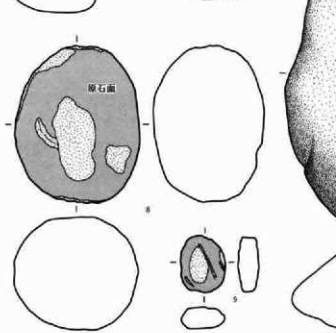
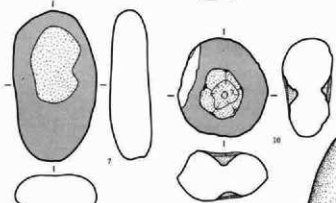
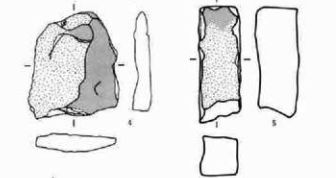


特殊遺物



下図は当遺跡の調査時点で収集された石類のうち、磨かれた痕跡のある石類の総てを掲げた。もっと多数石類が存在しているも良さそうであるが、立地上、周辺から想定される埋層は、遺跡地そのものが、かつての淡瀬川による扇状地形上にある小台地で、ローム層に覆われたその下方には埋層が存在しているそうである（近年周辺での発掘調査に携わった当国京大史による）。そのため、古代に川原石の採集に困難が想定される地域ではないので、砥石材である1・2・5などの流紋岩、3の頁岩質の粘板岩、砂岩質の6を除くと、近郊で採集された可能性もたれる。

金属を研いだと思われる砥石は1・2・3・5・6。部分的に金属の擦痕と思われる箇所が4・9に残される。11などは曲面の凹みに摩耗があり主体は金属でない。



6 (S200-10)

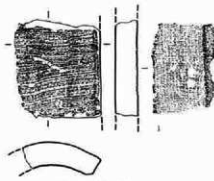
11 (S2110-12)

第86図 砥石ほか磨耗石類

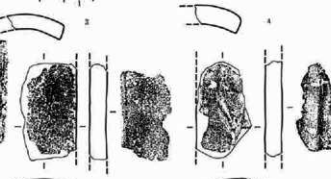
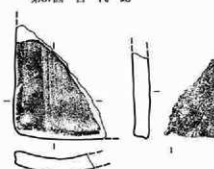
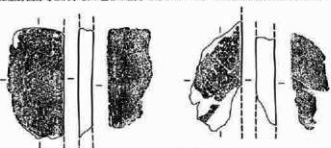
0 1:3 10cm

第4篇 検出された遺構と遺物

当遺跡のA区より北北東約1kmに白鳳時代の寺井庵寺跡がある。上毛野国で大塚横寺院は、上植木、金井、山王、寺井の四庵寺で山王庵寺のみ氏寺として上植木・金井は上野国分寺以降、公の色彩が濃厚とされている。1は寺井庵寺所用の転用か。

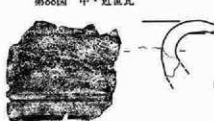


第87図 古代瓦



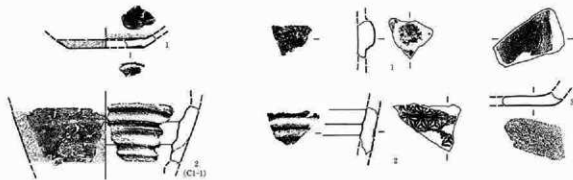
整理順初1~7の瓦片は、砂の付着、やや黄ばんだ焼上り、などから太田市近辺に出土例の多い中世瓦片かと考えたが、実測図に作成がおよんだところ、本瓦片にしては厚さと、女・男の差が明瞭でなく、しかも、7のように平らな破片も存在することから様瓦片と考えうるに至った。当地域の焼瓦は江戸時代に焼かれた例が資料中に見える。1~7は種が甘い、全体の質感は様瓦の古様を思わせる。

第88図 中・近世瓦



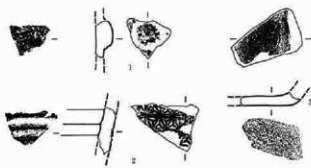
第89図 焼締中世陶器

0 1:3 10cm



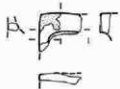
当遺跡出土の中世陶磁器のうち中国陶・磁器は1点もなく、国産陶磁器のうち施軸陶器は2点、地軸陶器は7点存在した。施軸陶器の1はわずか高台を備出し、見込を鈍目とする16世紀末から17世紀初頭の特徴を持つ。2は灰軸の梅瓶であるが、割口の角立ちは丸みをおびる。内面の織織の顕著な整形は15世紀を思わせる。

第90図 施軸陶器(中世)



当遺跡出土の軟質陶器は中・近世ともに金銅体を、中・近世に分けて揚げたが、観察表作成の段階に至って実物を発見したところ、上面のうち3のみが中世軟質陶器の織織の底面と推定されるほか、1・2は、中世遺物の一括遺物中に類例を見ないので、古びた質感ではあっても、近世の軟質陶器の可能性が持たれる。

第91図 軟質陶器(中世)



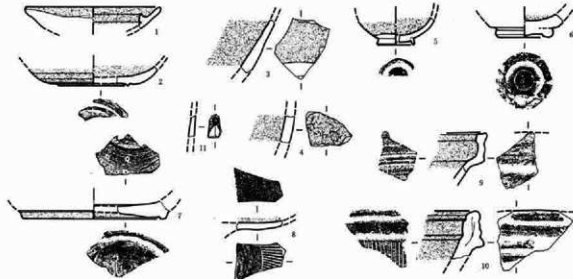
当遺跡出土の硯は、古代を含めて唯一一点のみであった。古代遺物の中で墨痕が認められ、内面に磨耗痕がある例は無かった。1は細片であるが、割れ口の風化は、それほど顕著ではない。

第92図 硯



石板は金銅体を同けた。ともに地版岩製である。石板は少し大がかりな発掘調査を実施すれば必ず出土するとしてよい遺物である。出土量を各遺跡単位で調べたことはないが、独特な出土傾向があるのかもしれない。群馬県内では昭和30年頃まで物資不足の中で、学校教育用具で使用されたことがある。石板は江戸時代まで廻りうるのかわからないが、出現時点が明らかとなれば、考古学上の年代決定素材となりうるはずである。

第93図 石板

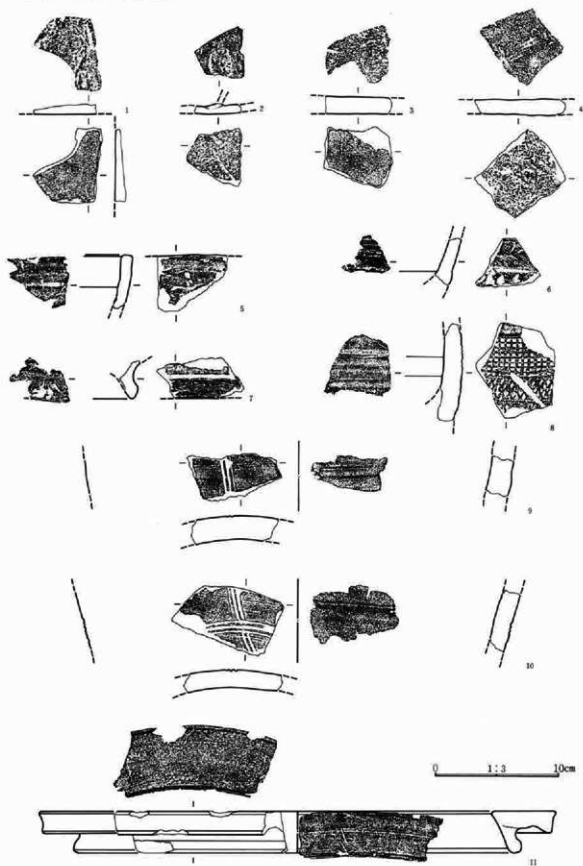


当遺跡出土の陶器は、その総べてを掲げた。近世陶・磁器の出土量は当調査報告の中で、生活との係わりが多い場合はその出土量が多く、特に、国内陶・磁器の生産が活発化する18世紀以降に、より出土傾向は多くなる所見が得られている。当遺跡出土の陶・磁器は、少ない点から生活域は、遺跡地から離れた場所であり、中世・近世を通じて、遺跡地と、その周辺の地が、一般の人々の生活が見ぶこはなかったと考えられるが、中・近世遺物を総体的に見ると中世常備焼が7点も存在し、近世瓦も含まれており、調査時点で能ての陶・磁器片が回収されたか否か大いに疑問が持たれる。本当は、中・近世陶・磁器は他に多く存在したかもしれないのでは。

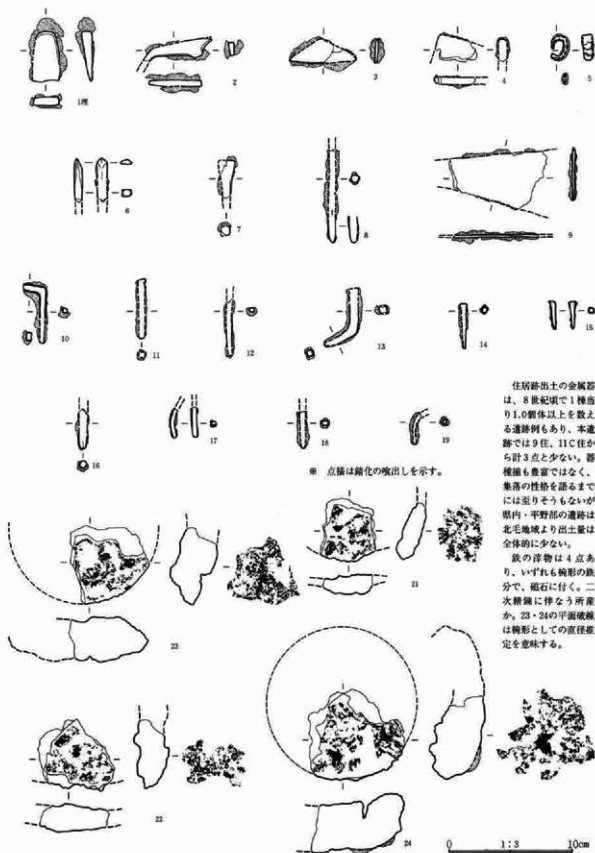
第94図 陶・磁器類(近世以降)

0 1:3 10cm

第4篇 検出された遺構と遺物



第95図 軟質陶器(近世以降)



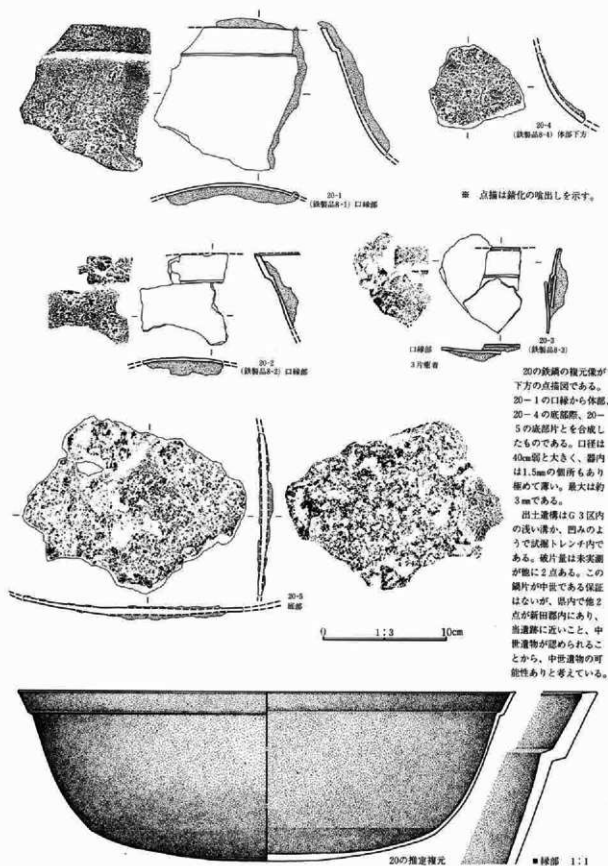
● 点は酸化の噴出しを示す。

住居跡出土の金属器は、8世紀頃で1種当り1.0個体以上を数える遺跡例もあり、本遺跡では9住、11C住から計3点と少ない。器種類も豊富ではなく、集落の性格を語るまでは至りそうもないが、照内・平野部の遺跡は北毛地域より出土量は全体的に少ない。

鉄の滓物は4点あり、いずれも輪影の鉄分で、磁石に付く。二次精錬に伴なう所産か。23・24の平面破線は輪影としての直径推定を意味する。

第96図 鉄製品と鉄滓物

第4篇 検出された遺構と遺物



第97図 鉄製品

縄文時代の遺物

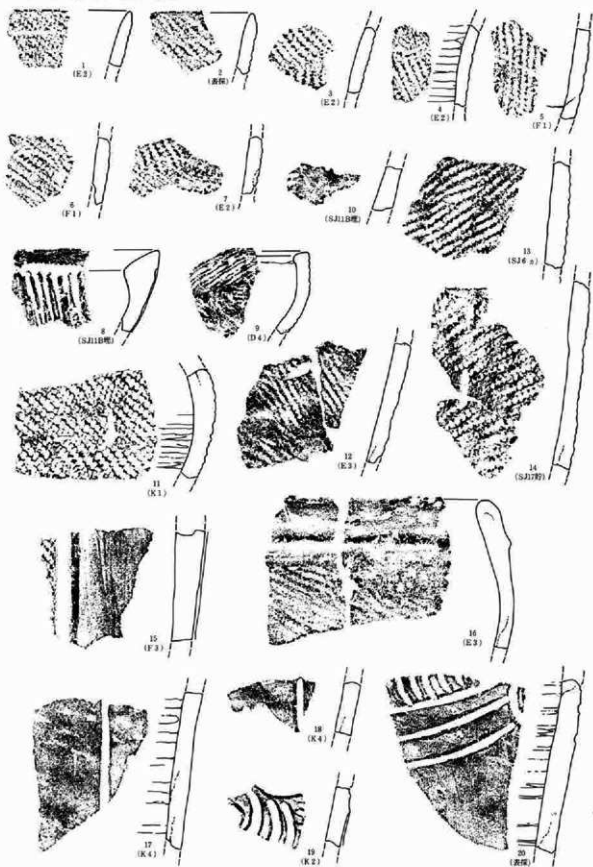
本遺跡では縄文時代の遺構は検出されなかったが、少量ながら前期から後期にかけての遺物がグリットや各遺構に散在して出土した。遺物総量は土器片約55点、石器・石片約30点である。第98図と第99図に示した遺物は出土遺物の中の代表的例である。

第98図1～7は前期後半に比定され、1・2は口縁部片、3～7は胴部片で、淡黄褐色や淡赤褐色を呈している。1・2はR L縄文を横位に施し、3・4は1段3条のR L³縄文を施し、4には縄の末端の圧痕が見られる。5・6は附加条第1種で軸繩R LにR 2本が附加されている。7はR L縄文が斜位に施されている。8は口縁部の破片で口縁内面が「く」の字状をなしている。色調は赤褐色を呈し、口縁直下を半截竹管による連続刺突で区画し、内部を同じ竹管で条線を施している。中期初頭。9も口縁部の破片で淡赤褐色を呈し、L縄文が横位に施されている。中期後半。10は胴部の破片で赤褐色を呈し、竹管による刺突が縦位に施されている。中期中葉。11は口縁部に近い破片で12～15は胴部の破片で淡黄褐色や淡赤褐色を呈し、中期後半に比定される。11はR L縄文を横位に、12はL R縄文を縦位に、13はR L縄文を縦位に、14はL R L縄文を横位に施している。15はL R縄文を縦位に施し、隆線と無文帯が垂下している。16は口縁部の破片で淡黄褐色を呈し、L R縄文が縦位に施され、口縁直下に断面三角形の隆線が横位に走っている。17～20は胴部の破片で淡灰色や淡赤褐色を呈し、直線と弧線を組み合わせた太い沈線による文様が構成されている。後期前半。

第99図1は撥形を呈する打製石斧である。頭端部が欠損しているが、ほぼ完形に近い。胴部の挟り込み部分は良く敲き潰されている。刃部は使用により鈍く潰れている。石質はグラノファイヤー。2は小形で撥形を呈する打製石斧である。刃縁は直線的に整っている。また、使用による磨滅および潰れは認められない。表面は平坦で、表面側が高く盛り上がっている。石質は黒色を呈する頁岩。3はスクレイパーであり、刃部の調整加工は粗く、鋸歯縁状を呈している。右肩部に自然面を残す。左肩部に残る連続した剝離痕はこの素材を取る以前の調整痕と考えられる。石質は黒色頁岩。4もスクレイパーであり、3に比べかなり刃部が薄くなっている。調整剝離も細かく、刃縁もほぼ直線的である。右側面に帯状に自然面を残し、左側面は剝離時の欠けである。石質はホルンフェルス。5は円礫であり、投弾として使用された可能性もある。表面全体は自然面のままで、研磨された痕跡は認められないが、全体的に良く整った球形をしている。石質は安山岩。6は磨石であり、表面と裏面の平坦部に若干磨れた痕跡が認められる。側面には磨痕および敲打痕は認められない。素材としては扁平な円礫を使用している。石質はやや粗粒の安山岩。7は磨石であり、表面や下面、右側面は非常に滑らかに磨られている。また、礫の陵部には敲打痕が顕著に認められる。石質は緻密で重量感のある砂岩。8は敲石であり、下半部が欠損し1/2程度の残存状態である。上端部には敲打痕が認められ、表裏両面は全体が風化していて明瞭ではないが、あまり強く磨かれたような痕跡は見られない。石質は粗粒安山岩。

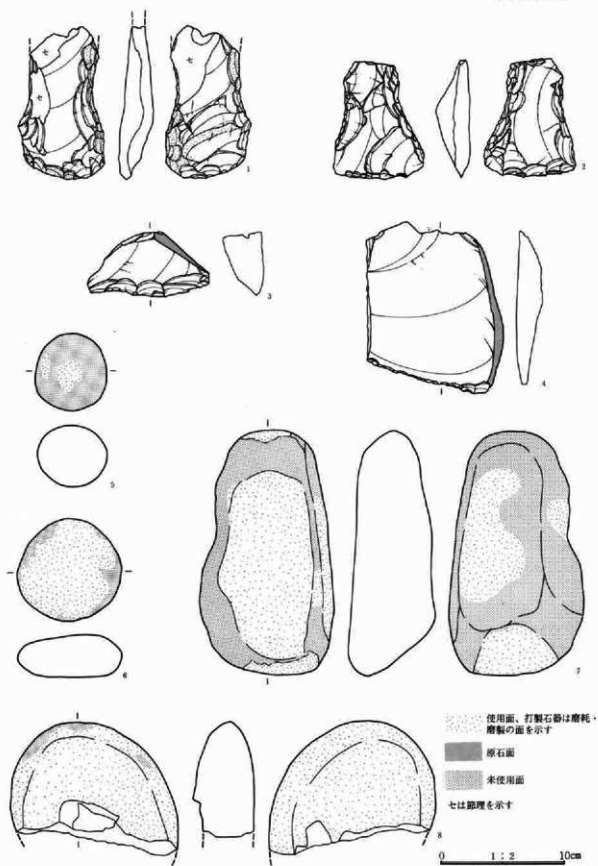
(下城 正)

第4篇 検出された遺構と遺物



第98図 縄文時代土器

0 1 : 2 10cm



第99図 縄文時代石器

第5篇 遺物観察

S J01~05

国番号 写真番号	器 器形	出土 位置	量 目(m) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備 考
第9図-1	須恵器	S J 01		黒書の土器6参照。		
第9図-2	須恵器	S J 01		黒書の土器8参照。		
第9図-3	須恵器	S J 01		黒書の土器7参照。		
第9図-4 写14-4	土師質 高台埴	S J 01	高台径8.0 器高 2.6+ σ	尖雑粘土粒赤褐色含。 並。にぶい橙。	付高台内・外面横無あり。	
第9図-5 写14-5	須恵器 壺	S J 01 埋土	口径15.1 器高(3 7.2) 肩部欠損	白色磁物粒含。硬。灰。	口縁・体部内・外面に轆轤目と紐作痕。体 部下半施厚。底部付高台。	
第9図-6 写14-6	土師器 台付壺	S J 01	脚径8.5 器高2.2 + σ 脚部片	尖雑磁物粒少。並。にぶ い橙。	脚部内・外面横無あり。	
第9図-7	土師器 台付壺	S J 01	脚径10.2 器高14 .2+ σ	良。軟。茶褐。	肩部斜行施削り。胴部より腹方行施削り。 (既報告による)。	遺物行方不明。
第9図-8 写14-8	土師器 壺	S J 01	口径(21.0) 器高 8.6+ σ 口縁部 片	尖雑磁物少。並。明赤帯。	口縁部内・外面横無あり。肩部外面施削 あり。	
第9図-9 写14-9	土師器 壺	S J 01 No.付	口径(21.1) 器高 15.0+ σ 写欠損	尖雑物粘土褐色粒含。 硬。にぶい橙。	口縁部内・外面横無あり。外面肩部紐作 痕、体部施削あり。内面施当痕あり。	内面施。
第10図-10 写15-10	石製 川原石	S J 01 No.付	長軸21.4 厚6.9	平面左の上面はならし、傷と磨痕がみられ、裏面に研磨痕あり。 側部は未使用面に近い。		
第10図-11 写15-11	石製 川原石	S J 01 No.付	長軸15.9 厚8.5	横断面隅丸三角形を呈し、各面と小口側に研磨面あり。側部は未使 用に近い。		
第10図-12 写14-12	石 川原石	S J 01 No.付	長軸18.7 厚9.0	平面面の点描部分が使用面で、研磨の痕痕あり。裏面にも同様の研 磨痕あり。割口は旧時。		
第10図-13 写15-13	石 川原石	S J 01 No.付	長軸14.8 厚8.4	壺材であったかのように被焼痕所があり、トーンはそれを示し、平 面図左側のみ使用痕と原石面。		
第12図-1 写15-1	須恵器 中壺	S J 03 埋土	体部片	白色磁物粒少。並。灰白。	外面に平行印、内面同心円の当目あり、 曲率は中形の壺を思わせる。	
第13図-1 写15-1	須恵器 中壺	S J 04 埋土	体部片	白色磁物粒少。並。灰白。	外面に平行印を繰返し、内面同心円の当 目あり。曲率は中形の壺を思わせる。	
第14図-1 写15-1	須恵器 杯	S J 06 埋土	口径13.3 器高3. 4 写欠損	尖雑磁物粒多。並。灰黄。	体部内・外面に轆轤目あり。底面平底で 回転施整形あり。右回転。	

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量 目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第14図-2 写15-2	須恵器 杯	S J 05 埋土	底径8.2 器高1.6 + ϵ 底部片	夾雑鉱物較少。並。灰質。	体部内・外面に轆轤目あり。底面平底未切後、周辺を回転調整形。右回転。	
第14図-3	須恵器	S J 05		須恵器類稀少器種4参照。		

S J 06~10

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量 目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第15図-1 写15-1	須恵器 杯	S J 06 No.付	口径12.8 器高3.4 ϵ 欠損	夾雑鉱物較含。並。灰白。	体部内・外面に轆轤目あり。底面平底未切後、周辺を回転調整形。右回転。	
第15図-2 写15-2	須恵器 碗	S J 06	底径(8.6) 器高1.8 + ϵ 底部片	白色鉱物較含。硬。灰。	底部片中央に焼成前穿孔があり。径1.05cm。内面は顯著に磨耗。付高台。	底部穿孔。
第15図-3 写15-3	土師器 杯	S J 06 No.付	口径(13.3) 器高3.2 ϵ 欠損	黒色鉱物較含。並。にぶい赤褐。	口縁部内・外面に横撫。体部外面に型肌あり。同内面横撫。底面は平底。	
第15図-4 写15-4	土師器 小形壺	S J 06 No.付	口径(16.0) 器高5.0 + ϵ 口縁部片	白色鉱物較含。硬。にぶい褐。	口縁部の内・外面に横撫あり。体部外面磨削。内面は滑らか。	
第15図-5 写15-5	土師器 壺	S J 06 No.付	口径(20.1) 器高5.5 + ϵ 口縁部片	黒色鉱物較含。並。にぶい赤褐。	口縁部内・外面に横撫。同外面に横作痕あり。体部外面磨削。	
第16図-6 写16-6	石製 壺材	S J 06 No.付	長軸32.8 厚6.3	左平面面は縦方向の削り。トーン部は被熱部を示す。右平面面は右上下方向の削り。		
第17図-1 写16-1	土師器 壺	S J 07 No.付	口径(21.3) 器高6.5 + ϵ 口縁部片	黒色鉱物較含。硬。にぶい褐。	口縁部内・外面に横撫あり。外面に指頭痕・紐作痕あり。体部外面磨削。	
第18図-1 写16-1	須恵器 杯	S J 08A No.付	口径(14.9) 器高(5.8) ϵ 欠損	白色鉱物較少。硬。灰。	体部内・外面に轆轤目あり。体部下位に磨削。	
第18図-2	須恵器	S J 08A		須恵器類稀少器種13を参照。		
第18図-3 写16-3	土師器 杯	S J 08A No.付	口径(10.2) 器高2.8 + ϵ 口縁部片	夾雑鉱物較少。硬。にぶい褐。	口縁部内・外面横撫。体部外面に横を持つ。底部外面磨削。	
第18図-4 写16-4	土師器 杯	S J 08A	口径(10.9) 器高(3.4) ϵ 欠損	夾雑鉱物較少。並。褐灰。	口縁部内・外面横撫。体部内・外面横撫。底部外面磨削。内面放射状磨削痕。	
第18図-5 写16-5	土師器 杯	S J 08A No.付	最大径(12.4) 器高1.8 + ϵ 体部片	黒色鉱物較含。並。にぶい橙。	体部外面に横を持つ。底部外面磨削。内面ざついている。	
第18図-6 写16-6	土師器 高杯	S J 08A No.付	脚径7.5 器高8.3 + ϵ 脚部片	黒色鉱物較含。並。橙。	脚部外面刷毛目・内面紐作痕・磨削あり。	
第18図-7 写16-7	土師器 瓶	S J 08A No.付	口径(25.6) 器高12.2 + ϵ 欠損	夾雑鉱物較少。硬。明赤褐。	口縁部内・外面横撫。体部内・外面磨削。	
第18図-8 写16-8	土師器 兵罌	S J 08A	口径(20.6) 器高24.3 + ϵ ϵ 欠損	夾雑鉱物較多。並。にぶい褐。	口縁部内・外面横撫。体部外面磨削。内面磨削目痕あり。	

第5篇 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第18図-9 写17-9	土師器 壺	S J 08 A No.付	口径19.3 器高31.4 口径欠損	夾雑鉱物粒少。硬。にぶい。	口縁部内・外面横撫。体部内・外面施刷。底部は平底。
第19図-1 写17-1	須恵器 蓋	S J 08 B	横直径3.1 横径のみ	夾雑鉱物粒少。硬。黒。	扁平なボタン状積み。天井部僅か中凹となる。内面僅か横撫目あり。
第19図-2	須恵器	S J 08 B		墨書出土器1を参照。	
第19図-3 写17-3	須恵器 杯	S J 08 B No.付	口径(12.5) 器高3.4 口径欠損	夾雑鉱物粒少。硬。黄灰。	体部内・外面に横撫目。底部右回転糸切後、周辺回転施刷。
第19図-4 写17-4	須恵器 杯	S J 08 B No.付	口径12.6 器高3.6 口径一部欠損	夾雑鉱物粒少。硬。黄灰。	体部内・外面に横撫目あり。底部右回転糸切後、周辺回転施刷。
第19図-5	須恵器	S J 08 B		墨書出土器2を参照。	
第19図-6 写17-6	須恵器 杯	S J 08 B	口径(14.6) 器高5.1 口径欠損	夾雑鉱物粒少。並。にぶい黄橙。	体部内・外面に横撫目あり。底面は平底で回転施整形。
第19図-7	須恵器	S J 08 B		須恵器類稀少器種6を参照。	
第19図-8 写17-8	土師器 杯	S J 08 B No.付	口径(14.7) 器高(4.4) 口径欠損	夾雑鉱物粒多。硬。にぶい赤褐色。	口縁部内・外面に横撫あり。体部外面に施刷あり。底面は丸底。
第19図-9 写17-9	須恵器 杯	S J 08 B No.付	口径(15.8) 器高5.8+ ϵ 口径欠損	褐色粘土物質多。並。にぶい橙。	体部内・外面は滑らか。器内はやや厚い。
第19図-10	石製	S J 08 B		砥石ほか磨耗石類6を参照。	
第21図-1 写17-1	土師器 杯	S J 09 A	口径(11.2) 器高(2.6) 口径部片	夾雑鉱物粒多。硬。橙。	口縁部内・外面に横撫あり。体部外面に彫肌・施刷あり。同内面に滑らか。
第21図-2 写17-2	土師器 杯	S J 09 A	口径(12.4) 器高3.7 口径欠損	夾雑鉱物粒多。並。黄橙。	口縁部・体部外面上方横撫。体部外面下方は荒れている。体部内面は滑らか。
第21図-3 写17-3	土師器 杯	S J 09 A	口径(12.3) 器高3.7 口径欠損	褐色粘土物質多。並。橙。	口縁部内・外面に横撫。体部外面に施刷あり。同内面は滑らか。底面は平底。
第21図-4 写18-4	土師器 杯	S J 09 A	口径(16.0) 器高2.4+ ϵ 口径部片	夾雑鉱物粒少。硬。にぶい。	口縁部内・外面に横撫あり。体部外面に施刷あり。同内面に滑らか。
第21図-5 写18-5	土師器 杯	S J 09 A	口径(17.7) 器高3.8+ ϵ 口径部片	夾雑鉱物粒多。並。橙。	口縁部内・外面に横撫あり。体部外面に施刷あり。同内面は滑らか。
第21図-6 写18-6	土師器 壺	S J 09 A	口径(20.2) 器高7.5+ ϵ 口径部片	夾雑鉱物粒多。並。橙。	口縁部内・外面に横撫。同柱作痕あり。体部外面に施刷あり。
第21図-7 写18-7	土師器 壺	S J 09 A	口径(22.4) 器高12.0+ ϵ 上半欠	白色鉱物粒多。並。にぶい。	口縁部内・外面に横撫。体部外面に施刷。同外面にハズレあり。
第21図-8 写18-8	土師器 壺	S J 09 A	口径(19.7) 器高6.1+ ϵ 口径欠損	夾雑鉱物粒多。並。明赤褐色。	口縁部内・外面に横撫あり。口縁部外面に柱作痕あり。体部外面に施刷。器内調整は極めて薄作り。
第21図-9 写18-9	土師器 壺	S J 09 A 床面	口径(21.0) 器高5.6+ ϵ 口径部片	夾雑鉱物粒少。硬。にぶい。	口縁部内・外面に横撫あり。器部外面下方に荒おきえによる凹みあり。

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第21図-10 写18-10	石製 磁材	S J 09A	短軸8.3 厚7.6	図右上から左下へ傾目あり。欠損は調査時。		
第21図-11 写18-11	石製 石鉢	S J 09A	長軸2.9 厚0.4	無柄、平根形跡で、細部整形に至るまで丁家で、縄文時代の所産か。		チャート。
第22図-1 写18-1	須恵器 杯	S J 09B	口径部(11.9) 器 高4.4 欠損	白色磁物粒含。並。灰。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底 で轆轤右回転糸切。	
第22図-2 写18-2	須恵器 杯	S J 09B	口径(12.4) 器高 3.5 欠損	夾雑磁物粒含。並。灰白。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底 で糸切あり。	
第22図-3 写18-3	須恵器 杯	S J 09B	口径(13.6) 器高 3.7 欠損	夾雑磁物粒少。並。灰白。	体部内・外面平滑。底面は平底で轆轤右 回転糸切あり。	
第22図-4 写18-4	須恵器 杯	S J 09B	口径(14.6) 器高 3.7 欠損	夾雑磁物粒含。軟。灰白。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底。	
第22図-5	須恵器	S J 09B		須恵器類稀少器種を参照。		
第22図-6 写18-6	須恵器 盤	S J 09B	最大径(17.0) 器 高1.7+ ϵ 高台片	夾雑磁物粒含。硬。暗青 灰。	かすかに立上りを残し、高合部端部は旧 時の割れ口。付高台。	
第22図-7 写18-7	須恵器 羽釜	S J 09B	口径(19.6) 器高 10.0+ ϵ 口縁片	夾雑磁物粒含。軟。浅黄 橙。	口縁部内・外面破壊。割貼付。体部外面 荒削あり。内面紐作痕凸凹あり。	
第23図-1 写19-1	土師器 高杯	S J 10	最大径12.2+ ϵ 器高4.3+ ϵ 欠 損	夾雑磁物粒含。硬。赤褐。	杯部外面差別状無あり。内面荒削あり。 脚部内面に粘土紋目あり。	

S J11~15

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第25図-1 写19-1	須恵器 杯小	S J 11B	口径(12.6) 器高 4.2+ ϵ 欠損	夾雑磁物粒含。並。灰。	体部外面轆轤目あり。内面は滑らか。	
第25図-2 写19-2	須恵器 杯	S J 11B	口径(13.0) 器高 4.4 欠損	白色磁物粒含。並。灰。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底。 轆轤右回転糸切。	
第25図-3 写19-3	須恵器 杯	S J 11B	口径(14.2) 器高 4.2 欠損	黒色磁物粒含。並。灰。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底。 底面と周辺は糸切後整形。	
第25図-4 写19-4	須恵器 碗	S J 11B	口径(13.5) 器高 5.7 欠損	夾雑磁物粒少。軟。にぶ い黄橙。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は糸切 後整形。付高台。	
第26図-5 写19-5	須恵器 散	S J 11B	体部片	白色磁物粒多。硬。褐灰。	体部内・外面に轆轤目あり。器内は、極 めて薄い。胎土は極めて良質で器外から 鑑入されたと思われる。	
第25図-6	須恵器	S J 11B		莖研磨の須恵器類7を参照。		
第25図-7	須恵器	S J 11B		莖研磨の須恵器類6を参照。		

第5篇 遺物観察

国番号 写真番号	器 種 器 形	出 土 位 置	量 目(cm) 口径・底径・器高 残 存 状 態	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調 と 損 害		備 考
第26図-8 写19-8	土師器 杯	S J 11 B	口径(12.1) 器高 2.8+* 欠欠損	褐色粘土微粒多。硬。明 赤褐色。	口縁部内・外面横撫あり。体部外面型肌 あり。内面は滑らか。	
第26図-9 写19-9	土師器 壺	S J 11 B	口径(15.0) 器高 (2.1) 欠欠損	褐色粘土微粒多。並。橙。	口縁部内・外面横撫あり。内面底指頭圧 痕あり。底面は平底気味。	
第26図-10 写19-10	土師器 壺	S J 11 B	口径(14.0) 器高 4.5+* 口縁部片	白色鉱物粒多。並。にぶ い橙。	頸部立上外面刷毛工具の当痕。体部内面 指頭圧痕・紐作痕・磨痕。外面カセ。	
第26図-11 写19-11	土師器 壺	S J 11 B	口径(20.1) 器高 5.6+* 口縁部片	夾雑鉱物粒多。硬。にぶ い赤褐色。	口縁部内・外面は横撫。頸部内・外面に 紐作痕。体部外面に磨削痕あり。	
第26図-12	石製	S J 11 B		砥石はか磨耗石類11を参照。		
第27図-1 写19-1	須恵器 蓋	S J 11 B C	最大径16.1+* 欠欠損	黒色鉱物粒少。並。浅黄。	内・外面に轆轤目あり。狭み周辺は施整 形。	
第27図-2 写19-2	須恵器 杯	S J 11 B C	口径(13.6) 器高 4.2 欠欠損	夾雑鉱物粒多。並。灰。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底。 底面は轆轤石回転切。	
第27図-3 写19-3	須恵器 杯	S J 11 B C	底部片	夾雑鉱物粒多。並。にぶ い橙。	底面内面に轆轤目。外面は糸切り。	
第27図-4	須恵器	S J 11 B C		煮研磨の須恵器類14を参照。		
第27図-5 写19-5	土師器 杯	S J 11 B C	口径(12.5) 器高 (3.5) 欠欠損	褐色粘土粒少。並。明赤 褐色。	口縁部内・外面に横撫あり。底面はやや 丸底気味。	
第27図-6 写19-6	土師器 壺	S J 11 B C	口径(12.9) 器高 3.5 口縁部片	夾雑鉱物粒多。並。にぶ い赤褐色。	頸部立上内・外面に紐作痕。体部外面 に施削痕。	
第27図-7 写19-7	土師器 壺	S J 11 B C	口径(17.8) 器高 5.5+* 口縁部片	夾雑鉱物粒少。並。橙。	口縁部内・外面に横撫・同外面に紐作 痕。体部外面磨削あり。	
第28図-1 写20-1	須恵器 杯	S J 11 C	口径(13.6) 器高 4.3 欠欠損	白色鉱物粒多。並。灰白。	体部外面轆轤目あり。内面はなめらか。 平底で回転施整形。轆轤回転左廻。	
第28図-2	須恵器	S J 11 C		須恵器類稀少器種12を参照。		
第28図-3 写20-3	須恵器 大甕	S J 11 C	体部片	石英粒多。硬。暗青灰。	体部内・外直線作痕。内面細い平行条当 目後施整形。接合痕割離個所当目。器内 の一群で接合面の叫目は少ない。	
第28図-4	須恵器	S J 11 C		煮研磨の須恵器類15を参照。		
第28図-5	土師器 杯	S J 11 C	口径(12.7) 器高 3.6 欠欠損	夾雑鉱物粒多。並。橙。	口縁部内・外面に横撫。体部外面に指頭 圧痕。底面は丸底で施整形。	
第28図-6 写20-6	土師器 台付壺	S J 11 C	脚座径10.0 器高 3.5+* 脚座片	夾雑鉱物粒多。並。橙。	脚座外面に焼ハゼ(二次か)、指頭圧痕。 同内面なめらか。	
第28図-7 写20-7	土師器 壺	S J 11 C	口径(20.8) 器高 16.3+* 欠欠損	夾雑鉱物粒多。硬。にぶ い橙。	口縁部内・外面は横撫。同外面に紐作痕。 体部外面磨削。同内面紐作痕。	
第29図-1 写20-1	須恵器 蓋	S J 12 No.付	最大径(14.3) 器 高1.9+* 欠欠損	夾雑鉱物粒多。硬。にぶ い橙。	外面上半は回転施整形。轆轤回転右廻。 内面と頸部に轆轤目。	

遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第29図-2 写20-2	須恵器 杯	S J 12	口径(13.0) 器高 3.7 欠欠損	夾雑鉱物粒含。並。黄灰。	体部外面に轆轤目。内面なめらか。底部は平底。	
第29図-3 写20-3	須恵器 杯	S J 12 埋土	口径(13.7) 器高 3.8 欠欠損	夾雑鉱物粒含。並。灰白。	外面轆轤目。内面なめらか。底面平気で回転糸切後、周刃磨削。轆轤右回転。	
第29図-4 写20-4	須恵器 壺	S J 12	口径(14.3) 器高 5.6 欠欠損	白色鉱物粒含。硬。橙。	外面に轆轤目。内面はなめらか。底部は糸切後、付高台。	
第29図-5 写20-5	須恵器 壺	S J 12	口径(13.8) 器高 5.7 欠欠損	白色鉱物粒含。並。灰白。	体部外面轆轤目あり。内面なめらか。底部は回転糸切で付高台。轆轤右回転。	
第29図-6	須恵器	S J 12		莿書の土器1を参照。		
第30図-7	須恵器	S J 12		須恵器類稀少器種18を参照。		
第30図-8 写21-8	須恵器 大甕	S J 12 No.付	最大径(42.5) 器高 17.0+* 頸部	白色鉱物粒含。硬。灰白。	口縁部内・外面轆轤目。体部外面に平行印目後撤消。同内面縦作痕・素文当目。8'は体部下方の個所で素文の当目を部分的に撤消す。8'の下方は底部粘土板まで至らず。	
第29図-9 写20-9	土師器 壺	S J 12	最大径(18.1) 器高 8.9+* 胴部片	白色鉱物粒含。並。赤。	体部外面に磨削。同内面に磨削痕あり。底面は平底気味で不定方向手持磨削。	
第29図-10 写21-10	土師器 壺	S J 12	口径(20.0) 器高 5.8+* 口縁部片	白色鉱物粒含。硬。橙。	口縁部内・外面に横溝あり。体部外面に磨削あり。	
第29図-11 写21-11	土師器 壺	S J 12	口径14.8+* 口縁から体部片	白色鉱物粒含。硬。赤橙。	口縁部内・外面に横溝。同外面に縦作痕あり。体部外面に磨削。同内面磨削。	
第29図-12 写21-12	土師器 壺	S J 12	口径(21.6) 口縁から体部片	白色鉱物粒多。硬。赤褐。	口縁部内・外面に横溝。同外面に縦作痕あり。体部外面磨削。同内面磨削。	
第30図-13 写21-13	石製 紡錘車	S J 12 籬	長軸6.7 厚2.3	頸部には工具による削り明瞭である。表・裏面は平滑である。わずかながら欠損あり。		流紋岩。
第31図-1 写22-1	土師器 壺	S J 13 籬	口径(20.2) 器高 18.4+* 欠欠損	夾雑鉱物粒含。並。橙。	口縁部内・外面横溝。同外面に指圧痕。体部外面に磨削。同内面縦作痕。	
第31図-2 写22-2	土師器 壺	S J 13 籬	最大径(18.4) 器高 16.5+*	夾雑鉱物粒含。並。橙。	体部外面に磨削あり。底面は平底。	
第32図-1 写22-1	須恵器 壺	S J 14	体部片	夾雑鉱物粒含。並。灰。	曲率から見ると台付短頸甕と思われる。肩部に沈線あり。内面に撫あり。	
第32図-2 写22-2	土師器 杯	S J 14	口径(12.6) 器高 (3.4) 欠欠損	褐色粘土粒含。硬。橙。	口縁部内・外面に横溝。体部外面に型肌・磨削あり。同内面は滑らか。	
第32図-3 写22-3	土師器 壺	S J 14 籬	口径(21.9) 器高 10.3+*	夾雑鉱物粒含。並。ぶい橙。	口縁部内・外面に横溝。同外面に指圧痕。体部外面に磨削。同内面縦作痕。	
第32図-4 写22-4	土師器 壺	S J 14 籬	口径(21.0) 器高 17.1+*	夾雑鉱物粒含。並。橙。	体部外面に磨削あり。同内面に撫・縦作痕あり。	
第33図-1	須恵器	S J 15		莿研書の須恵器類11を参照。		

第5編 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第33図-2 写22-2	須恵器 杯	S J 15	底径(9.9) 器高 2.0+ ϵ 底部片	灰色粘土粒含。並。灰。灰。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底で切離後回転の蓋蓋形。	
第33図-3 写22-3	須恵器 杯	S J 15	底径(8.8) 器高 1.9+ ϵ 底部片	夾雑鉱物粒含。並。灰。白。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底、轆轤右回転糸切。	

S J16~20

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第34図-1 写22-1	須恵器 杯	S J 16 No.付	口径(12.0) 器高 4.7 欠損	褐色粘土粒含。並。浅黄。	体部内・外面轆轤目。同外部黒色底文。底面平底。轆轤右回転糸切。燒蓋あり。	
第34図-2 写22-2	須恵器 杯	S J 16 埋土	口径12.2 器高4. 7 完形	夾雑鉱物粒含。軟。灰。白。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底、轆轤右回転糸切。燒蓋あり。	
第34図-3 写22-3	須恵器 杯	S J 16 埋土	口径12.8 器高4. 8 完形	夾雑鉱物粒含。軟。灰。白。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底、轆轤右回転糸切。焼割。燒蓋あり。	
第34図-4 写22-4	須恵器 塊	S J 16 No.付	高台径(6.3) 器 高3.5+ ϵ 欠損	夾雑鉱物粒含。軟。灰。	体部外面に轆轤目あり。底面は切離後指撫整形。付高台。	
第34図-5 写22-5	須恵器 塊	S J 16 No.付	高台径(6.2) 器 高2.9+ ϵ 底部片	夾雑鉱物粒含。軟。灰。	体部外面に轆轤目あり。底面は糸切。同付高台。	
第34図-6 写22-6	須恵器 塊	S J 16 No.付	底径6.0 器高3.3 + ϵ 欠損	夾雑鉱物粒含。軟。橙。	体部内・外面に轆轤目あり。底部は轆轤右回転糸切付高台。	
第34図-7 写22-7	須恵器 杯	S J 16 No.付	底径9.2 器高3.9 + ϵ 欠損	夾雑鉱物粒含。軟。橙。	体部外面轆轤目。内面は全体に荒れる。底面は平底、轆轤右回転糸切。大型杯の同類は多くはなく、稀少例である。糸切目が左に全部傾かないのに注意。	
第34図-8 写23-8	石製 川原石	S J 16 No.付	長軸10.0 厚5.0	図平面の大半に擦痕あり。天・地端に敲打痕あり。側部左右にわずか使用の浅い痕所あり。図左上から右下方向に研削によってきた稜部があり、刃ならし傷が多く認められる。断面の研削面は材質が硬いため金属には不明。		
第35図-1 写23-1	須恵器 杯	S J 17	底径(8.2) 器高 1.6+ ϵ 底部片	夾雑鉱物粒含。軟。灰。	底部は平底。底面は蓋蓋形。同内面に轆轤目あり。	
第35図-2 写23-2	須恵器 杯	S J 17	口径(13.5) 器高 3.6 欠損	夾雑鉱物粒含。軟。灰。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底、回転蓋整形。	
第35図-3 写23-3	須恵器 杯	S J 17	口径(14.9) 器高 3.6 欠損	白色鉱物粒含。硬。灰。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底で回転糸切痕あり。	
第35図-4 写23-4	須恵器 塊	S J 17	脚部径(11.7) 器 高2.0+ ϵ	夾雑鉱物粒含。硬。灰。白。	付高台。底部は蓋蓋形。内面に轆轤目あり。内・外面荒れている。	
第35図-5 写23-5	土師器 杯	S J 17 貯埋	口径13.0 器高3.6 完形	夾雑鉱物粒含。並。にふい 煙。	口縁部の内・外面に横撫あり。体部の外面に荒削あり。底面は丸底。	

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と概要		備考
第35図-6 写23-6	土師器 杯	S J 17 貯埋	口径(14.2) 器高 2.9+ ϵ ㄥ欠損	夾雑鉱物粒少。並。橙。	口縁部の内・外面に横溝あり。体部の外 面には直線形と型肌あり。	
第35図-7 写23-7	土師器 杯	S J 17 貯埋	口径(15.8) 器高 4.4 ㄥ欠損	夾雑鉱物粒含。並。橙。	口縁部の内・外面に横溝あり。体部外面 に寛削・型肌あり。同内面あり。	
第36図-8 写23-8	土師器 壺	S J 17 貯埋	口径(16.0) 口縁 から体部片	夾雑鉱物粒含。並。橙。	口縁部の内・外面に横溝、紐作痕あり。 体部外面に縦溝のハゼあり。	
第36図-9 写23-9	土師器 壺	S J 17 貯埋	口径(21.8) 口縁 から体部片	夾雑鉱物粒含。並。赤赤 濁。	口縁部の内・外面に横溝、同内面に紐作 痕あり。体部外面に直削あり。	
第36図-10 写23-10	土師器 壺	S J 17 貯埋	口径(22.0) 器高 13.8+ ϵ ㄥ欠損	夾雑鉱物粒含。並。赤赤 濁。	口縁部の内・外面に横溝あり。体部外面 に直削、内面に紐作痕あり。	
第36図-11 写23-11	石製 甕	S J 17 甕	長軸16.8 厚12.5	甕平面に割線が見られ、全体に縦割線あり、割口は調査時の欠損。 若質はきわめて軟らか。縦割線についてはトーンで示した。		
第36図-12 写23-12	石製 甕	S J 17 甕付近	長軸10.1 厚4.4	甕平面にわずかに旧時の面を残すが、大半は縦割のため風化している。 割口は調査時の欠損。若質はきわめて軟らか。点検部は旧態の 遺存部分を示し、13について同じ。		
第36図-13 写23-13	石製 甕	S J 17 甕付近	長軸7.4 厚5.7	甕平面の大半は縦割のため風化し、点検部のみ旧時の面残す。割口 は調査時の欠損。若質はきわめて軟らか。		
第37図-1 写24-1	須恵器 壺	S J 18	肩部径(18.0) 器 高2.6+ ϵ ㄥ欠 損	白色磁物粒含。並。灰白。	体部の外面上方は回転直削され、下方 は回転あり。轆轤の回転右廻。	
第37図-2 写24-2	須恵器 杯	S J 18	底径(8.2) 器高 0.5+ ϵ 底部片	夾雑鉱物粒含。並。灰白。	底面は平底で回転未切後、周辺は回転直 削形。轆轤の回転左廻。	
第37図-3 写24-3	須恵器 壺	S J 18	脚部径11.0 器高 2.1+ ϵ 底部片	夾雑鉱物粒含。並。灰白。	高台貼は後、底部は回転直削形。轆轤 の回転右廻。	
第37図-4	須恵器	S J 18		須恵器類種少器類5を参照。		
第37図-5 写24-5	須恵器 甗	S J 18	最大径(21.2) 器 高10.7+ ϵ	夾雑鉱物粒含。硬。灰。	胴部外面に自然軸付着、同内面に指圧痕 あり。	
第37図-6	須恵器	S J 18		須恵器類種少器種7を参照。		
第37図-7 写24-7	土師器 杯	S J 18	口径(12.1) 器高 4.8 ㄥ欠損	夾雑鉱物粒含。並。濁灰。	口縁内・外面横溝あり。体部外面上方に も横溝があり下方から底部に直削。	
第37図-8 写24-8	土師器 杯	S J 18	口径(14.0) 器高 4.3 ㄥ欠損	夾雑鉱物粒含。硬。橙。	口縁内・外面に横溝あり。体部の下方か ら底部に直削。	
第37図-9 写24-9	土師器 壺	S J 18	最大径(16.0) 器 高8.7 胴部片	夾雑鉱物粒含。並。にぶ い黄橙。	胴部の外面全体に縦割のハゼあり。内面 に刷毛目痕あり。	外面黒色斑文。
第37図-10 写24-10	土師器 小形壺	S J 18	口径(15.4) 器高 (19.6) ㄥ欠損	黒色磁物粒含。硬。橙。	口縁部内・外面に横溝。胴部外面直削。 内面紐作痕あり。	外面黒色斑文。
第40図-1 写24-1	須恵器 壺	S J 19	肩部径15.2 器高 3.1 完形	褐色粘土粒含。並。灰黄。	口縁部内・外面轆轤目。体部内・外面轆 轤目。外面右回転の直削形。胴部横溝。	

第5篇 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第40図-2 写24-2	須恵器 杯	S J 19	口径(13.2) 器高 3.5 欠欠損	夾雑鉱物粒少。並。にぶ い赤褐色。	体部内・外面に轆轤目あり。底面は平底 で右回転糸切。油煙は火皿痕みか。	口縁部に油煙の付 着あり。
第40図-3 写24-3	須恵器 碗	S J 19	底径8.4 上半欠 損	夾雑鉱物粒少。並。にぶ い黄褐色。	底部は付台高。底面は切離後、撫整形。	
第40図-4 写24-4	土師器 埴	S J 19	最大径(15.0) 器 高11.0+*	黒色鉱物粒含。並。橙。	体部外面彫削。内面柱作痕・摺り痕あり。 底面は外面彫削。丸底。	外面黒色斑文。
第40図-5 写24-5	土師器 壺	S J 19	口径(20.8) 器高 16.6+*	夾雑鉱物粒含。並。明赤 褐色。	口縁部内・外面横溝。同外面に焼ハゼあり。	5・6は同一個 体。
第40図-6 写25-6	土師器 壺	S J 19	最大径(21.2) 器 高16.2+*	夾雑鉱物粒含。硬。灰褐色。	体部の外面は彫削。内面に柱作痕。底部 は平面。	5・6は同一個 体。
第42図-1 写25-1	須恵器 杯	S J 20	口径(14.4) 器高 4.2 欠欠損	褐色粘土粒含。軟。浅黄。	体部の内・外面に轆轤目あり。底面は平 底で回転彫整形。	
第42図-2	須恵器	S J 20		美作の土器2を参照。		酸化須恵器。
第42図-3	須恵器	S J 20		美作の須恵器類2・美作の土器3を参照。		酸化須恵器。
第42図-4 写25-4	土師器 壺	S J 20	口径13.5 器高6. 6+* 口縁部片	黒色鉱物粒含。並。にぶ い橙。	口縁部の内・外面に横溝。体部外面に焼 ハゼ(二次小)・彫削痕あり。	
第43図-5 写25-5	土師器 壺	S J 20	口径(21.0) 器高 18.1+* 欠欠損	夾雑鉱物粒含。並。橙。	口縁部の内・外面横溝。外面に柱作痕。 体部外面彫削。内面柱作痕あり。	
第43図-6 写25-6	土師器 壺	S J 20	口径(20.1) 器高 10.4+*	黒色鉱物粒含。並。にぶ い橙。	口縁部の内・外面に横溝。外面に彫削。 器内は極めて薄い。	
第43図-7 写25-7	土師器 壺	S J 20	最大径(16.6) 器 高7.4 底部片	黒色鉱物粒少。並。にぶ い褐色。	体部の外面彫削。内面は底部にかけて美 当痕あり。底面は平底。彫削あり。	外面彫あり。

S J21~24

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第44図-1 写25-1	土師器 杯	S J 21	口径(11.6) 器高 2.6 欠欠損	褐色粘土粒少。並。橙。	口縁部の内・外面に、横溝。外面は底部 にかけて彫削。内面は滑らか。底部は丸 底気味。	
第45図-1 写25-1	須恵器 杯	S J 22	口径(12.8) 器高 3.5 欠欠損	灰色鉱物粒含。並。灰白。	体部の内・外面に轆轤目あり。底面はや や平底で、回転彫整形あり。	
第45図-2 写25-2	須恵器 杯	S J 22	底径7.8 底部片	夾雑鉱物粒少。硬。明褐色。	底部の内面に摺痕あり。外面は平底で彫 削あり。	酸化須恵器。
第45図-3 写25-3	須恵器 杯	S J 22	口縁部片	白色鉱物粒含。軟。灰黄。	体部に轆轤目痕があり、磨耗している。 外面に轆轤目あり。	
第45図-4 写25-4	須恵器 壺	S J 22	胴部片	白色鉱物粒含。軟。灰。	体部の外面に横目あり。下部に自然輪あ り。内面は滑らか。	

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第45図-5	須恵器	S J 22		焼研磨の須恵器類5を参照。	
第45図-6	須恵器	S J 22		焼研磨の須恵器類12を参照。	
第45図-7 写25-7	土師器 罎	S J 22	口径(14.5) 器高 3.2+ ϕ 口縁部片	夾雑鉱物粒含。赤。にぶ い赤褐色。	口縁部の内・外面に横撫。外面は底部に かけて荒削あり。内面は滑らか。
第45図-8 写25-8	土師器 壺	S J 22	口径(16.6) 器高 2.7+ ϕ 口縁部片	褐色粘土粒含。赤。粗。	口縁部の内・外面に横撫あり。外面に指 頭圧痕あり。

SB01~07

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第48図-1 写26-1	須恵器 蓋	S B 01 柱穴埋土	蓋部径(13.8) 器 高1.8+ ϕ 口縁片	白色鉱物粒少。赤。灰黄。	口縁部の内・外面に横撫。轆轤目あり。 外面右回転の荒削あり。
第48図-2 写26-2	須恵器 蓋	S B 01 柱穴埋土	蓋部径(16.3) 器 高1.1+ ϕ 口縁片	白色鉱物粒少。赤。灰白。	口縁部の内・外面に横撫・荒撫と轆轤目 あり。
第55図-1 写26-1	須恵器 杯	S B 06 柱穴埋土	口径(14.0) 器高 3.0+ ϕ 口縁部片	白色鉱物粒少。赤。褐灰。	体部の内・外面に轆轤目あり。さらに同 内面撫あり。
第55図-2 写26-2	土師器 壺	S B 06 柱穴埋土	口径21.4 器高 11.0 口縁部片	褐色粘土粒含。硯。明赤 褐色。	口縁部の内・外面横撫あり。体部外面に 荒削あり。同内面は撫。
第55図-3 写26-3	土師器 壺	S B 06 柱穴埋土	口径(20.6) 器高 12.8+ ϕ 口縁部片	褐色粘土粒含。硯。にぶ い粗。	口縁部の内・外面に横撫あり。体部の外 面に荒削あり。同内面は撫。
第58図-1 写26-1	須恵器 埴	S B 07 柱穴埋土	高台径(6.5) 器 高1.7+ ϕ 底部片	灰色粘土粒含。赤。灰。	付高台で内・外面に横撫あり。
第58図-2 写26-2	須恵器 杯	S B 07 柱穴埋土	口径(16.0) 器高 4.7 欠欠損	白色鉱物粒多。赤。灰。	体部の内・外面に轆轤目あり。底面は平 底で轆轤右回転の赤削あり。

SE01~03

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第60図-1 写27-1	土師器 杯	SE 01	口径(12.9) 器高 3.0+ ϕ 欠欠損	夾雑鉱物多。赤。粗。	口縁部の内・外面横撫。体部外面は荒削。 内面滑らか。底面は丸底である。
第60図-2 写27-2	土師器 杯	SE 01	口径(12.0) 器高 3.2+ ϕ 欠欠損	夾雑鉱物含。硯。明赤褐色。	口縁部の内・外面横撫。体部外面は荒削。 内面滑らか。底面は丸底である。
第60図-3	須恵器	SE 01		薬書の土器5を参照。	
第60図-4	須恵器	SE 01		焼研磨の須恵器類1を参照。	

第5篇 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第61図-1	須恵器	S E 02		須恵器類稀少器種11を参照。		
第61図-2	須恵器	S E 02		須恵器類稀少器種13を参照。		
第61図-3	須恵器	S E 02		須恵器類稀少器種14を参照。		
第61図-4 写27-4	土師器 杯	S E 02	口径(12.0) 器高 3.2 欠欠損	夾雑鉱物多。硬。明赤褐色。	口縁部の内・外面横撫。体部外面に型肌。同外面に施刷。底面丸底である。	
第61図-5 写27-5	土師器 杯	S E 02	口径(13.6) 器高 3.9+* 欠欠損	褐色粘土粒少。並。橙。	口縁部の内・外面に横撫。体部の外面に施刷。同内面に撫。	
第61図-6 写27-6	土師器 杯	S E 02	口径(13.5) 器高 (3.8) 欠欠損	褐色粘土粒多。硬。明赤褐色。	口縁部の内・外面横撫。体部外面型肌。同外面施刷。同内面撫。底面丸底。	
第61図-7 写27-7	土師器 杯	S E 02	口径(13.9) 器高 (3.0) 欠欠損	夾雑鉱物合。硬。にぶい橙。	口縁部の内・外面に横撫。体部の外面に施刷。同内面に撫。	
第61図-8 写27-8	土師器 杯	S E 02	口径(14.0) 器高 2.7 欠欠損	夾雑鉱物合。硬。にぶい橙。	口縁部の内・外面横撫。体部の外面に施刷。同外面型肌あり。底面丸底。	
第61図-9 写27-9	土師器 杯	S E 02	口径(14.8) 器高 3.1 欠欠損	夾雑鉱物合。並。明赤褐色。	口縁部の内・外面に横撫。体部の内面に指任痕。同外面は施刷。底面は丸底。	
第61図-10 写27-10	土師器 小形壺	S E 02	口径(13.0) 器高 4.7+* 口縁部片	褐色粘土粒少。並。橙。	口縁部の内・外面に横撫。頸部の外面は撫。体部の外面は施刷。同内面に撫。	
第61図-11 写27-11	土師器 壺	S E 02	口径(20.0) 器高 9.2+* 口縁部片	褐色粘土粒多。並。橙。	口縁部の内・外面横撫。頸部立上り外面指任痕。体部外面施刷。同内面に撫。	
第62図-1 写27-1	須恵器 杯	S E 03	口径(13.7) 器高 3.9 欠欠損	夾雑鉱物合。並。灰。	体部の内・外面に横撫目あり。底面は平底。底部切離後回転の施刷整形。整形前は余切・施刷のいずれか不明。	
第62図-2 写27-2	土師器 杯	S E 03	口径(12.0) 器高 (3.4) 欠欠損	褐色粘土粒多。硬。にぶい褐色。	口縁部の内・外面に横撫。体部の外面に型肌。同外面に施刷。同内面に撫。	
第62図-3 写27-3	土師器 杯	S E 03	口径(13.1) 器高 2.7+* 口縁部片	夾雑鉱物合。硬。橙。	口縁部の内・外面に横撫。体部の外面に型肌。同外面は施刷。同内面に撫。	

S D

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第63図-1 写28-1	須恵器 埴	S D 01 埴土	高台径(7.6) 器高 2.1+* 底部欠	夾雑鉱物粒合。軟。灰。	体部の内・外面に横撫目あり。底面は横石回転の余切。行高台。	
第63図-2	須恵器	S D 01		須恵器類稀少器種No.17を参照。		
第63図-3	埴輪	S D 01		埴輪 1 を参照。		
第63図-4	埴輪	S D 01		埴輪 2 を参照。		

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第63図-1 写28-1	須恵器 埴	S D01-4 埋土	最大径(9.2) 器高 1.4+ ϵ 底部片	夾雑物粒含。軟。にぶ い橙。	高台部は欠損。底部は糸切。内面は剥落。 外面も風化顯著。	
第63図-2 写28-2	須恵器 小形埴	S D01-4 埋土	口径(14.1) 器高 1.7+ ϵ 口縁片	夾雑物粒含。硬。灰白。	内・外面は滑らか。外面に自然軸あり。 全体的に風化。	
第63図-3 写28-3	須恵器 埴	S D01-4 埋土	頸部立上り片	夾雑物粒含。硬。階状。	外面に4+ ϵ 桑を単位とした波状文あり。 内面に当目痕あり。全体に自然軸。	強い。
第63図-4	須恵器	S D01-4		須恵器類稀少器種15を参照。		
第63図-1 写28-1	須恵器 埴	S D06	脚端径13.2 器高 2.2+ ϵ 欠欠損	夾雑物粒含。軟。にぶ い黄橙。	底面は機軸右回転の糸切。内・外面とも に荒れている。	

SK

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第64図-1	須恵器	S K5-6-7		須恵器類稀少器種1を参照。		
第64図-2	須恵器	S K5-6-7		美研館の須恵器類4を参照。		
第64図-3	須恵器	S K5-6-7		美研館の須恵器類3を参照。		
第64図-4 写28-4	土師器 杯	S K5-6-7	口径(13.7) 器高 3.5 欠欠損	夾雑物含。並。橙。	口縁部内・外面に横撫。体部外面に型肌。 指圧痕、荒削。同内面に撫あり。	
第64図-5 写28-5	土師器 杯	S K5-6-7	口径(13.7) 器高 3.4 欠欠損	夾雑物少。硬。にぶい赤 銅。	口縁部の内・外面に横撫。体部の外面に 荒削。同内面に撫あり。	
第64図-6 写28-6	土師器 壺	S K5-6-7	口径(22.8) 口縁 部から体部片	夾雑物含。並。橙。	口縁部の内・外面横撫。紐作痕。体部外 面に横撫。同内面に撫当痕あり。	
第64図-7 写29-7	土師器 壺	S K5-6-7	口径(19.9) 口縁 部から体部片	夾雑物含。並。橙。	口縁部内・外面横撫。同外面に紐作痕。 体部外面に荒削。同内面に撫当痕あり。	
第64図-8 写29-8	土師器 壺	S K5-6-7	口径24.7 器高15 .6+ ϵ 下半欠損	夾雑物含。硬。橙。	口縁部内・外面横撫。同外面紐作痕。体 部外面荒削。同内面に撫当痕。滑らか。	
第68図-1 写29-1	須恵器 壺	S K47	口径17.6 器高25 .1 完形	夾雑物含。並。浅黄橙。	口縁部の内・外面に横撫。頸部の外面に 指撫顯著。体部の外面は荒削後復削。内 面に紐作痕あり。	
第70図-1 写29-1	土師器 杯	S K02	口径(13.8) 器高 3.2 欠欠損	夾雑物含。硬。にぶい赤 銅。	口縁部の内・外面に横撫あり。体部の外 面に型肌。荒削あり。内面に撫。	
第70図-1	粘土	S K34		粘土捏不良・未成物3を参照。		
第70図-2	粘土	S K34		粘土捏不良・未成物1を参照。		
第70図-3 写29-3	土師器 高杯	S K34	最大径(7.8) 器 高3.0+ ϵ 杯部 片	夾雑物含。並。橙。	杯部の外面に撫撫あり。杯部に脚部受の 出柄あり。	

第5篇 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 現存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第70図-4 写29-4	土師器 高杯	S K 34	最大径(4.7) 器高 4.5+ ϵ 脚部片	夾雑物入る。並。橙。	脚部上方に杯部接合の割落あり。脚部外面は刷毛目肌。内面に生乾の乾。	
第70図-5 写29-5	土師器 高杯	S K 34	最大径(7.5) 器高 6.9+ ϵ 脚部片	褐色粒入る。並。橙。	脚部外面に刷毛目肌顕著。同内面に継作の橙痕。杯部に脚部受の出柄あり。	
第70図-6 写29-6	土師器 高杯	S K 34	脚部径(17.8) 器 高4.2+ ϵ 脚部片	褐色粒少量入る。並。橙赤。	脚部の内・外面に無。全体に薄作である。脚部径が僅かに内挿する。	
第70図-7 写29-7	土師器 高杯	S K 34	口径(20.3) 器高 7.1+ ϵ 杯部片	褐色粒少量入る。並。橙赤。	杯部外面上方進。下方更磨痕あり。内面 上方更磨。下方は漆ハゼが著しい。	
第70図-8 写29-8	土師器 壺	S K 34	口径(19.9) 器高 4.2+ ϵ 口縁部片	褐色粒入る。並。橙。	口縁部の内・外面横撫あり。	
第70図-9 写29-9	土師器 壺	S K 34	口径(16.5) 器高 4.0+ ϵ 口縁部片	夾雑物少。並。橙。	口縁部の内・外面に横撫あり。頸部の内 面に接合痕あり。	
第70図-10 写29-10	土師器 壺	S K 34	口径(17.5) 器高 4.6+ ϵ 口縁部片	褐色鉱物粒少。橙。橙赤。	口縁部の内・外面に横撫あり。体部の内 面に継作痕あり。	
第70図-11 写29-11	土師器 壺	S K 34	口径(19.2) 器高 4.1+ ϵ 口縁部片	褐色鉱物粒少。硬。橙赤。	口縁部の内・外面に横撫あり。頸部の内 面に接合痕。指爪痕あり。	
第59図-1 写26-1	須恵器 杯	B 2区	口径11.6 器高4. 1 欠損	褐色粘土粒合。並。赤。	体部の内・外面に被熱箇所と轆轤目あり。 底面は平底で右回転糸切あり。	
第59図-2 写26-2	須恵器 杯	B 2区	口径(11.2) 器高 3.6 はば笠形	夾雑鉱物粒少。硬。灰白。	体部の内・外面に轆轤目あり。底面は平 底で右回転の糸切あり。	
第59図-3 写26-3	土師質 脚付埴	B 2区	脚径8.8 器高3.2 + ϵ 底部片	夾雑鉱物粒合。並。にぶ い橙。	付合で底部は内・外面とも横撫。外面 に被熱ハゼあり。	内・外面部分的 横撫。
第59図-4 写26-4	土師器 壺	B 2区	口径(20.6) 器高 9.0+ ϵ 口縁部片	褐色粘土粒合。硬。橙。	口縁部の内・外面は横撫。外面継作痕。 体部外面更磨あり。内面継作痕。	
第59図-5 写26-5	土師器 壺	B 2区	脚径(19.6) 器高 9.2+ ϵ 脚部片	褐色粘土粒多。並。にぶ い赤褐。	脚部の外面に更磨あり。内面に無あり。	
第59図-1 写26-1	須恵器 壺	G 2区	肩部径(16.4) 器 高2.3+ ϵ 口縁片	白色鉱物粒合。並。灰白。	口縁部の内・外面に横撫あり。さらに轆 轤目あり。	
第59図-2 写26-2	須恵器 杯	G 2区	口径(14.3) 器高 4.0 欠損	褐色粘土粒多。硬。にぶ い赤褐。	体部の内・外面に轆轤目あり。底面は平 底で糸切。	
第59図-1 写26-1	土師器 高杯	D 3・J1 区	口径17.8 器高6. 0+ ϵ 杯部片	褐色粘土粒多。並。橙。	口縁部の内・外面に横撫あり。杯部の下 方に更磨あり。	
第59図-2 写26-2	土師器 高杯	D 3・J1 区	脚径(15.3) 器高 12.0+ ϵ 脚部片	褐色粘土粒多。並。橙。	脚部外面刷毛目後指撫。内面継作痕・指 頭痕。瓶部横撫。杯部欠損は田跡。	
第59図-3 写26-3	土師器 壺	D 3・J1 区	口径(15.6) 器高 5.6+ ϵ 口縁部片	褐色粘土粒合。硬。明赤 褐。	口縁部の内・外面に横撫あり。内面更磨 あり。頸部に継作痕あり。	
第59図-1 写26-1	須恵器 壺	C 1区	肩部径(14.6) 器高 2.3+ ϵ 口縁部片	夾雑鉱物粒少。並。にぶ い橙。	口縁部の内・外面に横撫・轆轤目あり。 外面上方に右回転の更磨形あり。	

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第59図-1 写26-1	土師器 杯	K3区	口径(13.4) 器高 (2.5) 口縁部片	夾雑鉱物粒少。並。橙。	口縁の内・外面に横撫あり。体部の外面に磨削り。内面に撫あり。	
第59図-1 写26-1	土師器 杯残蓋	A2区	口径(12.0)内外 器高3.5 片欠損	夾雑鉱物粒少。硬。灰黄。	二次的か燒遺みあり。口縁部の内・外面に横撫・外面底裏削あり。	須恵器状に還元。
第59図-1 写26-1	土師器 壺	K3区	口径16.1 器高5. 2+ 口縁部片	赤褐色土粒含。並。にぶ い橙。	口縁部の内・外面に横撫あり。体部の内面に指頭圧痕、紐作痕。	
第71図-1 写30-1	須恵器 杯	小土壇	口径(14.6) 器高 3.5+ 体部片	夾雑物少。並。灰。	体部の内・外面に横撫目あり。	
第71図-2 写30-2	須恵器 杯・壺	小土壇	最大径(9.8) 器高 1.4+ 底部片	白色鉱物粒少。並。灰。	燒成後に高台割落し、底面を再調整して使用される。	
第71図-3 写30-3	須恵器 杯	小土壇	底径(9.8) 器高 2.2+ 底部片	黑色鉱物粒少。並。灰白。	底部は回転糸切後、周辺を磨整形。轆轤の回転右廻。	
第71図-4 写30-4	須恵器 杯	小土壇	底径(9.2) 器高 1.6+ 底部片	灰色鉱物粒少。並。灰白。	底部は回転糸切後、周辺は磨整形。轆轤の回転右廻。	
第71図-5 写30-5	須恵器 杯	小土壇	口径14.7 器高4. 5 片欠損	黑色鉱物粒少。並。灰白。	体部内・外面に横撫目。底部は回転糸切後、周辺回転磨整形。轆轤回転右。	
第71図-6 写30-6	須恵器 罐	小土壇	最大径(10.8) 器 高3.3+ 胴部片	夾雑物少。硬。灰白。	体部の外面下平に自然釉、ひつつきあり。内面に横撫目あり。	
第71図-7 写30-7	須恵器 壺	小土壇	最大径(14.0) 器 高8.1+ 胴部片	灰色鉱物粒入。硬。灰。	体部の外面上部に二条の沈線あり。内面に横撫目あり。	
第71図-8	鉄網	G3 試験		鉄製遺物20を参照。		

区別

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第72図-1 写30-1	須恵器 横瓶か	A1区	体部片	夾雑鉱物粒含。硬。暗赤 灰。	安定丸底。外面に平行明後磨削。内面同心円の当目後磨あり。全体に自然釉。	
第72図-1 写30-1	須恵器 杯	A3区	底径(7.5) 器高 1.1 底部片	褐色粘土粒含。並。暗赤 灰。	底面は、平底で、轆轤右回転糸切あり。内面に横撫目あり。	
第72図-1	須恵器	A・B2区		須恵器類稀少器種10を参照。		
第72図-1 写31-1	土師器 高杯	B1区	最大径(6.0) 器 高7.0+ 胴部片	夾雑鉱物粒含。並。橙。	杯部外面に接合痕あり。脚部外面は荒れている。内面に指押え痕あり。	
第72図-2 写31-2	土師器 壺	B1区	口径(19.2) 器高 (5.0) 片欠損	夾雑鉱物粒含。並。明赤 釉。	口縁部の内・外面は横撫。体部外面に型肌・荒削。内内面は滑らか。	
第72図-1 写30-1	須恵器 壺	B2区	肩部径(14.6) 器 高1.6 片欠損	白色鉱物粒多。並。灰。	轆轤は右回転。内・外面ともに滑らか。上部に磨削痕あり。接み部は割落。	

第5編 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第72図-2 写30-2	須恵器 杯	B2区	口径11.5 器高4.1 欠損	黒色鉱物粒少。灰。灰白。	体部の内・外面に轆轤目。底面は平底で轆轤右回転糸切。焼直。	
第72図-3 写30-3	土師器 壺	B2区	口径(20.0) 器高19.0+ α 欠損	灰緑鉱物粒含。並。暗赤褐。	口縁部の内・外面に横撫あり。体部外面は磨削。同内面に紐作痕あり。	
第72図-4 写30-4	土師器 壺	B2区	口径(22.0) 器高10.0+ α 口縁片	褐色粘土粒多。並。明赤褐。	口縁部の内・外面に横撫。体部外面に磨削。同内面に紐作痕・荒虫痕あり。	
第72図-5 写30-5	土師器 壺	B2区	口径(19.8) 器高11.6+ α 口縁片	褐色粘土粒含。並。橙。	口縁部の内・外面に横撫あり。体部の外面に磨削あり。同内面に紐作痕あり。	
第72図-1 写31-1	土師器 高杯	B3区	脚部径(14.2) 器高9.2+ α 脚部欠	褐色粘土粒多。並。明赤褐。	外面に杯部と頸部の接合痕。頸部の内・外面は横撫。杯部内面に紐作痕。	
第72図-1 写31-1	土師器 杯	B4区	口径(12.9) 器高(2.9) 口縁部片	灰緑鉱物粒含。並。橙。	口縁部の内・外面は横撫。体部の外面は磨削。同外面に指痕圧痕。同内面滑。	
第73図-1	施釉陶	C1区		施釉陶器(中世)2を参照。		
第73図-2	須恵器	C1区		須恵器類稀少器種5を参照。		
第73図-1 写31-1	須恵器 杯	C2区	口径(12.0) 器高3.8 欠損	黒色粘土粒含。軟。灰白。	口縁部内・外面横撫。体部内・外面に轆轤目。底面平底。轆轤右回転糸切。	
第73図-2 写31-2	須恵器 杯	C2区	底径(6.2) 器高3.7+ α 欠損	褐色粘土粒含。軟。灰白。	体部の内・外面に轆轤目。底面は平底。轆轤右回転糸切。全体に荒れる。	
第73図-3 写31-3	須恵器 碗	C2区	最大径(9.8) 器高2.5+ α 欠損	灰緑鉱物粒含。並。灰。	体部の内・外面に轆轤目。底面は轆轤右回転糸切依付高台。高台部剥落。	
第73図-4 写31-4	須恵器 碗	C2区	底径(5.8) 口縁片・底部片	褐色粘土粒含。軟。灰白。	体部の内・外面に轆轤目あり。底面は付高台。高台部剥落。全体に荒れる。	
第73図-5 写31-5	須恵器 広口壺	C2区	口径(33.0) 器高6.2+ α 口縁部片	白・灰色鉱物粒含。並。灰白。	口縁部の内・外面に横撫。体部の内・外面に叩と同心円の当目痕あり。	
第73図-6 写31-6	土師器 杯	C2区	口径(12.0) 器高(3.5) 口縁部片	褐色粘土粒含。並。橙。	口縁部の内・外面横撫。体部外面磨削。同外面は二次的な被熱ハズレあり。	
第73図-7 写31-7	土師器 壺	C2区	口径(15.0) 器高6.4+ α 口縁部片	白色鉱物粒含。並。明赤褐。	口縁部の内・外面に横撫・紐作痕あり。体部外面は磨削。	
第73図-1 写31-1	土師器 壺	C4区	口径(19.2) 器高8.6+ α 口縁部片	白色鉱物粒含。硬。灰。にぶい黄橙。	口縁部の内・外面に横撫あり。体部の外面に磨削。内面に紐作痕・磨削痕。	
第73図-1 写31-1	須恵器 壺	D1区	胴部径5.9 胴部のみ	白色鉱物粒含。硬。灰。	胴み部上面に傷あり。内外面ともに荒れている。旧時の欠損。	
第73図-2	須恵器	D1区		須恵器類稀少器種9を参照。		
第73図-1	須恵器	D4区		須恵器類稀少器種16を参照。		
第73図-2 写31-2	須恵器 杯	D4区	口径(14.0) 器高3.3 欠損	白色鉱物粒含。並。灰黄。	体部の内・外面に轆轤目あり。体部の下に磨削。底面は回転糸切後。周辺に磨削をほどこす。	

遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・施成・色調と摘要		備考
第73図-3 写31-3	土師器 台付甕	D4区	胴径(8.7) 器高 3.5 胴部片	黒色灰物粒少。硬。橙。	胴部の内・外面に横撫あり。体部の外面に彫削あり。	
第75図-4 写31-4	土師器 高坏	D4区	最大径(8.4) 器 高9.0+ ϵ 胴部片	黒色灰物粒含。並。橙。	胴部の外面に撫。内面に紐作痕あり。全体に磨耗している。	
第74図-1 写32-1	土師器 坏	E1区	口径(14.1) 器高 2.7 欠欠損	褐色粘土粒少。並。黄橙。	口縁部の内・外面に横撫あり。体部の外面に彫削あり。	
第74図-1 写32-1	須恵器 坏	E3区	口径14.8 器高3. 4 完形	褐色粘土粒含。並。にふい赤黄。	体部の内・外面に横撫目あり。底部は右回転糸切後、周辺を彫削。	
第74図-1 写32-1	須恵器 坏	E4区	口径(13.1) 器高 4.2 欠欠損	白色灰物粒含。軟。黄灰。	体部の内・外面に横撫目あり。底部は右回転糸切後、修整形。	
第74図-2 写32-2	土師器 甕	E4区	口径(14.6) 器高 11.5+ ϵ	白色灰物粒含。並。にふい赤黄。	口縁部に横撫。体部外面に彫削。内面に紐作痕あり。	
第74図-1 写32-1	須恵器 埴	F1区	口径(14.0) 器高 5.4 欠欠	白色灰物粒含。並。灰黄。	体部の内・外面に横撫目あり。底部は右回転糸切。付高台。	
第74図-2 写32-2	須恵器 坏	F1区	高台径(5.7) 坏 部欠損	黒色灰物粒少。軟。灰黄。	体部の外面は彫削。底部は糸切で付高台。高台部は修整。	
第74図-3 写32-3	須恵器 埴	F1区	口径(15.9) 器高 7.1 欠欠損	白色灰物粒少。硬。にふい黄橙。	体部の内・外面に横撫目あり。底部は回転修整形。付高台。	
第74図-4 写32-4	須恵器 瓶	F1区	底部(15.0) 器高 8.4+ ϵ	黒色粘土粒含。硬。灰。	体部の内・外面に紐作痕あり。体部の外面は彫削整形。底面は平底。	
第74図-5 写32-5	土師器 甕	F1区	口径14.5 器高30 .7 欠欠損	白色粘土粒含。並。橙。	口縁部の内・外面は横撫。体部外面に彫削・被熱のハゼあり。内面紐作痕。	黒色灰文。
第74図-1 写32-1	須恵器 坏	F3区	底径(7.7) 底部 片	白色灰物粒含。軟。灰。	底部は平底。外面は糸切後、回転修整形。内面に撫あり。	
第74図-2 写32-2	須恵器 坏	F3区	底径(6.0) 底部 片	白色灰物粒含。硬。灰。	底部は平底で右回転の修整形。内面に撫あり。	
第74図-3 写32-3	須恵器 坏	F3区	底径(7.3) 底部 片	白色灰物粒含。並。灰。	底部は平底で右回転の糸切後、周辺を回転彫削。内面に撫あり。	
第74図-4 写32-4	須恵器 坏	F3区	底部片	夾雑灰物含。軟。灰白。	底面が平底で糸切後回転の修整整形。横撫は右回転。	
第74図-5 写32-5	須恵器 瓶	F3区	最大径17.2 器高 5.2+ ϵ 体部片	夾雑灰物含。軟。灰白。	体部の外面に自然胎あり。同内面に横撫目あり。	
第74図-6 写32-6	須恵器 瓶	F3区	最大径12.8 器高 1.7+ ϵ 底部片	白色灰物多。並。灰。	体部の内面に横撫目。同外面下方は手持の彫削。底面は平底。	
第75図-7 写32-7	土師器 高坏	F3区	最大径16.4 器高 5.3+ ϵ 坏部片	褐色粘土粒多。並。明赤黄。	体部の内・外面に横撫あり。胴部は彫削される。胴内面に出削あり。	
第75図-1 写33-1	土師器 坏	F4区	口径(13.4) 器高 (2.9) 口縁部片	夾雑灰物含。並。橙。	口縁部の内・外面に横撫。体部の外面は彫削・型肌あり。同内面は滑らか。	

第5篇 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第75図-2 写33-2	土師器 杯	F4区	口径(13.9) 器高 (3.2) 口縁部片	夾雑物少。並。明褐色。	口縁部の内・外面に横溝。体部の外面に 彫削あり。内内面は撫。	
第75図-1 写33-1	土師器 杯	G3区	口径(13.0) 器高 2.8+ ϕ 口縁部片	褐色粘土粒多。並。赤褐色。	口縁部の内・外面に横溝。体部の外面に 彫削。同外面に型肌。同内面に撫。	
第75図-1 写33-1	須恵器 埴	H2区	最大径11.5 器高 3.7+ ϕ 片欠損	黒色粘土粒少。並。灰白。	体部の内・外面に横溝目。貼付高台内 面に工具による撫痕あり。	
第75図-2 写33-2	土師器 壺	H2区	口径(29.7) 器高 13.2+ ϕ 口縁片	褐色粘土粒少。並。並。	口縁部の内・外面横溝。内面に紐作痕。 外面に紐作痕。体部外面は彫削。	
第75図-3 写33-3	土師器 壺	H2区	口径(19.4) 器高 10.2+ ϕ 口縁片	褐色粘土粒少。並。並。に ぶい黄褐色。	口縁部の内・外面横溝。体部内面紐作痕・ 彫削痕。外面紐作痕・彫削痕。	
第75図-1 写33-1	土師器 壺	I2区	口径(16.7) 器高 19.8+ ϕ 片欠損	褐色粘土粒多。並。赤褐色。	口縁部の内・外面に横溝。内・外面に紐 作痕と彫削。内面刷毛目。	
第75図-2 写33-2	土師器 壺	I2区	最大径20.0 胴部 下平から底部片	褐色粘土粒少。並。並。に ぶい褐色。	外面に刷毛目。内面は寛れ所々に刷毛目 あり。底面は平底。	
第75図-1 写33-1	須恵器 瓶	J1区	体部片	白色鉱物粒少。硬。灰。	内面に横溝目あり。外面に2本の沈線あり。	
第75図-1 写33-1	土師質 土甕	J2区	脚部片	褐色粘土粒少。硬。明褐色。	釜形と考られる器種の脚部片である。全 体に裏面が施され、被焼ハゼはトーン部 である。当地域では致さない器種。	在地製か。
第75図-1 写33-1	土師器 高杯	J4区	直径3.3 器高9.3 + ϕ 脚部片	褐色粘土粒少。並。並。	外面に彫削痕あり。内面に彫削痕あり。 杯部に脚部受の出削あり。	
第75図-1 1-3	土師質	K1区		壁体片1-3を参照。		
第75図-4 写33-4	須恵器 杯	K1区	口径(13.0) 器高 2.8+ ϕ 口縁部片	白色粘土粒多。硬。灰。	口縁部の内・外面に横溝目あり。	
第75図-1	須恵器	L2区		丸研磨の須恵器類9を参照。		
第75図-2	須恵器	L2区		丸研磨の須恵器類10を参照。		

特殊遺物 須恵器類稀少器種

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第76図-1 写28-1	須恵器 壺	S K 5・ 6・7-1	口径(14.5) 器高 4.6 片欠損	白色鉱物粒少。並。灰黄。	口縁部の内・外面に横溝。天井部内・外 面なめらか。肩部際に変帯あり。	
第76図-2 写34-2	須恵器 盤	表塚	高台径(15.1) 器 高2.1+ ϕ 底部片	白色鉱物粒少。硬。灰白。	底部が高台より張り出す独特な形。底部 外面は回転彫削り後高台貼付。	
第76図-3 写18-5	須恵器 埴	S J 09 B	高台径(14.3) 器 高1.5+ ϕ 底部片	白色鉱物粒並。硬。灰黄。	底部が高台より張り出す独特な形。底部 の外面は回転彫削り後高台貼付。	

須臾器類稀少器種

国番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考	
第76図-4 写15-3	須臾器 長頸壺	S J 05- 3	頸部径(5.2) 器 高5.6+ ϕ 頸部片	白色臍物较多。硬。明青 灰。	頸部の内・外面に轆轤目あり。内面に自 然釉あり。	
第76図-5 写31-2	須臾器 平瓶	C1区-2	天井径(15.8) 器 高2.5+ ϕ 天井部	灰色臍物较多。硬。灰。	天井片で内面粘土板接合面あり、轆轤目 あり、外面にわずかな自然釉あり。	自然釉。
第76図-6 写17-7	灰釉陶 瓶	S J 08B -7	高台径(9.3) 器 高2.6+ ϕ 或部片	白色臍物较多。硬。灰白。	体部の外面下方は荒削。内面に轆轤目あり。 付高台、灰釉。	灰釉。
第76図-7	土師器	S J 18	脚部片	褐色粘土粒。並。赤褐色。	器種不詳の脚部片。外面施。内面光。	
第76図-8 写24-4	須臾器 短頸壺	S J 18	口径10.0 器高10 .6 寛形	白色臍物较少。並。灰白。	口縁外面二条沈淵。体部内・外面轆轤目 あり、体部下荒削。底部丸成。	太田・金山窯群 製か。
第76図-9 写31-2	須臾器 平瓶か	D1区-2	天井部(14.0) 器 高1.6+ ϕ 天井片	白色臍物较少。硬。灰黄 灰。	天井部片で内面に粘土板の接合面あり。 轆轤目あり、外面に自然釉あり。	自然釉。
第76図-10 写30-1	須臾器 提瓶	A・B2 区-1	胴部径(16.5) 器 高8.8+ ϕ 肩部片	白色臍物较多。硬。にぶ い陶。	粘土粒による成形後、外部上面に回転荒 削。外面の二条の沈淵は地味色。	
第76図-11 写27-1	須臾器 小形壺	S E 02- 1	口径(16.0) 器高 2.7+ ϕ 口縁部片	白色臍物较少。並。灰黄 陶。	口縁部片で内・外面全体に滑らかな轆轤目 はシャープ。頸はゆるやか。	
第76図-12 写20-2	須臾器 短頸壺	S J 11C -2	口径(12.0) 器高 3.2+ ϕ 口縁部片	灰色臍物较多。硬。灰白。	口縁部片の内・外面全体は滑らかな、轆轤 目はシャープ。頸はゆるやかである。	
第76図-13 写16-2	須臾器 短頸壺	S J 08A %付	最大径(17.6) 器 高9.4+ ϕ 頸部片	灰色臍物较少。硬。暗灰 黄。	胴部の内・外面に轆轤目あり。胴下位に 平行印当目あり。	同一個体で他S E 02-2。
第76図-14 写27-2	須臾器 壺	S E 02- 3	口径(28.8) 器高 4.3+ ϕ 口縁部片	白色臍物较多。硬。灰。	口縁部片の内・外面全体は滑らかな、轆轤 目はシャープである。	
第76図-15 写28-4	須臾器 大壺	S D 01- 04-4	口縁部片	白色臍物较多。硬。灰。	口縁下に隆帯と8+ ϕ 状を単位とする波状文 を二段以上施す。	内・外面自然釉。
第76図-16 写31-1	須臾器 壺	D4区-1	頸か。頸部立上片	白色臍物较多。硬。灰。	頸部片外面9+ ϕ 状を単位とする波状文 を一段以上施し微隆帯あり。	
第76図-17	須臾器 壺	S D 01- 2	頸部立上片	白色臍物多。硬。陶灰。	外面8+ ϕ 状の波状文。内面継作痕。	内・外面自然釉。
第76図-18 写21-7	須臾器 大壺	S J 12	頸部径(49.6) 底部から肩部	白色臍物较多。硬。灰黄 灰。	頸部立上2+ ϕ 状単位の波状文。平行印。 内面継作痕。素文の当目を無消す。	

箕原産の須臾器類

国番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考	
第77図-1 写27-4	須臾器 杯	S E 01- 4	口径(16.4) 器高 6.1 1/2欠損	白色臍物较多。硬。赤褐色。 酸化焼成。	体部の内・外面に轆轤目・彫磨あり。 内面は黒色処理。底面に荒削。	

第5篇 遺物観察

国番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量 目(cm) 口径・底径・器高 残 存 状 態	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調 と 摘 要		備 考
第77図-2 写25-3	須恵器 杯	S J 20- 3	口径(17.0) 器高 5.5 2/3欠損	褐色粘土粒合。並。にぶ い橙。酸化焼成。	口縁部の外面に沈線。体部内・外面磨研 磨。底面回転磨削。底面研磨。	内面黒色処理。 「大」刻書銘。
第77図-3 写28-3	須恵器 杯	S K	口径(17.9) 口縁 部片	褐色粘土粒合。並。橙。酸 化焼成。	口縁部の内・外面回転磨後磨研磨あり。 体部の内・外面回転磨後磨研磨あり。	内面黒色処理。
第77図-4 写28-2	須恵器 杯	S K	底径(11.0) 底部 片	褐色粘土粒合。並。にぶ い橙。酸化焼成。	体部の内・外面回転磨後磨研磨あり。底 面は磨削。内面・外面に磨研磨あり。	内面黒色処理。 外面黒色珮文。
第77図-5 写25-5	須恵器 杯	S J 22- 5	口径(16.0) 口縁 部片	褐色粘土粒合。並。にぶ い橙。酸化焼成。	口縁部の外面に轆轤目あり。内面に回 転磨後磨研磨あり。	外面黒色珮文。
第77図-6 写19-7	須恵器 杯	S J 11 B -7	口径(15.0) 口縁 部片・底部片	褐色粘土粒合。並。にぶ い橙。酸化焼成。	口縁部外面回転の撫・沈線あり。内面は 磨研磨。底面平底。底部磨削整形あり。	内面黒色処理。 外面黒色珮文。
第77図-7 写19-6	須恵器 杯	S J 11 B -6	最大径(14.2) 体 部片	褐色粘土粒合。並。黒褐。 酸化焼成。	体部の外面に回転の撫あり。同部の内面 に回転磨後磨研磨あり。	内面黒色処理。
第77図-8 写15-1	須恵器 杯	S J 04- 1	最大径(14.8) 体 部片	褐色粘土粒合。並。にぶ い橙。酸化焼成。	体部外面轆轤目。体部内面回転磨後磨 研磨。底部平底。底部磨削整形あり。	内面黒色処理。
第77図-9 写33-1	須恵器 杯	L2区-1	底径8.0 底部片	褐色粘土粒合。並。橙。酸 化焼成。	底部の外面は轆轤右回転と磨削整形。内面 に回転磨後磨研磨あり。	内面黒色処理。
第78図-10 写33-2	須恵器 杯	L-2区 -2	底径(7.0) 底部 片	白色磁物粒合。並。にぶ い橙。酸化焼成。	底部の外面に磨削整形あり。内面は回転の 撫後磨研磨あり。	内面黒色処理。
第78図-11 写22-1	須恵器 杯	S J 15- 1	底径(10.3) 底部 片	褐色粘土粒合。並。橙。酸 化焼成。	底面は平底。外面は回転磨削整形と内面 に轆轤目あり。	胎土・手法はこの 類。
第78図-12 写25-6	須恵器 杯	S J 22- 6	底径(7.8) 底部 片	褐色粘土粒合。並。にぶ い赤褐。酸化焼成。	外面轆轤目。内面回転磨後磨研磨。底面 平底。轆轤右回転の糸切後回転の磨削整形。	撫あり。胎土・手 法はこの類。
第78図-13 写20-6	須恵器 杯	S J 12- 6	底径(9.5) 底部 片	褐色粘土粒合。並。橙。酸 化焼成。	体部外面は回転の磨削。その上方は轆轤 目。内面磨研磨。底面回転磨削整形。	胎土・手法はこの 類。即「上」。
第78図-14 写19-4	須恵器 杯	S J 11 B ・C-4	底径(8.2) 底部 片	褐色粘土粒合。並。橙。酸 化焼成。	体部の外面は磨削。同部内面に珮文を意 識した施様文様。底面は磨削整形。	胎土・手法はこの 類。
第78図-15 写20-4	須恵器 杯	S J 11 C -4	口縁部-体部片	褐色粘土粒合。並。橙。 酸化焼成。	内・外面轆轤目。体部下方磨削。内・外 面に石ハゼあり。土師器とする小須恵器 とするか迷う土器で酸化の焼成。	胎土はこの類。
第78図-16 写34-16	須恵器 杯	表探	口径(14.1) 器高 4.5 2/3欠損	褐色粘土粒合。並。にぶ い橙。酸化焼成。	体部の内・外面に轆轤目。内面は磨研磨。 底面は平底で轆轤右回転糸切。	内面黒色処理。
第78図-17 写34-17	須恵器 碗	表探	口径(14.5) 器高 7.0 2/3欠損	褐色粘土粒合。並。にぶ い褐。酸化焼成。	内・外面に轆轤目。内面は磨研磨。底面 轆轤右回転糸切後付合。	内面黒色処理。

墨書土器

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第80図-1 写17-2	須恵器 壺	S J 08 B -2No付	罐部径18.2 器高 4.2 ほぼ完形	褐色粘土粒多。並。橙。	体部の内・外面に轆轤目。同部外面上半は回転遺跡。体部外面に墨書あり。	「万」の字の墨書跡あり。
第80図-2 写17-5	須恵器 杯	S J 08 B -5No付	口径13.8 器高3. 7 はほぼ完形	褐色粘土粒多。並。濁。	体部の内・外面に轆轤目。底面は平底回転差削整形。同部内・外面に墨書あり。	「玉」の字の墨書跡あり。
第80図-3 写34-3	須恵器 杯	D3区	口縁部片	夾雑灰物粒含。並。灰黄。	口縁部の内・外面に轆轤目あり。外面に墨書あり。全体に充れている。	小片のため判読できず。
第80図-4 写34-4	須恵器 杯	C1区	口縁部片	褐色粘土粒含。並。灰。	体部の内・外面に轆轤目あり。同部外面に墨書あり。内面は覚れる。	小片のため判読できず。
第80図-5 写27-3	須恵器 杯	S E 01- 3	口縁部片	褐色粘土粒少。並。橙。	口縁部の内・外面に轆轤目あり。外面に墨書あり。	小片のため判読できず。内面無。
第80図-6 写14-1	須恵器 杯	S J 01- 1	口縁部片	褐色粘土粒少。並。橙。	口縁部の内・外面に轆轤目あり。体部内面に墨書あり。	「直」の字の墨書跡あり。
第80図-7 写14-3	須恵器 碗	S J 01- 3	口径13.0 器高2. 8 やや完形	褐色粘土粒少。並。橙。	体部の内・外面に轆轤目。内面は滑らか体部内面墨書。底部糸切右回転付高台。	「直」の字の墨書跡。黒直文。
第80図-8 写14-2	須恵器 碗	S J 01- 2No付	口径(14.4) 器高 6.0 1/3欠損	白色粘土粒少。並。灰白。	体部の内・外面に轆轤目。内面に墨書。底面は糸切右回転付高台。底面焼割。	「直」の字の墨書跡。黒直文。

施書土器

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第81図-1	須恵器	S J 12- 6		黒研磨の須恵器類No.17を参照。		
第81図-2 写25-2	須恵器 杯	S J 20- 2No付	口径14.0 器高3. 6 やや完形	灰色粘土粒多。並。灰白。	体部の内・外面に轆轤目。底面平底で回転の差削整形。底面に施記号「X」。	
第81図-3	須恵器	S J 20- 3		黒研磨の須恵器No.2を参照。		

埴輪類

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第82図-1 写28-3	埴輪 円筒	S D 01- 3	破片	褐色粘土粒少。並。橙。	内面に指撫あり。外面に差削あり。外面の刷毛目糸痕は不明瞭。	
第82図-2 写28-4	埴輪 円筒	S D 01- 4	基部	小礫含。並。橙。	内面は指撫。外面に刷毛状工具による刷毛目あり。刷毛の刃みは細かい。1箇所に通しあり。平円か円不明。	

第5篇 遺物観察

壺体

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状況	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第83図-1 写33-1	土師質 壺体	K1区-1	長軸2.9	灰雑質物無。軟。橙。	高があり軽い。素地はスサと気泡を多く混えるので伊体・壺の壺体か。	
第83図-2 写33-2	土師質 壺体	K1区-2	長軸2.7	灰雑質物無。軟。橙。	高があり軽い。素地はスサと気泡を多く混えるので伊体・壺の壺体か。	
第83図-3 写33-3	土師質 壺体	K1区-3	長軸2.2	灰雑質物無。軟。橙。	高があり軽い。素地はスサと気泡を多く混えるので伊体・壺の壺体か。	

粘土捏不良・未成物

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状況	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第84図-1 写29-2	土師質 粘土捏	S K34- 2	長軸3.4	灰雑質物少。硬。橙。	高が無く重く素地に陶土を思わせる。本個体をよく観察すると、底部と口縁部跡が見られ、小形根製土師器を製作し、形をある程度成した時点で押し潰したと考えられ、潰れた中に指の圧痕が残される。本例は当集落内か付近で小形根製土師器を製作した可能性を示唆する点で重要な資料である。	
第84図-2 写29-1	土師質 粘土捏	S K34- 1	長軸4.5	灰雑質物少。硬。橙。	高が無く重い。土師器素材の粘土塊を捏ねたように見える。	
第84図-3 写35-3	土師質 粘土捏	不詳	長軸5.3	黒色灰物粒含。硬。にぶ い黄橙。	高が無く重い。土師器素材の粘土塊を捏ねたように見える。全体は粘土小塊を集合したように小塊の接合面が各所に見える。	

灰釉陶器

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状況	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第85図-1 写35-1	灰釉陶 碗	B区小土 塚	口縁部片	黒色灰物粒少。硬。灰白。	体部内・外面に輪轆目痕あり。内・外面とも施釉されている。	
第85図-2 写35-2	灰釉陶 碗	B1区	口縁部片	白色灰物粒少。硬。灰白。	体部内・外面に輪轆目痕あり。内・外面とも施釉されている。	
第85図-3 写35-3	灰釉陶 碗	C1区	体部片	白色灰物粒少。硬。灰白。	体部外面に輪轆目痕あり。内・外面に施釉されている。	
第85図-4 写35-4	灰釉陶 瓶	D4区	底径11.7 体部下 部～高台部片	褐色粘土粒含む。硬。灰 白。	体部外面に黒煎。底部付高台。生地は、灰釉陶器である。	

砥石はか磨耗石類

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第86図-1 写35-1	石製品 砥石	表採	長4.05 厚1.7 重40.5g	小形の下砥で、側部・小口に整形の痕跡と、成形の削跡あり。使用は表・裏面で、若干刃痕あり。	流紋岩。古代。砥沢砥か。
第86図-2 写35-2	石製品 砥石	F3区	長4.80 厚3.4 重71.61g	円筒小口は成形時の削痕があり、両側部、前小口は旧時の割れ口。き目は細く、虎状の砥あり。削痕は近世以降か。	流紋岩。砥沢砥か。
第86図-3 写35-3	石製品 砥石	D2区	長5.35 厚0.65 重18.15g	使用は図下方へ所で、そのほかは自然剥離面、図平面下方左側に、分割の溝跡あり。粗研磨用砥石で、やや軟らか。	
第86図-4 写35-4	石製品 砥石	表採	長8.1 厚1.4 重83.96g	自然石砥石の剥落利用砥で表面は剥落面、表面は自然面、研磨面内の凹面にも研磨がおよぶため、金属外の砥主体も考えられる。	
第86図-5 写35-5	石製品 砥石	L2区	長9.06 厚3.3 重187.59g	図の左側部、小口面を旧時欠損するほか、表・裏は使用面。右側部・裏小口に成形の削痕あり。削痕は近世以降か。	流紋岩。砥沢砥か。
第86図-6 写17-10	石製品 砥石	S J 8 B -10	長9.25 厚4.9 重351.0g	図の表面と裏面の一部に研磨面あり。他は風化、旧時欠損する。き目は砂質のため荒く、極めて軟質。	砂岩。
第86図-7 写35-7	二次利 用石	C1区	長11.9 厚3.2 重377.7g	図の表・裏面の中央付近に研磨面あり。硬質石材のため金属には不向。小穴内にも研磨がおよぶため軟質の砥主体か。	自然石。
第86図-8 写35-8	二次利 用石	F1区	長12.25 厚8.95 重1281.2g	図の表・裏と部分的に研磨面あり。小口側の両部に敲痕あり。硬質石材のため金属は不向。軟質の砥主体か。	自然石。
第86図-9 写35-9	二次利 用石	B2区	長4.3 厚1.7 重40.0g	図の表・裏と右側部のみ研磨面があり、硬質の石材のため金属には不向。小穴内にも研磨がおよぶため軟質の砥主体か。	自然石。
第86図-10 写35-10	二次利 用石	F1区	長7.7 厚3.9 重170.47g	表・裏に凹み箇所に入為削所あり。左側部は旧時欠損。凹み底は安山岩。その側部は主につき込み状。	安山岩。
第86図-11 写19-2	二次利 用石	S J 11 B -12	長25.35 厚7.45 重3630g	段差のある箇所を除き、全体的に使用面がおよぶ。硬質石材のため、金属には不向。小穴内にも磨耗があり、軟質の砥主体であったと考えられる。	自然石。

瓦類

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第87図-1 写35-1	古瓦 男瓦	B1区	長7.5+* 厚1.9	表面に縦線条痕。側部面取回数2。胎土白色灰物粒含む。焼成色、灰色。縦線条痕は筒二分割による製作か。	本瓦身男瓦。7世紀後半。
第88図-1 写35-1	棧瓦	A1区	長6.6+* 厚1.2	図左平面の表面に割押成形時と見られる寄木状の圧痕あり。裏面側部にややめくれあり。器面荒い。白色灰物粒含む。軟。灰色。	棧瓦か。
第88図-2 写35-2	棧瓦	J2区	長3.6+* 厚1.5	図横断面の曲率は低く、棧瓦の女瓦側所か。器面は型肌状に見える。白色灰物粒含む。軟。灰色。	棧瓦か。
第88図-3 写35-3	棧瓦	J2区	長8.4+* 厚1.2	図横断面の曲率は高く、棧瓦の男瓦側所か。器面は型肌状に見える。白色灰物粒含む。軟。灰色。	棧瓦か。

第5篇 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第88図-4 写35-4	棧瓦	表採	長7.2+ ϕ 厚1.5	図横断面の曲率は高く、棧瓦の男瓦側所か。器面は型肌状に充れる。白色灰物粒含む。軟。灰色。	棧瓦か。
第88図-5 写35-5	棧瓦	C3区	長7.6+ ϕ 厚1.3	図横断面の曲率はやや低く、棧瓦の女瓦側所か。器面は型肌状に充れる。白色灰物粒含む。軟。灰色。	棧瓦か。
第88図-6 写35-6	棧瓦	K1区	長7.4+ ϕ 厚1.3	図横断面の曲率は高く、棧瓦の男瓦側所か。器面は型肌状に充れる。左平面に奇木状狂痕。白色灰物粒含む。軟。灰色。	棧瓦か。
第88図-7 写35-7	棧瓦	C3区	長2.9+ ϕ 厚1.6	図横断面の曲率は無く、棧瓦の平の部か。器面はそう充れていない。白色灰物粒含む。軟。灰色。	棧瓦か。

焼締中世陶器

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考	
第89図-1 写35-1	焼締陶 甕	F3区	口縁部片	白色灰物粒入る。硬。灰白。	口縁部内・外面に自然釉かかる。内面に紐作痕・横撫痕がある。口縁部は大きく外反し特徴的である。	常滑焼。12世紀。
第89図-2 写35-2	焼締陶 甕	A1区	胴部片	白色灰物粒入る。硬。	胴部外面に自然釉かかる。	常滑焼。
第89図-3 写35-3	焼締陶 甕	K1区	体部片	大粒灰物粒入る。硬。にぶい釉。	体部の外面に自然釉かかる。内面に刷毛目痕あり。	美濃焼。
第89図-4 写35-4	焼締陶 甕	J2区	体部片	白色灰物粒入る。硬。にぶい釉。	表面に刷毛目痕あり。内・外に自然釉かかる。	常滑焼。
第89図-5 写35-5	焼締陶 甕	C2区	体部片	褐色粒・白色灰物粒入る。硬。赤褐。	内・外面に自然釉かかる。	常滑焼。
第89図-6 写35-6	焼締陶 甕	D4区	体部片	白色灰物粒入る。硬。にぶい釉。	表面に刷毛目痕あり。内・外面に自然釉かかる。	常滑焼。
第89図-7 写35-7	焼締陶 甕	A2区	体部下部から底部	白色灰物粒入る。硬。にぶい赤釉。	表面撫撫。内・外面に自然釉かかる。底部に砂付着。	常滑焼。

灰釉陶器

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考	
第90図-1 写36-1	施釉陶 壺	B3区	最大径(7.9) 器高1.0+ ϕ 底部片	夾雑物なし。硬。浅黄。	内・外面に灰釉かかる。底部は開出高台で低い。	美濃焼。
第90図-2 写36-2	施釉陶 梅瓶	C1区	最大径(15.0) 器高4.5+ ϕ 体部片	夾雑物なし。硬。浅黄。	外面に灰釉かかる。紐作後内面輪轆目あり。胎境は脱足状に発色するが、深い青緑化には至っていない。	瀬戸・美濃焼。

中世軟質陶器

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第91図-1 写36-1	軟陶 不詳	B2区	体部片	黒色鉱物粒含。軟。明灰 色。	部位不詳で、表面側にボタン状の胎付文 あり。器面に塵かかす。	近世か。
第91図-2 写36-2	軟陶 火鉢か	J2区	体部片	白色鉱物粒微。軟。黒灰 色。	内面に轆轤目が残るが割れ口に経作痕あ り。内・外面に塵かかす。	近世か。
第91図-3 写36-3	軟陶 内耳鍋	J4区	底部片	褐色粘土粒含。軟。暗灰 色。	体部から底部にかけての破片で立上形状 は15世紀代の内耳鍋である。	15世紀。

硯

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第92図-1 写36-1	石製品 硯	B3区	胴部片	胴部片で、海側傾斜部と隆平部と、奥小口・左側部とが、わずかに 旧態をとどめる。表面平部は割落顯著。		粘板岩

石板

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第93図-1 写36-1	石製品 石板	C3区	胴部片	胴部片で異線は表・裏ともに認められない。側部には、面ならしの 工具痕あり。表・裏面平滑。		粘板岩。
第93図-2 写36-2	石製品 石板	表採	小片	異線は表・裏ともに認められない。表・裏面は平滑である。		粘板岩。

近世陶・磁器

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(m) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第94図-1 写36-1	陶器 灯火皿	C1区	口縁部片 口径 (9.4)	陶質。鉄輪。並。	口縁部の内・外面施釉。油受け以下欠損 し、施釉状態不明。	18・19世紀。
第94図-2 写36-2	陶器 皿	A2区	底部片 高台径 (5.6)	陶質。灰輪。並。	体部下半の内外面施釉。高台部は削出し、 外面に轆轤目あり。	瀬戸・美濃焼。17 世紀。
第94図-3 写36-3	陶器 碗	D2区	体部片	陶質。鉄輪。並。	外面の一部に露胎あり。内・外面に施釉。	
第94図-4 写36-4	陶器 碗	D4区	体部片	陶質。透明輪。硬質。	内・外面にやや灰色気味の透明釉が施釉 される。顔料入り。	瀬戸・美濃焼。18 世紀か。

第5編 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量 目(cm) 口径・底径・器高 残存状	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第94図-5 写36-5	陶器 小碗	C3区	底部片 高台径(2.9)	陶質。透明釉。並。	外面の一部は垂胎となり、他は透明釉。 高台は付高台形出か。	瀬戸・美濃焼。18 世紀。
第94図-6 写36-6	陶器 碗	J2区	底部片 高台部径 (1.5)	陶質。灰釉。並。	内面のみに施釉。他は露胎となる。高台は 貼付後、削出整形。	18・19世紀。
第94図-7 写36-7	陶器 片口か	D2区	底部片 高台部径 (11.5)	陶質。灰釉。並。	高台の端部を除き、内・外面に施釉。釉 はやや黄ばむ。	18・19世紀。
第94図-8 写36-8	陶器 土瓶	J4区	体部片	陶質。鉄・灰釉。並。	内面に鉄釉。外面に鉄釉と透明釉。器内 は極めて薄い。	益子焼か。 19・20世紀。
第94図-9 写36-9	陶器 搦鉢	K1区	口縁部片	陶質。鉄釉。焼締。並。	外面に鉄釉と思われる釉が薄く施され、 内面に4+5本の跡目あり。	信楽焼。 18世紀頃。
第94図-10 写36-10	陶器 搦鉢	C1区	口縁部片	陶質。鉄釉。焼締。並。	口縁部周辺に鉄釉と思われる釉が薄く施 され、内面に7+8本の跡目あり。	信楽焼。 18世紀頃。
第94図-11 写36-11	磁器 碗か	表採	体部片	磁器質。染付。並。	そば窪口か碗の小片で、外面に菊花の染 付を施し、内・外面に透明釉。	伊万里系。18・19 世紀。

近世軟質陶器

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量 目(cm) 口径・底径・器高 残存状	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第95図-1 写36-1	軟陶 内耳か	J2区	底部片	白色磁物粒・褐色粘土粒 含む。淡褐。並。	底部片で、外面に型肌状の凹凸あり。外 面僅かかる。	在地製。
第95図-2 写36-2	軟陶 内耳	J4区	底部片	白色磁物粒・褐色粘土粒 含む。淡褐。並。	底部片で、外面に型肌状の凹凸、内耳に 耳痕あり。外面僅かかる。	在地製。
第95図-3 写36-3	軟陶 盤形	J2区	底部片	白色磁物粒・褐色粘土粒 含む。淡褐。並。	底部片で、器内が厚いため火跡片か。外 面に型肌状凹凸、僅かかる。	在地製。
第95図-4 写36-4	軟陶 盤形か	J4区	底部片	白色磁物粒・褐色粘土粒 含む。淡褐。並。	器内が厚いので火跡などの底か。外面に 型肌状の凹凸あり。内・外面僅。	在地製。
第95図-5 写36-5	軟陶 内耳か	D1区	口縁部片	白色磁物粒・褐色粘土粒 含む。淡褐。並。	口作は内耳盤形の形状を思わせ、内・外 面僅かよぶ。	在地製。
第95図-6 写36-6	軟陶 盤形か	J2区	体部片	白色磁物粒・褐色粘土粒 含む。淡灰。並。	器内が厚いので火跡などの底か。外面に 盤形時の凹凸あり。僅かかる。	在地製。
第95図-7 写36-7	軟陶 盤形か	C2区	脚部片	白色磁物粒・褐色粘土粒 含む。暗灰。並。	兼葉火鉢の脚部に似ているが、少し小形。 内・外面僅かかる。	在地製。
第95図-8 写36-8	軟陶 火鉢	D4区	体部片	白色磁物粒・褐色粘土粒 含む。黒灰。並。	格子・網格子文が外面にあり、内・外と ともに強い。内面縦線形あり。	在地製。
第95図-9 写36-9	軟陶 不詳	C2区	体部片	白色磁物粒・褐色粘土粒 含む。淡褐。並。	器種不詳。外面に窪跡目が3条1単位で 施され、内面縦線目シャープ。発掘調査 で時おり見るので普及ありか。	在地製。

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第95図-10 写36-10	陶輪 不詳	K1区	体部片	白色粘土粒・褐色粘土粒 含む。淡褐色。産。	器種不詳。外面に掻削目が3条1単位で 交叉して施され、内面輪轆目あり。	在地製。
第95図-11 写36-11	陶輪 不詳	K1区	部分片	白色粘土粒・褐色粘土粒 含む。淡黄褐色。産。	器種不詳であるが、甕の胴か。回転糸痕 はシャープである。	在地製。

鉄製遺物と鉄滓物

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第96図-1 写37-1	鉄製 契状	S J 11 C 埋土	長3.9 厚0.83	錆化顯著。図下方は、刃先のように鋭るが、刃であるかは不明。上方 は契なら、めくれがあるはずであるが見えない。		
第96図-2 写37-2	鉄製 不詳	S J 11 C	長4.4+ # 厚0. 51	錆化顯著。図左側は調査時欠損。右は旧時。各側部と平との角だ ちはやや丸い。製品種不詳。		
第96-3 写37-3	鉄製	B 3 区	長5.2 厚0.28	錆化顯著。図右側は調査時欠損。各側部と平との角だちは丸い。製 品種不明。		
第96図-4 写37-4	鉄製 不詳	B 1 区	長3.1+ # 厚0.7	欠損は調査時。図左端に小穴らしき所作が錆化中に窺える。各側部 と平との角はやや丸みおびる。		
第96図-5 写37-5	鉄製 錐	S J 09	長径2.1 幅0.7	刀子の錐状を呈する金物で、やや歪む。側部と縁との角は丸みおび る。錆化顯著。		
第96図-6 写37-6	鉄製 鏃	A 1 区溝	長3.42+ #	尖根・細根鏃で、鏃先にわずかながら錆筋の研出し面あり。図下方 は調査時欠損。錆割少なく、良鉄の使用を思わせる。市内平野部で の住居跡出土の古代鏃の類例は少なく重要。		
第96図-7 写37-7	鉄製 不詳	J 2 区	長3.0+ #	鏃状の平面形を呈するが、先は尖らずやや丸みおびるため鏃では ないであろう。茎は断面方形を呈す。		
第96図-8 写37-8	鉄製 不詳	C 区	長7.23+ #	茎であろう。末端は尖らず丸みおびる。図上方の断面形は丸い。錆 化顯著で、欠損は調査時。		
第96図-9 写37-9	鉄製 鎌か	G 4 区	長7.05+ # 厚0. 25	鎌にしては、平面形状がやや異なる。刃部は平面上方にあり、両刃 平造気味である。錆化顯著で鉄味不貞。左・右調査時欠損。		
第96図-10 写37-10	鉄製 金物	J 4 区	長4.45	L形の金物で、横断面は方形で、その角立ちはやや歪む。錆化顯著。 欠損なし。		
第96図-11 写37-11	鉄製 金物	A 2 区	長4.73	棒状の金物で、両端部は旧型。錆化顯著。上方の頭は、図右側にや やめくれる。		
第96図-12 写37-12	鉄製 棒状	K 区	長4.3+ # 径0. 35	錆化顯著で、図上方は調査時欠損。横断面形は横丸方形を呈する。 茎尻のように見える。		
第96図-13 写37-13	鉄製 釘か	L 1 区	長4.5	図上方の頭にめくれあり。横断面形は方形を呈するが、やや歪みあ り。錆化顯著。		
第96図-14 写37-14	鉄製 釘	J 4 区	長3.5	小形釘で頭にわずかなめくれか、頭成しあり。横断面形は横丸方形 を呈し、錆化顯著。		

第5編 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成・色調と概要	備考
第96図-15 写37-15	鉄製 釘	E 2区	長2.15	小形釘で頭に折返し頭成しがなされる。横断面形はやや楕円方形気味である。錆化は少ない。	
第96図-16 写37-16	鉄製 棒状	B 2区	長3.2+*	基底か。下方の端部横断面は菱形を呈し、それより上方は方形を呈するが、平はやや膨らむ。上方は調査時欠損。	
第96図-17 写37-17	鉄製 棒状	K区	長2.35+*	基底か。横断面形は楕円方形を呈している。上方は調査時欠損。錆化は顕著でない。	
第96図-18 写37-18	鉄製 棒状	E 4区	長2.95+*	基底か。横断面形は楕円方形を呈する。上方は調査時欠損。錆化は顕著。	
第96図-19 写37-19	鉄製 棒状	E 2区	長2.45+*	基底か。横断面形は歪んだ円形を呈する。上方は調査時欠損。錆化は顕著。	
第96図-21 写37-21	鉄洋物 鉋澤	J 2区	直径(12.0) 厚 3.5	碗形の鉄鉋澤で、底と側部に伊体の器壁面痕あり。重さはある、磁石に反応。	
第96図-22 写37-22	鉄洋物 鉋澤	A 2区溝	厚1.5	碗形の鉄鉋澤で、拓本図右に伊体の底面の器壁面が残される。重さはある、磁石に反応。	
第96図-23 写37-23	鉄洋物 鉋澤	E 2区	厚2.3	碗形の鉄鉋澤で、拓本図右に伊体の底面の器壁面が残される。重さはある、磁石に反応。	
第96図-24 写37-24	鉄洋物 鉋澤	E 2区	直径(12.0) 厚 3.9	碗形の鉄鉋澤。拓本図右側と側部に伊体の器壁面痕が残され、鉄分が多いためか二次錆(点錆)化あり。磁石に反応。	
第97図20-1 写38-1	鉄製 鍋	G 3区出土であるが、調査時点での記録に記載はない。出土は試掘調査時でトレンチ内の、浅い凹みか溝で検出されたようである。	全部で8点の出土があり、全体の互程度が残存するに過ぎない。第97図下は復元図であるが口径は20-1から、体部下方は20-4から、底面は20-5から推定した。口径40cm前後、高13.5cm前後となるが、高さは4寸・5寸として算出すると矛盾が多く、4.5寸が妥当。口径は1尺3-4寸であろう。	口縁部片で、全面錆のかたまりであったのを表面側のみ削がす。各部と変換部の作り込みはシャープ。	鉄製(割れ方から、極めて数量の多い鉄)。
第97図20-2 写38-2				口縁部片で、図は片側の錆部を全部削した状態。器内がやや薄いのは、錆化のためではなく、本来的で錆出しはやや不均一。	
第97図20-3 写38-3				4片が、ゆ着した状態にあり、1片が口縁部で他は体部片である。図は片側の錆部を削した後。	
第97図20-4 写38-4				体部下方片で、この破片から、鍋のある程度の深さが考えられ、口縁と底との推定が可能。	
第97図20-5 写38-5				底部片で、器内は中央部で厚くなり、左・右の端につれ薄くなる。底裏の頂部に錆出しの座のような箇所は見当たらない。	
第97図20 復元図				口縁部の等倍図は20-1を用いた。口縁部部にわずかながら、内側に返えりがあり、中世の土器群との共通性を思わせる。	

第6篇 太田市八幡遺跡出土土器の胎土分析

小 沢 達 樹 (群馬県工業試験場)

大 江 正 行 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)

はじめに

1979年からはじめた胎土分析数は約800点を数え、過去20回にわたる報告がある。その結果、県内10個所に存在する主要窯跡群のうち秋間、太田・金山、月夜野、吉井、乗附、笠懸窯跡群について一傾向を知るとともに製作地の同定も可能となってきた。さらに各窯跡群の胎土傾向は立地基盤層と有機的な関係にある点も次第に判ってきたのと土器胎土の根本を知るうえでは不可欠な分析となってきた。

今回は経費の関係で少ない点数ではあるが、太田市八幡遺跡出土の須恵器4点を扱い、製作の同定を目的に分析を行った。本稿の化学的な記述は小沢が、考古学的な記述を大江が分担した。

1. 試料の選択

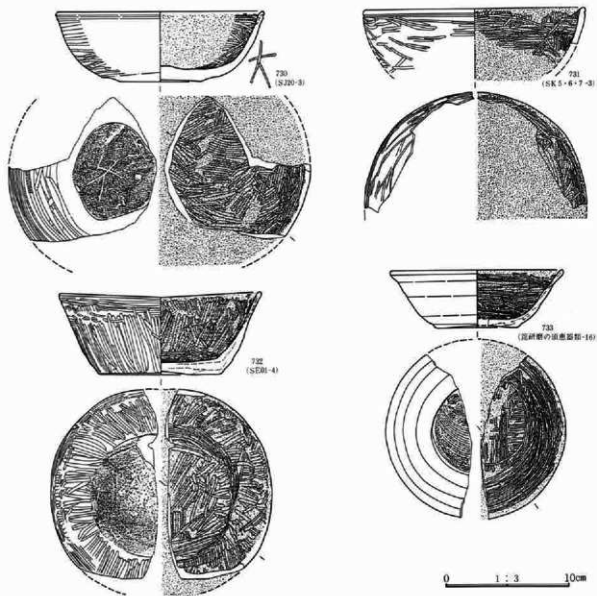
今回の分析試料はすべて太田市八幡遺跡から出土した須恵器類である。試料の選択にあたっては次の点を留意した。

同一窯跡群製と思われる製品中から胎土に共通性のある4点を絞り、少ない分析点数でありながら確実な結果が得られるよう選択を行なった。

2. 分析の目的と意図

胎土分析の有効性は製作地の同定にあるため、今回の分析目的もまた製作地同定とした。4点ともに酸化焰気味の焼成で内面に黒色燻処理と細かな内面研磨が施され、従来は、土師器、土師質の扱いを受けることが多かった。当遺跡では、第77・78図のとおり同類が多量に存在する。この多出土の現象は、一つには生産地域に近接していること、それらの須恵器類を入手し、使用し易い状況にあったことなどが起因すると考えられ、その生産地域は胎土にやや重みがあり、夾雑物中に白色の微細な鉱物粒が入り、割れ口にクセのない特徴があることから笠懸窯跡群もしくは、その存在地質基盤（太田金山丘陵、八王子丘陵におよぶ）と見られ、ことに重みのある胎土は胎土そのものが陶土存在基盤に根ざすことが意味される。この酸化焰の焼上、黒色燻処理（ない場合もある）と内面研磨が施され、轆轤の使用により製作された一群をここでは便宜上、笠懸系内黒須恵器と称し、10世紀以降の内黒の須恵器や北毛地域に存在する一群とは区別しておきたい。酸化焰の焼成は火中した時など二次焼成を除くと、偶発的な結果によって生じた時、当初から作意して酸化させた時（工人の自覚の有・無については別次元の問題）がありうるが、笠懸系内黒須恵器は製作当初の頃と考えられる分析試料番号730など8世紀代の例から末流はどこまで下るか判然としないが9世紀代の試料番号733に至っても酸化焰の焼成と内面の内黒化を行っており、その間、少数ではあるが中性焰気味（灰黄色を呈する状態は素地中の鉄分が発色していないため、実際には還元状態に近い）のものまで含まれ、基本技術に系統的な流れの継承が認められるので体系的に完成された形での生産（末流の段階は疑問）が続けられたと類推される。その製品中には佐液理（銅に数パーセントの錫と鉛からなる）製の銅鏡写しの製品が含まれ、たとえば試料番号730・731の口縁部下には一条の沈線があり、銅鏡の口縁部下沈線のそれと共通しており、しかも丸みをおびる体部の曲線はそれと良く似ていて、あたかも做鏡を思わせるものが感じられる。生

第6篇 太田市八幡遺跡出土土器の胎土分析



第100図(附図1) 分析試料図

試料番号	出土地・図番号	摘 要
730	S J 20-3	底の外面を除き全面に研磨が施される。底面は手持回転の磨削、口縁部外面に一条の沈線あり。全面酸化。胎土中に白色微細物粒わずか入り。素地全体は粉っぽい。茶褐色物粒は楕円粒で爪でつぶれる。底面外面に焼成前「大」施書。
731	S K 5・6・7-3	口縁部外面に一条の沈線があり、体部の丸みとともに微線に見える。焼成・胎土の特徴と内面研磨の状態は前出と同じ。
732	S E 01-4	底の外面を除き全面に研磨が施される。底面は不定方向の手持磨削。焼成・胎土の特徴は前出とほぼ同じ。
733	豊研磨の須忠器類16	底面は轆轤右回転の糸切。体部外面轆轤目は須忠器環と同じ、内面の裏研磨の念込きは前出と同じであるが外面は施されていない。焼成・胎土の特徴は前出と同じ。

附表1 試料の内眼観察表

産量に関しては持続性がありながら、当遺跡出土の総個体中に画一性が薄く、大量生産物とは認め難い。仔細に今後検討しなければ判らないが、特殊機能や特注生産も考える必要があると思う。

一方、その生産が考えられる笠懸窯跡群は7世紀中頃から終末まで現新里村雷電山窯跡群で瓦の焼造を続けた工人達が、7世紀終末～8世紀初頭頃に笠懸窯跡群に移動したと考えられている。その中でなされた造瓦は、8世紀中頃の段階は上野国分二寺ほか供給主体を公に向けて営まれた官窯としての時期で、その形は775年頃まで続き、鹿の川支群と山際支群で生産が確認されている。その間、一般的な焼成の須恵器も本科をはるかにしのぐ規模で量産され、古利根川の東方地域に広く分布している。8世紀終末から9世紀初頭頃にかけて同窯跡群の規模の縮小はほぼ確実で、多野群吉井窯跡群に組織統合されて行ったと考えられる。その頃から以降の生産規模は、笠懸公民館収蔵遺物の須恵器中に9世紀終末頃の製品がわずかに知られるに過ぎないし、瓦生産も9世紀初頭前後の頃の例をわずかに知るに過ぎない状況となる。

この笠懸系内黒須恵器が仮りに笠懸窯跡群中で生産が行なわれたとしたら（理由は後述）その製作は上野国分寺式軒瓦が製作し続けている間は公の影響の基での製作が考えられるものの、上野国分寺式軒瓦の製作終了（775年頃）以降の背景はいかなる形であったのか不明瞭である。仮りに公の基での背景があったのであれば、上野国府、国分二寺など上野国の中枢地域において、また民的色彩が強ければ県内の平野部、古利根川東部流域の広域にわたり分布数とある程度出土量をもって存在していても良いはずである。その点を関連遺跡の整理に携わる担当職員に出土量と傾向をたずねたところ上野国府の関連工房で知られる前橋市鳥羽遺跡の整理担当である綿貫邦男は出土量は極めて少ないという。上野国分二寺中間地域の整理を行なっている木津博明と桜岡正信も出土量は遺跡内出土の坏・埴類の割合からすれば極めて少ないという。古利根川以東である上武国道の整理にたずさわる飯田陽一も同様に8・9世紀において他の遺跡と比べ一遺跡全体から特に多く出土した遺跡例は未見で、一遺跡中の出土量も多くはないという。さらに9世紀以降に至って酸化焰の焼成で内黒・内面研磨を施された類の出土傾向は高まるとのことであった。結局、現状でにわかには公の背景たる左証も、民の背景たる左証も得られなかったのであるが、では、当遺跡において検出された住居跡数27に対し、18点という出土量の多さは何を物語るものなのか問題となるところで、して考えれば当遺跡の置かれた新田郡地域に主体供給を行った可能性が生じてくるし、掘立柱建物が多く検出された当遺跡の性格にも直接関わってくる。

笠懸窯跡群で焼造された可能性と新田郡内に供給された可能性があることは次の理由による。笠懸窯跡群の置かれた場所は、古代の新田郡に属していたと考えられていること、また笠懸系内黒須恵器が笠懸窯跡群で焼造された可能性が高いことは昭和63年度に神谷佳明・木津博明・桜岡正信が笠懸窯跡群内の山際支群の窯体断面に接した灰原断面から酸化焰焼成で、内黒処理、内面研磨された小片を採集し、製作年代は同支群は上野国分寺式瓦を焼造した窯跡群であるため8世紀中頃の公算大でさらに、その小片は、同年に試料番号401として胎土分析の結果、山際支群製として疑問は生じないことによる。したがって今回の分析の意図はそうした類推を左証しするか確認の意味において試料を選定した。

笠懸系内黒須恵器と称したのは便宜とはいえ、本来であれば名称をあたえる必要とその意義および名称の正当性について触れなければならないが、それを行うための時間的いとまがなく、恐縮なことであるが以下に略記したい。同須恵器は厳密な意味では須恵器工人（陶作部か）がこしらえた製品ではなく作瓦工がこしらえた可能性が極めて強い（灰原から採集されたことは2次的に使用された可能性を秘めることに通じているが、関東地方の須恵器・瓦窯跡で土師器の出土例は神奈川県瓦屋根瓦窯跡例で窯前作業場から土師器小形壺が出土したほか、類例は少なく、それに対し、内黒須恵器の出土例は栃木県に類例があり、そのほか下

第6篇 太田市八幡遺跡出土土器の胎土分析

野の窯業生産は笠懸窯跡群と須恵器形態の一部、作瓦における叩技法の一部に共通性がある。では作瓦工が製作させた器を何んと呼んだら良いのかということになるが土器は意味あいが広過ぎ、土師器では生産組織と生地粘土そのものが異なる。そのため、窯跡から瓦・陶の両者を出土した場合に、定義づけもされないままに陶を須恵器と呼ぶ例と結局は同様であるが須恵器として考えたい。笠懸系という呼称はこうした製作を行う製作者集団は同窯跡群を除くと考え難く、系は流れのある系譜を持つと考えられるので用いた。

3. 分析方法及び測定条件

蛍光X線分析

試料 供試料を振動ミル粉砕機により10 μ m以下に粉砕し、5~10gを油圧プレス機を用いて径4cmの円板状に成型して使用した。

太田市八幡遺跡試料

試料	成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO(%)	MgO(%)	K ₂ O(%)	Ca/K(%)	Sr/Rb(%)
太田市八幡	730	61.81	21.06	5.13	0.89	0.96	1.57	1.29	0.88	1.43
*	731	64.24	19.05	4.98	0.78	0.70	0.99	1.70	0.47	1.64
*	732	59.43	20.94	7.40	0.77	0.90	0.89	1.14	0.92	2.00
*	733	59.07	21.98	7.02	0.96	0.85	1.46	1.34	0.74	1.40

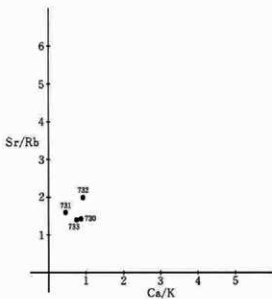
笠懸窯跡群試料既分析値

試料	成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO(%)	MgO(%)	K ₂ O(%)	Ca/K(%)	Sr/Rb(%)
山形支群	須恵器201	64.6	22.5	7.45	0.96	1.02	1.01	1.48	0.79	2.31
*	* 202	62.7	24.4	7.73	0.93	0.97	0.62	1.34	0.83	3.17
*	瓦 392	65.9	23.9	6.35	1.14	1.04	0.84	1.52	0.94	1.45
*	* 393	67.9	19.1	6.92	1.08	1.08	0.87	1.53	0.97	1.65
*	* 394	61.6	24.0	8.85	1.04	1.29	0.78	1.50	1.18	2.24
*	* 395	64.5	22.1	6.85	1.16	0.80	0.70	1.14	0.97	1.51
*	* 396	63.7	22.8	8.10	0.90	1.09	0.51	1.62	0.92	2.18
*	* 397	63.4	23.7	8.71	1.07	1.35	0.63	1.24	1.49	2.93
*	* 398	63.8	23.2	10.40	1.03	1.84	0.27	1.98	1.31	2.30
*	* 399	60.7	26.7	8.52	1.11	1.59	1.11	1.93	1.14	3.58
*	* 400	62.9	26.2	8.60	1.20	1.64	1.15	1.14	1.98	3.86
*	酸化須恵器401	57.9	19.8	11.00	1.17	1.36	0.47	1.20	1.57	2.10
*	須恵器402	63.9	21.0	10.70	1.05	1.62	0.57	1.40	1.58	3.73
*	* 403	61.2	26.5	8.61	0.97	1.13	1.14	1.55	1.02	3.16
*	須恵器404	67.4	19.9	7.52	1.02	0.86	1.04	1.74	0.69	1.44

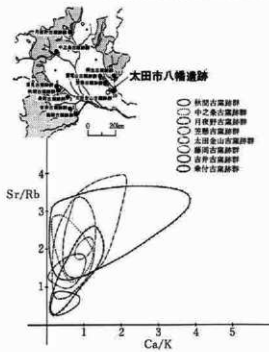
太田・金山窯跡群試料既分析値

試料	成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO(%)	MgO(%)	K ₂ O(%)	Ca/K(%)	Sr/Rb(%)
吉沢支群	塚廻20	64.3	21.7	7.64	1.09	0.74	2.75	1.91	0.54	1.51
*	塚廻21	67.0	18.5	6.91	0.96	0.85	2.03	2.19	0.54	1.10
*	391	61.0	20.7	9.00	1.08	0.81	0.65	1.52	0.71	1.58
龜山支群	塚廻22	68.0	18.9	6.51	0.87	0.53	0.94	1.42	0.51	1.69
大造西遺跡	塚廻15	69.7	18.4	3.93	0.70	0.26	1.00	2.51	0.14	1.30
*	塚廻16	66.5	21.0	5.05	0.89	0.84	0.77	1.36	0.85	1.77
*	塚廻17	67.1	20.1	5.66	1.09	0.90	2.23	1.94	0.65	1.59
*	塚廻19	69.3	19.2	3.58	0.70	0.40	0.91	2.34	0.24	1.41

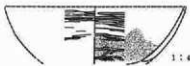
附表2 分析値一覧



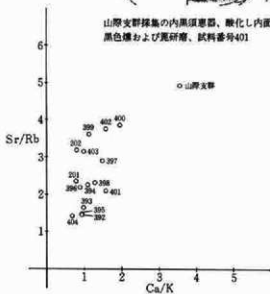
試料番号730～733は酸化須恵器で内面黒色焼・底研磨
太田市八幡遺跡試料



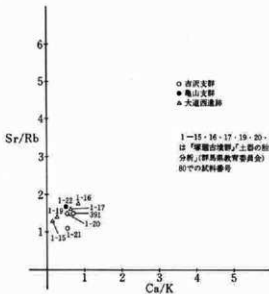
昭和64年度までの分析試料に基づく
県内主要窯跡群についての領域



山原支群採集の内黒須恵器、酸化し内面
黒色焼および底研磨、試料番号401



窯体内とその周辺の表採資料で、真の川支群が未分析
笠懸窯跡群試料



吉沢・亀山支群は窯跡、大道西は工人集落関連
太田・金山窯跡群試料

第101図 (附図2) Sr/RbとCa/Kグラフ

第6篇 太田市八幡遺跡出土土器の胎土分析

分析装置

理学電機機 KG-4型

測定条件

分光結晶: Fe, Sr, Rb には LiF ($2d=4.028\text{\AA}$)

Ca, K, Ti, Si, Al には EDDT ($2d=8.808\text{\AA}$)

Mg には ADP ($2d=10.648\text{\AA}$)

検出器: LiF を使用したとき S.C. EDDT, ADP を使用したとき P.C

時定数: 1

計数法: Fe, Ca, K, Ti, Sr, Rb はチャートによる。Si, Al, Mg は定時計数法による。チャートの速さは、 $4^\circ/\text{min}$ とした。

波高分析器: 積分方式

測定線: $\text{FeK}\beta$, $\text{CaK}\alpha$, $\text{KK}\alpha$, $\text{TiK}\alpha$, $\text{AlK}\alpha$, $\text{MgK}\alpha$, $\text{SrK}\alpha$, $\text{RbK}\alpha$ の各一次線を使用した。

X線照射面積: $20\text{mm}\phi$

測定方法

検量線法: 6点

標準試料: 群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器 (295, 310, 336, 345, 360, 380) を湿式化学分析して、標準試料とした。

4. 分析結果

分析値に関しては附図2に示したとおりで、既分析の笠懸窯跡群の領域内に収まる。笠懸窯跡群中の山際支群の陶土基盤は飯島静男『群馬県の地質』『群馬県植物誌』1987による足尾層群であり、連続した地質にある太田・金山窯跡群の主体である北金井周辺も足尾層群である。しかし、新井房夫『群馬の地質と地下資源・群馬県地質図』(内外地図) 1964によると山際支群は火成岩類の斜長流紋岩で太田・金山窯跡群の北金井周辺は秩父古成層中の粘板岩、砂岩層となっていて根本的な成因が異なっているが、飯島の地質区分によった場合には、太田・金山窯跡群も同一に触れる必要があるので附図2に既分析値を掲げた。それと比較すると、730・731・733が領域内に入り、732は近接する。

第7篇 考 察

1. 旧報告中の考察について

旧報告を作成した平野進一は結語をなす前段に、変遷観を得るため出土土器群を類型化しておられる。その類型化は、各遺構の所産年代に基軸を得たうえで、考察しようとする意図が充分窺え、考察作成の正しい志向の形としてそれを評価することができる。近年の報告作成の形が各遺構を同質、同等の価値感で扱わなければならない文化財の原則を無視し、整理担当者自らが特定の時代や土器文化を偏重しようとする傾向が強まっている点は残念でならない。本稿はそうした旧担当の意志を受継ぎたいが、遺物に取上Noがあっても遺構図中に遺物取上Noおよび床直認定の記載が少ないことから、各住居跡に伴う遺物を明らかにすることはできなかった。そのため追証は行わないこととする。類型化された土器群と現状の年代観の対比は以下のとおりである。

第Ⅰ類は「器形、整形技法から南関東における鬼高式の範疇に類する」とし古墳時代後期から終末期に相当する。それは現在、飛鳥時代という区分を除けば6世紀から7世紀前半で白鳳時代より前である。

第Ⅱ類は「真間式の後半に対比し得るものと考えられる。」とし、それは現在では奈良時代、8世紀代に推されている。しかしⅡ類の指標土器群中には明らかに奈良時代を遡りえる個体が含まれているので、第Ⅱ類の幅を7世紀頃からと捉えた方が良いと考えられる。

第Ⅲ類は3に細分され、第Ⅲ-A類は「埼玉県入間市新久宮出土の須恵器蓋との比較から9世紀前半に比定されるものと考えている。」としているが、第Ⅲ-A類中に現在時点では8世紀中頃までの個体が含まれるので、A類の上限をその頃まで遡らせた方が良いと考えられる。第Ⅲ-B類については「国分式に比定しうる。」とし、さらに第Ⅲ-C類は「器形、糸切り底から平安時代においてもかなり年代が下るものと思われるがその位置づけは明確にしがたい。」とし、住居跡出土の終末の土器群を捉えている。国分式の幅は、昭和30年代頃までは奈良・平安時代を、40年代に至って平安時代と限定しようようになった。現在時点から見れば第Ⅲ-B類は9世紀代に、また当遺跡の住居跡出土土器のうち平安時代の下限は9世紀終末から10世紀初頃であるため第Ⅲ-C類はその頃と考えられる。住居が存在したか否か不明な中に、11・12世紀の土器・陶器が含まれる。

第Ⅳ類については「器形、整形技法から和泉式に比定し得る。」としている。和泉式は、古墳時代中期に相当する。

次に旧報告にある結語を転載するが文中の時代観はそうした出土土器の類別に基づいている。

「V 結 語

調査のまとめ

発掘調査区域は太田市遺跡台帳（No. 78号）に記載される包蔵地の南西部を占め、当初予想されなかった標高56.5mから57mほどの水田地帯に遺構を確認した。検出した遺構は竪穴住居跡、掘立柱建築遺構、井戸状遺構、溝、土壕等である。以下確認された遺構について簡単に要約しておきたい。

なお、調査資料の整理がなされていない以上、細部については後日資料整理の機会を得て検討を加えることにしたい。

集落について

当初、遺物の散布状況からして遺跡地西側の低台地上に集落跡の可能性を考えていたが、調査の結果、低

台地において遺構の確認に至らず、その縁辺に接する水田地帯に多数の遺構を確認し得た。

特に竪穴住居跡、掘立柱建築遺構は低地における集落の一部として古墳時代後期から奈良、平安時代にわたり営まれたことがうかがわれる。

集落の広がりについては、調査区が限定されているため推定の域をでないが、調査区南側の舗装農道を隔てて、水田地帯が一段低くなっており、その附近に南側の限界が予想される。したがって集落は北側低台地と一段低い水田地帯にはさまれ、帯状にその広がりをみせるものと思われる。

前述したように、調査区南方は旧渡良瀬川によって開析された低湿な沖積平坦地が広がり、水田地帯として利用されている。本集落が営まれた時代においても同様の土地利用が行なわれたと考えられようから、この地域に農業生産の場を求めることができよう。

ほかに、第Ⅳ類土器を出土する土壌、あるいは鶴山古墳等から周辺に古墳時代中期の集落跡の存在を思わせる。

竪穴住居跡について

確認した竪穴住居跡は23軒で、ほかに2カ所ほどその可能性がある。出土遺物からして古墳時代後期の3例を除いて他は奈良・平安時代に位置づけられるものである。これら住居跡について現段階で問題もあろうが、その特徴を簡単にふれておこう。

① 2例の住居跡(9-A号、17号)を除いて、すべて小規模な住居跡であり、一部疑わしきものもあるが柱穴は確認し得ない。

② 古墳時代後期に位置づけられる3例(8-A号、10号、18号)の正方形に近い小規模な住居跡(18号は一部未調査のため規模不詳)は、カマドが東側中央寄りに構築され、東南隅に貯蔵穴と考えられる小ピットをとまうことに特徴がある。

奈良時代に位置づけた大型の住居跡(9-A号、17号)は厚い貼り床がみられ、特に17号では中央で30cmの厚さを示し、低地における構築上の特徴かと考えられるものである。

同時代に位置づけた小規模な長方形の住居跡(13号・14号・21号・22号・23号等)、および平安時代に位置づけた、やや正方形に近い小規模な住居跡(1号・2号・6号・8-B号等)は、カマドが東南隅に構築され、古墳時代後期の2例(8-A号・10号)に比べ、構築技法・床面の利用からも発展した構造がうかがわれる。

これら上記の住居跡群の調査区における分布をみると古墳時代後期の3例、および奈良時代に位置づけた大型の住居跡2例は調査区北側に方向を同じくして、まとまりのある分布を示している。

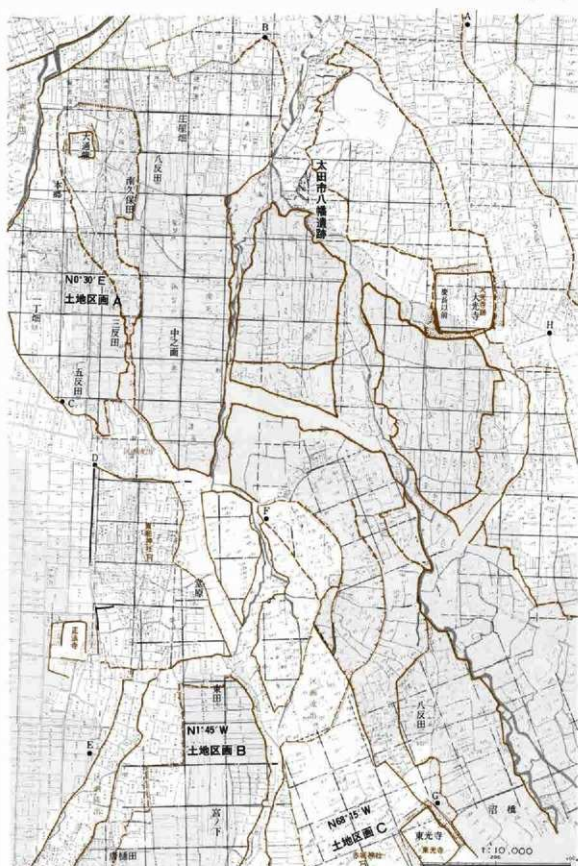
奈良・平安時代に位置づけた小規模な住居跡群においても同様に、調査区南、あるいは中央にまとまりのある方向性を示している。

これら住居跡群の分布は集落において一定の構成を予想せしめる。

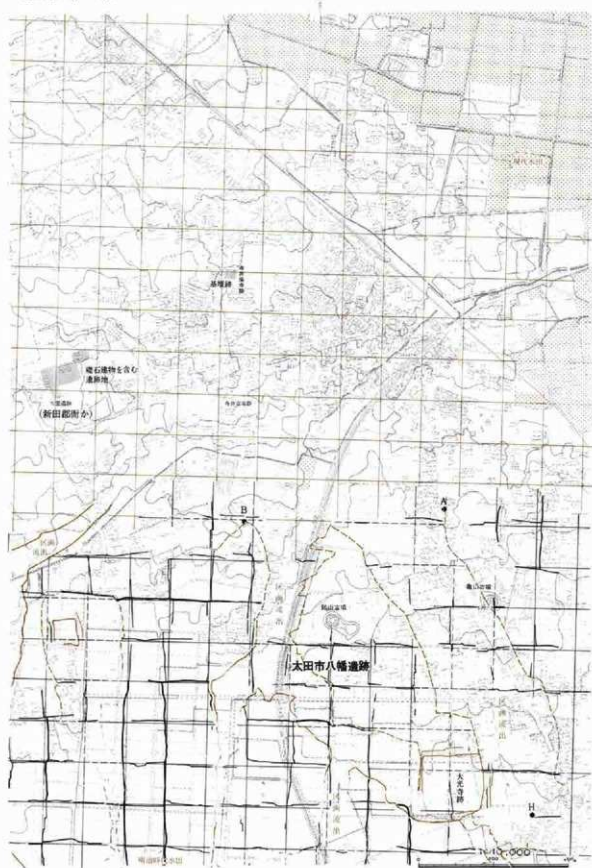
掘立柱建築遺構について

大小4棟の掘立柱建築遺構を確認しているが、B-1区からB-2区にかけて、あるいは8-A住居跡内にも同様に建築遺構が構築されたものと考えられる。さらには柱穴と考えられる多数のピットが確認されているので、かなりの掘立柱建築遺構の存在が推定されるものであった。

確認された4棟の掘立柱建築遺構については、規模・構造が異なっており、西側部分のみ調査された大規模な掘立柱建築遺構を除いて、柱穴が直線上からずれるものが多く、柱間の距離についてもその間隔が一定していない。これらの遺構が住居跡であるのか、倉庫跡と考えるべきものか推定の域を出ないが、いずれに



第102図 土地区画都定図 1:10,000



第103図 太田市八幡遺跡と土地区画推定図 1 : 10,000

しても整然とした企画性を考えることは困難である。

近年、本県においても掘立柱建築遺構の調査例は巴
 楽郡大泉町仙石道祖遺跡（註6）・前橋市元総社町市
 立総社小学校校庭、およびその北方の昌楽寺遺跡（註
 7）・太田市大字宝泉五反田遺跡（註8）・佐波郡東
 村園芸試験場内遺跡（註9）等から確認される。そ
 の時期については仙石道祖遺跡の古墳時代後期（鬼高
 期並行）の建築遺構を上限として、他は奈良・平安時
 代に位置づけられるものである。本遺跡における建築
 遺構群が同一時期のものか問題があるにしても、これ
 ら遺構群が方向を同じくすること、D-4区の中規模
 な掘立柱建築遺構と第11号住居跡の重複関係、出土遺
 物の型式認定、さらには他地域との比較から、奈良・
 平安時代にかけて、特に平安時代にその主体があった
 ものと考えている。

その他の遺構

溝については、規模、形状、方向等により数種の分
 類を試みた。中規模な溝①、およびそれより分岐する
 小規模な溝②は流水の痕跡が認められ、遺跡地南方の
 低湿平坦地に向かう灌漑としての水路、あるいは集落
 における排水を目的としている等、推測されるもので
 あるが、資料整理がなされていない現時点では、その
 性格、時期とも判断がむずかしい。

粘土帯との関連が考えられる中規模な溝②につい
 ては、出土遺物、第20号住居跡との重複から集落との関
 連が想起されるが、その性格についても同様に判断が
 むずかしい。

井戸状遺構については、遺構群との関連、出土遺物
 から奈良、あるいは平安時代に位置づけられる。

土壇については、墓壇状のもの、不定形のもの、柱
 穴状のもの等、種類も多い。出土遺物、作成資料の検
 討によりその実態は明らかになり得よう。

以上、本発掘調査により確認された遺構についてそ
 の概要を述べてきた。特に奈良・平安時代に位置づけ
 た竪穴住居群、掘立柱建築遺構群は寺井庵寺跡の存在、
 周囲の歴史的環境とあわせ、東山道沿線の一集落とし
 て律令体制との深いかわりあいのもとに歴史的清長
 をたどったことが推定されるのである。



第104図 掘立柱建物群と土地区画 1:400

第7編 考 察

- (註6) 昭和41年、邑楽郡大泉町の仙石道恒道徳発掘を担当した柳次郎重氏により開口5間、興行2期の大規模な独立柱建遺構を確認している。
- (註7) 尾崎喜左衛門 国府跡推定地の発掘調査 前橋市史第一巻 昭和46年
- (註8) 昭和47年、太田市教育委員会より太田市五反田遺跡発掘調査を実施、小規模な独立低台地上に多数の独立柱建遺構を確認している。調査報告は近刊の予定
- (註9) 群馬県教育委員会 県国史跡跡場第二遺跡 上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報 1 昭和48年」とあり、今回の整理

作業から得た所見を次に加えた。

過去を振り返るために、まず周辺に残された土地区画を見たい。それは税制の根本は土地制度にあり、税制は政治機構からはじまり、末端の庶民にまで影響をあたえるという観点からである。現在の土地区画は大半が戦後から現在までの土地改良によって区画が改変されている。そのため戦前に作成された耕地図「鳥之郷村」、「強戸村」、「生品村」を用意し、旧状と現状の比較を行った。現状は、太田市が昭和59年に修正した1:2,500平面図「10・11」である。耕地図は距離観が不正確であるので3村のうち、道の交点や特定の物体の中で現状でも変更されず太田市1:2,500に図化されている箇所を選び出し、新・旧図相互の測距基準とした。基準であるので2点間がなるべく長距離となるよう求めた。その差の値に基づいて耕地図を現在の1:2,500と同等となるようコピーで拡大合成し、第102図がそれで、図中のA～Hの黒丸は測点位置で、第102図にも一致する。耕地図の方は無視した。耕地図の不連続、重複部分は耕地図作成時の測距配分の矛盾である。

耕地図内に、方向性の異なるいくつかの土地区画が存在していることは、調査地内の小字名称を確認するため耕地図を見た際に感じていた。それを追証する形で108m=1町を単位とする方眼を1:2,500図と、旧耕地図に置いたところ、第102図のとおり3つの土地区画が推定できるようになった。1町毎の単位を耕地図のみで認知することは困難であるが、設定した方眼上に乗るか近接または平行してある農道や畦は少なからず、ある区画の方向性が存在した時分の名残のはずで、そこに旧来の区画の残存ありとすることができる。基準点に近接した箇所の中で太い実線で示した農道や畦は1町毎の方眼に乗ることが確実視できる時に用い、細線は近接してあるものの区画の方向性は生きていと考えられる時に、破線は区画の方向性が部分的に残存し、かつては整然とした状態があったと推定される時に用いた。土地区画Aは国土座標北に対しN0°30'Eを、土地区画BはN1°45'Wを、土地区画CはN22°Wを指向している。各土地区画間にはある時代に設けられた区画が流出したかまたは及ばなかったと見える箇所が存在する。それらの多くは、北方からの流水による区画流出と考えられる場合が多く、流出と推定される流路跡の中にさらに別の区画が入り込み、おぼろげながら傾向として、区画設置の新・古の関係が導き出される。傾向といってもその重みは、ほぼ誤りないことに近い。最も土地区画Aが最も古く、次にBが、最も新しい段階にある。Cは流路跡の末流域中におよぶので、ずいぶんと新しく感じるが、明治29年の参謀本部陸軍部測量局による「第一軍管地方迅速測図」にはその方向性の目筋が残されており、少なくともそれ以前の成立である。土地区画Bについては、その中に土地区画を意識した人造物痕が明瞭ではないので区画設定の時代ははっきりしない。土地区画Aについては、大光寺跡、正法寺現区画、寺井小字大通龍の区画などのおおむね跡状に見える区画がその中に入り、方向性に一致を見る。大光寺跡は、現大光院の慶長以前の跡地で、慶長前代藩址の外域と内域の一部と、南北中軸線が土地区画Aの1町方眼の目筋に当る。内域は1辺約160m(約1.5町)、外郭は約210m(約2町)を測り、一般の館跡から比べれば大規模で、有力な特権階級の居館に匹敵し、鳥山氏などの居館廃用の寺地を思わせる。目筋に沿った点からは区画Aの設定以降の所産が考えうる。同様の区画は寺井小字大通龍にも認められ、外域約100m(約1町)、内域約70mの規模で、館とすれば極めて小さいが、大通龍という地名からは湧水地での水神社を思わせる。しかし単一の地名からの推定は困難で、地元での聞き取りを丁寧にした

うえでなければなんとも言えない。土地区画Aとの整合性は方向性が近似しているものの主要な筋目とは一致していない。また土地区画Aの方向性はN0°30'Eであるのでし北極星を指向して区画設定を行ったら方向性は近似する可能性がある。そのため土地区画Aとの係わりは不明である。続いて脇屋にある現正法寺の区画である。正法寺は理源大師聖法の開山になり現在、平安時代末期から鎌倉時代の作とされる聖観世音立像が伝存する。寺地の区画は明治29年の迅速図を見ると北側まで水田はおよんでおり、そのため北外濠はそれ以前に埋められているようである。規模は、東西の外域約130m（約1.2町）、同内域約60m（約半町）、南北の外域約130+ α m、同内域約100m（約1町）を測る、濠跡が全体的に広いのは何か特別な理由があるのであろう。区画Aとの関連は西側外域と内域の南北の中軸が区画Aに則しており、正法寺の現区画は土地区画Aの設定後に設けられていると推定されるので、正法寺の寺地設置の段階がいつであったのかが問題となってくる。寺内には脇屋義助の遺髪を埋めた厩3年（1341）銘の塚がある。

また少し巨視的であるがかつて新田郡の古地名と利根・吾妻郡、多胡郡内の古代の郷名が現代にどのくらい持ち越されているのかを少し比較したことがあった。その時の所見は新田郡と吾妻郡の郷名の残存は新田郡の場合のごくわずかで、吾妻郡はまったく残されていない。それに対し、利根郡はすべての郷名が、多胡郡には多くが残存していた。残存理由には、古代から中世に変遷する過程において土地制度や支配構造が大きく変換した場合に、旧地名が新地名に変更されうることが考えられた。新田郡の場合は、新田の荘の成立に直接係わる史料の「新田郷莊嘉応二年田島在家目録」（1170）中の39郷の多くが現在に地名をとどめており、そうした名残が多かった場合は、その時点で施工された土地開発や改良の残影は今日まで良く残った可能性があり、今回、抽出した中で最も古い土地区画Aは、その頃以前に選りうる可能性が多にあると云える。ただ土地区画Aの筋目がすべてその当時のものかと言う点を考えると、前代の土地区画をそのまま受継いだ可能性もあろうし、後代に新田の拡張はその目的に合わせて施工したことも考えうる。遺跡の存在する鳥山の地が史料に見えるのは前目録中ではなく文永三年（1266）と推定される「新田庄内大島六郷注文」（正木文書）中に「鳥山郷」が見え、当遺跡は鳥山郷内に属していたと考えられる。大島郷の名称は前目録中に既に見える。

さて第102図に示した土地区画Aの左側には耕地に関連し、しかも猪田・庄屋畑・三反田・五反田・八反田・一町畑（第102図）など古そうな地名が残されている。第102図の細かいトーンは明治22年の水田域（現距離に修正済）でその中に条里制の区画に多くあるとされている長地、半折りの両者が長堀用水周辺にある小字宮東のあたりまでに多く認められる。その水田の主水系は現蛇川によっており、長堀用水が旧生品村側以西の低地の水田の主水系となっている。現新田堀用水から分水した蛇川は、前述のとおり、自然流水により天良、鳥山の台地を分析したとは、低台地巾（古波瀬川の自然堤防）と低地との落差は大きいため考え難く、鳥山西方の低地中に存在した小河川中に人工用水を引込んだか、改修前の蛇川にほぼ南北を指向する個所が認められるので大半が人工用水とも考えられるのでそこに古蛇川用水と称すべき個有名が必要と考えられ、その場合は古新田堀用水から分岐してから以南の交流をさすことになる。鳥山西方の低地帯中の水田区画は、その淵源を平安時代末期以前に選りうるとした。その区画の目筋は東・西方の台地上にも及んでいることは確かであるが、天良小字蔵久保・天良・石橋・七堂以北が不明瞭であり、さらに土地区画Aを北方に延ばし、その淵源を7世紀代の寺井庵寺の造寺段階にあると仮定して既発見の基壇跡がその目筋に載るか求めてみたが結果は第103図のとおり判然としなかった。

太田市八幡遺跡で検出された遺構との係わりについては、土地区画AとS D 06の方向性がほぼ同じであるので一町毎方眼を遺跡内に落してみると第103図のとおりトーンの目となり、さらに50尺方眼を引いて何

度となく各建物遺構に合わせたものの気持ちよく一致する遺構はなく、土地区画Aの目筋が奈良・平安時代の遺構の段階まで遡りうるが疑問が持たれ、周辺遺跡での確認を待つより解決の糸口はなさそうである。掘立柱建物群については新田郡の中核に近接するため小地域管掌者の居宅や公の施設にその機能が考えられるが、前者の場合は、奈良時代に2棟の大形住居跡が遺構中に存在するので、その段階では、民の色彩の濃い形を窺うことができ、全部の建物ではないかもしれないがわずかながら居宅跡にある程度の可能性が持たれる。土地区画Aとはまったく別にN7°30'Wの方向を指すSD04を基準に50尺方眼を載せてみたが、それも発掘上の比較区域が狭ま過ぎて関係の有・無を明確にし得なかった。ただN7°30'Wの方向性の50尺方眼には、掘立柱建物跡の隅柱が、ひっかかるようにも見受けられた。しかし地形走行がその方向性を作り出した主因かもしれないことを思うと、それもまた、今後に引継いでほしい視点である。古蛇川用水との関連からは、SD01について流水の痕跡があったとする調査所見は特に貴重である。その方向性は改修前の蛇川の方向に並走しており、古い主要灌漑水路と考えられる。残念ながら溝の年代は押えられていないが、台地端を走る水路は一般的に高所水田に水を引込むための機能があるので、その点からすれば大光寺跡西側の低地に引込むための水路であったことも考える必要がある。

以上、今回の整理から重要な視点を見い出したが、調査資料に必要な事項の記入が少なく、遺構の時期特定をし得ない極めて残念な結果を作り出してしまった。発掘調査の中で、遺物供伴および埋土中出土の認定がどんなに必要であるか、痛切に感じた次第である。担当者・調査員の各々は記録保存を行なうための基本技術とともに遺物認定の責任を基本的にきちんと果たす必要があり、それによって調査成果の良、否が決まるのである。

写 真 图 版



鶴山古墳と調査地 南西→ 左側の白線が調査地



調査地北半を望む 南→

写真図版 2



調査風景 南→



調査風景 南→



調査風景 西→



調査風景 南西→



調査風景 北→



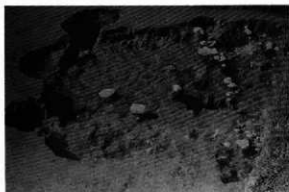
調査地北半を望む 南→



調査地南半を望む 北→



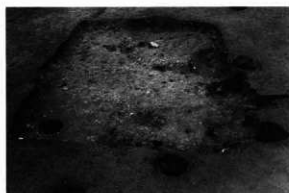
調査地南半を望む 北→



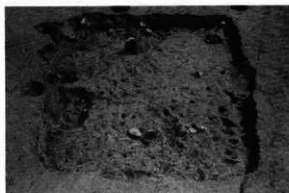
S J 01床面状況 西→



S J 01遺物出土状況 南→



S J 02床面状況 南→



S J 02掘方状況 北→



S J 03床面状況 西→



S J 04甕状況 西→



S J 05床面状況 西→



S J 04甕状況 南→

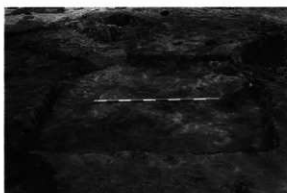
写真図版4



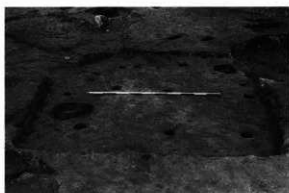
S J 06床面状況 南→



S J 06竈状況 南→



S J 08A床面状況 南西→



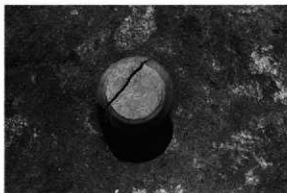
S J 08A掘方状況 南西→



S J 08A遺物出土状況



S J 08B近景状況 南西→



S J 08B遺物出土状況



S J 08B遺物出土状況



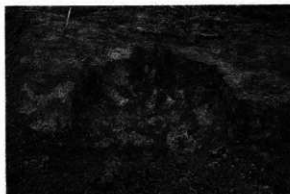
S J 09 A・09 B 床面状況 南西→



S J 09 B 竈検出状況 西→



S J 09 B 竈截剖状況 西→



S J 09 B 竈掘方状況 西→



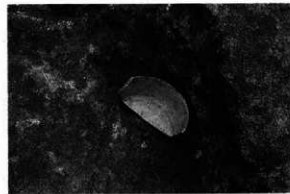
S J 10 床面状況 南西→



S J 10 調査状況 東→

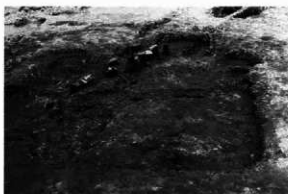


S J 11 B 床面状況 西→



S J 11 B 遺物出土状況

写真図版 6



S J 12床面状況 西→



S J 12遺物出土状況 南→



S J 13床面状況 南西→



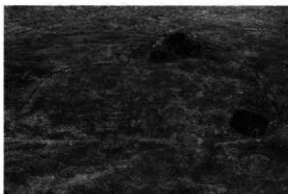
S J 13遺物出土状況 南西→



S J 14床面状況 南→



S J 14竈状況 西→



S J 15床面状況 西→



S J 16掘方状況 西→



S J 17床面状況 西北→



S J 17竈状況 西北→



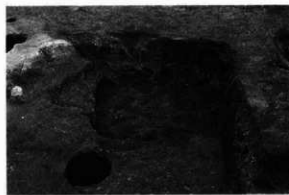
S J 17竈状況 北西→



S J 17竈截割状況 西→



S J 17遺物出土状況 北西→



S J 17貯藏穴掘方状況 西→



S J 18遺物出土状況

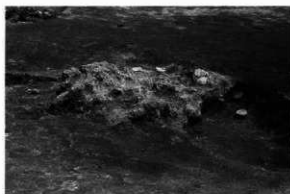


S J 19A床、掘方状況 西→

写真図版 8



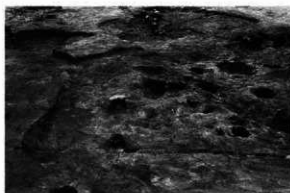
S J 19A 窟状況 西→



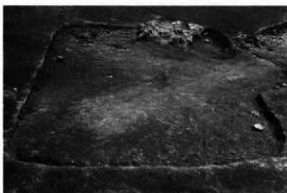
S J 19A 壘貯蔵穴状況 西→



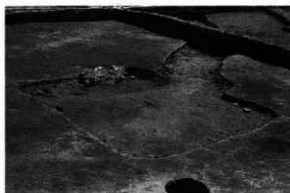
S J 19A 壘付近遺物状況 西→



S J 19B 掘方状況 北西→



S J 20床面状況 西→



S J 20と S D 02状況 北西→



S J 20遺物出土状況



S J 21床面状況 南西→



S B01検出状況 北→



S B02検出状況 南→



S B02検出状況 南西→



S B03検出状況 東→



S B04検出状況 南→



S B04検出状況 南→



S B07(奥)・S B01(手前)検出状況 北→



S B07検出状況 北→

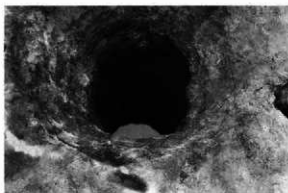
写真図版10



S E 01検出状況 南→



S E 01遺物出土状況



S E 02遺物出土状況



S E 02遺物出土状況



S E 03検出状況



S D 01、B 3区付近状況 北→



S D 01、B 3区付近状況 北→



S D 01・04、B 3区状況 北→



S D01・04、B 3 区付近状況 北→



S D08(左)・02(右)、F 4 区付近状況 南→



S D05(奥)・03(手前)、D 4 - J 2 区間 南西→



S D06検出状況 南→



S D08検出状況



S D08、F 3 区土層断面状況 南西→



S D08、K 3 区土層断面状況

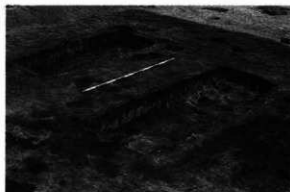


S D08土層断面状況

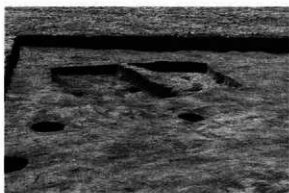
写真図版12



S K 04検出状況 南→



S K 19(左奥)・S K 20検出状況 北西→



S K 21検出状況 東→



S K 30土層断面状況 南西→



S K 31土層断面状況 東→



S K 33土層断面状況 南東→



S K 38土層断面状況



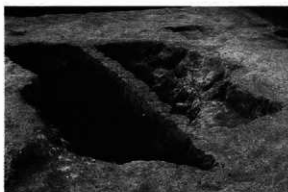
S K 38土層断面状況



S K 38遠景状況 北→



S K 38土層断面状況 西→



S K 39土層断面状況 東→



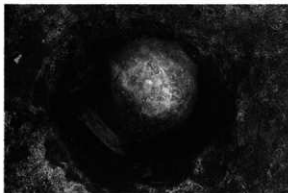
S K 39検出状況 東→



S K 45・44付近の状況 北→



S K 44・45付近の状況 西→

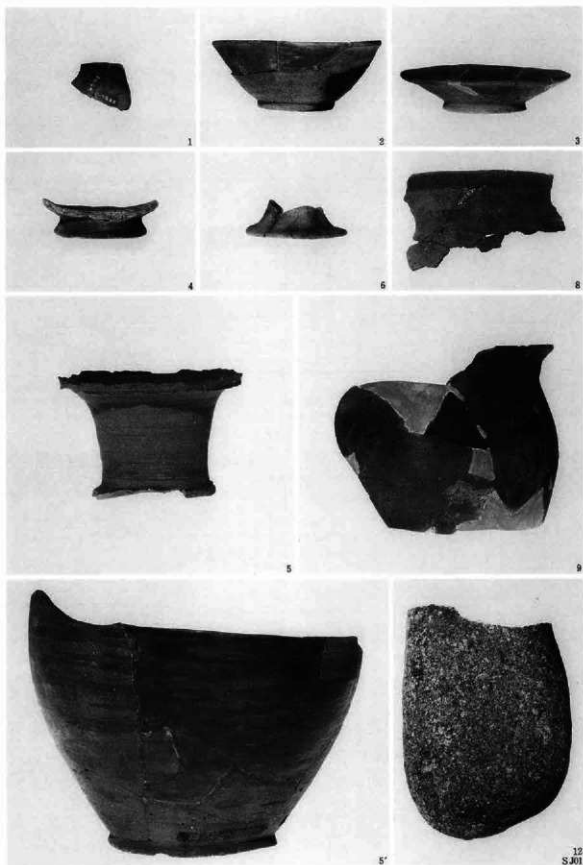


S K 47遺物出土状況 南西→

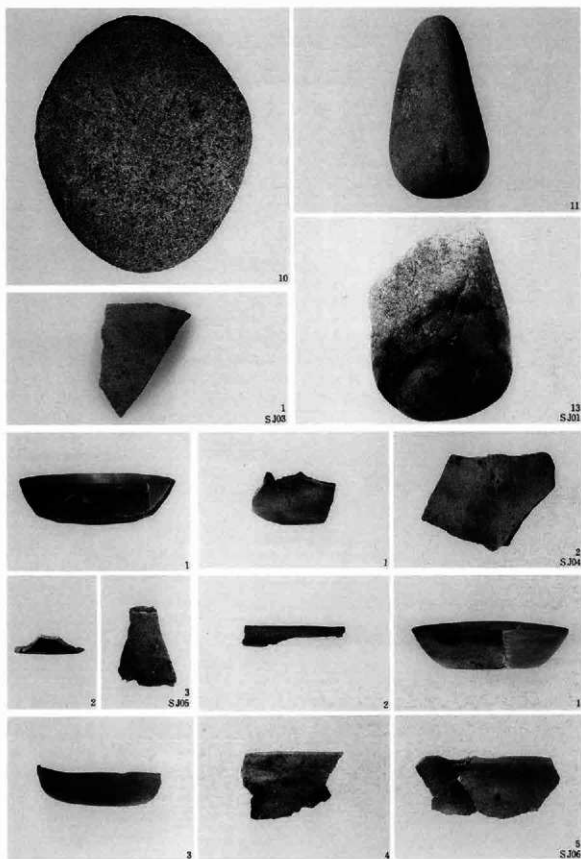


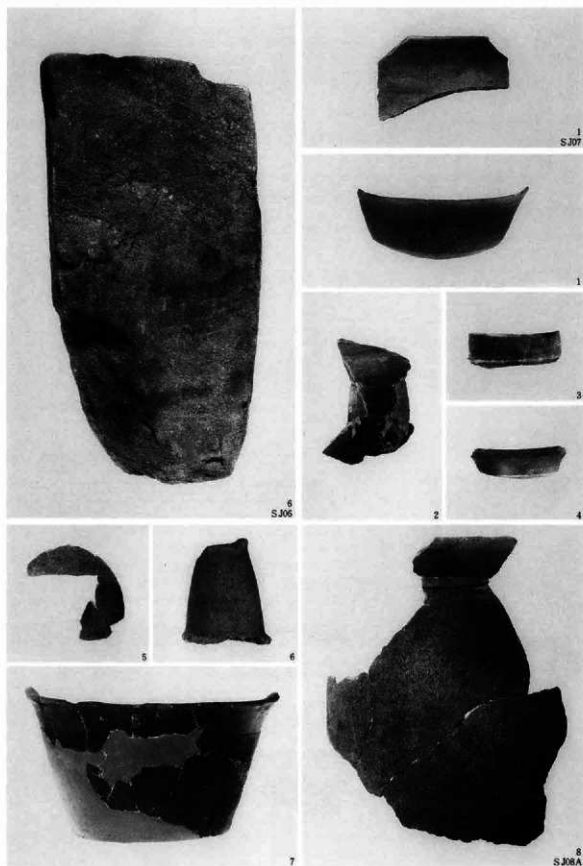
S K 47遺物出土状況 南→

写真図版14

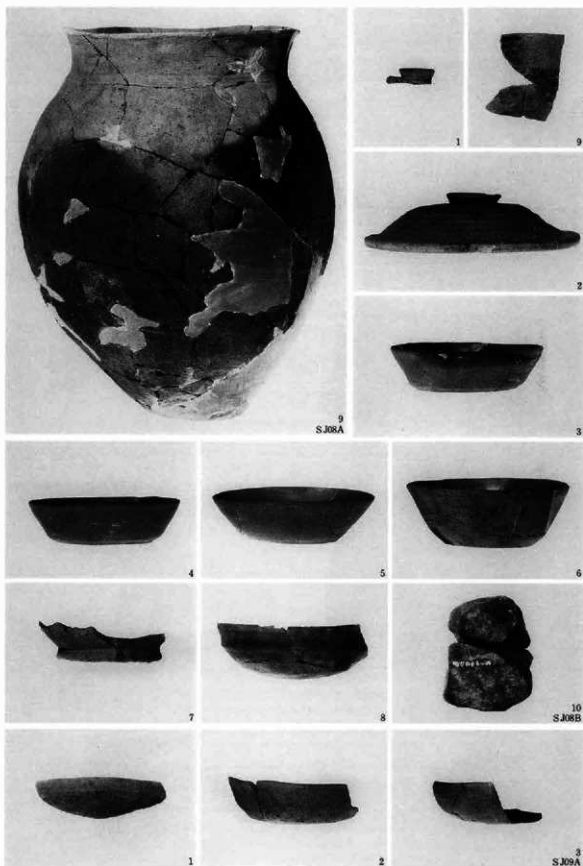


S J 01出土遺物 02号1:3

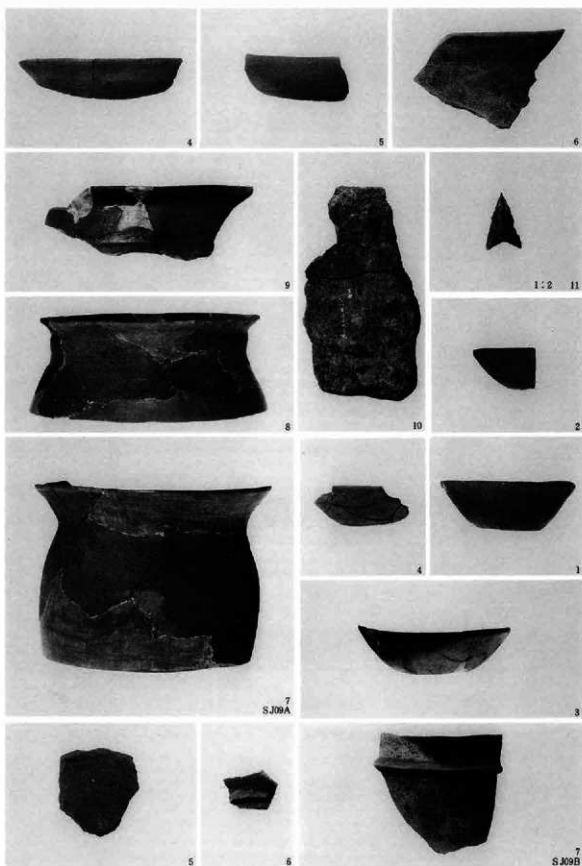




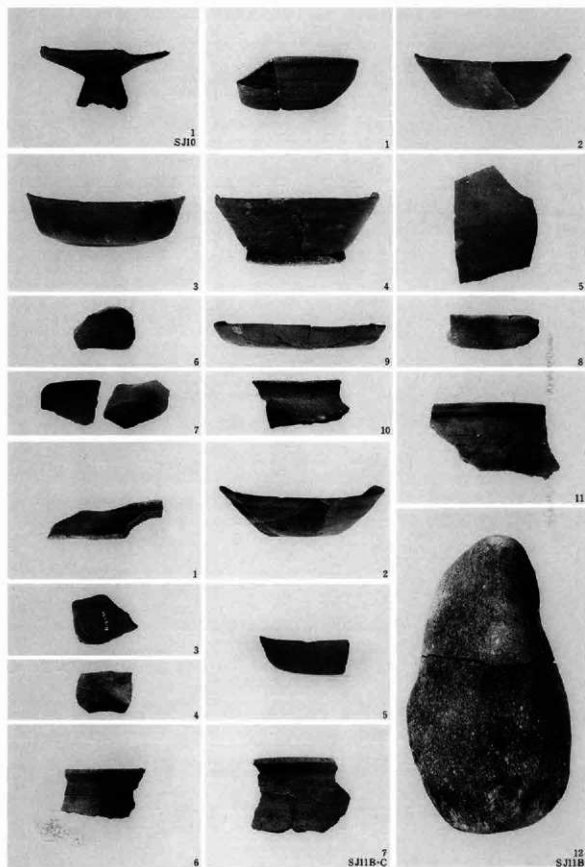
S J 06・07・08A 出土遺物 全長 1 : 3



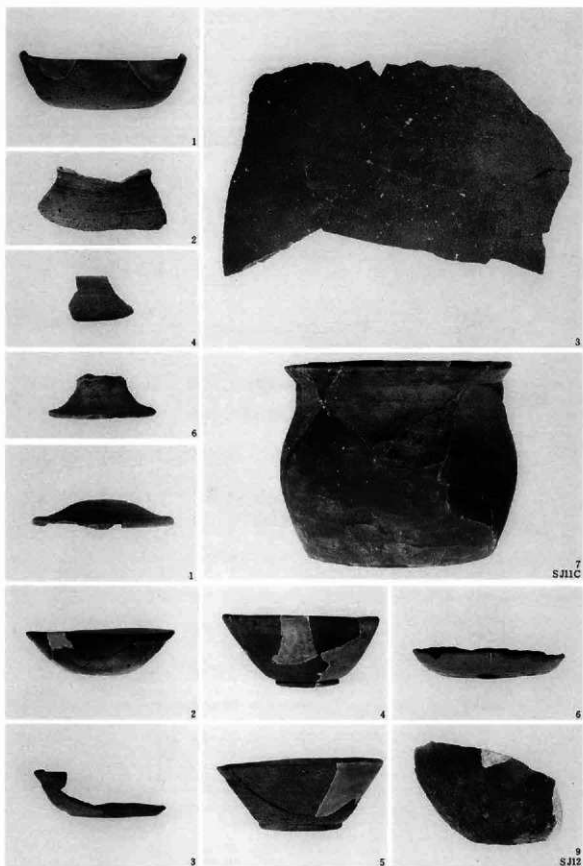
S J 08A・08B・09A出土遺物 番号1:3

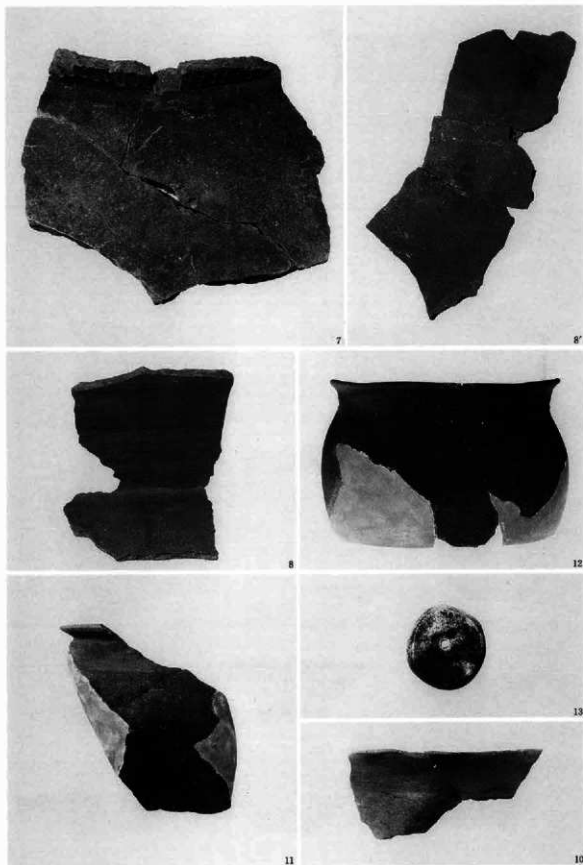


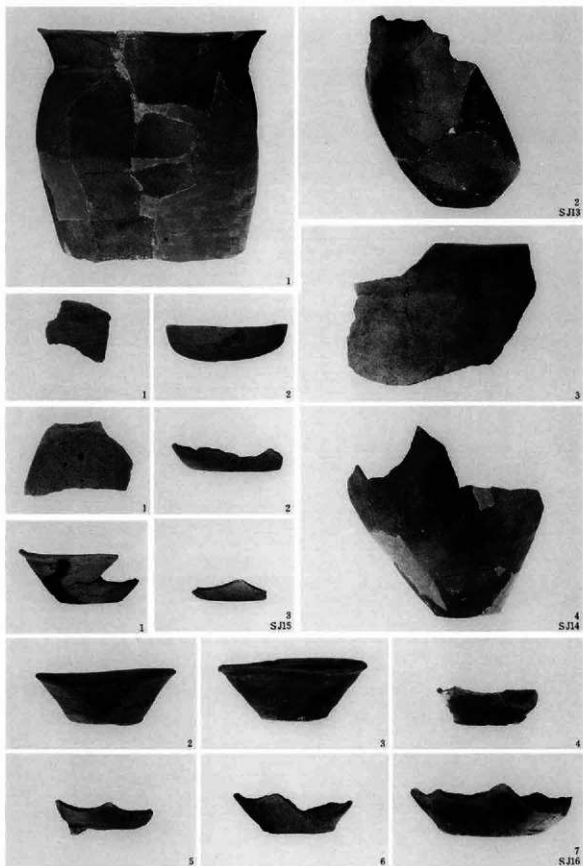
S J 09 A ・ 09 B 出土遺物 およそ 1 : 3



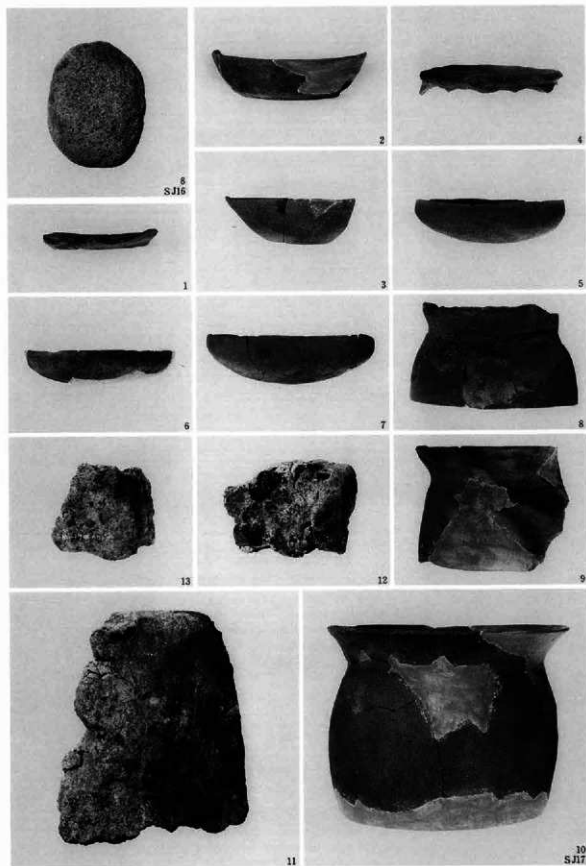
SJ10、11B、11B・C出土遺物 01号1:3



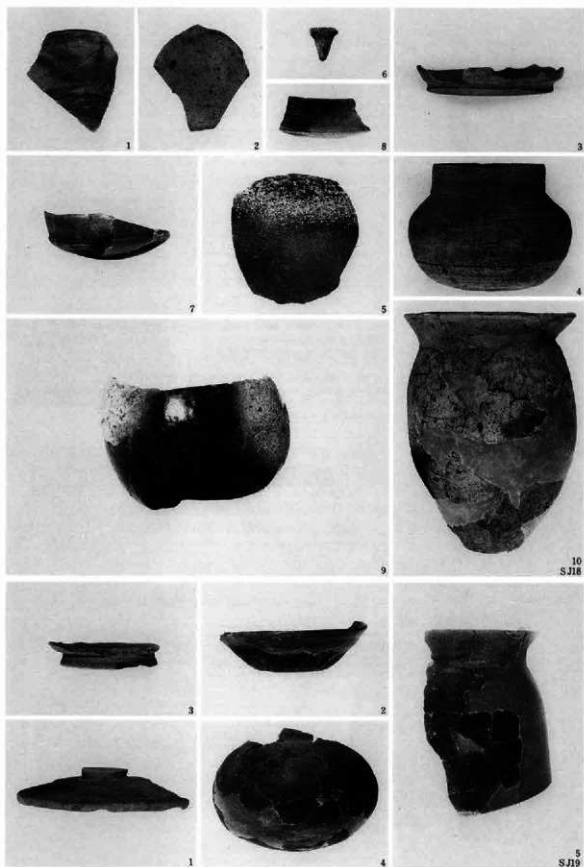




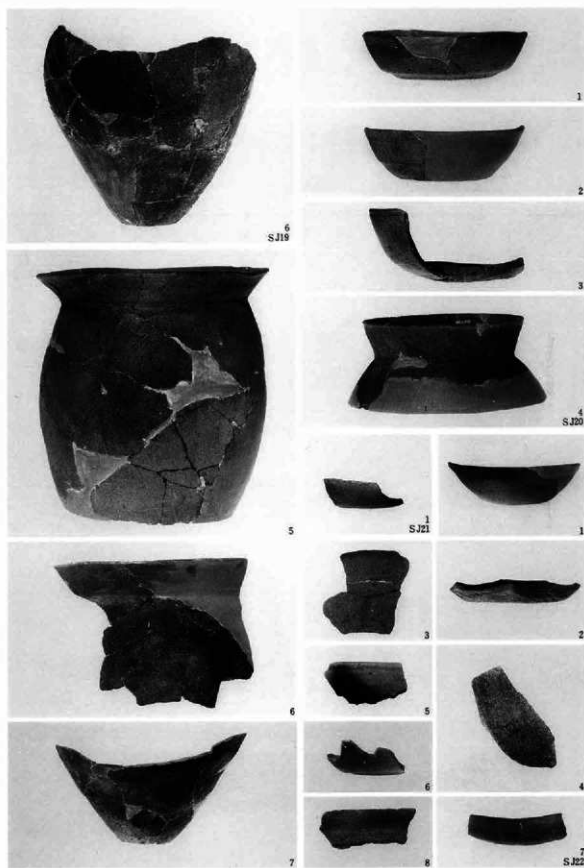
S J 13・14・15・16出土遺物 およそ1:3

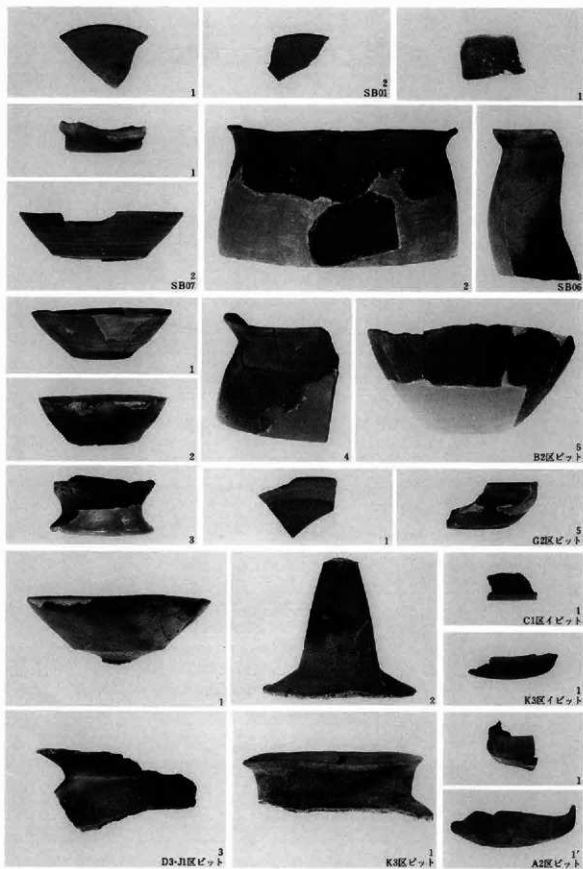


S J 16・17出土遺物 0201:3

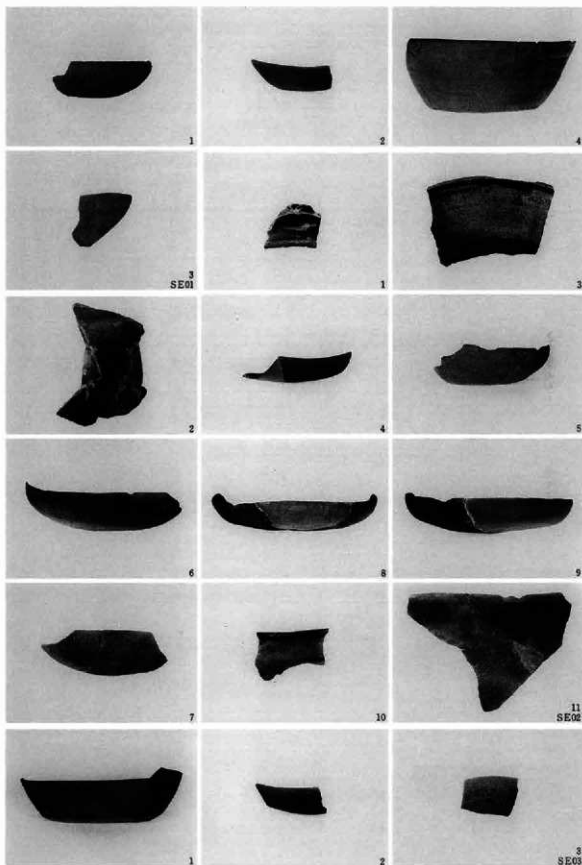


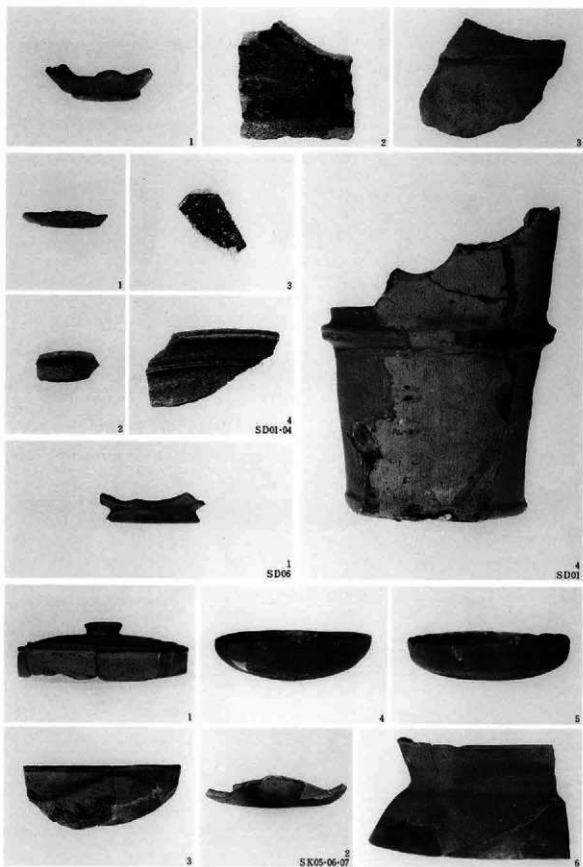
S J 18・19出土遺物 右上等1:3



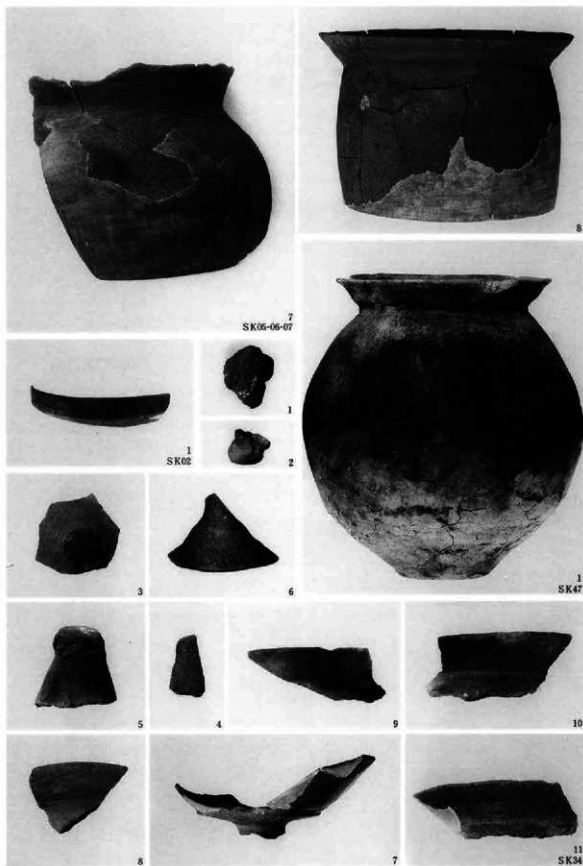


SB01, 06, 07, B2区ピット, G2区ピット, D3・J1区ピット, C1区イピット, K3区イピット, K3区ピット, A2区ピット およそ1:3

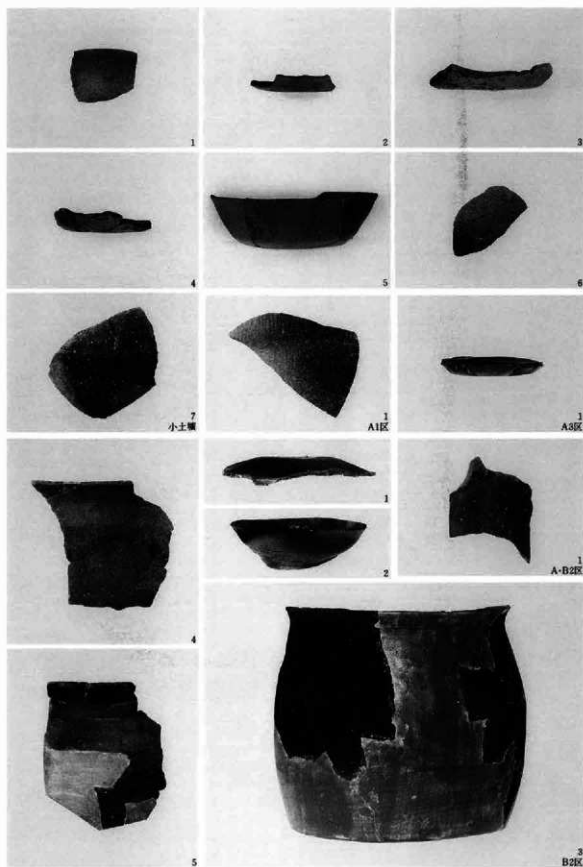




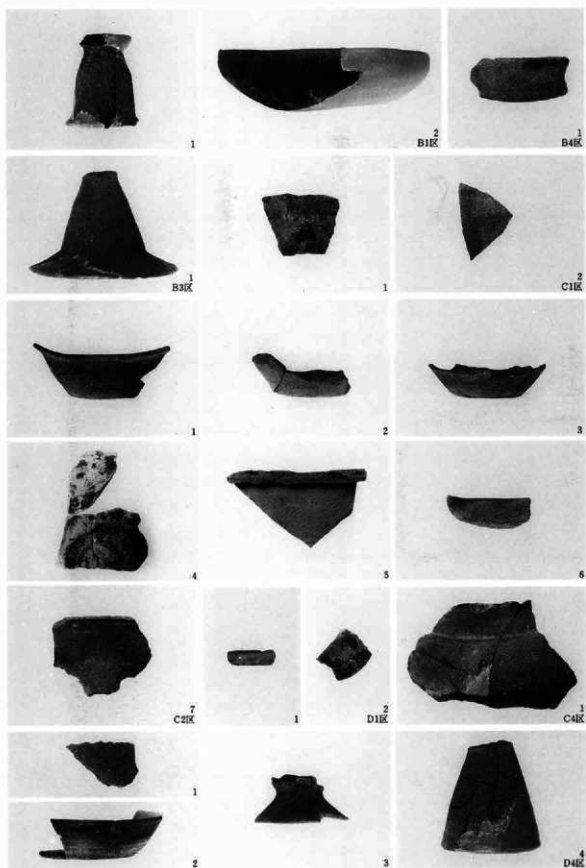
S D01, 01・04、06、S K05、06、07出土遺物



S K 02・05・06・07・34・47出土遺物 およそ1:3

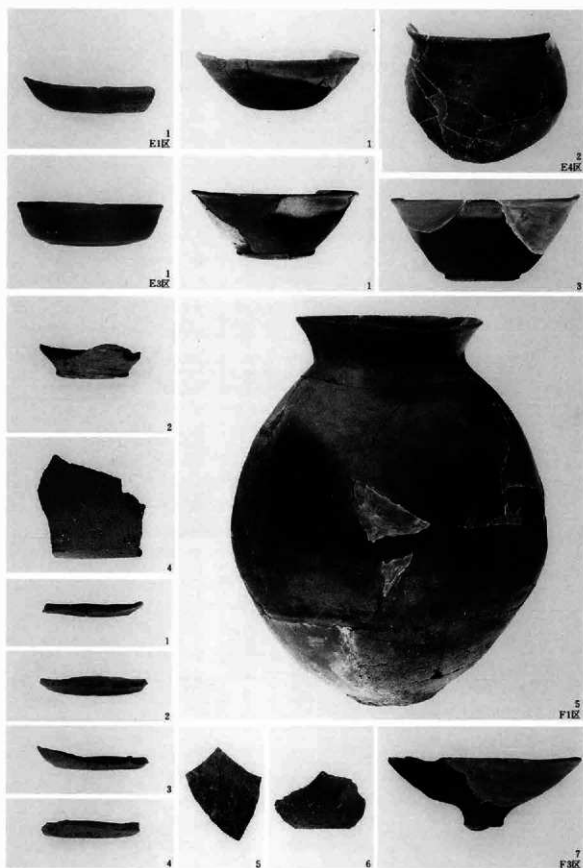


小土壙、A1区、A3区、A·B2区、B2区出土遺物 如上1:3

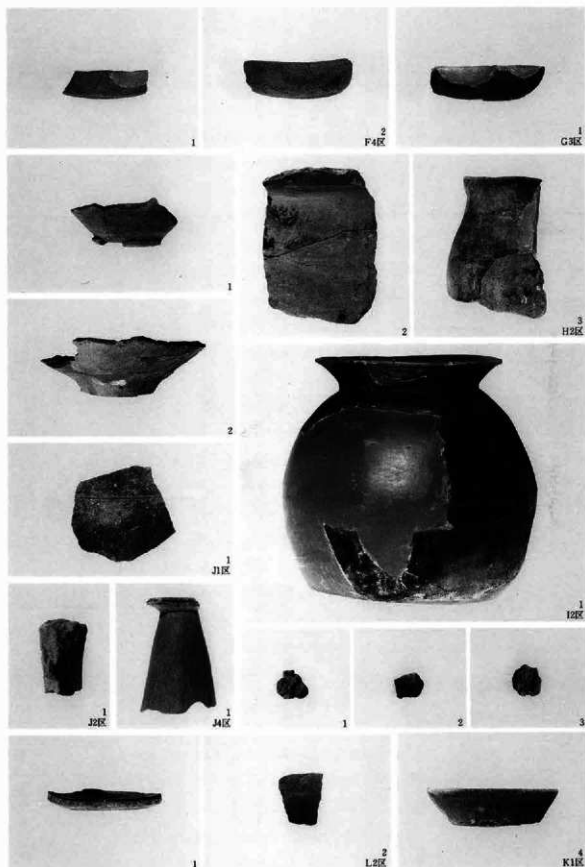


B区·B3区·B4区·C1区·C2区·C4区·D1区·D4区出土遺物 1:2+1:3

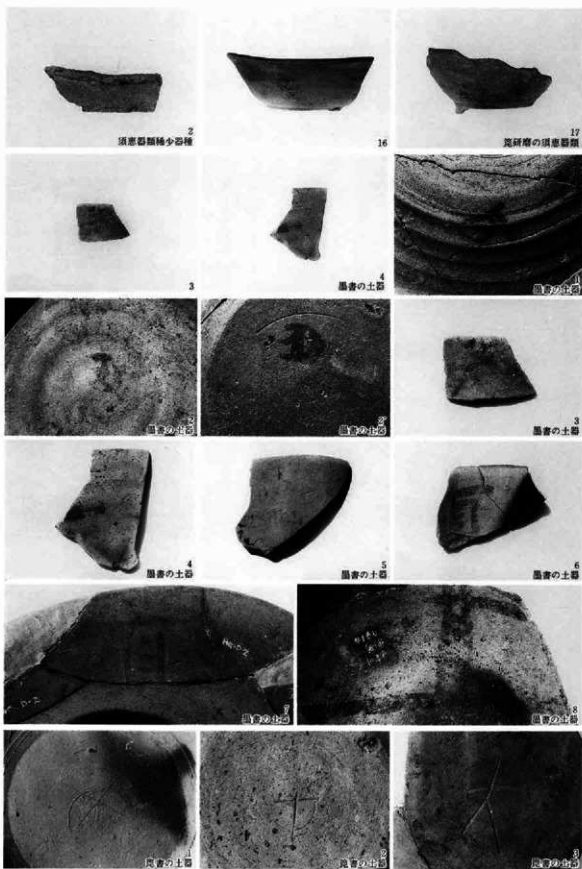
写真图版32



E1区・E3区・E4区・F1区・F3区出土遺物 対そ1:3

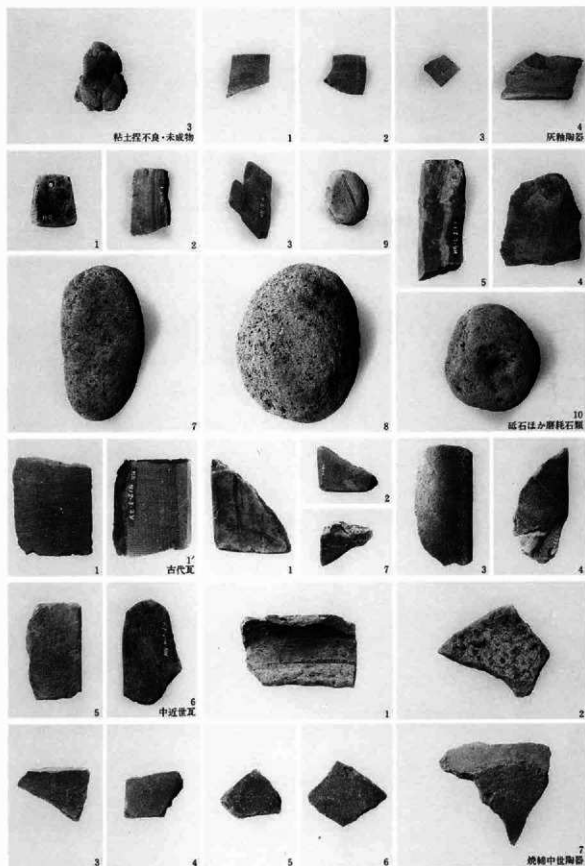


F4区・G3区・H2区・I2区・J1区・J2区・J4区・K1区・L2区遺物 02・1:3

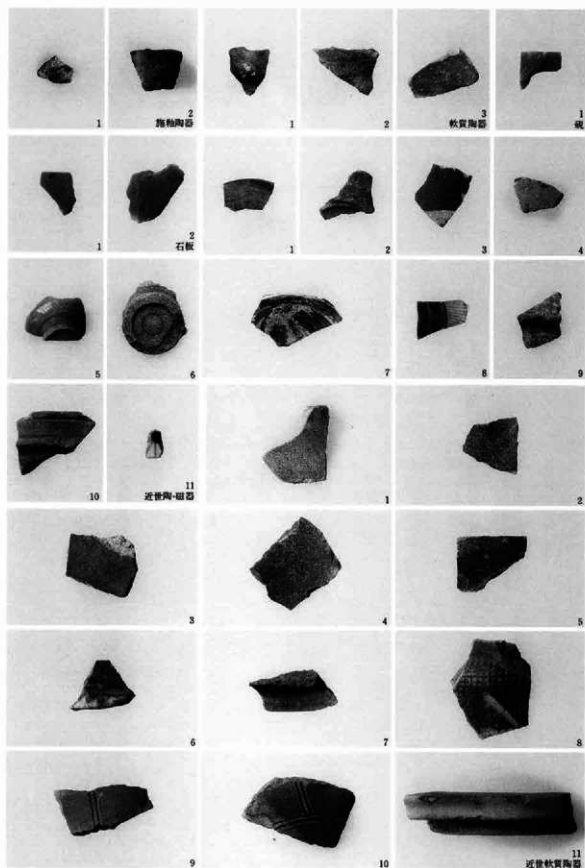


須恵器類稀少器種・荒研磨の須恵器類・黒書の土器・荒書の土器

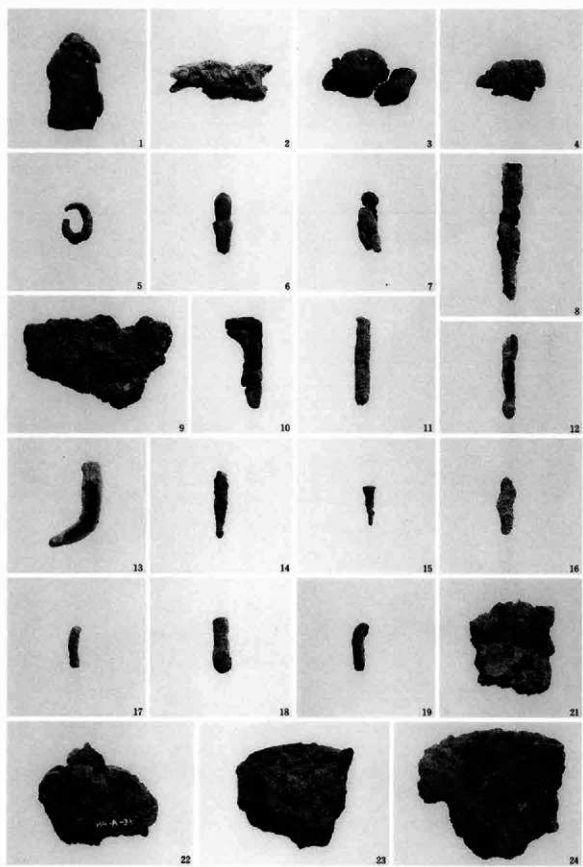
文字は接写さくら赤外750



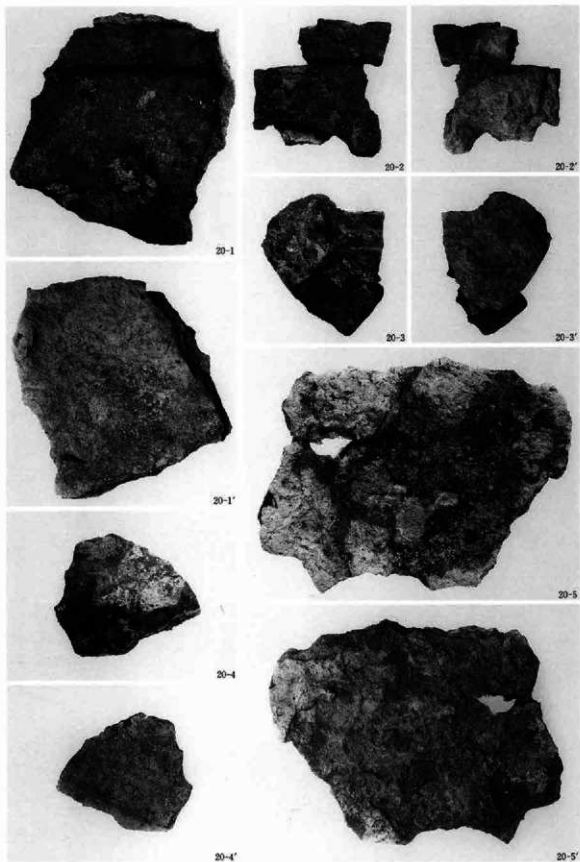
粘土捏不良未成物・灰軸陶器・砥石ほか磨耗石器類・古代瓦・中近世瓦・焼締中世陶器 全2枚1:3



施釉陶器・軟質陶器・硯・石板・近世陶磁器・近世軟質陶器 0141:3



鉄製遺物 およそ1:2



鉄製造物 およそ1:2

太田市八幡遺跡 一財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団
調査報告書第195集一

平成2年3月15日 印刷

平成2年3月20日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会

前橋市大手町1丁目1番1号

電話 (0272) 23-1111

財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511

発行／群馬県考古資料普及会

勢多郡北橋村下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511

印刷／株式会社 前橋印刷所
